大堀城跡Ⅱ

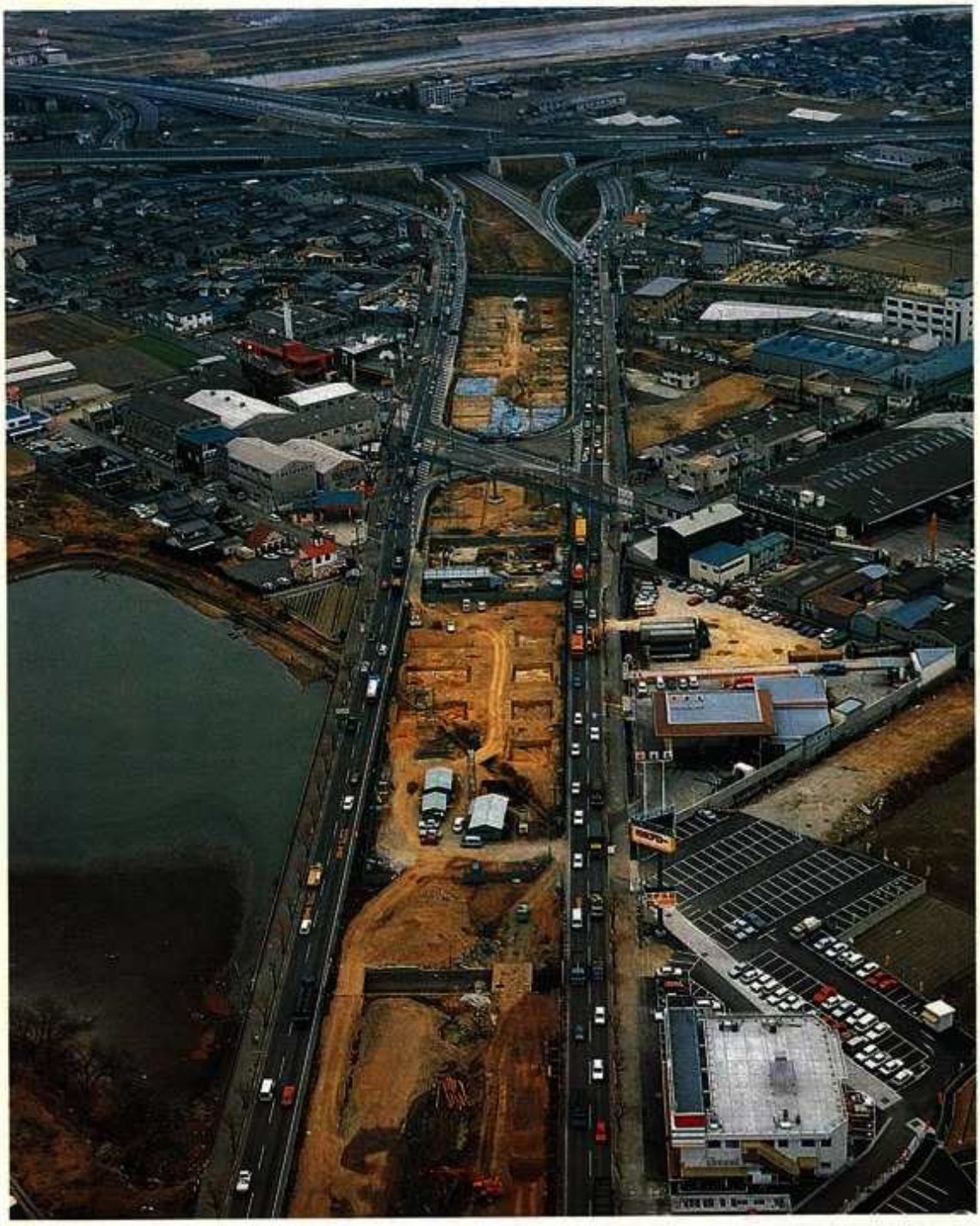
近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人　大阪文化財センター

大堀城跡Ⅱ

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人　大阪文化財センター



図版１　調査地全景（南より）

図版 2　製塩土器(1)

図版 3　製塩土器(2)

序　　文

大堀城跡遺跡は、中世末期に河内平野で活躍した大堀氏の館跡（城跡）として考えられていた遺跡であり、近隣には別所城・一津屋城などが所在し、河内平野の重要な拠点の一つとして、注目すべき地域であった。

前回の試掘調査及び発掘調査において、旧石器時代の遺物や奈良時代の掘立柱建物群とそれに伴なう溝・井戸等の遺構が検出され、当地が、古代より河内平野において、重要な地域であったことが窺えた。

今回の発掘調査でも、奈良時代の掘立柱の建物群が多く検出され、前回の調査と合せて、古代の集落の研究に貴重な史料となりえた。

この大堀城跡遺跡Ⅱの発掘調査は、日本道路公団が計画した、近畿自動車道天理～吹田線にかかる埋蔵文化財の調査として、昭和57年１月に着手し、昭和59年８月に現地調査を終了したものである。

発掘調査にあたっては、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターをはじめ、関係者各位のご協力・ご支援に対し、ここに深く感謝するものであります。

昭和60年３月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　吉　房　康　幸

序　　文

現在では、周辺に工場・ビルが立ち並ぶ当遺跡は、当報告の主な記述がされている古墳時代から奈良時代では、はるかに眺望の良い、広大な景観であったでしょう。この土地に人々が働きかけ、営々と生活を営なんだわけですが、その時にさまざまな痕跡を残しました。現在まで残されて来たこれらの人々の軌跡を、当センターの考古学的調査の手を加えることによって、一部分は直接見聞きできる資料にいたしました。この成果の一端は、担当技師諸君の手によって以下の報告書に記述されています。これによりますと、古くは一万年以前にもさかのぼる旧石器時代の遺物が発見されておりますし、奈良時代の村の姿も、おぼろげながら明らかにされています。この様に多様な資料を提供し、奈良時代集落の様相や段丘面開発の経緯の一端をつかめたことなど貴重な事実を知ることができました。これらは、大阪府教育委員会、日本道路公団大阪建設局、同大阪工事事務所を始めとして、調査関係各位並びに、多数の方々の御尽力の賜物と深く感謝いたしますとともに、今後とも当センターの事業に対し温かい御支援を賜わるよう切望してやみません。

昭和60年3月

財団法人　大阪文化財センター

理事長　加　藤　三之雄

例　　言

1. 本書は、日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査のうち、松原市大堀町に所在する大堀城跡第2次発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。
3. 本調査に要した費用110,104,000円はすべて日本道路公団が負担した。
4. 本調査は、昭和57年1月20日から昭和59年8月31日までの間実施した。
5. 本調査並びに本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に、財団法人大阪文化財センターが実施したものである。調査並びに本書作成に関係したものは以下の組織表のとおりである。

調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	井上定清
		小林廣喜
	次長兼総務課長	大塚恭朗
		尾田勝之
	主幹兼庶務係長	阪上允子、主査　田中喜代子、主事　秋山芳廣
		灰本明子、千野和久、田口宗義、宮本哲男、鎗山洋子
	主幹兼普及係長	福岡澄男、技師　杉本直子、主事　小島容子
調査総括責任者	業務課長	中井貞夫（現　大阪府教育委員会文化財保護課）
		石神　怡（〃　　〃　　）
		泉本知秀
	業務課主幹	椋尾孝彦（現　大阪府土木部道路課）
		吉村信男
長吉分室	業務第2係長	赤木克視、技師　平井貞子（写真）
	業務第3係長	広瀬和雄、技師　石神幸子・藤沢真依・辻本　武・杉本二郎・上林史郎・藤永正明・阿部幸一・岩瀬透・入江正則・西村母文（現　大阪府教育委員会文化財保護課）

また、調査に際しては、日本道路公団大阪工事事務所、大阪府八尾土木事務所及び松原警察署等に格別の配慮を受けたと共に現場調査及び整理作業においては、以下の学生諸君の協力を得た。

市原敦司、井上　剛、大原正行、岡　章夫、笠井　勉、加藤孝浩、木村史朗、小柳　治、坂田

秀樹、佐野貴志、清水　修、寺田泰浩、友田和男、西岡誠司、西村勝久、西本浩之、前田茂美、前田謙二、前吉浩二、馬勝和美、吉川信行、脇田佳見、浅井絹江、前田晴美、前吉清子、松井智子、吉田恵子

6. 切り拡げ調査では、以下の諸氏の御指導を受け、またこのほかにも数多くの方々のご協力、ご指導があった。(順不同)

近藤義郎（岡山大学）、岡崎晋明（奈良県立橿原考古学研究所）、岩本正二（奈良国立文化財研究所）、横山浩一（九州大学）、山崎純男（福岡県教育委員会）、森田 勉（北九州歴史資料館）、古賀直樹（和歌山県立笑島高校教諭）、巽 三郎（和歌山県印南町在住）、竹内雅人、渋谷高秀、土井孝之（(社)和歌山県文化財研究会）、佐藤隆春（八尾東高校）、浦上雅史（兵庫県淡路文化史料館）、吉識雅仁、西口圭介（兵庫県教育委員会）、山本信夫（太宰府町教育委員会）、松本　肇（宗像大社　文化財管理事務局）、小方泰宏、木太久守（(財)北九州教育文化事業団）、伊東照雄、村田多津江（下関市教育委員会）、渡辺一雄、小田村宏（山口県教育委員会）、吉瀬勝康、大林遼夫（防府市教育委員会）、石部正志（大阪府立金岡高校）、入江文敏（若狭歴史民俗資料館）、松本敏三（瀬戸内歴史民俗資料館）、那須孝悌、樽野博幸（大阪市立自然史博物館）

7. 遺構の空中写真及び実測図作製についてはアジア航測株式会社に委託した。

8. 本書の執筆分担は目次に示したとおりであるが、第3係長広瀬和雄の指導のもとに A 調査区に関しては入江正則、B・C 調査区に関しては西村尋文が担当した。また、遺構写真は西村、入江が撮影し、遺物写真に関しては平井貞子が撮影した。編集は、石神幸子が担当した。

9. 第二次調査の概報においても記したように、契約時の遺跡名は「大堀城跡」であったが、本調査においても当城郭に相当する遺構は確認できていない。むしろこの城郭以外の性格の遺構を検出しているため、本文中の遺跡名の記載は「大堀遺跡」とする。

10. 調査区は北から順次、A調査区、B調査区、C調査区と呼ぶ。これらの調査区のうち、切り拡げでは、それぞれの切り拡げ名の前に、各調査区を付けている。

例)　A ―― 5　調査区

調査区名　切り拡げ番号

11. 遺構名の表示は遺構名、遺構記号と遺構番号の間に調査区名を入れている。また切り拡げ部分で検出された遺構の番号はトレンチ調査部分の続き番号を与えており、同じ遺構の場合はトレンチ調査部分の遺構名を付している。

12. 本書の遺構平面図の方位は、すべて真北を示す。

13. 遺構実測図の縮尺は、1/100、1/80、1/40、1/20 を基本としたが、遺構の大きさにより、縮尺を変えたものもある。

14. 遺物実測図の縮尺は基本的には以下の通りである。

土器1/4、石器　3/4

15. 遺物の断面表示は、黒塗りは須恵器、白ぬきは土師器である。網線は瓦器である。

16. レベル高は、T.P.土で表記した。

17. 遺構のスケールはm・cm、遺物はcm・mmで表示している。

18. 本調査にあたっては、写真、実測図等の記録とともに、カラースライドを数多く作成した。本書に記載した以外の資料については、財団法人大阪文化財センターにて保管しているため、広く活用されん事を希望する。

大堀城跡 Ⅱ

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目　次

巻頭カラー写真図版　1～3

序　文

例　言

第Ⅰ章　はじめに……入江正則……1

　第1節　調査の経過……1

　第2節　調査の方法……2

第Ⅱ章　大堀遺跡の歴史的環境……入江正則……4

第Ⅲ章　A調査区の調査成果……入江正則……6

　第1節　基本層序……6

　第2節　遺構……7

　第3節　遺物……17

　第4節　小結……21

第Ⅳ章　B・C調査区の調査成果……西村尋文……42

　第1節　基本層序……42

　第2節　遺構……44

　第3節　遺物……53

　第4節　小結……66

第Ⅴ章　まとめ……入江正則……72

第Ⅵ章　考察……入江正則……76

　第1節　奈良・平安時代遺構の変遷……76

　第2節　溝について……80

　第3節　奈良時代の土器の型式分類と器種構成……82

　第4節　瓦について……87

　第5節　製塩土器の若干の考察……88

図 版 目 次

図版1　遺構平面、断面図（1）（1/80）（建物A－1）

図版2　遺構平面、断面図（2）（1/80）（建物A－2・7）

図版3　遺構平面、断面図（3）（1/80）（建物A－3）

図版4　遺構平面、断面図（4）（1/80）（建物A－4・5）

図版5　遺構平面、断面図（5）（1/80）（建物A－8）

図版6　遺構平面、断面図（6）（1/80）（建物A－9・10）

図版7　遺構平面、断面図（7）（1/80）（塀A－1・3～5）

図版8　遺構平面、断面図（8）及び遺構断面図（1）（井戸A－3（1/40）、溝A－43、東除川旧河道（1/80））

図版9　遺構断面図（2）（溝A－3・5・16～18・35（1/40）溝A－1・6・11・13・34・36（1/40）、溝A－15（1/80））

図版10　遺構断面図（3）（1/40）（溝A－20～25・28・29）

図版11　遺構断面図（4）（井戸A－4・5（1/40）、井戸A－6（1/20）、土坑A－18・62（1/40）土坑A－19・48・61・63・64（1/20））

図版12　遺物実測図A調査区出土土器（1）（1/4）（建物A－1～4・7～10、塀A－1・4・5、井戸A－3）

図版13　遺物実測図A調査区出土土器（2）（1/4）（溝A－2）

図版14　遺物実測図A調査区出土土器（3）（1/4）（溝A－20・36）

図版15　遺物実測図A調査区出土土器（4）（1/4）（井戸A－5、溝A－11・22・34・40、土坑A－59、東除川旧河道、A－6・8～10・12調査区）

図版16　遺物実測図A調査区出土瓦（1）（1/3）

図版17　遺物実測図A調査区出土瓦（2）（1/3）

図版18　遺物実測図A調査区出土石器（2/3）

図版19　遺物実測図井戸A－3井筒材（1）（1/20）

図版20　遺物実測図井戸A－3井筒材（2）（1/20）

図版21　遺構A調査区航空写真（1）（A－1～5・13調査区）

図版22　遺構A調査区航空写真（2）（A－6～11調査区）

図版23　遺構A調査区航空写真（3）（A－12調査区）

図版24　遺構A－5・6調査区全景（A－6調査区最終遺構面）

図版25　遺構A－7・8調査区全景（A－7調査区土坑A－40～45）

図版26　遺構A－10・11調査区全景

図版27　遺構A－12調査区各遺構（1）（建物A－2・4・5・7）
図版28　遺構A－12調査区各遺構（2）（建物A－8・9）
図版29　遺構A－12調査区各遺構（3）（建物A－10、塀A－3～5）
図版30　遺構A－12調査区各遺構（4）（溝A－5・6・20～29）
図版31　遺構A－12調査区各遺構（5）（井戸A－3）
図版32　遺構A－1・6調査区遺構断面（東除川旧河道、井戸A－5）
図版33　遺物A調査区出土土器（1）（溝A－2）
図版34　遺物A調査区出土土器（2）（溝A－34・36）
図版35　遺物A調査区出土土器（3）（溝A－20、東除川旧河道、A－12調査区包含層）
図版36　遺物A調査区出土土器（4）（建物A－1～4・7～10、塀1・4・5）
図版37　遺物A調査区出土土器（5）（溝A－2）
図版38　遺物A調査区出土土器（6）（溝A－2・20・34・36）
図版39　遺物A調査区出土土器（7）（井戸A－3）
図版40　遺物A調査区出土土器（8）（井戸A－5、土坑A－59、溝A－11・40・104、東除川旧河道、A－6・8～10調査区包含層）
図版41　遺物A調査区井戸A－3出土井筒材（1）
図版42　遺物A調査区井戸A－3出土井筒材（2）
図版43　遺物A調査区井戸A－3井筒内出土木製品及びA調査区出土石器
図版44　遺物A調査区出土瓦
図版45　遺構B調査区航空写真
図版46　遺構C調査区航空写真
図版47　遺構B－1・2調査区全景
図版48　遺構B－3・4調査区全景
図版49　遺構B－5・6調査区全景（B－5調査区第1遺構面）
図版50　遺構B－7・2調査区全景（B－2調査区第1遺構面）
図版51　遺構C－1・2調査区全景（C－2調査区第1遺構面）
図版52　遺構C－3・4調査区全景
図版53　遺構C－5・6調査区全景（C－6調査区第1遺構面）
図版54　遺構C－7・8調査区全景
図版55　遺構C－9・10調査区全景
図版56　遺構B調査区遺構断面（1）柵B－1掘方、溝B－2）
図版57　遺構B・C調査区遺構断面（2）（溝BW－6、溝C－1）
図版58　遺構C調査区遺構断面（3）（溝C－2・18）
図版59　遺構C調査区遺構断面（4）、遺物出土状況（1）（土坑C－27、溝C－1・2遺物出

土状況全景）
図版60　遺構C調査区遺物出土状況（2）（溝C－1・18）
図版61　遺物B・C調査区出土土器（1）（溝B－25、溝C－1・2、落ち込みC－3）
図版62　遺物B・C調査区出土土器（2）及び埴輪（柵B－1、溝B－2、溝BW－6、溝B－25、溝C－1・2・18、井戸C－5、落ち込みB－6）
図版63　遺物B・C調査区出土瓦
図版64　遺物B・C調査区出土石器（1）
図版65　遺物B・C調査区出土石器（2）
図版66　製塩土器各型式（1）（A－1類）
図版67　製塩土器各型式（2）（A－2類）
図版68　製塩土器各型式（3）（A－3類）
図版69　製塩土器各型式（4）（B－1類）
図版70　製塩土器各型式（5）（B－2類）
図版71　製塩土器各型式（6）（C類）
図版72　製塩土器各型式（7）（D類）
図版73　製塩土器各型式（8）（E類）

挿図目次

第1図　調査区配置図（1/2000）……2
第2図　調査経過図（1/2000）……3
第3図　A調査区土層柱状図……6
第4図　A－8調査区遺構平面図（1/200）……10
第5図　溝A－44～92遺構平面図（1/200）……13・14
第6図　溝A－104出土須恵器拓本（綾杉文）（1/2）……17
第7図　埋積谷出土家形埴輪（1/5）……17
第8図　A調査区出土軒瓦（1/5）……18
第9図　井戸A－3井筒内出土木製品（1/4）……20
第10図　B・C調査区土層柱状図……43
第11図　柵B－1遺構平面、断面図（1/80）……44
第12図　柵C－1～3遺構平面、断面図（1/40）……45
第13図　溝B－2遺構断面図（1/20）……45
第14図　溝B－3遺構断面図（1/20）……46

第 15 図　溝BW－6遺構断面図（1/50）……46
第 16 図　溝C－1遺構断面図（1/20）……47
第 17 図　溝C－2遺構断面図（1/20）……47
第 18 図　溝C－1・2遺物出土状況図（1/40）……48
第 19 図　溝C－18遺構断面図（1/20）……49
第 20 図　溝C－18遺物出土状況図（1/40）……49
第 21 図　土坑B－9遺構断面図（1/20）……50
第 22 図　土坑C－27遺構断面図（1/20）……51
第 23 図　畦畔状遺構平面図（1/80）……52
第 24 図　B・C調査区出土土器（1）（1/4）……53
第 25 図　B・C調査区出土土器（2）（1/4）……55
第 26 図　B・C調査区出土土器（3）（1/4）……57
第 27 図　B・C調査区出土土器（4）（1/4）……57
第 28 図　B・C調査区出土埴輪（1/4）……58
第 29 図　B・C調査区出土瓦（1/4）……59
第 30 図　B・C調査区出土石器（1）（3/5）……61
第 31 図　B・C調査区出土石器（2）（3/5）……62
第 32 図　B・C調査区出土石器（3）（3/5）……63
第 33 図　B・C調査区出土石器（4）（1/2）……64
第 34 図　製塩土器各型式（1）（1/5）……91
第 35 図　製塩土器各型式（2）（1/5）……92

表　目　次

第 1 表　掘立柱建物、塀一覧表……22
第 2 表　溝一覧表……23
第 3 表　土坑、井戸一覧表……25
第 4 表　A調査区出土土器観察表……27
第 5 表　A調査区出土瓦観察表……40
第 6 表　A調査区出土石器観察表……41
第 7 表　B・C調査区出土土器観察表……67
第 8 表　B・C調査区出土瓦観察表……69
第 9 表　B・C調査区出土石器観察表……70
第 10 表　奈良・平安時代遺構の変遷表……79

第 11 表　A調査区出土土器器種構成表……84
第 12 表　A調査区出土製塩土器観察表……93

付　図　目　次

付 図 1　大堀遺跡の歴史的環境
付 図 2　A調査区全体図（1/200）
付 図 3　B調査区第1遺構面全体図（1/200）
付 図 4　B調査区第2遺構面全体図（1/200）
付 図 5　C調査区第1遺構面全体図（1/200）
付 図 6　C調査区第2遺構面全体図（1/200）

第Ⅰ章　はじめに

第1節　調査の経過

大堀城は、近世初頭に「大堀兵馬」氏の居館として知られており、また南北朝期にも「大堀庄」として、この地に所在していた事が知られている。しかしながら、これまで発掘調査には至っていなかった。この地を、近畿自動車道大阪線が通過するに至り、大阪府教育委員会と日本道路公団が協議をかさねた結果、試掘調査（第一次調査）を昭和56年６月１日から９月15日まで実施し、遺構の有無を確認した。この結果、当初の「大堀城」関連の遺構とは別に、古墳時代、奈良平安時代の遺構および遺物を主に検出した。この結果にもとずいて、本調査（第二次調査）を実施するに至り、遺構保存の協議資料を得る為、トレンチ調査を実施した。昭和57年１月20日より着手し、同年10月には終了した。この調査の結果、奈良・平安時代の掘立柱建物が多数検出され、道路橋脚位置決定についての協議がもたれた。しかし切り拡げ部の調査方法に関連した協議が長びいた為、本調査のうち、第二次調査の成果は、『大堀城跡』として、すでに刊行した。ついで昭和58年９月、切り拡げ調査部分に関しての調査方法について大阪府教育委員会と日本道路公団が合意に達し、同時に本調査（第三次調査）を開始し、昭和59年８月31日に現地調査は一部分を除いて、すべて完了した。残りの一部分は、中央環状線と市道羽曳野線の交差部分にまたがる橋脚部分の調査および、農業用排水路の移設に伴う調査である。昭和59年６月の時点では、残りの調査にいつ着手し得るか、全く見通しがつかないため『大堀城跡』Ⅱに着手した。この概要報告書では、すでに既往の調査の中で報告されていない部分を中心に報告せざるを得ない為以下の注意点をあげておきたい。

①大堀城跡の「切り拡げ部」調査の概報である。

②トレンチ部にて検出した遺構は、切り拡げ調査に関連し、必要である範囲内で記述した。

なお、大堀遺跡はこの他に昭和57年11月から58年１月まで大和川下流東部流域下水道大井処理場放流幹線建設事業に伴う発掘調査（特殊マンホール部調査）が（財）大阪文化財センターにより実施されており、調査報告書が既に刊行されている。当調査区のW・E調査区に該当する。

①大堀城跡発掘調査報告書―大和川下流東部流域下水道大井処理場放流幹線建設事業に伴う―1983年１月

②大堀城跡―近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書―1984年３月

第2節　調査の方法

大堀城跡では、河内平野部で踏襲されて来た方式、すなわち遺構の分布を調べ橋脚の位置を決定する為に中央環状線中央分離帯の中央部に幅10mのトレンチを設定し、次にその調査成果をもとに、橋脚の位置を変更する方式が採用された。これをトレンチ部と呼び、橋脚の位置は切り拡げ部と呼ぶ。さらに今回は、奈良平安時代の掘立柱建物群の検出されるであろう部分に関しては、全面発掘を行った。

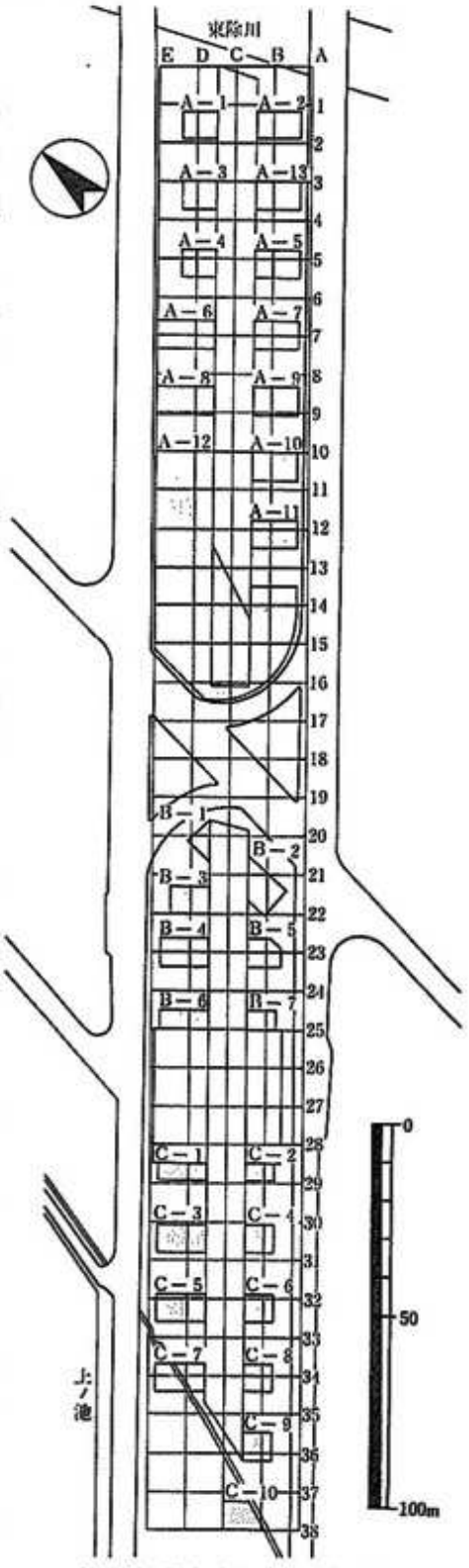
各調査区の名称は、調査区北西側を起点として、西、東、西の順序に調査番号を決定した。しかし、調査の順序の都合で、一部、変更している部分がある。

A調査区の切り拡げ部は、Aの記号、B調査区はBの記号、C調査区はCの記号を頭につけた。ちなみに切り拡げの数はA調査区が13、B調査区は7、C調査区は10である。W、E調査区は、すでに、大和川下流東部流域下水道大井処理場放流幹線建設事業で調査している為、今回の調査には含まない。

大堀城跡は、近畿自動車和歌山線の最北端の遺跡であるが、西名阪自動車道、阪神高速松原線、近畿自動車道の三幹線の合流する所にある為、実際上は、近畿自動車道大阪線の最南端として位置付けられている。

掘削深度の深い沖積平野部で採用された従来通りのトレンチ方式の調査では掘立柱建物等、集落構造が全く把握し切れず、寸断されたままで、重要な遺構の確認ができない事から、A調査区南端の集落の密集地域について、大阪府教育委員会と道路公団の間で調査方法についての協議がもたれた。この結果、集落部分の全面発掘を行ないその調査成果によって橋脚の設計変更を行なう事で話がつき集落部分全掘方針が出された。

調査区全体の地区割りは、第1図に示すように道路公団設定のSTA.3＋00mから以南のセンター杭を

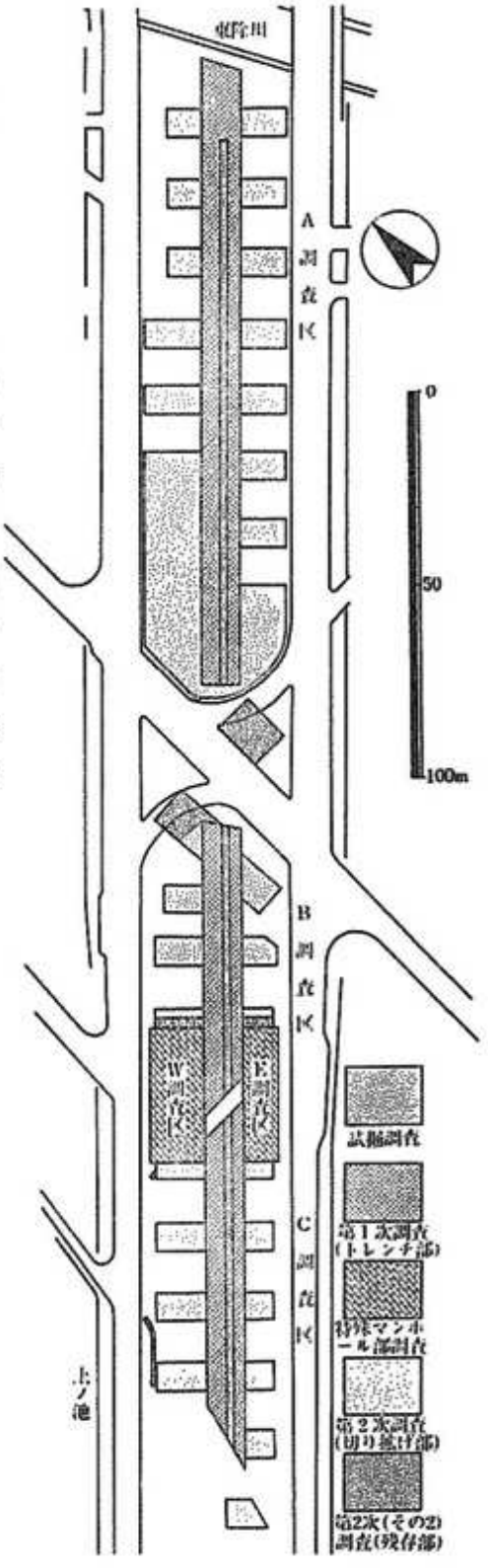


第1図　調査区配置図（1/2000）

利用して、これを基軸に東西に10mピッチで割り付けた。中央分離帯で使用する事を目的として、東側から順次A、B、C、D、Eとした。一方、南北方向に関しては、センター杭のＳＴＡ.２＋60mの杭を０として、南へ10mピッチで割り付け、順次番号を付した。ちなみにA調査区は、０～16、B調査区は、19～26、C調査区では、26～38である。

なお、地区割りの基準線は、Ｎ－43°29′41″－Ｅとなる。各区画の地区名は、北西－南東の10mピッチの地区割りは、アルファベット、北東－南西方向の10ピッチの地区割りは、数字を用い、区割りの表示は、南東優位の原則に従って用いる。

これまでの調査の経過を調査区ごとに表わした図は、第２図である。試掘調査、第１次調査はトレンチ部調査、第２次調査は切り拡げ部調査、第２次（その２）は残った部分の調査である。なお先に述べた特殊マンホール調査が、第１次調査と第２次調査の間に実施された。



第２図　調査経過図（1/2000）

第Ⅱ章　大堀遺跡の歴史的環境

大阪の河内地方に所在する大堀遺跡は、古代以来幾たびかにわたって所属する郡名は変化した。歴史上判明している最も古い郡名は、奈良時代の丹比郡であり、これは西暦734年には丹北郡、丹南郡に別れ、丹北郡に属する事となる。さらに、この丹北郡は、八上郡とに分離している。古来歴史的変遷を受けていたこの地は、数多くの人々の生活を営む生業の地として、あるいは居住の地として利用され続けて来た。大地に鍬きかけ、溝を穿ち、谷を埋め、家を建て、土器を焼く等の営為を行ない、それらの痕跡を大地に刻み残して来た。今この様なもののうちで、私達の知識になり得ているものを集積し、大堀遺跡の周辺の歴史的環境を以下述べてゆきたい。

旧石器時代　羽曳野丘陵や、中位段丘上のあちらこちらから、少量ではあるが旧石器時代に属すると思われる遺物が出土している。前回の報告書にも記載したように、亀井遺跡・長吉川辺遺跡・長吉野山遺跡・八尾南遺跡・瓜破遺跡等から、これまでに剥片・石核・ナイフ形石器また接合資料等も検出されている。また、松原市域からも数多く出土している事は、すでに報告されている。しかし、この松原市域の資料は、包含層、他の後世の遺構等から出土した資料に限定されており、原位置での出土は皆無である。この点では、大堀遺跡の出土状況と全く同じである。また一方、国府遺跡・林遺跡・土師の里遺跡・西大井遺跡からも、原位置出土も含めて旧石器が出土している。

縄文時代　中位段丘上の代表的な縄文時代遺跡は、国府遺跡である。前期・中期・後期・晩期の遺物を出土し、この周辺の中核的な遺跡であった事を推測させる。このほか船橋遺跡では、後期・晩期、その他では、東阪田・喜志遺跡等が上げられる。また、林遺跡・土師の里遺跡・青山遺跡等にも縄文時代遺物は検出されている。この時代では、河内の沖積地からも少量の縄文時代遺物を出土するが、主な住居範囲は、段丘上面に展開していた事を推測させる。そしてこれまで、南河内の石川流域近隣に縄文遺跡が発見されているが、東除川・西除川流域では縄文時代遺跡ははっきり解明し得ていない。

弥生時代　この時代の段丘上の遺跡は、松原市上田町遺跡から弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物を検出したほかは極めて限られる。羽曳野丘陵では国府遺跡から溝をもつ集落遺跡、また、長原遺跡では弥生時代にさかのぼる可能性のある水田等を検出している。この様に総じてみれば、弥生時代の中位段丘上の遺跡は極めて限定される。これらの遺跡は立地している段丘から至近距離の位置に沖積地等の可耕地が存在して水田が営まれている等の条件で、段丘面に集落を形成しているのであって、むしろ段丘面が直接可耕地として、水田等として開発されていたわけはでないだろうと思われる。

古墳時代前期　大堀遺跡近隣の中位段丘上には、この時期の集落および方形周溝墓、古墳は認められない。

古墳時代中期　河内地域の巨大な前方後円墳が、累々と築造された時期である。古墳時代前期末頃津堂城山古墳に始まる巨大な前方後円墳の築造は、古墳時代後期に河内大塚で終焉するようであり、古墳時代中期に長原古墳群、塚の本古墳を中心として数多くの方形墳が造られている。しかし、この様な動きは大堀遺跡の近くに現在のところ、認められていない。

古墳時代後期　古墳時代後期では、横穴式石室墳等は大堀遺跡に隣接した所には、これまで全く認められていない。

一方、大堀遺跡近隣の集落遺跡について述べると次の様になる。

古墳時代中期　古墳時代中期の、段丘上の集落遺跡はほとんど判明していない。しかし、はさみ山遺跡等では、この時期の遺物は散見されている。また、丹治比柴垣宮等の伝承地はあるが、現在の所、詳細な点については判明していない。

古墳時代後期　この時代の集落は早くて6世紀後半頃から、あるいは7世紀に入ってから形成される事が多い。しかし、これらの集落においても短期的に存在するものと長期的に存在する集落が認められる。しかし、現在まで、近隣の集落は全くと言ってよいほどわかっていない。

奈良時代以降　寺院の造営及び集落の動向が大堀遺跡との関連で問題となる。河内地方の古代寺院は立地からみれば、中位段丘、沖積地の差はあまり認められず、各郡にそれぞれ分布している。『柏原市史・資料編Ⅰ』の河内六十六寺によれば、志紀郡四ヶ寺・丹比郡に七ヶ寺比定されている。

いっぽう、式内社の分布等から見ると、この時代にも、段丘面の開発はかなり進んでいると考えられるし、次の平安時代には、段丘上に荘園も、数多く見られ、開発は進行していたようである。

付図（1）作製の為に、以下の地図、文献等を利用し、参照した。

1）　参謀本部陸軍部測量局、「京阪地方仮製二万分壱地形図」明治17年～22年測図のうち、「金田村」、「天王寺村」、「国府」、「八尾」を使用した。

2）　「大阪府誌、第3巻」付図「鎌倉期・南北朝室町期における荘園分布図」作製者宮川満氏のものを一部使用した。

3）　「大阪府誌　第4巻」付図「室町戦国期古城址・古戦場図」作製者　今谷　明氏のものを一部使用した。

4）　「大阪府文化財分布図」大阪府教育委員会　文化財保護課作製のものを一部使用した。

5）　「松原市における大字及び小字図」を一部そのまま使用した。

第Ⅲ章　A調査区の調査成果

第1節　基本層序

基本層序は、Ⅰ～Ⅴ層に分層でき、前回の報告と変わる所はない。以下、再度Ⅰ～Ⅴ層について、簡単に説明を加える。

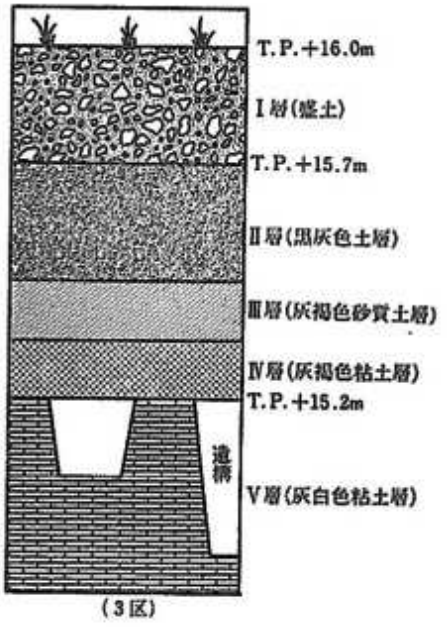
Ⅰ層　中央環状線道路工事に伴って盛られた土層である。現地表面は、Ⅰ層上面となる。この面の海抜高は、16区にて、T.P.＋16.5m、3区にて、T.P.＋16.0mである。層厚は、非常に差が認められ、Ⅰ層の全く存在しない場所から、40cm盛られている所まである。

Ⅱ層（黒灰色土層）　中央環状線用地買収時までの地表面であり、水田あるいは畑地として使用されていた。層厚は、Ⅰ層土盛り時、あるいは、中央環状線付帯工事等で削平を受けた場所もあり、Ⅱ層の全く認められない所から、25cmの厚さを呈す所まである。このⅡ層上面海抜高は、14区では、T.P.＋16.2m、8区では、T.P.＋15.9m、3区では、T.P.＋15.7mを測った。

Ⅲ層（灰褐色砂質土層）　Ⅱ層の直下に認められる層である。この層は場所によっては2層に分けられる。上層は褐色の強い色調を示し、下層は灰白色を呈する。土質は均一で砂粒はほとんど含まない。この層は、後世の開発の影響を大きく受けており、全く認められない場所から20cmの厚さにおよぶ所まである。遺物は少量であるが出土し、特に、A―12調査区のみ、多く出土した。

Ⅳ層（灰褐色粘土層）　地山層直上に存在する。厚さは1～5cmの非常に薄い層である。この層もⅢ層と同様、全く認められない所も存在した。出土遺物量は場所によって異なり、ほとんど出土しない地区から、多く出土するA―12調査区までさまざまである。土色も地区によって微妙に異なる。

Ⅴ層（灰白色粘土層）　地山である。粘土層の部分と少し砂っぽい部分とが認められた。当遺跡で検出した遺構の大半はⅤ層を切り込んでいる。Ⅴ層上面の海抜高は、15区では、T.P.＋15.6m、3区ではT.P.＋15.2mである。地形は序々に北から南へ高くなる。その間にC―13区付近に開析谷の窪みが認められる。



第3図　A調査区土層柱状図

第2節　遺　構

遺構の分布から大きく2つの地区に分けられ得る。南端部の集落遺構が集中する地区と、それ以外の地区とである。性格は時代とともに変化しているが奈良時代のみで語れば、前者は居住域、後者は生産域と考えられよう。前者では、掘立柱建物、塀、井戸、土坑が主体となり、後者では、溝、井戸が主体となる。

1）　掘立柱建物

主な建物は2間×3間の掘立柱建物が占め、屋に相当すると思われる。2間×2間の建物も少数認められる。この場合は倉であろう。塀はすべて南北方向に認められた。前回の報告では柵列としたものを塀に表現を改め、また建物の規模、配置、塀の配置等については前回報告したものをできるだけ踏襲しているが、今回の調査で、完掘した結果新しい知見が得られた為に、建物の規模、柱間寸法、主軸方位、建物の新旧の順序等若干の変更を行なった。この事をはじめにお断りしておきたい。

掘立柱建物A－1・2・3・7（図版1～3、27）　A調査区南端の近く、B14・B15・C14・C15区にて検出した。建物A－2・7と建物A－1・3は、ほぼ同位置に建てかえられ、建物A－2・7の北妻側と建物A－1・3の南妻側が重なる関係にある。それぞれの建物は、南北棟でよく似た主軸方位を示す。建て替えの順序は、建物A－7→2→1→3である。切り合いについては、建物A－2・7は溝A－36より新しく、土坑A－1より古い。建物A－3のみ東側に廂を持つ。掘方は建物A－2・7が長方形で深く大きいが、建物A－1は隅丸長方形、建物A－3は円形を呈し浅くなる。

掘立柱建物A－4・5（図版4、27）　C13・C14区にあり、建物A－1・3の3m北側に位置する。2つの建物は、建物A－4・5の順にほぼ同位置に建て替えられる。2間×2間の規模を示す建物は、調査区内ではこの2つの建物を検出したのみである。後に土坑A－3が東柱の位置に開削される為、東柱の有無はよくわからない。建物の一部分は、後に溝状遺構A－2に削平される。南東に土坑A－4が存在する。

掘立柱建物A－8・9（図版5・6、28）　建物A－4・5の西側約9mに位置し、D14・D15区にて検出した。建物A－8は、3間×2間の身舎に南側に2間の廂が付く。廂柱間寸法は、主軸方向では、身舎と同じ柱間寸法を示すが、主軸と直交する方向ではやや狭い。掘方は、身舎では長方形、廂では方形を示す。建物A－9は3間×2間の東西棟であり、掘方は隅丸方形である。建物A－8の身舎に重複して建て替えられる。

掘立柱建物A－10（図版6、29）　C12・C13区にて検出した、3間×2間の南北棟である。掘方は方形であり、少し深い。建物A－10は建物A－4・5の北側に約10m離れて単独で存在し、建て替えは認められない。この建物の西側には塀が存在するが、建物A－10に伴うかどうかよくわからない。

掘立柱建物A－6　B15区にて検出した。2間×1間の掘立柱建物である。掘方も小さく、規模も小さい南北棟で、溝状遺構A－1より後の新しい時期のものである。

以上の様に建物に復元し得た柱穴以外にも数多くの柱穴がある。これらは規模の大きなものから小さなものまでさまざまであり、また密集していたり、散在していたりする。これらも建物の復元に努めたが、配列のわからない柱穴の方が多かった。これは一部の柱穴では約30cmもの厚さで地山層と同じ土の埋めもどしが行なわれていて、識別し得なかった事も関係している。この事から判断すれば、実際の建物はもっと数多く建てられており、複雑な配置であったと思われるが、遺憾ながら復元し得た建物群は、先に述べたものだけである。

2）　塀

塀A－1（図版7）　B14・B15・C14・C15に存在する。建物A－2・7東側柱列の少し東側に、平行して存在する南北の塀で柱間は5間分あり、掘方は楕円形である。切り合いは、建物A－1・2・3・7より新しい。また溝状遺構A－1よりも新しい。

塀A－3（図版7、29）　D12区にあり、建物A－10の西側柱列にほぼ平行する南北の塀である。柱間は2間分を検出した。掘方は一辺60cmの正方形を呈し、それぞれ柱痕が認められる。なお、西側には溝A－33があり、この塀を切っている。

塀A－4（図版7、29）　D12・D13区に位置し、建物A－10・塀A－3とほぼ平行関係にある。この塀は4間認められ、検出した中でも長い。掘方は隅丸方形を呈し、一辺40cmである。

塀A－5（図版7、29）　塀A－3のさらに西側に位置する。掘方は方形であり、南の端の掘方は、上部を溝A－104に削平される。一辺50cm程度のものである。

今回の報告では前回の報告時の柵は塀に改称した。理由は集落内での使用目的を考えると柵では十分設置された目隠しの意図が表現できているとは思えず、むしろ塀の言葉がより適切と思われる。また柵A－2は今回の調査時に立ち割りを行なった結果、存在し難い事が判明したので今回の報告では柵A－2を抹消している。

3）　井戸

A調査区では、井戸を新たに4基検出した。A－12調査区に2基、A－6調査区、A－13調査区がそれぞれ各1基である。これらの井戸の時期は、A－12調査区井戸A－3が平安時代前期、残りの3基は中近世である。井戸の構造は、井戸A－3が船体を転用した井筒を持つほかは、素掘りである。井戸の深さは、井戸A－3、井戸A－5がそれぞれ3m前後を測り、残りの2基については、深さはわからなかった。出土遺物は、井戸A－3井筒内の上層と下層から遺物を検出し、井戸A－5では、小さな破片を2点検出した程度であり、井戸A－4、井戸A－6においては遺物は検出できなかった。以下個々の井戸の説明を加えてゆきたい。

井戸A－3（図版8、31）　B15・B16区にて検出し、調査範囲の境界付近にある。井戸掘方は、上部、下部が異なった2段構造を取る。上部は一辺2.2m程度の正方形を呈し、深さ0.9mから1.2m掘り下げている。下部は、正方形の上部掘方の中央に直径1.2mの円形の掘方を穿ち、上

部掘方底部からさらに約2.3m掘り下げており、この中に井筒を入れている。井筒は丸木をくりぬいた船材5枚を上方からみれば三角形状に組み合わせて土圧に耐え得る構造に作っている。支柱も横梁も認められず、井筒の底部には、沈下を防ぐ目的と思われる横木を入れているようであった。また井筒より下に玉砂利が見られた所から、玉砂利を敷きつめていた可能性がある。この井筒内から、後の遺物の節で述べる土師器甕、杯、皿、そして瓦、用途不明木製品が出土した。

井戸A－4（図版11）　A－13調査区東の隅A3区に位置する。調査区に約1/4程入っただけである為、正確な諸数値はわからないが、平面形は円形と思われる。井戸の断面形は、ラッパ状を呈し深さ約1mまでは徐々に狭くなり、それ以下は同じ径を示す。井筒等の設備はなく、素掘りと思われる。埋土は図版11の通りであるが、井戸A－5の埋土と似ている。調査し得た範囲内では遺物は出土しなかった。

井戸A－5（図版11、32）　A－6調査区中央北東よりD6区に所在する。検出面の掘方は不整な円形を呈す。掘方の断面形は、ラッパ状であり約1.2mまで徐々に狭くなり、それ以下は1.2m×0.9mの楕円形のまま深くなり、深さ2.7mである。埋土は図版11の通りであり、土師器羽釜や用途不明木製品が出土した。

井戸A－6（図版11）　A－12調査区の南東側の隅A14区にて検出した。検出面は、埋積谷Ⅲ層上面であり、ここから掘削されている。掘方は円形で径0.64×0.58m、深さ0.7m以上を測り、素掘りである。遺物は全く出土しなかった。

4）　溝

非常に数多く溝が縦横に掘られていたのが当遺跡の大きな特質である。洪積段丘上の遺跡であるにもかかわらず溝が数多く認められた事は何を意味するのであろうか。幅約3m、深さ約1.5mを測るような大きな溝よりもむしろ、大多数を占めているのは幅が1m、深さ0.3mにも満たない小さな溝である。これらの溝の性格はさまざまに考えられるが、この点について後に述べている。一方、溝内遺物は比較的まとまっているものと、ごく少量しか出土しないもの、全く出土しないものなどさまざまである。また切り合い関係については後にまとめている。

溝A－1（図版9）　A5・6、B6・7、C8・9・10区に検出する。段丘を横切る形で掘られた溝である。溝東端は、溝底がT.P.＋15.65m、西端はT.P.＋15.25mを測り、東側が高い。西側は、溝A－15に合流するかあるいは切り合っていると思われるが、後世の攪乱の為わからない。遺物は、須恵器、土師器の小片を数点出土したのみである。

溝A－2　A3・4、B3・4・5、C5・6、D6区に検出する。大堀遺跡では最も大きな溝の1つであり、溝A－1と同様、段丘を横切る。東から円弧をえがきつつ西へ北へ向かう。溝A－2の東端は、東除川の旧河道部分では、検出できなかった。埋土は、上下に別れ、上層は砂層、下層は粘土層である。遺物は主に下層中、溝底から0.4m～0.5m浮いた状態で須恵器、土師器、木片を出土した。

溝A－3（図版9）　B3、C2・3、D2区に検出する。南北に真直ぐ伸びる溝で、北端は

旧東除川の河道に削平される。溝A－2とは交差する事なく、少し北側から始まる。遺物は場所によっては、須恵器甕の破片が集中して出土した所もあるが他の部分では極めて少ない。

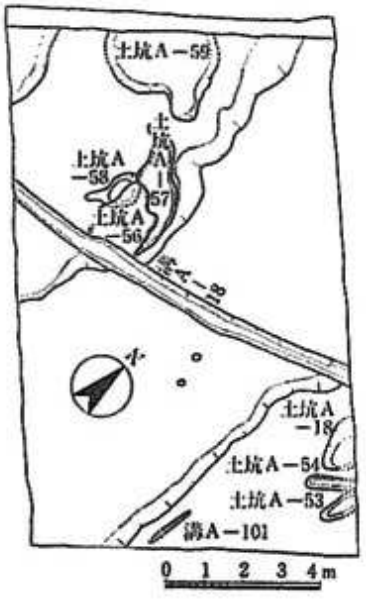
溝A－5（図版9）　B14・15、C15、D16区に検出する。溝A－5が約23mで終った延長上に、土坑が2基存在する。幅も溝に近似している。これは、溝の延長上にたまたま土坑が掘られたとも考えられるし、あるいはまた、もともと同一の溝が削平を受けたために溝の底部だけが残って、溝と土坑に分離してしまったとも考えられる。この溝は、土坑A－4の埋没後に掘り込まれ、開析谷か、溝A－7に連なると思われる。

溝A－6（図版9）　C15、D15・16区に検出する。トレンチ部の溝の続きを西側に検出した。そして今回の調査では、溝A－6埋没後に、重複して再び溝A－34が掘られていることが判明した。溝は直線をなし、深さ、幅ともほぼ一定である。

溝A－7　B15区に検出する。この溝は、開析谷に沿って掘られており、遺物が集中して出土した所が2、3か所ある。北側では溝A－20に連なるが、南側では溝A－36には続かないと考える。

溝A－11（図版9）　A4、B4、C3・4、D3区に検出する。今回の切り開げ調査においても、2つの調査区から新たに溝の延長部分を検出し真直ぐ伸びる事を確認した。遺物は少量出土した。

溝A－12・13・14（図版9）　A5、B5・6、C6・7・8・9・10区に検出する。トレンチ部にて検出したこれらの溝は、切り拡げ部では溝の続きの部分は全く検出できなかった。このためこれらの溝は、溝A－40にすべての溝が重複して連なるのではないかと考えている。遺物は少量出土しただけである。



第4図　A－8調査区
遺構平面図（1/200）

溝A－15（図版9）　A14・15、B12・13・14・15、C10・11・12・13、D10・11区に検出する。開析谷の底部を屈曲しつつ流れる。遺物はわずかに出土している。屈曲した溝であり、開析谷の底部を流れる事から、自然の流路の可能性が強い。

溝A－16・17（図版9）　C7・8、D7区に認められ、切り拡げA－6調査区にて検出した。溝A－16はV字溝の細い溝、溝A－17はU字溝である。溝A－17は次に述べる溝A－18と同一溝の可能性がある。溝A－16は東側では土坑A－51としたものに連なるかも知れない。遺物は細片を出土しただけである。

溝A－18（図版9）　C9、D9・10区に検出する。埋積谷堆積層第Ⅲ層の下層に認められた。溝の下層にも土坑

がある。この溝は、溝A－15に切り合うか、合流するかどちらかであるが、調査範囲外の為あきらかではない。

溝A－19　この溝は溝A－20、A－21、A－22と連なっているが、後世に溝A－43に削平され分断されて検出したものである。開析谷の落ちぎわの高い部分に溝群が平行して流れるうちの一本である。

溝A－20・21・22（図版10、30）　C12・13、D12区に検出する。これらの溝は比較的土色は類似しているが、互いに切り合っている。埋没すれば掘り直して、継続して使用したものと思われる。溝A－20からは、遺物を集中して検出するなどして、比較的遺物出土量は多い。

溝A－23・24（図版10）　C12・13、D12区に検出する。この溝は、先に述べた溝A－20～22と平行で西側に流れる。これらの溝は調査範囲では開析谷際を流れる。溝内からは、さほど遺物を出土しない。

溝A－27・28（図版10）　C13、D12区に検出する。やはり、先に述べた溝群と同様、開析谷西側を流れる。この２つの溝は同一の可能性がある。

溝A－30　C13、D13・14区に検出する。東西方向を示し、長さ10m前後の短い溝である。下層から土坑A－66を検出した。

溝A－34（図版９）　C15、D15・16区に検出する。溝A－６の埋没後再び開削された溝であり、幅は溝A－６に較べ狭くなり、一定の幅で東西に真直ぐ伸びる。

溝A－35（図版９）　A15・16、B15区付近にて検出する。溝内から遺物を出土し、炭化物を多量に含んでいる。南の端では太く、北へは序々に狭くなり最後には消失する。

溝A－36（図版９）　A16、B15・16区に検出する。この溝は北側に続かず、溝A－７とは別な遺構と思われる。上層からは多量の土器を出土し、２・３ヵ所に集中し破砕された状態であった。これは廃棄されたと考えられる。

溝A－40　C７・８区に検出する。同一の溝を３回にわたって補修し、井戸A－５より以前に作られ、かつ中央環状線買収前まで使用されていた。溝A－13、溝A－40、溝A－14、および溝A－12、溝A－40、溝A－14が一連のものであり、それが重複し時代とともに改削されていたと思われる。

溝A－43（図版８）　A９、B９～11、C10～12、D11・12区に検出する。東西方向を示し、A調査区を横断する。A－12調査区では幅14m前後、A－９調査区では幅５m前後を示す。ゆるやかな傾斜をもつ南側斜面と急な傾斜で溝底に降る北側斜面からなり、右左不均等の断面を持つ。また、東側は高く、溝幅が狭くなり、西側は広く深い形をなし、西側から掘り込まれた形をなす。この溝は、すでに埋没していた埋積谷を横切って掘削している。埋土は灰色粘土層を示す下層と、さまざまなブロック層からなる上層からなり、上層は整地層の可能性がある。遺物は少量検出した。

溝A－103　A14区にあり、埋積谷堆積層Ⅲ層下から検出した溝は、溝A－４と同一延長上に

あるが、埋土、溝幅が異なり、別に開削されたものと考えられる。溝の時期は、遺物が出土しない為不明である。

5）　小溝

溝A－44～100（第5図）　A4、A10～12・15、B10～15、C10区に検出する。埋積谷堆積層Ⅰ層上面から切り込んでいる。溝は埋積谷の部分に検出範囲が限定されている。長さに短い、長いの差は認められるが、溝幅、深さは大体一定している。これらの溝は大半は方位N－4°－Eかこの角度に近い角度を示す。遺物は小片を検出した。

6）　土坑

相当数検出した土坑は、大きさから見た場合、長径1mを超す土坑は少ない。出土遺物数は極めて少なく、一括遺物も出土しなかった。土坑の性格は、わからないものが多い。

土坑A－1　前回調査時より南側に延びた。井戸A－3と接する。埋土の色調も灰紫色から暗灰紫色を呈し、遺物も少し出土した。

土坑A－2　土坑A－1と同様、比較的浅い遺構である。井戸A－3に接し、埋土も似ており、井戸A－3と同時期に埋没したと思われる。

土坑A－8　溝群を切って作られている。

土坑A－18（図版11）　A－8調査区北東側に出土した。この土坑の堆積土、暗灰色粘土層から、奈良時代の土師器甕の破片を出土した。調査区内に部分的に検出された為、性格は判然としない。

土坑A－10・11・30～35　今回の調査では比較的まとまって類似性をもった土坑を検出した。南北に長く、東西に短い長方形の土坑が長辺を互いに接して東西方向に並びこの列が2列並ぶ。土坑の埋土は紫灰色粘土のブロック層からなるものや基本層序Ⅱ層がブロックとして混っているものもあり、土坑相互の切り合い関係が存在し、時期差が認められる。出土遺物は非常に少ない。これらの土坑群の性格は粘土取り跡と推察され、埋土中から少量であるが染付等の遺物を出土し近世以降に掘削されたと考えられる。

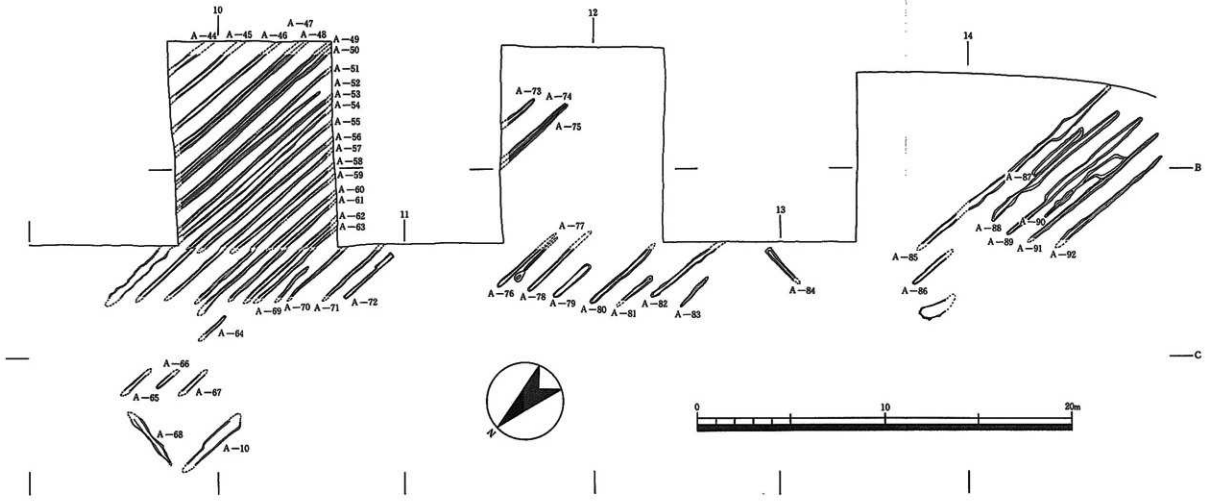
土坑A－12・13・17・46・49・50・52・60　埋土の土色は一様に暗茶色かそれに近い色調を呈す。遺物は一片も検出しない。この遺構の埋土が暗茶色であり、遺物がまったく出土しない事から、何とも判断できないが一応、ここでは遺構として取り扱っている。

土坑A－14～16・45・48（図版11）　埋土の土色は灰白色である。遺物は出土しない。上記の一群と同様の性格のものではないかと推測したいが判然としない。

土坑A－55・56・57・58（第4図）　埋積谷堆積層Ⅲ層下から検出した。遺物は出土しないが埋土中に炭化物を含み非常に浅く不定形な形状を呈す。

土坑A－61～63・67（図版11）　基本層序Ⅳ層下から検出した。しかし、遺物は出土せず、時期及び性格は不明である。

以上であるが、遺物を出土する土坑が少なく、全く時期のわからないものも存在する。一覧表



第５図　溝Ａ－44～92　遺構平面図（1/200）

に示した年代も、出土遺物から判断した年代とともに、切り合い関係によるものも含んでいる。

7）　溝状遺構

名称としては必ずしも適切ではないが、前回の概報にこの名称を使用している為、引き続き使用する。性格は溝および整地した土層がそれぞれ考えられる。溝状遺構A－4～8では人為的な埋土が観察された。なお前回の概報で溝状遺構としたものは、今回溝状遺構A－1とA－2をあわせたものにあたる。

溝状遺構A－1　A－12調査区、B14、C14区の一部に存在する。浅い遺構で深さ10cm以内である。掘立柱建物の柱穴を削平している。埋土は暗灰紫色粘質土である。

溝状遺構A－2　A－12調査区　B13・C13区にて検出する。深さ5cm～10cm　埋土は暗灰色を示し、掘立柱建物の柱穴を削平している。位置的には井戸A－2より南に存在する。

溝状遺構A－3　C12、D12区から検出する。東側は溝A－26に切られる。深さ5cm～15cmで北側の方が深い。少量の遺物を検出した。

溝状遺構A－4　C12・13区に検出する。溝A－31と溝A－104の間にある。隣接する溝状遺構A－5とは、少し時期が異なりこちらの方が新しい。溝A－104を切る。深さ5cm－10cmで埋土は茶黄色粘質土である。

溝状遺構A－5　C12、D13区に検出する。溝A－104と溝A－31の間にある。溝A－104に切られる。深さ5cm～10cmであり、埋土は黄茶色粘質土である。

溝状遺構A－6　D12区にて検出する。溝状遺構A－3、溝状遺構A－8を切る。深さ5cm～10cmで黄灰色粘質土である。

溝状遺構A－7　D13区に検出する。深さ7cm～10cmを示し、埋土は黄灰色粘質土と茶灰色粘質土でブロック層である。

溝状遺構A－8　D13区に検出する。深さ3cm～10cmを示し、埋土は暗茶色粘質土と黄灰色粘質土のブロック層である。

溝状遺構は、開析谷の落ち際を流れる溝群と前後して形成され、集落の北および東側の沿辺部に限って認められた。また遺物は少量出土した程度である。

8）　その他

東除川旧河道（図版8）　トレンチ部調査ではA調査区最北端にて、二段になった川岸の傾斜面を検出した。切り拡げ部にはその続きがあり第一段目は深さ1.5mになるが、第2段目は落ち始めを検出したが深さはわからなかった。第一段目の埋土は図版上に示し、第二段目は落ち始めの部分では砂層を中心とした堆積層が認められた。この埋土中からは瓦器片等を検出した。

埋積谷　トレンチ部の調査にて判明した埋積谷は、切り拡げ調査においても各調査区から検出した。A－6、8、9、10、11、12調査区からである。堆積層は、前回と同様4層に分層した。この4層は上から1層　淡灰褐色粘土層、2層　灰色粘土層、3層　灰褐色粘土層、4層　暗茶色粘土層である。これらの調査区のうち、必要な地区のみ説明を加える。

A－6調査区、この地区では、井戸A－5が位置する付近からゆるやかに地山は降り始める。この部分に基本的に上、下2層の堆積が認められ、このうち上層は、灰黄色砂質土層と黄灰色砂質土層に分けられ、下層は灰色砂質土層、灰黄色砂質土層等に分けられる。上層は、瓦器、土師器が主であり、下層は、須恵器、土師器が主である。

整地層　A－12調査区A15・16、B15・16区に認められる。集落の北東側の開析谷を約80cm盛り土をしている。これは開析谷の集落側南端部分約30mの範囲にのみ認められ、約8m東側へ拡げている。土層は2層に分層でき、上層は褐灰色粘土層、下層は灰色粘質土層を示す。埋積谷4層（6世紀後半）上に盛り土しており、溝A－35（8世紀中葉）が掘り込まれる事から、集落形成の早い時期に盛り土されたと考えられる。

第3節　遺　　物

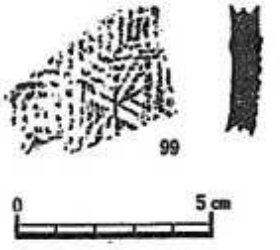
A調査区、遺物総量はコンテナにして約80杯である。これらのうち、主要な遺物、一括遺物等に限定して報告している。そしてこれらの掲載した遺物に関しては後に一覧表を作製しているので、本文中に説明文の無い遺物、その他に関しては参照されたい。なお器種分類基準については第Ⅱ章第3節、第4節で記述している。

1.　土器

掘立柱建物・塀出土土器（図版12、36）建物、塀の遺物の中には、土師器杯C類・D類を出土している一方で、土師器杯A類および須恵器杯B類も出土している。（4）は、須恵器杯D類で底部外面に高台を貼り付けている。（5）は口縁端部内外面に沈線を施している。

井戸A－3出土土器（図版12、39）　土師器杯C類、皿C類を出土している。(28)～(31)、(33)は、井筒底部から出土した。(32)は、井筒上層より出土した土師器杯B類である。高台は退化して杯底面が高台より下方にはみ出している。

溝A－2出土土器（図版13、33・37・38）　土師器甕A類が3点、B類が8点出土した。このほか、須恵器杯C類も出土しているが図示していない。



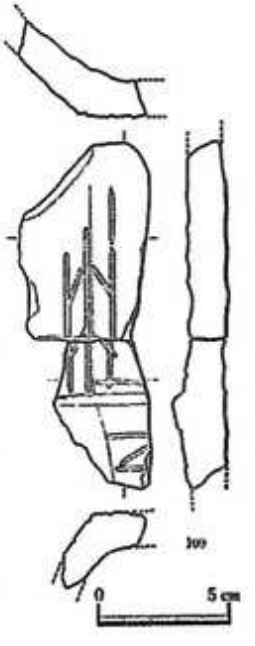
第6図　溝A－104出土須恵器拓本（綾杉文）（1/2）

溝A－20出土土器（図版14、35・38）　土師器杯B類や須恵器杯C類等を出土した。(54)の内面の暗文は正放射暗文である。(57)の須恵器杯蓋の内面のかえりは少し残っており口縁端部より内側に入り込んでいる。

溝A－36出土土器（図版14、34・38）　ここに掲載した遺物は、法量の大きなものを選んでいる。土師器杯では、A類が(61)、B類では(62)がある。土師器杯か鉢かよくわからないが(66)・(68)がある。須恵器壺(64)は、(76)と類似し調整も丁寧に行なっている。土師器甕では、A類(65)・B類(67)を代表して示した。ここでは、A類がB類を数量的に圧倒している。土師器高杯(63)の脚柱部の面取りは13面である。

(98)は埋積谷出土の弥生時代前期の壺底部と思われる。(99)は溝A－104出土の須恵器甕の体部であり、綾杉文のタタキ目を施している。（第6図）

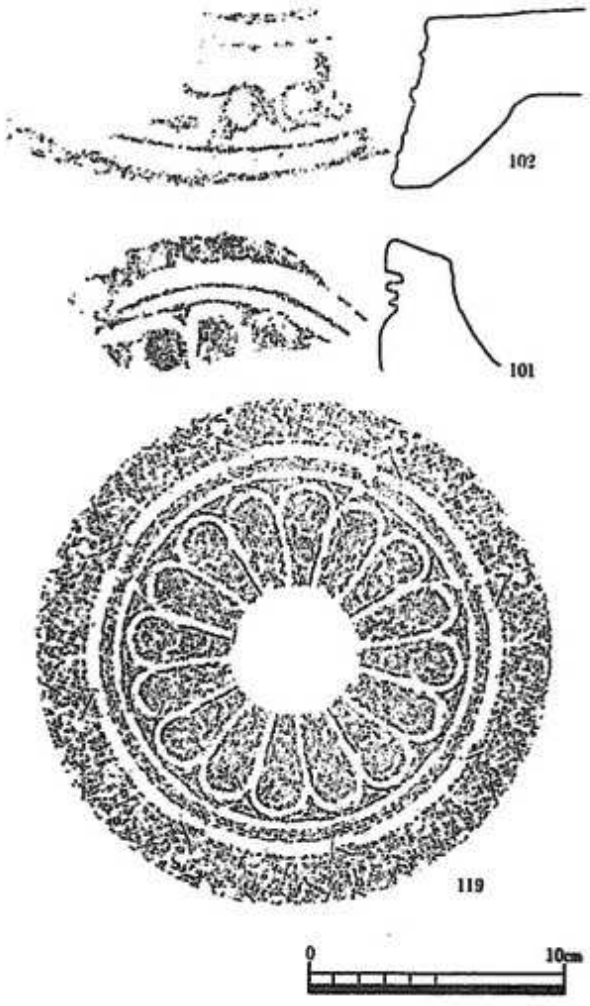
(100)は埋積谷出土の家型埴輪と思われる破片である。ただ小破片の為全体の形状等についてはわからない。（第7図）



第7図　埋積谷出土家形埴輪（1/3）

2.　瓦（第8図、図版16・17、44）

A調査区の瓦の出土量は総数約170点であり、これらのうちで代表的な



第8図　A調査区出土軒瓦（1/3）

ものについて述べる。軒瓦は（101）（102）である。（101）は単弁蓮華文、（102）は唐草文であるが風化が激しくこれ以上はわからない。（119）は前回報告した軒丸瓦の復元案である。単弁16葉、外区は無文で蓮子は不明である。復元直径は約19.5cmを測り、外区幅は約1.3cm、内区径は約13.2cm、中房径は約5cmになると思われる。この軒丸瓦を前回の報告では単弁18葉としたが今回は上記の通り改めた。（第8図、図版35）

丸瓦はⅠ－aが（105）、Ⅱ－1－aは（103）、Ⅱ－2－aは（104）である。（106）、（109）は井戸A－3井筒底部より出土した遺物である。（図版16・17、44）

2.　埴

埋積谷埋土から2点破片を出土した。色調や形態は前回報告したものと同様な白灰色で砂粒を含み、焼成は良好である。

3.　石器（図版18、43）

サヌカイト製石器および玄武岩、安山岩質石器、砥石など約30点出土し、この中で代表的なもの4点を図示する。（113）は石鏃、のこり3点はハンマーストーンおよび砥石である。

4.　木製品

井筒材（図版19・20、41・42）

（115）～（117）は、井戸A－3の井筒として使用していたものの実測図である。これらの部材は、船底部であったものを、加工して井筒に転用したものである。

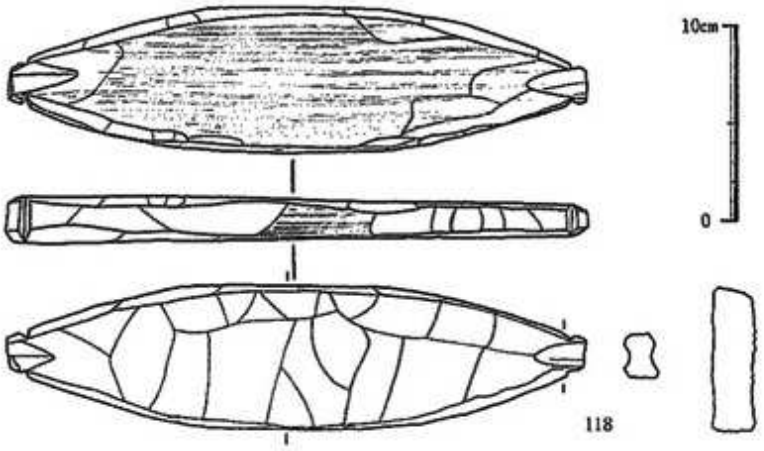
（116）は残存長258cm、幅80cm、厚さ9～13cmである。刳船を加工し井筒に使用できる部分だけを使っている。舷側部が心もち残る程度にまで左右とも削り取っており、この上端面は外側に傾斜した面をつくっている。この面には、2カ所ずつ、4×2.5cmの枘穴を穿ち、目釘を入れて隣接する井戸枠と繋いでいる。船首（尾）部は、船体が狭くなり、井筒に使用するには必要ない為、狭くなり始める所から先端は切り落して、幅がほぼ一定している船の中央部を使用してい

る。図の下方は船首（尾）として、使用されていた事がわかる。船首（尾）になるにつれ船底が厚くなり、船底内側も徐々に高くなる。船体は、中央部の幅はほぼ一定で、断面形状も似ているが、船首、船尾部のみが細くなる構造と思われる。船首（尾）部外側には、腐蝕した痕跡がある。この腐蝕は、図の上部にみられるような地表面に近い部分が全体的に腐植してゆくものではなく、部分的に虫に蝕われたような痕跡であり、船として使用していた時の腐蝕痕と思われる。船底中央に7.5×5.5cmの枘穴があり、木片が埋め込まれている。船体外側、内側にそれぞれ手斧の削った痕跡がおぼろげながら残っている。

（115）は残存長260cm、幅130cm、厚さ10～13cmを測る。船材の船首（尾）部を下部に、中央部を上部にして土圧を直接受ける外側板に使用している。左右の舷側部は、図の下から上を見る方向（横断面）において、右側舷側は、船底から立ち上がる部分を、内側で約10cmの高さを残して削り取り、上端面は外側に傾斜した面を作っている。左側の舷側部は、内側の船底から高さ25cmほどの所で、上端面が水平になるように切断している。船使用時の表面と新たに井筒加工時に切断された部分とは色調が異なり、後者が新しく、汚れていない事からこのように判断している。井筒の下方になる部分は、船底部の内側が徐々に狭くなり、厚さも下方にゆくにつれて増してゆく事から、船首（尾）に相当すると思われる。船首（尾）の部分は、井筒としては不必要な部分を鋸で切断している。両舷側の上面には、それぞれ2ヵ所に4×2.5cmの枘穴を穿ち、目釘で隣接した井筒を繋いでいる。井筒の上部は腐蝕し、切断面は全く残っていない。内側から見た左上部は、一部分切断されて井筒として足らない部分に（117）の井筒小片を外側から斜めに置き土圧に耐えられる工夫がみられた。船材は太い丸木をえぐりこみ、外側も加工して使用している。船底外側は、ほぼ平行の幅の平坦面を持っているが、船首（尾）部でも狭くなる傾向はみられない。船材外側の両舷側には、手斧痕が平行に、図の縦方向に並んでいるのが認められた。船材内側では、手斧の刃先の窪みが認められた。船材中央部は井筒上部に位置したため、腐蝕が進行してしまい切断面は残っていない。この為（115）（116）が同一の船材から切断して作られた井筒であるかどうかはわからない。

用途不明木製品（第9図、図版43）

（118）は井戸A－3井筒内出土の用途不明木製品である。これは全長29.7cm、最大幅7.4cm、厚さ1.6～2.9cmを測り、板材をやや細長く舟形に整形している。この木製品の一平面は割った時のささくれ立った面を少し手斧で削っているものの凸凹は著しく残っている。もう一方の面は手斧で丁寧に削っている。平面の両端の尖った部分には長軸方向に約2cmの長さで幅1.5cm、深さ3～4mmに至るV字状の抉りがある。この抉り込みは両平面の両端にあわせて4ヵ所認められる。次に側面は全周にわたって手斧で削る。ただ一側面のみくさびで割り裂いた時の凹凸面が手斧の削りによっても少し残っている。両側面の両端から約5mm内側に入った位置に幅5mmほどの切り込みを平面の長軸方向とは直交方向に入れている。この切り込みは一側面に2ヵ所、両側面で4ヵ所認められ平面両端のV字状抉り込みと対応している。平面と側面の稜の部分には全体に



第9図　井戸A－3井筒内出土木製品（1/4）

面取りを施している。厚さは右端部が1.6cmで左端部が2.4cmで除々に変ってゆく。以上がこの木製品のだいたいの概要であるが、使用痕については認められなかった。また側面の4カ所の切り込みも、使用痕跡は何も認められなかった。井筒内部から出土した土器の年代がこの木製品の年代を示すものとすればおおよそ9世紀後半頃のものと考えられる。

第4節　小　　結

A調査区は奈良平安時代の遺構を主として検出した。

弥生時代以前はサヌカイト等剥片を約20片、石鏃1点、ハンマーストーン1点、弥生式土器壺底部等を検出したのみであった。この他に時期不明の砥石2点がある。

古墳時代後期では前回の遺構の延長の溝A－2等を検出した。

奈良・平安時代初頭では、新たな建物、溝を見い出し、集落が相当拡がっていた事を想定させた。前回の調査部分と合わせて、建物10棟（建物A－1～A－10）、塀4条（A－1、A－3～A－5）、井戸3基（井戸A－1～A－3）を認めた。これらは規格性をもって意識的に作られたかどうかについては明らかではないが、東西か南北方向に近い角度を示している。

遺物では前回同様土器（土師器、須恵器、灰釉陶器等）を検出し、瓦類では軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、塼を認めた。

先の概報では埋積谷は少なくとも13、14世紀に埋め立てられるとしたが、今回の調査では一部分西寄りの部分を埋め立てた事が判明し、集落形成の比較的早い時期（6世紀後半～8世紀後半）になされたようである。

開析谷の東側はトレンチ部調査では、はっきりとした遺構が認められなかったが、今回の切り拡げでは溝、土坑等の遺構がわずかに存在していた事を確認した。しかしこれらも極めてわずかであり集落の中心部分は依然として開析谷の西側にある事には変りはない。

鎌倉時代以降においてはこれまでの知見に加えて井戸を3基新たに検出した。遺物の出土を見ない為時期を決めかねる遺構もあるが、断片的な出土土器からはおおむね16・17世紀と思われる。16・17世紀の遺構としては開析谷が埋没した後に溝A－43が掘られる事が判明した。

第1表　掘立柱建物、塀一覧表

遺構名	地区	規模 桁行 (間)	規模 桁行 (m)	規模 梁行 (間)	規模 梁行 (m)	柱間寸法 桁行 (尺)	柱間寸法 桁行 (m)	柱間寸法 梁行 (尺)	柱間寸法 梁行 (m)	建物面積 (㎡)	建物の方向	主軸方位	掘方 形状	掘方 規模(cm)	海抜高 (T.P.+) (m)	備考
建物A－1	BC14区	3	7.2	2	4.8	8	2.4	8	2.4	34.56	南北	N－5°－E	長方形	70×65×50	15.85	図版1
建物A－2	B14・15区	3	5.85	2	3.9	6.5	1.95	6.5	1.95	22.82	南北	N－9.5°－E	長方形	70×60×50	15.88	図版2
建物A－3	BC14区	3	5.4	2	3.3	6	1.8	5.5	1.65	21.06	南北	N－8°－E	円形	50×40×30	15.85	廂5.4×0.6　3.24㎡　図版3
建物A－4	BC13・14区	2	5.1	2	3.9	8.5	2.55	6	1.8	19.89	東西	N－94°－E	長方形	50×40×40	15.80	図版4
建物A－5	BC13・14区	2	4.5	2	3.9	7.5	2.25	6.5	1.95	17.55	東西	N－93°－E	長方形	60×50×40	15.80	図版4
建物A－6	B14区	2	3.0	1	1.95	5	1.5	6.5	1.95	5.85	南北	N－55°－E	円形	20×20×20	15.90	
建物A－7	B14・15区	3	6.75	2	4.5	7.5	2.25	7.5	2.25	30.38	南北	N－7°－E	長方形	70×60×60	15.88	図版2
建物A－8	D14・15区	3	6.75	2	4.5	7.5	2.25	7.5	2.25	50.63	東西	N－92°－E	長方形	80×70×40	15.83	廂6.75×3.0　20.25㎡　図版5
建物A－9	D14・15区	3	6.75	2	4.8	7.5	2.25	8	2.4	32.4	東西	N－92°－E	円形	50×50×30	15.83	図版6
建物A－10	CD12区	3	5.85	2	3.9	6.5	1.95	6.5	1.95	22.81	南北	N－8°－E	方形	70×60×50	15.60	図版6
塀A－1	B14区	5	10.5			7	2.1				南北	N－8°－E	方形	55×50×35	15.88	図版7
塀A－3	D12区	3	5.8			6.5	1.95				南北	N－1.5°－E	方形	70×60×60	15.70	図版7
塀A－4	D12・13区	4	7.8			6.5	1.95				南北	N－2°－E	方形	50×50×40	15.75	図版7
塀A－5	D13区	2	4.2			7	2.1				南北	N－5.5°－E	方形	90×80×60	15.80	図版7

第2表　溝一覧表(1)

遺構名	調査区	検出長(m)	幅(m) 広	幅(m) 狭	深さ(m)	平面形	断面形	方位	埋土	出土遺物	備考
溝A－1	A－5 ほか	42.9	1.5	1.0	0.4	比較的真直ぐにのびる	浅いU字形の溝	N-69°-E	黄灰色シルト、灰紫色粘土とブロック 暗灰紫色粘土、灰色粘土		図版9 古墳時代後期
溝A－2	A－4、13	39.0	4.5	1.9	1.5	東端は東、西端は北西に屈曲す	U字溝、肩口は急傾斜	N-84°-W	細砂層、粘土層	34～51	古墳時代後期
溝A－3	A－13	23.3	1.2	0.5	0.13	少し蛇行するがほぼ直線に近い	肩口急傾斜、底面は平ら	N-11°-W	灰紫色粘土		図版9、奈良時代
溝A－5	A－12	23.10	1.4	0.6	0.21～0.27	ほぼ真直ぐ	肩口急傾斜、底面は平ら	N-84°-W	灰紫色粘質土、暗灰紫色粘質土 暗灰紫色粘質土(砂粒多い)		図版9 奈良時代
溝A－6	A－12	25.0	1.7	1.2	0.34	真直ぐのび西側では深い部分のみ残る	肩口急傾斜、底面は平ら	N-87°-W	灰色粘質土		図版9、奈良時代
溝A－7	A－12	32.0	0.7	0.3	0.27	開析谷に平行して流れる	浅い皿状の溝	N-7°-E	灰紫色粘土		奈良時代
溝A－11	A－3 A－13	27.0	2.7	1.3	0.36	真直ぐ、6トレでは検出せず	肩口急傾斜、底面は平ら	N-28°-W	灰黄色粘土、灰色粘土、灰褐色砂質土のブロック	96	図版9 近世以降
溝A－12	A－5	21.0	1.7	1.2	0.98	真直ぐ	肩口急傾斜、底面は平ら	N-89°-W	暗灰色砂質土層、灰褐色砂質土層		近世以降
溝A－13	A－5	21.0	2.1	1.5	0.4	直角に折れ曲る溝	U字溝	N-90°-W	灰白色粘土ブロック層、灰色シルト層		図版9、近世以降
溝A－15	A－12 A－8	70.0	4.2	1.4	0.42	蛇行している	両肩口ゆるやか、所々に深み	N-7°-W	暗茶灰色粘質土、灰色中細砂、灰色細砂、灰黄色シルト、灰色中細砂層		図版9 古墳時代後期
溝A－16	A－6	3.44	0.4	0.1	0.12～0.22		V字形の底部幅の狭い溝	N-83°-E	暗茶灰色粘土、灰黄色砂質土、灰色砂質土		図版9、奈良時代
溝A－17	A－6	4.12	0.4	0.3	0.15	真直ぐのびる	U字形を示す	N-58°-E	灰黄色粘土(周囲より暗い)、灰黄色粘土		図版9、奈良時代
溝A－18	A－8	9.48	0.5	0.3	0.16～0.23	ほぼ真直ぐ	U字形を示す	N-67°-E	黄褐色粘土、灰紫色粘土		図版9、奈良時代
溝A－19	A－12	25.8	1.3	0.2		ほぼ真直ぐ北方向にのびる		N-12°-E	灰褐色粘土、暗灰紫色粘土、灰紫色粘土		奈良時代
溝A－20	A－12	5.7	1.1	0.4	0.26	ほぼ真直ぐ北方向にのびる	肩口急傾斜、底面は平ら	N-12°-E	灰紫色粘土、暗灰紫色粘土	52～59	図版10、奈良時代
溝A－21	A－12	18.0	0.9	0.4	0.24	ほぼ真直ぐ北方向にのびる		N-12°-E	暗灰紫色粘土、灰褐色粘土		図版10、奈良時代
溝A－22	A－12	4.2	0.5	0.1	0.22	少し蛇行	肩口急傾斜	N-12°-E	暗灰紫色粘土	81、82	図版10、奈良時代
溝A－23	A－12	9.0	0.5	0.3	0.36	ほぼ真直ぐ北方向にのびる	肩口傾斜、底面は平ら	N-12°-E	灰白色粘土、黄灰色粘質土、灰色粘土		図版10
溝A－24	A－12	16.17	0.8	0.4		ほぼ真直ぐ北方向にのびる			暗灰紫色粘土、暗茶灰色粘土、灰茶色粘土		
溝A－25	A－12	14.4	1.0	0.2	0.22	ほぼ真直ぐ北方向にのびる	肩口傾斜、底面は平ら	N-12°-E	黒灰紫色粘土、暗灰茶色粘土、暗灰紫色粘土		奈良時代
溝A－26	A－12	4.0	0.8	0.4	0.18	ほぼ真直ぐ北方向にのびる	肩口傾斜、底面は丸い	N-12°-E	灰色粘土		図版10、奈良時代
溝A－27	A－12	8.0	0.8	0.7	0.2	ほぼ真直ぐ北方向にのびる	肩口傾斜、底面は平ら	N-12°-E	暗灰紫色粘土		図版10、奈良時代
溝A－28	A－12	10.0	1.3	0.6	0.3	ほぼ真直ぐ北方向にのびる	肩口ゆるやか、底面は平ら	N-12°-E	暗灰茶色粘質土、暗灰紫色粘土 暗灰色粘土(灰白色粘土ブロック含む)		図版10、奈良時代

第2表　溝一覧表(2)

遺構名	調査区	検出長(m)	幅(m) 広	幅(m) 狭	深さ(m)	平面形	断面形	方位	埋土	出土遺物	備考
溝A－29	A－12	9.2	2.1	1.6	0.38	ほぼ真直ぐ北方向にのびる	肩口ゆるやか、底面は平ら	N-12°-E	暗茶灰色粘質土、暗灰色粘土(灰白色粘土ブロック)、暗灰紫色粘土、灰色粘土		図版10、奈良時代
溝A－30	A－12	7.16	0.8	0.1	0.36	ほぼ直線に西から東	肩口急傾斜、底面は平ら、浅い皿状	N-83°-W	暗灰紫色粘質土(やや上層より暗い)		奈良時代
溝A－31	A－12	6.16	1.1	0.4	0.13	ほぼ直線、ある部分では幅広い	肩口急傾斜、底面は平ら	N-71°-W	暗灰紫色粘質土(少し暗い)		奈良時代
溝A－32	A－12	14.44	0.5	0.2	0.05	ほぼ東西方向に流れるが一部分広くなる	浅い皿状の断面形をなす	N-75°-W	暗灰紫色粘質土、灰紫色粘質土		奈良時代
溝A－33	A－12	5.62	0.3	0.1	0.05	ほぼ真直ぐ北方向にのびる	肩口ゆるやか、底面は平ら	N-84°-W	灰紫色粘土		奈良時代
溝A－34	A－12	13.40	0.7	0.3	0.26	真直ぐ、溝A－6を削平する	肩口急傾斜、底面は平ら	N-84°-W	灰紫色粘質土	76～80	図版9、奈良時代
溝A－35	A－12	4.93	1.2	0.5	0.18	ほぼ真直ぐ	肩口急傾斜、底面は大きくカーブ	N-11°-E	暗灰色粘土、灰色粘土		図版9、奈良時代
溝A－36	A－12	15.40	2.7	1.1	0.27	全体ではほぼ真直ぐ、肩部少し蛇行	肩口少し急、底面は平ら	N-11°-E	灰紫色粘土、灰紫色粘質土、灰色粘土	60～75	図版9、奈良時代
溝A－37	A－12	7.70	0.4	0.2	0.07	直線をなす	肩口ゆるやか、底面は丸い	N-83°-W	暗灰色粘土、灰色粘土		
溝A－38	A－12	1.54	0.9		0.11	弧を描いている	肩口傾斜、底面はU字形	N-13°-W	灰紫色粘質土、灰紫色砂質土、暗灰紫色粘質土		奈良時代
溝A－39	A－12	1.16	0.4	0.2	0.20	短く真直ぐ	底面が丸いU字溝	N-67°-W	灰紫色粘土、灰黄色粘土		
溝A－40	A－6	8.0	2.9	2.1	0.51	やや蛇行する	全体U字形、底部は平坦面を作る	N-43°-E	黒色土、暗灰色細砂	83、86	
溝A－41	A－6				0.03	溝A－41から別れて屈曲する	浅い皿状				
溝A－42	A－6				0.03	屈曲しつつ、途中で消滅する	浅い皿状				
溝A－43	A－9、A－12	49	4.45～7.5		0.48	東西9トレにもその延長上のものがある	両側肩口浅く、東側急傾斜	N-90°-E	淡灰色粘質土、灰色粘土、灰黄色粘質土		図版8
溝A－44～63	A－10	10.4	0.38～0.18		0.05～0.06	ほぼ直線、溝は互いに平行	ゆるやかな皿状	N-4°-W	灰黄色砂質土(埋り込む、土層より少し暗い)		近世
溝A－85～91	A－12	9.24	0.59		0.05～0.06	互いに平行、多少凹凸がある	肩口からゆるやかに傾斜して浅い皿状	N-3°-E			近世
溝A－92～94	A－11	4.35	0.26～0.12		0.03	直線溝A－92単独溝A－93・94連接	ゆるやかなカーブで肩口から底面まで続く	N-13°-E	灰黄色砂質土、灰黄色砂質土(砂粒多い)		近世
溝A－100	A－13	5.92	0.4	0.3	0.18	ほぼ真直ぐ	肩口急傾斜、底面は平ら		灰色粘土、暗灰紫色粘土 灰色粘質土(褐色斑点)、灰白色粘土		近世
溝A－101	A－8	0.88	0.3	0.1	0.08	細い真直ぐな溝	肩口斜め、底面は丸い	N-2°-W	灰色砂まじり粘土		
溝A－102	A－10	1.1	0.3	0.2	0.07	真直ぐの短いもの	U字形を示す	N-43°-E	暗黄色粘土、灰色粘土、黄色粘土		
溝A－103	A－12	7.39	0.9	0.3	0.11	東西方向にほぼ真直ぐ、西部分に凹凸		N-83°-W	灰色粘土、灰色砂質土、褐灰色粘土		
溝A－104	A－12	14.44	1.6	0.4	0.05	ほぼ東西方向に流れるが一部分広くなる	浅い皿状の断面形をなす	N-75°-W	暗灰紫色粘質土、灰紫色粘質土		
溝A－105	A－12	8.30	1.0	0.2	0.09	北部分は太く、南部分は細い 途中で一部分屈曲	肩口ゆるやか、底面は平ら 途中U字溝	N-3°-E	灰紫色粘質土、灰色粘土		

(注　ここに掲載に使った溝はトレンチ部調査以降変化のなかった溝である。)

第3表　土坑、井戸一覧表(1)

遺構名	調査区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形	壁面形	埋土	出土遺物	備考
土坑A－1	A－12	5.38	2.75	0.60	隅丸長方形	肩口急傾斜、底面平ら	灰紫色粘土か暗灰紫色粘土		奈良時代
土坑A－2	A－12	1.6	1.4	0.30	不整形	肩口傾斜、底部は1ヶ所落ちこむすりばち状	灰紫色粘土		
土坑A－3	A－12	1.35	1.10	0.5	楕円形	楕鉢形をなす	小石を比較的多く含む、暗灰紫色粘土		奈良時代
土坑A－4	A－12	2.86	1.61	0.3			灰紫色粘土層、暗灰紫色粘土層、灰黄色粘土層 暗灰紫色粘土に灰黄色粘土がブロック状に混入 炭化物層、灰色粘土層(以上6層)		奈良時代
土坑A－5	A－12	2.47	1.01	0.18	不整形		灰色砂層		
土坑A－12	トレンチ部	3.00	2.20		楕円形				
土坑A－13	トレンチ部	3.43	2.14	0.41	やや不整な隅丸長方形				
土坑A－14	トレンチ部	2.60	1.96	0.21	いびつな隅丸三角形に近い形状				
土坑A－15	トレンチ部	1.57	0.48	0.39	不整な隅丸長方形				
土坑A－16	トレンチ部	0.69	0.68	0.59	不整な円形				
土坑A－17	トレンチ部	2.65	1.50		楕円形				
土坑A－18	A－8	1.32	0.71	0.75	ややいびつな隅丸方形の一部分	底部は丸いU字形	暗褐色粘土、灰褐色粘土、灰色粘土 灰白色粘土、褐灰色粘土、暗灰色粘土 灰色粘土、灰褐色粘土、灰白色粘土		図版11
土坑A－19	A－12	1.66	0.9	0.27	隅丸長方形	肩口急傾斜、底部は平ら	灰紫色粘土、暗灰紫色粘土 灰茶色粘土、暗紫色粘土		図版11
土坑A－20	A－12	1.34	0.94	0.32	隅丸長方形	肩口急傾斜、狭い底面を持つ	灰紫色粘土、灰紫色粘質土、灰色粘土		遺A－26の隣接、図版11
土坑A－29	A－5	0.63	0.42	測計不可能	不定形		灰黄色シルト		
土坑A－30	A－7	4.02	3.00	0.50	ややいびつな隅丸長方形		黄灰色粘土、灰茶色粘土、黄灰色粘土		
土坑A－31	A－7	4.20	3.61	0.64	不整な隅丸長方形	肩口急傾斜、底面は平ら	灰茶色粘土層、灰色粘質土		
土坑A－32	A－7	7.05	3.92	0.36	細長い部分と大きく広がる部分からなる	肩口急傾斜、底面は平ら	黄灰色粘土層と灰紫色粘土ブロック層 黄灰色粘土、灰白色粘質土		
土坑A－33	A－7	2.95	2.19	0.61	やや不整な隅丸長方形	肩口急傾斜、底面は平らで二段	灰白色粘質土、黄灰色粘土層と灰紫色粘土ブロック層、灰白色粘土層に灰褐色粘質土ブロックとして含む、黄灰色粘土		
土坑A－34	A－7	3.68	2.48	0.48	不整な隅丸長方形	肩口急傾斜、底面は平ら	灰白色粘質土、灰緑色粘質土と灰白色粘質土のブロック層		
土坑A－35	A－7	3.79	2.38	0.66	不ぞろいな隅丸長方形	肩口急傾斜で落ち込む、底面は平ら	灰白色粘質土、灰緑色粘質土と灰白色粘質土のブロック層		
土坑A－45	A－13	2.65	2.21	0.56	いびつな隅丸三角形状	肩口急傾斜底面もゆるい曲線を描く	灰黄色粘土、灰色粘土、灰色粘質土、暗灰茶色粘土		
土坑A－46	A－3	1.34	0.86	0.30	隅の丸い三角形状	一ヶ所が深くなるすりばち状	灰黄色粘土層、暗灰色と灰黄色粘土ブロック層、灰白色粘土層		

第3表　土坑、井戸一覧表(2)

遺構名	調査区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形	断面形	埋土	出土遺物	備考
土坑A—47	A—5	1.16	0.39	0.02	隅丸長方形	底面は浅い	黄灰色粘質土		
土坑A—48	A—5	1.53	0.75	0.39	細長い楕円形	肩口急傾斜、底面カーブする	灰色粘土、淡白色粘土、灰白色粘土		図版11
土坑A—49	A—4	0.59	0.47	0.13	半円形	肩口急傾斜、狭い底面を持つ	白灰色粘土		
土坑A—50	A—6	1.18	0.81	0.47	楕円形	肩口から急に落ちこみ、底面の一部は島状	灰白色粘土層、暗灰色粘土層 灰白黄色粘土層、灰黄色粘土層		
土坑A—53	A—8	0.77	0.39	0.09	斜めに切った扁平な楕円形	U字形	灰色粘質土		
土坑A—54	A—8	1.03	0.41	0.17	幅はほぼ同じで、末端は丸みを帯びる	幅広いU字形	灰色粘質土、灰色粘土(黄色粘土を含む)		
土坑A—55	A—8	1.47	0.59	0.28	少しいびつな楕円形	肩口急傾斜、底面は丸いU字形	灰灰色粘土(暗い色調を帯び、暗茶色の斑点なし) 灰褐色粘土(暗茶色の斑点) 灰褐色粘土(2層より明るい) 灰褐色砂質土(地山)		
土坑A—56	A—8	2.28	1.50	0.07	楕円形	肩口急傾斜、底部は平ら	灰茶色砂質土(混礫)		第4図
土坑A—57	A—8	3.26	0.94	0.09	細長く不整形	肩口急傾斜、底部は平ら	灰黄色砂質土(含炭化物)		第4図
土坑A—58	A—8	1.63	0.94	0.11	不定形	肩口急傾斜、底部中央は更に窪りこまれる	灰茶色粘質土(混礫)		第4図
土坑A—59	A—8	2.78	1.34	0.11~0.21	不定形	肩口ゆるやか、底面は平ら	暗灰茶色粘土	89~91	
土坑A—60	A—10	2.80	2.19	0.41	一部分凹凸を有する、楕円形に近い	肩口急傾斜、底面は少し凹凸	茶灰色粘土、黄灰色粘土、灰色粘土、灰色粘質土		
土坑A—61	A—10	1.27	0.41	0.23	不ぞろいな隅丸長方形	肩口はやや急傾斜、底面は少し南へ傾く	暗灰黄色粘土、灰色粘土		図版11
土坑A—62	A—10	2.69	2.36	0.32	ややいびつな隅丸長方形	肩口急傾斜、底面平ら	黄灰色粘土、灰黄色粘質土、灰黄色粘土、灰色粘土、灰色粘質土		図版11
土坑A—63	A—10	0.73	0.55	0.35	隅丸長方形	肩口急傾斜、底面も南側へ傾斜	灰色粘土、灰色粘質土		図版11
土坑A—64	A—12	3.16	0.90	0.17	不定形	底部は平ら	暗茶灰色粘土、暗茶色粘土 暗茶灰色粘質土		図版11
土坑A—65	A—12	1.92	1.39	0.09	不整な形状	肩口少し急傾斜	灰色粘土		
土坑A—67	A—13	2.20	2.00	0.03	方形	底面は浅い	灰黄色粘土		
井戸A—3	A—12	2.24	2.18	3.13	不整形な長円に似た形状	肩口急傾斜、底面平ら	灰青色砂質土	28~33	図版8
井戸A—4	A—13	1.76	1.24	(0)1.30	円形	肩口少し開き気味、少し深くなると垂直	茶灰色砂質土、淡茶灰色砂質土 灰黄色砂質土		図版11
井戸A—5	A—6	3.06	2.76	2.83	肩口が不整な円に近い形状	肩口付近ゆるやか、ラッパ状	褐色砂質土、灰色粘質土、灰色粘土層	88	図版11
井戸A—6	A—12	0.64	0.58	(0)0.70	円形	径は細い	灰色粘土、灰茶色中砂と黄色粘土ブロック 灰色粘土と灰茶色中砂ブロック層		図版11

(本文中にありこの表に記載されてない土坑は『大堀城跡』第2次調査概報で報告済である。)

第4表　A調査区出土土器観察表(1)

遺構名	遺物番号	写真図版番号	実測図版番号	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存率(%)
建物A−2	1	図版36	図版12	土師器杯	口径 14.4 残存高 3.5	底部からゆるやかに立ち上る口縁部をなす。口縁端部は少し肉厚になり、先端部は丸める。	内面　回転ナデ 外面　指頭圧痕が認められるが、回転ナデをどこまで施すかについては、剥離の為明らかではない。	密	堅緻	灰褐色	褐色	褐色	10
〃	2	図版36	図版12	須恵器杯	高台径 9.4	口縁端部は欠損。 高台から少し弯曲しつつ、垂直に近く立ち上る。	口縁部　内外面回転ナデである。	密	堅緻	淡灰色	灰白色	淡白色	10
〃	3	図版36	図版12	土師器杯	口径 14.0 残存高 3.7	底部からゆるやかに弯曲しつつ立ち上り、口縁端部外側を強くナデる。	内面　回転ナデ 外面　口縁部外側に指頭圧痕が認められるほかは、剥離の為、不明。	密 少し砂粒を含む	堅緻	茶灰色	灰褐色	淡灰褐色	10
〃	4	図版36	図版12	須恵器杯	口径 19.8 高台径 12.4 残存高 4.5	底部からゆるやかに円弧を描いて立ち上る、口縁部を作り、口縁端部は再び外反する。	内外面　回転ナデ	密	堅緻	暗灰色	灰色	灰色	10
建物A−7	5	図版36	図版12	土師器杯	口径 21.0 残存高 4.0	底部からゆるやかに立ち上り、口縁部付近にて垂直に近くなる。口縁端部内外面に一条の沈線あり。	内外面　回転ナデ 外側底部　ヘラ削り	密 砂粒をほとんど含まず	堅緻	灰黄色	灰黄色	褐色	10
〃	6	図版36	図版12	土師器杯	口径 19.6 器高 3.6	底部から、やや急な角度で立ち上り、口縁端部は外側へ屈曲する。口縁端部内側に一条の沈線を設ける。	内面　回転ナデ 杯底部から、口縁部下部にかけて、暗文を施す。 外面　口縁部上半、回転ナデ	密	堅緻	黄灰色	灰黄色	茶灰色	5
〃	7	図版36	図版12	須恵器杯	口径 12.2 器高 4.1	体部は高台からやや外側に張り出す。口縁部は、この張り出した部分から斜め上方に伸びる。	内外面　回転ナデ 内面中央部　不整方向ナデ	密 砂粒をほとんど含まず	堅緻	暗灰色	灰色	灰色	10
〃	8	図版36	図版12	須恵器杯蓋	少片の為、口径計測不可能	天井部から少し窪みつつ口縁部に至る。端部は欠損。	内外面　回転ナデ	密	堅緻	灰色	灰色	灰紫色	5
建物A−1	9	図版36	図版12	土師器甕	口径 14.3 残存高 2.5	やや外側に傾斜した面を持ち、外側に少しつまみ出す口縁端部を持つ。 口縁部のみ残存。	口縁部内外面　回転ナデ	粗 砂粒を比較的含む	やや軟	褐色	暗灰色	褐色	5

第4表　A調査区出土土器観察表(2)

遺構名	遺物番号	写真図版番号	実測図版番号	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存率(%)
建物A−1	10	図版36	図版12	土師器杯	口径 11.4 器高 2.7	底部からゆるやかに立ち上る口縁をもち、口縁端部は少し上向きに屈曲。	内面　回転ナデ 剥離の為、外面の調整不明。 ただ中位付近に、指圧痕と思われる窪みを認める。	密 砂粒をほとんど含まず	堅緻	褐色	褐色	褐色	10
〃	11	図版36	図版12	土師器杯	少片の為、口径計測不可能	底部からゆるやかに立ち上る。口縁部からなり、口縁部先端は少し、垂直に立ち上る。	内外面の調整は明らかではない。	密 砂粒を含まず	堅緻	灰黄色	灰黄色	灰黄色	5
建物A−3	12	図版36	図版12	土師器杯	口径 15.3 残存高 2.5	底部からゆるやかに立ち上り、先端を丸めている。	口縁部内面は回転ナデ 外面上部は回転ナデ 下部は指頭圧痕が認められる。	密 砂粒を含まず	やや軟	褐灰色	灰褐色	褐色	5
〃	13	図版36	図版12	土師器杯	少片の為、口径計測不可能	口縁部はゆるやかに立ち上り、口縁端部は屈曲する事なく外上方に伸びる。口縁端部内側に、一条沈線を設ける。	内面　回転ナデ 外面　上半　回転ナデ 下半　剥離の為不明。	密	堅緻	灰黄色	灰黄色	茶褐色	5
〃	14	図版36	図版12	土師器皿	少片の為、口径計測不可能	口縁部は弯曲しつつ、立ち上り、端部を上方へつまみ上げる。	剥離の為、内外面とも調整不明。	密　少し砂粒を含む	やや軟	灰黄色	灰黄色		5
建物A−4	16	図版36	図版12	土師器杯	少片の為、口径計測不可能	口縁端部内側に一条の沈線と内面に斜放射状暗文を施す。	内外面　回転ナデ	密	堅緻	褐色	褐色	褐色	2
建物A−8	17	図版36	図版12	須恵器杯蓋	少片の為、口径計測不可能	ゆるやかに天井部から降下し、口縁端部1〜2cm手前も屈曲する事はない。	内外面　回転ナデ	密	堅緻	灰色	灰色	淡灰色	3
建物A−9	15	図版36	図版12	土師器杯	少片の為、口径計測不可能	口縁部は外側へわずかに屈曲する。口縁端部内側に沈線を設ける。	少片である為、また磨耗の為、調整は不明である。	密	堅緻	灰黄色	淡灰褐色	褐色	2
〃	18	図版36	図版12	須恵器鉢	少片の為、口径計測不可能	外上方にのびた口縁部は先端にて内側に少し厚くなっている。	内外面　回転ナデ	密	堅緻	灰色	灰色	灰紫色	5
〃	19	図版36	図版12	土師器甕	口径 28.8 残存高 7.8	口縁部はわずかに外反している。肩部はほとんどはらない。ナデ肩である。	剥離の為、内外面とも調整不明。	密　少し砂粒を含む	やや軟	茶褐色	淡茶褐色	灰褐色	7
建物A−10	20	図版36	図版12	須恵器杯	口径 15.2 器高 3.8	高台は口縁部と底部との屈曲点より内側に位置し、口縁部は斜め外上方に真直ぐ伸びる。	内外面　回転ナデ	密	堅緻	灰色	淡灰色	淡灰色	10

第4表　A調査区出土土器観察表(3)

遺構名	遺物番号	写真図版番号	実測図版番号	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存率(%)
建物 A−10	21	図版36	図版12	土師器 小皿	口径 10.0 器高 2.6	底部から序々に弯曲したカーブを描きつつ口縁部に至る。口縁端部は上方へつまみ上げる。	内面はナデを施こし、外面には指頭圧痕が全面にわたって認められる。内面に煤が付く事がない。	密 少し砂粒は含むが全体的にきめ細い粘土である	堅 緻	褐 色	淡灰黄色	褐 色	100
〃	22	図版36	図版12	土師器 杯	少片の為、口径計測不可能	口縁部のみ遺存。口縁端部内側に一条の沈線を施こす。	内外面　回転ナデ 内面には暗文を、外面下部にはヘラ削りを施す。	密	堅 緻	黄灰色	暗灰黄色	黄灰色	5
溝 A−1	23	図版36	図版12	土師器 杯	口径 14.3 残存高 1.8	ゆるやかに立ち上る口縁部は先端を丸める。	剥離の為、調整不明。外側口縁下1.3cmの所に段が認められる。砂粒質である。これはここまで回転ナデを施した時の痕跡と思われる。	粗 砂粒質である	やや軟	褐 色	褐 色	褐 色	5
〃	24	図版36	図版12	土師器 小皿	口径 13.2 器高 1.7	平らな底部からゆるやかな曲線を描きつつ立ち上る口縁部とからなる。	調整については、表面がすべて剥離している為、全く不明。	密 微砂粒質粘土	堅 緻	褐 色	淡褐色	褐 色	6.7
溝 A−4	25	図版36	図版12	土師器 甕	少片の為、口径計測不可能	体部から口頸部で最もくびれ、口縁部は外反する。先端は水平な面を作り、先端はつまみ出さない。	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ 口頸部内面に刷毛目らしいものも確認できるが判然としない。	密	やや軟	赤褐色	茶褐色	赤褐色	5
溝 A−5	26	図版36	図版12	土師器 杯	少片の為、口径計測不可能	口縁部のみ遺存。口縁端部内側に一条の沈線をもうける。口縁端部は少し外側に屈曲。	内外面　回転ナデ 外面にはさらにヘラミガキを施しているようだが判然としない。	密	堅 緻	茶褐色	黄灰色	茶褐色	10
〃	27	図版36	図版12	須恵器 杯蓋	少片の為、口径計測不可能	やや高くなった天井部からゆっくり下ってくる口縁部に相当すると思われ、口縁先端部は下方につまみ出す。	内外面　回転ナデ	密	堅 緻	灰 色	灰 色	灰 色	5
井戸 A−3 下層	28	図版39	図版12	土師器 皿	口径 15.0 器高 2.2	口縁部はわずかに外反しており、先端は外側に傾斜する面を作る。底部は中央部で少し窪む。	内面及び口縁部外面には回転ナデ、底面には指頭圧痕がはっきり認められる。	密 わずかに砂粒を含む	堅 緻	灰褐色	灰褐色	灰褐色	17
〃	29	図版39	図版12	土師器 皿	口径 15.2 器高 2.4	口縁部は大きく外反。（灯明皿として使用したらしく、口縁部内外面に焦げたあとが認められる。）底部は指頭圧痕が全面にわたって認められ、中央部が最も窪んでいる。	口縁部外面には回転ナデ、口縁部下部及び底面には指頭圧痕が認められる。内面は口縁部から少し内側までは回転ナデ、中央部には横ナデが認められる。	密 少し砂粒を含む	堅 緻	灰褐色	灰褐色	淡灰褐色	25

第4表　A調査区出土土器観察表(4)

遺構名	遺物番号	写真図版番号	実測図版番号	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存率(%)
井戸 A−3 下層	30	図版39	図版12	土師器 杯	口径 15.8 器高 4.2	平らと思われる底部から斜め外上方に比較的真直ぐに伸びる。 口縁端部付近には回転ナデの為に少し屈曲する。	内面　回転ナデ 外面上部　回転ナデ 中部から下部、指頭圧痕が右上から左下に認められる。	密	堅緻	灰緑色	灰緑色	灰黄色	10
〃	31	図版39	図版12	土師器 甕	口径 18.8 残存高 11.1	外側に傾斜した口縁部の端部は、回転ナデで外側に傾斜する面を作る。なで肩でゆるやかに弧を描いている。短い口縁部と球形の体部が特徴である。	口縁部は内外面とも回転ナデ。外面は平行横方向に指頭圧痕。内面は外面同様の指頭圧痕の上から横ナデ調整。内面には、粘土ひもの接合痕が認められる。	密	堅緻	灰褐色	灰褐色	淡灰褐色	13
井戸 A−3 上層	32	図版39	図版12	土師器 杯	口径 14.2 器高 4.1	やや弯曲した底部に径の大きな高台を付けている。しかし、高台の下端部よりも底部中央が低く高台の意味をなくしいない。口縁部中位あたりまで、ゆるやかな傾斜をなし、底部は指頭圧痕の窪みが認められる。この上部の口縁部は少し急傾斜をもって外上方に立ち上る。	外側指圧痕が認められるが、内側についてはわからない。	密	軟	暗灰色 灰　色 灰褐色	暗灰色	暗灰色	60
井戸 A−3 下層	33	図版39	図版12	土師器 杯	口径 14.4 残存高 5.5	平らと思われる底部からほぼ斜め上方真直ぐに伸びている。口縁先端部は回転ナデのためわずかに内側に屈曲し、先端は丸めており、少しうすくなっている。	内面は中央部付近のみ横ナデ。他の部分は回転ナデ調整。 口縁部外面は回転ナデ。他の外面はおそらく、下部から斜め右上方に指頭圧痕。	密	堅緻	灰白黄色	灰白黄色	灰白黄色	6
井戸 A−5	88	図版40	図版15	土師質 羽釜	口径 28.0 残存高 8.8	ほぼ垂直に近く、心もち内側に傾く口縁部とその口縁端部は内側に肥厚。また、口縁端部から約5cmの位置に外側に鍔を付けている。	口縁部外面は三条の凹線を作り、体部外面は左から右方向のヘラ削り調整。口縁部、体部内面とも、横方向の刷毛目調整。	密 わずかに砂粒を含む	堅緻	暗灰色	暗灰茶色	茶褐色	3
(A−13 調査区) 溝 A−2	34	図版33	図版13	須恵器 壺	口径 5.8 器高高 11.5	上から押した楕円球に近い形をなす。肩部から体部へはいくらか稜線を意識した形である。口縁部はやや外側に開きつつ、真直ぐに伸びる。	内面　回転ナデ調整 外面　回転ヘラ削りの後、回転ナデ調整。底部は静止ヘラ削り。	密 少し砂粒を含む	堅緻	灰　色	灰　色	褐　色	10

第4表　A調査区出土土器観察表(5)

遺構名	遺物番号	写真図版番号	実測図版番号	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存率(%)
(A−13調査区)溝A−2	35	図版33	図版13	須恵器 壺	体部径 9.1 残存高 12.7	半球形の体部下半と細くくびれた口頸部から序々に大きく開く口縁部からなる。口頸部に三条、体部に二条の凹線あり。	外面　体部は回転ナデ調整、このあと下半を非常に丁寧な回転ヘラ削り。口頸部は回転ナデを施す。体部、口頸部に斜めの刺突文あり。	密	堅緻	暗灰色	淡灰色	淡灰色	100
〃	36	図版37	図版13	土師器 甕	少片の為、口径計測不可能	体部からくの字状に折れ曲り、ほぼ真直ぐに外上方に伸びる。口縁端部は、ナデの為窪むが平坦面を作る。	口縁部、内外面　回転ナデ	密	堅緻	灰白色	灰白色	灰白色	2
〃	37	図版37	図版13	土師器 甕	少片の為、口径計測不可能	口縁部は体部からくの字状に折れ曲って外反する。口頸部の回転ナデの屈曲はさほどない。口縁端部上面に平坦面を作る。	口縁部、内外面共回転ナデ。 体部内外面　刷毛目調整。	密	堅緻	黒色	灰白色	灰白色 黒色 淡褐色	5
〃	38	図版38	図版13	土師器 小型壺	口径 8.6 残存高 6.5	偏平な球形を示す体部と体部最大径よりわずかに広い口縁部からなる。 口縁部はやや外斜め上方に立ち上る。	口縁部外面　回転ナデ調整。 底部は、4〜8本の刷毛目を不整方向に施す。 口縁部内面は、水平方向刷毛目調整後、回転ナデ調整。内面底部はほぼ横の方向からヘラ削り調整。	密	堅緻	灰白黄色	淡褐色	褐色	40
〃	39	図版33	図版13	須恵器 壺	口径 9.0 最大径 15.4 器高 12.5	やや丸みを帯びた底部から、体部が球形に近い形で立ち上る。口縁端部は、平坦面を作り、やや外側に内傾。口頸部の径は体部に比較して広い。また、肩部には稜線が認められる。	体部上半の内外面、回転ナデ。 体部下半の内面、横ナデ。 体部下半の外面、ヘラ削り。 壺内部の厚さ、回転ナデの凹凸等については、実測不可能な為、大まかな厚さについて示している。	密 砂粒は比較的多い。	堅緻	灰青色	灰色	灰紫色	95
〃	40	図版37	図版13	土師器 甕	少片の為、口径計測不可能	口縁部の欠損した遺物であるが、体部以下の手法が明らかなので掲載した。	口縁部外面、回転ナデ。体部は指頭圧痕あり。上から縦（わずかにナナメ）にハケ目を施す。口縁部内面、回転ナデ。体部、横ナデ	密	堅緻	灰白黄色	灰白黄色	灰白黄色 茶褐色	5

第4表　A調査区出土土器観察表(6)

遺構名	遺物番号	写真図版番号	実測図版番号	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存率(%)
(A−13)溝 A−2	41	図版37	図版13	土師器甕	口径 11.4 残存高 4.9	口縁部末端はわずかに外方向に開き、外側に少しふくらむ。 肩部は張る事なくナデ肩である。	口縁部外面、回転ナデ。体部は縦方向のハケ目調整。内面口縁部は、刷毛目の後回転ナデ。体部はわずかにナナメ方向のハケ目の上から回転ナデを施す。	密	堅緻	灰黄色	灰黄色	灰黄色 淡黒色	5
(A−4)*	42	図版38	図版13	土師器甕	口径 18.6	口縁部は外側に外反し、口縁端部は上方へつまみあげている。口頸部内側は稜を持つ。肩は、やや張り出している。	口縁部内面には刷毛目が認められ、外面は回転ナデである。体部内外面もナデである。口頸部には指頭圧痕が認められる。	粗 全体的に微砂粒質からなる。	堅緻	黄灰色	褐灰色	淡灰黄色	15
(A−4)*	43	図版37	図版13	土師器甕	口径 13.7 器高 4.0	口縁部は外反し、先端を上方へつまみ上げる。肩部はあまり張らず、ナデ肩をなす。	口縁部　内外面　回転ナデ。 体　部　内　面　横ナデ。 外　面　指頭圧痕。	密	堅緻	淡灰黄色	暗灰色 (煤付着)	淡灰黄色	5
(A−4)*	44	図版37	図版13	土師器甕	口径 13.2 残存高 7.7	口縁部は外側に反外し、先端は上方につまみ上げている。	口縁部外面　回転ナデ。 体部は指頭圧痕が認められる。 口縁部内面　回転ナデ。 体部は横ナデ調整。	密	堅緻	暗灰色 灰　色 淡褐色	暗灰色	暗灰色 淡褐色 灰黄色	10
(A−4)*	45	図版38	図版13	土師器甕口縁部	口径 19.4	口縁部はやや内弯し、先端が内側に少し肥厚する。肩部はあまり張らず、ナデ肩である。	口縁部内外面　回転ナデ。 体部外面　縦方向刷毛目。 内面　横方向刷毛目で、この上からナデている。	密　全体的に砂粒を含む。金雲母を含む。	堅緻	淡灰茶色	灰茶色	灰茶色	15
(A−4)*	46	図版37	図版13	土師器甕	最大径 17.8	口縁部先端欠損。 口縁部は大きく外反しているが先端の形状は明らかではない。	口縁部外面　回転ナデ。 体部上部は、縦方向のハケ目。 下部は、指頭圧痕が認められる。 口縁部内面、回転ナデ。 体部は横ナデ調整。	密	堅緻	灰白黄色	淡黒色	灰白黄色	5
(A−13)*	47	図版38	図版13	羽釜	口径 26.5 残存高 7.5	口縁部は体部からくの字状に折れ曲るように外側に開き、つばの部分はやや上側に反る。	内外面　回転ナデ。 外面のつばの上、下部に指頭圧痕が認められる。	密 砂粒を含む	堅緻	茶褐色	茶褐色	灰褐色 茶褐色 褐　色	10
(A−13)*	48	図版37	図版13	土師器甕	口径 19.6 残存高 5.6	ゆるやかに外反する口縁部と先端部分は、上方につまみ上げている。	口縁部外面に回転ナデ、口縁部内面は表面が剥離していて確認できない。 体部内面に指頭圧痕を認める。	密 (やや密)	やや軟	灰　色	淡褐色	淡褐色	5

第4表　A調査区出土土器観察表(7)

遺構名	遺物番号	写真図版番号	実測図版番号	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存率(%)
(A−13)溝 A−2	49	図版38	図版13	須恵器 甕	口径 20.0 残存高 9.7	口縁部は外上方にのび、口縁端部は、外側に肥厚する。体部は大きく張り出してひろがる形態をなす。	口縁部内外面、回転ナデ調整。 体部外面は、縦方向の平行タタキの上からカキ目を施し、口頸部、肩部下部ではタタキ目が消えている。	密	堅緻	淡灰色 (褐色混り)	灰色 (褐混り)	灰色	15
(A−4) *	50	図版37	図版13	土師器 甕	口径 15.8 残存高 4.3	口頸部から大きく外側に弯曲しつつ開き、先端は薄くなる。口縁端部内側に一条沈線を設ける。体部の肩の部分は、少し張り出している。	剥離の為、内外面の調整不明。	密 砂粒を少し含む	堅緻	淡黒色 灰白黄色	淡黒色 灰白黄色	淡黒色 灰白黄色 茶褐色	5
(A−13) *	51	図版33	図版13	須恵器 壺	口径 17.0 残存高 9.5	口頸部から序々に外反し、大きく開く口縁部をなす。口縁端部は垂直な面を作り、下方へわずかに垂下する。	外面は右上、左下かあるいはこの逆方向の刷毛目調整。この上から回転ナデを施す。内面、回転ナデ調整。	密	堅緻	灰色	灰白色	紫灰色	100
溝 A−11	96	図版40	図版15	はにわ	口径 53.6 残存高 2.4	筒形埴輪の先端部分である。ほんの一部分のみで全体の形状は掌握できない。	内面は横ナデ。 外面は磨耗の為不明。	密 砂粒をほとんど含まず	やや軟	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1
溝 A−20	52	図版38	図版14	土師器 甕	口径 25.0 残存高 5.0	口縁部は外反し、先端は外側へ丸めている。体部はあまり肩が張らず、口頸部内側には稜を作る。	回転ナデ調整。 内面は、はがれている為、わからない。 口縁部内外面、回転ナデ調整。	密	堅緻	褐色	灰白黄色	淡褐色 黒灰色 灰白色	15
*	53	図版35	図版14	須恵器 鉢	口径 28.3 最大径 30.0 器高 8.9	ゆるやかな曲線を持つ底部とやや内弯気味の口縁部からなる。口縁端部は少し内側に傾斜した面を作る。外側に一条沈線を作る。器形は片口である。	内側底部に同心円文がわずかに認められる。この後、回転ナデ調整。	密 砂粒をほとんど含まず	堅緻	灰色	灰色	灰色	20
*	54	図版33	図版14	土師器 杯	口径 22.5 残存高 5.0	底部からゆるやかな円弧を描いて口縁部に至る。	内面　回転ナデの後、正放射暗文を施す。口縁端部内側に一条の沈線あり、 剥離の為、外面の調整不明。	密 きめ細かな粘土で砂粒をほとんど含まない。	堅緻	灰黄色	褐色	灰黄色	10
*	55	図版38	図版14	土師器 鉢	口径 29.8 残存高 9.6	口縁部が内弯し、口縁端部は面を持つ。体部下半については、欠損して明らかではない。	内面　回転ナデ。 外面　上部は回転ナデ、下部はナデを施す。	密 きめ細かな粘土で砂粒をほとんど含まない。	堅緻	褐色	灰黄色	褐色	5

第4表　A調査区出土土器観察表(8)

遺構名	遺物番号	写真図版番号	実測図版番号	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存率(%)
溝 A−20	56	図版38	図版14	土師器 高杯	高台径 10.3 器高 8.0	脚部脚柱部は下へ大きく広がり、先端部ではさらに大きく広がる。外面には峯のはっきりしない段が残る。杯部外面には稜の痕跡が認められる。	剥離の為、外面の調整不明。内面には、下部に指頭圧痕と脚柱部のしぼり痕が認められる。特に、指頭圧痕は放射状に連なる。下方からは花弁の輪状に並んでいるかのように見える。	密 きめ細かな粘土で砂粒をほとんど含まない。	やや軟	灰黄色	灰褐色	灰褐色	60
〃	57	図版35	図版14	須恵器 杯蓋	口径 10.2 器高 2.8	平らな中央部から斜め下方に屈曲し、まっすぐにのびている。中央部に少しいびつな宝珠つまみを付ける。内面のかえりは口縁端よりも内側で止まっている。	外面は宝珠つまみ以外あらい回転ヘラ削り、口縁部は回転ナデの上から横ナデ調整。	密 わずかに砂粒を含む	堅緻	黒灰色	灰白色	茶褐色	50
〃	58	図版35	図版14	須恵器 杯	口径径 9.4 器高 3.4	底部よりほぼ垂直に近く立ち上る。底面は少し弯曲している。やや丸みを帯びた底部と少し開き気味の口縁部からなる。	内面は回転ナデの後中央部分のみ不整方向ナデを施し、底面は回転ヘラ切りのまま未調整である。口縁部は内外面とも回転ナデである。	密	堅緻	暗灰色	暗灰色	暗灰色	90
〃	59	図版38	図版14	土師器 杯	口径 10.9 器高 3.0	底面からゆるやかに弯曲しつつ立ち上り、口縁端部は外側へ少しつまみ出している。	外面は口縁端部付近で回転ナデが認められるが、その他については剥離している為、明らかではない。中位より下では指圧痕と思われる凹凸が認められる。内面は回転ナデである。	密 砂粒を含まず	やや軟	褐色	灰褐色	灰黄色	12
溝 A−22	81	図版40	図版15	土師器 甕	口径 12.7 残存高 4.0	斜め上方に真直ぐ伸びた口縁部端部は内側に肥厚している。肩部はなで肩である。	外面は全体にハケ目を施した後、口縁部のみ回転ナデによって消されている。内面は、口縁部は回転ナデ。その他はハケ目を施した後、指頭圧痕が認められる。	密	堅緻	淡茶褐色	茶白色	灰褐色	12
〃	82	図版40	図版15	土師器 皿	口径 21.6 残存高 2.4	底部よりゆるやかに立ち上る口縁を持つ。口縁端部は内側に丸め込む様な形をなし、一条の沈線を作る。	底部には指頭圧痕が認められる。口縁の調整　不明。	密	軟	褐色	褐色	褐色	13
溝 A−34	76	図版38	図版15	須恵器 壺	口径 9.2 残存高 3.8	肩部はややゆるやかな斜めの傾斜を持ちつつ、最大径部まで張り出し、再び体部は下方へすぼまる形状をなす。口縁部は少し外側へ傾斜しつつ立ち上る。	内外面　回転ナデ。	密 砂粒を含まず	堅緻	灰白色	灰白色	灰白色	5

第4表　A調査区出土土器観察表(9)

遺構名	遺物番号	写真図版番号	実測図版番号	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存率(%)
溝A−34	77	図版38	図版15	須恵器杯蓋	口径 15.6 残存高 2.2	天井部からゆるやかに口縁部に斜め下方に降る。	外面　天井部は回転ヘラ削り調整後外面全体に回転ナデを施す。 内面　回転ナデ。	密 少し砂粒を含む	堅緻	灰青色	淡灰色	灰紫色	20
〃	78	図版34	図版15	須恵器杯	口径 10.2 器高 4.1	口縁部はほぼ平らな底面から斜め上方に真すぐ伸びる。高台は貼り付け高台で端部を鋭角につまみ出した形をしている。	内面　回転ナデ。外面　回転ナデ。 底部は回転ヘラ削り、貼り付け高台は回転ナデが施されている。また、外面一部に自然釉が付着。	密 少し砂粒を含む	堅緻	灰色	灰色	淡灰色	70
〃	79	図版38	図版15	須恵器蓋	口径 20.0 残存高 3.2	体部からやや外反しつつ立ち上り口縁端部2cmほど手前にて角度をゆるやかな傾斜に変えて開く。口縁端部は、上、下に少し肥厚する。	内外面　回転ナデ。 外側　口頸部に自然釉付着。	密	堅緻	灰色 暗緑色の自然釉付着	淡灰色	灰色	10
〃	80	図版38	図版15	土師器高杯	残存高 10.8	脚柱部のみ遺存。脚柱部、13面の面取りを施す。内面は棒状部に粘土ひもを巻きつけて形成した後、棒状部をひきぬいたと思われる。	脚柱部は鋭利な刃部で面取りを施す。その他は不明である。	密 砂粒をほとんど含まず	堅緻	褐色	褐色	褐色	30
溝A−35	60	図版34	図版14	須恵器杯	口径 10.8 器高 4.0	高台より垂直に近い角度で斜め上方向に伸びている。また、下部の高台と側面との境界にくぼみがある。この須恵器の特徴は、下方に鋭角に尖った高台と、灰白色の胎土にある。小型であるが、全体的に作りがシャープである。	体部内面　回転ナデ。 口縁部　内外面　回転ナデ。 底面　回転ヘラ削り。	密 砂粒を少し含む	堅緻	灰色	灰色	灰色	75
〃	61	−	図版14	土師器鼎	口径 23.8 器高 2.6	平らな部分と少し屈曲する口縁部からなる。口縁端部内側に一条の沈線を設ける。	内面　回転ナデ。このあと斜放射状暗文を施し、さらに内側にラセン状暗文を施す。 外面　回転ナデ。底面は全面に丁寧なヘラ削りを施す。	密	堅緻	黄灰色	黄灰色	茶褐色	25
〃	62	−	図版14	土師器杯	口径 28.0 器高 3.1	平らな底部と大きくS字状に屈曲する口縁部からなる。口縁部内側に一条沈線を設ける。高台は口縁部の転換部より少し内側に存在する。	内面は回転ナデで斜放射状暗文とラセン状暗文を施す。 外面は口縁部から高台内側まで回転ナデ、高台内側はヘラ削りを施す。	密	堅緻	黄灰色	黄灰色	茶褐色	25

第4表　A調査区出土土器観察表(1)

遺構名	遺物番号	写真図版番号	実測図版番号	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存率(%)
溝 A−34	63	図版34	図版14	土師器 高杯	脚部径 12.8 残存高 11.8	脚柱部13面の面取りを施している。内部は棒状部に粘土ひもを巻きつけて形成した後、棒状部をひきぬいた脚柱部に杯部分を接合。	脚柱部は鋭利な刃部で面取りを施す。高杯脚部内面の平坦に近くなっている部分は、ヘラ削り調整。脚柱部間脚部内面はヘラミガキ。その他、杯部等は不明である。	密	やや軟	灰黄色	灰黄色	赤褐色	40
〃	64	図版34	図版14	須恵器 壺	口　径 9.2 最大径 11.4 器　高 7.2	体部はほぼ垂直に近い角度で立ち上り、その後ほぼ水平に内側に張り出し、その後少しだけ垂直に上につまみ上げる口縁部からなる。高台は少し外側に八の字形に開いた形をなす。全体的には、小ぶりであるが整った形を示す。	回転ナデで最終調整を施したあと、体部下半のみヘラナデ整形。	密	堅　緻	淡褐灰色	淡褐灰色	灰　色	50
〃	65	図版38	図版14	土師器 甕	口　径 16.4 残存高 5.5	体部から大きく外反する口縁部を持つ。口縁端部は外側に傾斜する面を作る。体部は球形をなす。口頸部は回転ナデの為に大きく屈曲している。	口縁部内面　横方向に刷毛目調整後回転ナデ。 外面　全面に指頭圧痕が認められる。	密 砂粒を少し含む	堅　緻	茶褐色	灰　色	褐　色	5
溝 A−36	66	図版38	図版14	土師器 壺	口　径 13.4 残存高 6.3	体部は底部から急角度で立ち上り肩部が最大径部をなす。口縁部は内傾。	剥離の為、調整不明。	密	堅　緻	褐　色	灰　色 褐　色	灰　色 褐　色	35
〃	67	図版38	図版14	土師器 甕	口　径 19.4 残存高 6.6	体部はほとんど肩の張らないナデ肩のタイプである。口縁部は斜め上方に真直ぐのびる口縁部をなす。 口縁端部は内側に少し肥厚している。	口縁部外面　体部外面と同様な縦方向の刷毛目の上から回転ナデ。内面　回転ナデの後、横方向の刷毛目調整。 体部外面　縦方向の刷毛目調整。内面口頸部上面は、横方向の刷毛目、これから後に下から上へ削り上げるヘラ削りを施す。	密	やや軟	淡茶褐色	灰褐色	褐　色	10
〃	68	図版38	図版14	土師器 杯	口　径 24.0 残存高 6.6	底部よりゆるやかに上り、口縁部でほぼ垂直に上る。口縁端部で少し屈曲し、内側に一条沈線を設ける。	内面　回転ナデ調整。底部外面は指頭圧痕が認められる。この上から荒いヘラ削りを施す。口縁部外面上部は、回転ナデの後ヘラミガキ調整。	密 (やや密)	やや軟	灰褐色	灰褐色	褐　色	25

第4表　A調査区出土土器観察表(1)

遺構名	遺物番号	写真図版番号	実測図版番号	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存率(%)
溝 A−36	69	−	図版14	須恵器 鼎	口径 18.8 器高 2.2	平らな底部と斜め外上方に立ち上る短い口縁部からなる。口縁部外側がわずかに窪む。口縁端部は平坦面を作る。	内側底部　回転ナデのあと横ナデを施こす。口縁部内外面　回転ナデ。底部外側はヘラ切りのまま未調整。	密	堅緻	灰色	灰色	灰色	50
〃	70	図版38	図版14	須恵器 甕	口径 26.0 残存高 5.8	口縁部は弯曲しつつ外反し、口縁端部は外側に傾斜する面を作り、内外に少しつまみ出している。肩部はゆるやかに大きく張り出してゆくと思われる。	外面　回転ナデ調整 肩部には平行タタキの上からカキ目を施す。 内面　回転ナデ調整。	密 (やや密)	堅緻	淡灰色	淡灰色	褐色	10
〃	71	図版34	図版14	須恵器 杯	口径 20.0 器高 7.0	口縁部は外側へわずかに傾斜し真直ぐ長く伸びる。高台はやや長く少し外側に開き気味である。	口縁部内外面　回転ナデ。 底部外面　回転ヘラ削り。	密 砂粒をほとんど含まず	堅緻	灰色	灰色	灰色	30
〃	72	図版38	図版14	羽釜	口径 30.0 残存高 5.9	口縁部は外反し、先端は丸める。鍔の部分は水平に体部に張り付けられる。	回転ナデ、その他大半は剥離の為不明。	密　砂粒を含む	堅緻	茶褐色 灰色	茶褐色 灰色	茶褐色 灰色	5
〃	73	図版34	図版14	須恵器 杯	口径 21.2 器高 7.0 高台径 16.6	やや長目の高台から横方向に張り出す事なく口縁部は斜め上方に伸びる。口縁部外面は強いナデの為に、凹線状の窪みが認められる。	口縁部内外面　回転ナデ。 底部裏面　回転ヘラ削り。 内面　回転ナデ。	密 砂粒をほとんど含まず	堅緻	淡灰色	淡灰色	淡灰色	50
〃	74	図版38	図版14	土師器 羽釜	口径 29.5 最大径 33.6 残存高 6.2	口縁部は少し外反するがきほど折れ曲らない。鍔の部分は少し厚手であり、ほぼ水平である。	口縁部上面　回転ナデが一部分判明する。その他は剥離の為、調整不明。	粗 砂粒を数多く含む	やや軟	茶色	茶色	茶色	5
〃	75	図版34	図版14	須恵器 杯蓋	口径 22.4 器高 4.6	平らな天井部からやや降り気味な口縁部をなす。口縁端部は、少し屈曲。	外面　天井部のほぼ全体にわたって回転ヘラ削り調整後、口縁部と天井部中央にかけては回転ナデを施す。 内面　全体にわたって回転ナデの後、内側の大半を再びヘラナデを施す。	密	堅緻	灰色	灰色	灰色	75
溝 A−40	83	図版40	図版15	瓦質甕	口径 33.4 残存高 3.8	やや内弯する体部の上半から口縁にかけて、外側にひねり出しており、厚くなる。	口縁部外面　回転ナデ調整。 体部上部外面　平行タタキ。 口縁部内面　回転ナデ。 体部上部内面　刷毛目調整。	密 砂粒を少し含む	堅緻	暗灰色	淡灰色	淡灰色	5

第4表　A調査区出土土器観察表(3)

遺構名	遺物番号	写真図版番号	実測図版番号	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存率(%)
溝 A−40	86	図版40	図版15	陶器 (唐津焼)	高台径 4.4 残存高 2.5	削り出した高台と、ゆるやかな曲線を持って立ち上る口縁部とからなる。外面下部、高台外面に三条の青い線を作る。また、高台内面にも一条の青い線を入れる。また、裏面高台部分に「稲」と読めるような文字が記入されている。	調整は、不明。 釉薬は、白灰色を呈す。	密	堅緻	白色 わずかに青味がかる	白色	白色	100
溝 A−41	99	図版40	第6図	須恵器 甕	少片の為、口径計測不可能	甕の体部。ただ、この破片が体部のどのあたりに位置したのかについてはわからない。したがって、断面図に示した傾きも正しいとは限らない。	外面　格子文のタタキ成形。 内面　同心円文のタタキ目があり、この上からナデ調整を施す為、タタキ目はほとんど消えかかっている。	密	堅緻	灰色	灰色	灰色	2
土坑 A−59	89	図版40	図版15	瓦器 杯	高台径 3.8	椀底部からしっかりした作りで約5mm以上の高さを有する高台である。高台基部から先端にかけて尖り気味である。	高台付近は、内外面とも回転ナデ。	密	堅緻	黄灰色	灰白色	灰白色	10
〃	90	図版40	図版15	土師器 小皿	口径 9.6 器高 0.9	平らな底部から大きく開き外側に伸びた口縁部を形成する。	剥離の為、内外面とも調整不明。	密	やや軟	淡黄灰色	黄灰色	黄灰色	20
〃	91	図版40	図版15	灰釉陶器 椀	口径 17.0 残存高 5.2	底部からゆるやかに斜め上方に立ち上り先端は丸めている。	全て回転ナデ。 外面には回転ナデの凹凸が著しい。 体部下半部は露胎である。	密 砂粒を含まず	堅緻	上：淡灰黄色 下：灰色	淡灰黄色	淡灰黄色	9
東除川旧河道	92	図版40	図版15	羽釜	口径 29.0 残存高 6.0	口縁部は内傾し、なおかつ内湾している。この外側に回転ナデのあと三条の沈線を施こしている。つばの部分は、水平に張り出している。体部も球形をなすと思われる。	外面上部は回転ナデを施し、この上から三条の凹線を施す。外面下部は、ヘラ削りが上から下へ下から上へ施されている。内面は、刷毛目の後回転ナデを施す。	密 砂粒を少し含む	堅緻	灰色	灰色	灰色	7
〃	93	図版40	図版15	土師質 井筒	口径 37.6 残存高 8.6	全体は円筒形をなす口縁部と思われる。口縁部より少し下につばを付ける。	外面上部　回転ナデ。下部　指頭圧痕が認められ、さらにナデ調整。内面上部　刷毛目調整後ナデ調整。つばの部分は上から指圧を加えており、その窪みが回転ナデ調整によっても消えていない。また、内面にもつばを貼り付け	密	堅緻	灰黄色	灰白色	灰白色	7

第4表　A調査区出土土器観察表(3)

遺構名	遺物番号	写真図版番号	実測図版番号	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存率(%)
							た時の指頭圧痕が認められる。傾斜については少片の為、あやまりがあるかも知れない。						
(A−6 調査区) 黄灰色粘土層	84	図版40	図版15	瓦器 椀高台部分	高台径 5.0 残存高 1.0	高台より水平に近く、大きく張り出す口縁部をなすと思われる。	高台付近のみ遺存しているが高台はしっかりした三角形を呈す。内外面の調整は明らかではない。	密	やや軟	黄灰色	灰白色	白色(黄を含む)	18
*	85	図版40	図版15	土師器 小皿	口径 10.0 残存高 1.3	底部よりゆるやかに外上方に伸びている。	外面上部　回転ナデ。 下部　指頭圧痕が認められる。	密	やや軟	灰黄色	灰黄色	灰黄色	15
*	87	図版40	図版15	白磁 椀	少片の為、口径計測不可能	口縁端部高台部については、欠損。体部は、上半に釉薬が付着し、下半は露胎である。高台部からゆるやかに湾曲しつつ立ち上る。他の部分については明らかではない。	体部外面　回転ヘラ削り。 素地の段階で右上、左下方向の刷毛目調整。 口縁部内面　中段付近に一条の沈線あり。	密	堅緻	白色の釉薬(少し灰色がかる)	白色の釉薬(少し灰色がかる)	白色	5
(A−8) 埋積谷 灰茶色粘土層	98	図版40	図版15	弥生式土器 壺底部	底径 10.4	ほぼ平らな底部から体部へ張り出してゆく。その張り出し方は大きい。	剥離の為、内外面とも調整不明。	粗 砂粒を多く含む	やや軟	茶褐色 灰黄色の斑点状	灰黄色	茶褐色	80
(A−8) 埋積谷 灰茶色粘土層	100	図版40	第7図	家形埴 軒部分	残存高 13.4 厚さ 1.5 前後	家の屋根か、何か張り出した部分に線刻による3本の平行線と斜めに横切る斜線が少しずつ認められる。家の隅にあたる部分ではないかと思われる。	調整はほとんど不明。 裏面は指ナデによる凹凸が少し認められる程度である。	粗 砂粒を多く含む	やや軟	黄灰色	黄灰色	黄白色	
(A−9) 埋積谷 灰色粘土層	95	図版40	図版15	瓦器 椀	口径 11.2 器高 3.2	ゆるやかに立ち上る口縁部をなす。	剥離の為、内面の調整不明。外面は、下部で指頭圧痕。上部で沈線状の窪みが認められる。	密	やや軟	灰黄色	灰色	黄灰色	5
(A−10) 埋積谷 褐灰色粘質土層	97	図版40	図版15	白磁 椀	残存高 2.8	高台は削り出しで露胎である。釉薬は少し灰色味がかった色を示す。見込みに圏線を一条設ける。	素地の外面は刷毛目調整を施す。釉薬は、淡灰色を示し貫入がある。	密	堅緻	淡灰色 下：白色(黄)	淡灰色	白色(黄)	40
(A−12) 埋積谷 褐灰色シルト層	94	図版35	図版15	須恵器 杯蓋	口径 19.4 器高 2.5	口縁部は少し屈曲しており、端部は屈曲した下端より浮き上っている。天井部には、外側に傾斜した輪状つまみを付着している。	外面天井部　回転ヘラ削り。 口縁部　回転ナデ。 内面　回転ナデ調整。中央部のみ、この後に横ナデを施す。	密 砂粒をほとんど含まず	堅緻	灰白色	灰色	灰色	20

第5表　A調査区出土瓦観察表(1)

遺構名	遺物番号	実測図版番号	写真図版番号	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存率(%)
(A−12調査区) I層 淡黒色粘質土層	101	第8図	図版35	軒丸瓦		瓦当の一部分のみで蓮子は欠損している。瓦当端面より内側に丸瓦部が付く。	周縁は素文。外区には一重の圏線を持つ。間弁が連続して圏線のすぐ内側にある。花弁は単純で、子葉は認められない。中房は不明。	密 しかし砂粒を少し含む	やや軟	暗灰色	茶灰色	茶灰色	30
(A−12) 褐灰色シルト層	102	第8図	図版35	軒平瓦		瓦当の背面に貼り付ける形態と思われる。	瓦当面は周縁は無文であり、外区は連珠文の有無についてはわからない。内区は、唐草文と思われる	密 砂粒をほとんど含まず	やや軟	褐色	褐色	褐色	30
P.A−66	103	図版16	図版44	丸瓦	タテ 23.4 横 12.7 厚さ 約2	凹側縁に近い部分には布目痕はなく、布を折り返して重ねた痕が認められる。凹面に模骨痕は認められない。	凹面は布目痕が認められ、凸面は表面を完全にスリ消している。側面はヘラ削りを一回丁寧に施す。	やや密 砂粒を含む	やや軟	褐色	黒褐色	褐色	25
溝 A−35	104	図版16	図版44	丸瓦	タテ 8.1 横 11.1	布目痕に模骨痕は認められない。	分割裁面と凹側縁の2面にヘラ削りを施こす。凹面は布目痕が認められ凸面は縄叩きをほとんど見えないほどにスリ消している。	密	軟	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	20
溝 A−34	105	図版16	図版44	丸瓦	タテ 15.5 横 8.7	玉縁の接合部分は欠損し、丸瓦部分のみ残存	分割裁面は未調整のままである。内面は布目痕が残り、外面はナデている。	やや密 砂粒を含む	やや軟	灰白色	灰白色	灰白色	50
井戸 A−3 井筒底部	106	図版16	図版44	平瓦	厚さ 1.8 残存法量 8×9.2	端面部分が遺存しているが、側面は遺存していない。	凸面は縄叩き痕、凹面は布目痕が認められる。端面はヘラ削りを施し、凹端縁は少し強にヘラ削りを施している。凸端縁部は縄叩きを施さなかった為、叩きを施した所と異なって厚いままである。	密 砂粒を全く含まず	堅緻	暗灰色	黒灰色	淡灰黄色	20
(A−12) 側溝	107	図版17	図版44	平瓦	タテ 2.1 横 5.8 厚さ 1.8	平瓦の中央部である。	凸面は縄叩きを施す。 凹面は布目痕が認められ、模骨痕らしいものが認められる。	密 砂粒をほとんど含まない	堅緻	灰青色	灰青色	灰青色	5
(A−12) II層 灰色粘質土層	108	図版17	図版44	平瓦	タテ 8.8 横 7.9 厚さ 2.2	平瓦の中央部破片である。	凸面は縄叩きを施している。 凹面は布目痕と粘土板糸切り痕が円弧を描いているものが認められる。	密	堅緻	暗灰色(黒味がかっている)	灰白色	灰白色	不明
井戸 A−3	109	図版17	図版44	平瓦	タテ 14.9 横 12.2	凹側縁に平行に1.5cm内側に幅1cmの一条の窪みが認められる。これより側縁側	凹面は布目痕が認められるが側縁より1.5cmの所は、布目痕がない。側面は、	粗 砂粒を含む	やや軟	黒色	黒色	淡灰色	25

第5表　A調査区出土瓦観察表(2)

遺構名	遺物番号	実測図版番号	写真図版番号	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存率(%)
第筒瓦部						には布目は認められない。	凸側縁と側面の2回ヘラ削りを施す。端面もヘラ削りを施している。凸面には縄叩きを施すが、側縁に近い部分では不明瞭になっている。						
東路川旧河道	110	図版17	図版35	平瓦	厚さ 4.2 残存法量29.4×18.7	凸面側にハの字状で長さ5cm前後、最大幅1.3cmほどの刻みを平行に4列施している。	凹面、凸面とも刻み目以外はナデている。側面、端面もナデている。	密 砂粒を全く含まない	堅緻	黒灰色	褐灰色	灰色	20

第6表　A調査区出土石器観察表

遺構名	遺物番号	実測図版番号	写真図版番号	器種	法量(cm)(g)	特徴
溝 A−13 下層	111	図版 18	図版 43	ハンマーストーン	長さ 52 幅 53 厚さ 33 重さ 98.9	サヌカイト製である。敲打痕は、図の下方及び右、左の突出した部分にも見られる。特に右側下方は使用頻度が最も高い。母材の自然面が一部分に残っている。
溝 A−2 灰茶色 粘土層	112	図版 18	図版 43	砥石	長さ 66 幅 39 厚さ 24 重さ 69.9	中央の窪んだ、かなり使用された遺物である。図化した上面と下面及びその長側面も研磨痕が認められる。図の左側の中央よりやや下に研磨時の段が認められる。この様な段は、右側の右長側面の下の方にも認められる。材質は砂岩で、微砂質の均一な岩質を示し、良好な石材である。
溝 A−40 黄灰色 粘質土層	113	図版 18	図版 43	石鏃	長さ 21 幅 16 厚さ 4 重さ 1.1	サヌカイト製の小型の石鏃である。凹基式であるが両側の突出部はあまり突き出ておらず、実質は平基式に近い形態である事から、縄文時代の石鏃ではなく、弥生時代の石鏃と思われる。
A−4 調査区	114	図版 18	図版 43	砥石	長さ 59 幅 46 厚さ 3 重さ 91.2	研磨面は、四面に見られ砂粒を引きずった痕跡が見られる。 石材は砂岩である。

第Ⅳ章　B•C調査区の調査成果

第1節　基本層序

当調査区における層序を略述する。層序を大別すれば、上層よりⅠ～Ⅴ層に分層することができる。また各層を色調及び細部にいたる土質より細分すれば、Ⅲ層をⅢ－①～Ⅲ－③層に、Ⅳ層はⅣ－①～Ⅳ－③層に分けることができた。そしてⅠ～Ⅴ層の堆積状況は第10図土層柱状図に表わした。以下各層の概要を述べる。

Ⅰ層：調査区全域を覆う盛土である。厚さは約0.9m。上面（現地表面）は平坦で、平均T.P.＋17.5mを測る。

Ⅱ層：C－10調査区とC－7調査区西半部を除く、ほぼ調査区全域を覆う近年までの耕作土。層厚は約0.1mを測る。

Ⅲ－①層：（淡灰褐色砂質土層）ほぼ調査区全域を覆う土層であり、旧石器・古墳～江戸時代までの遺物を含んでいる。層厚は約0.02mを測る。

Ⅲ－②層：（淡灰黄褐色砂質土層）ほぼ調査区全域を覆う土層であり、酸化鉄が沈着し微細なマンガンノジュールが散在している。旧石器・古墳～江戸時代までの遺物を含んでいる。層厚は約0.02mを測る。

Ⅲ－③層：（黄灰砂質土層）B－1、2調査区付近に堆積する土層である。古墳～室町時代までの遺物を含んでいる。層厚は約0.06mを測る。この層はB－2調査区に所在する畦畔状遺構を覆っている。

Ⅳ－①層：（暗茶褐色粘土層）B調査区北端部B・C20～21区、及びC－5調査区西半部、C－7、10～11調査区を除く。ほぼ調査区全域を覆う土層であり、古墳時代後半～鎌倉時代までの遺物を含む。層厚は約0.06mを測る。

Ⅳ－②層：（暗黄褐色粘土層）W調査区D28・29区周辺を中心に堆積している土層であり、古墳時代後半～鎌倉時代までの遺物を含む。層厚は約0.1mである。

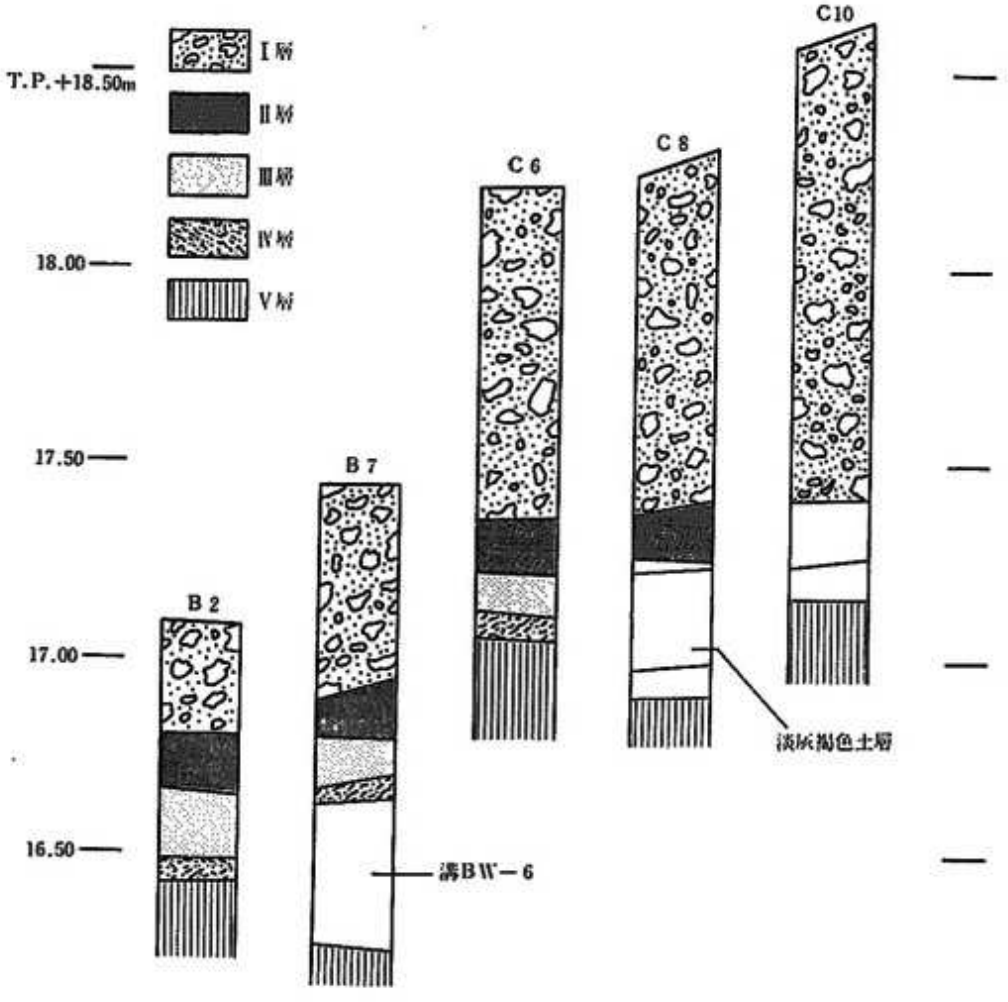
Ⅳ－③層：（暗灰茶褐色粘質土層）B調査区北端部B・C20～21区周辺を中心に堆積している土層であり、古墳時代後半～平安時代までの遺物を含む。層厚は約0.2mである。

Ⅴ層：（灰黄色粘土層：地山層）当遺跡のベースになる層で、ひび割れ状の古乾痕の発達が著しい。調査区全域にほぼ水平に堆積するが、C－6調査区付近より南にむけて上がっている。上面はT.P.＋16.4～17.2mを測る。

なお基本層序には含まれないが、C－8・9調査区付近には、古墳時代～鎌倉時代までの遺物を含んでいる「淡灰褐色土層」が存在する。層厚は約0.2mであり、Ⅳ層との切り合いより上下

関係をみれば、Ⅳ層に対し上層にあたる。

遺構面は、Ⅳ層・淡灰褐色土層上面及びⅤ層上面（地山面）に合せて２面確認することができた。Ⅳ層　淡灰褐色土層上面を第１遺構面、Ⅴ層上面を第２遺構面と呼ぶことにした。両遺構面の所属時期は、Ⅳ層　淡灰褐色土層を鍵層として、第１遺構面を室町時代～江戸時代前半、第２遺構面を室町時代より以前として位置づけることができる。しかし、Ⅳ層　淡灰褐色土層の堆積が認められないＣ－７・10調査区に関しては、地山面のみ遺構面として存在している。そのため付図５・６の遺構平面全体図中には、第１、第２両遺構面全体図中に加えた。また両遺構面は上層からの削平を顕著に受け、残存状態は非常に悪く、各々第１遺構面は江戸時代及び第２遺構面は鎌倉末～室町時代二時期にわたっての削平が考えられる。



第10図　B・C調査区土層柱状図

第2節　遺　　構

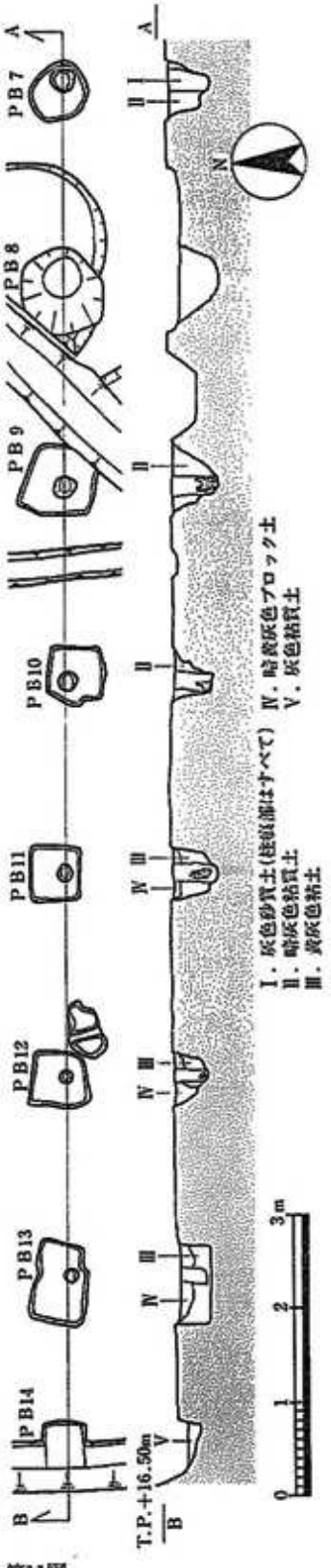
B・C調査区が所在する、中央環状線中央分離帯中には、今回の調査を含め三度の調査がなされている。[1] その中でも、近畿自動車道以外の調査として、B・C調査区周に、近年大和川下流東部流域下水道大井処理場放流幹線建設に伴う大堀遺跡の発掘調査が実施された。その調査区はB・C調査区を東西にはさみ、各々東側をE区及び西側をW区と設定し報告されている。そのため、中には複数の調査区に及ぶ遺構も存在し、先の報告と一部重複する事項も現われることを断っておく。次いで今回の調査により明らかになった主要な遺構を略述すれば、奈良時代の柵・溝・土坑、平安時代の溝、鎌倉時代の溝、室町～江戸時代の柵、畦畔・小溝等の諸遺構を見い出すことができる。以下順に主要な遺構の概要をまとめていきたい。

柵B－1（第11図、図版48・56）　B－3調査区を中心としてC21～22、D22区に所在する。柱穴8基PB7～14より構成される柵列である。検出長15m、柱間寸法2.1m（7尺）、主軸方位はN－89°－Wを示す。柱掘方は、方形及び隅丸方形を呈し、1辺は約60cm、深さは約40cm、柱痕径は約18cmを測る。PB9～12の柱痕は遺存状態がよく、柱材が検出された。

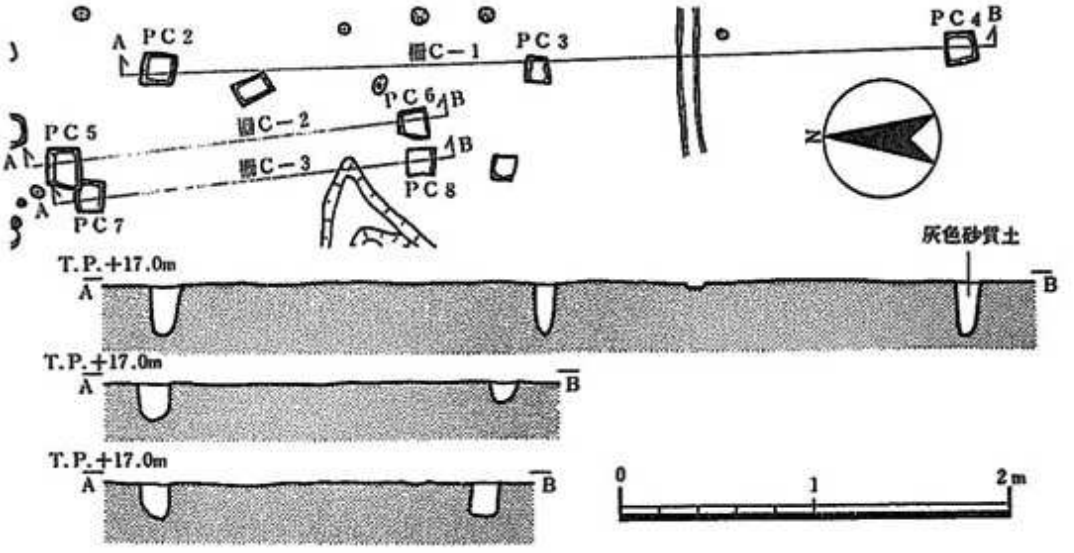
なお第2次調査の報告では、柱穴PB7はPB6と共に建物B－2として報告したのであるが、今回の調査によりPB7が柵B－1を構成する柱穴の1つとして認められたため、建物B－2は設定できなくなったことを断っておく。

出土遺物としては、PB9～13の柱掘方埋土中及び柱痕部より、須恵器及び土師器の細片がわずかに出土している。

柵C－1～3（第12図、図版53）　C－6調査区、A・B33区に所在する角柱の柵列群である。柵C－1は柱穴3基PC2～4より構成される柵列である。残存長4m、柱間寸法2m、主軸方位はN－2°－Wを測る。柵C－2は柱穴2基PC5～6より構成され、主軸方位はN－9°－Wを測る。柵C－3は、柱穴2基PC7～8より構成され、主軸方位はN－



第11図
柵B－1遺構平面、断面図（1/60）



第12図　柵C－1～3遺構平面、断面図（1/40）

9°－Wを測る。柱穴の深さを、柵C－1～3全体よりみると約20cmである。柱穴の埋土は灰色砂質土を呈する。

出土遺物としては、PC2・5より、土師器、青磁の細片が出土しているのみである。

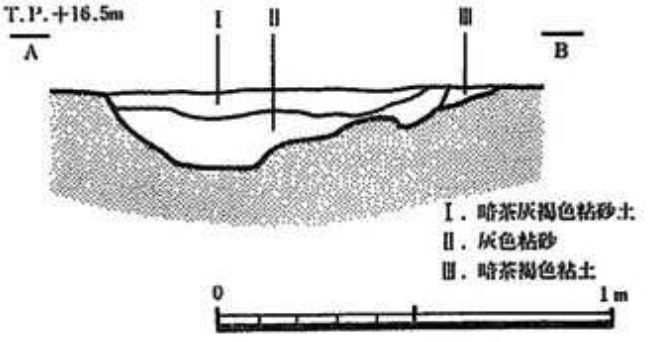
溝B－1（付図3、図版47）　B－1調査区、C20～21、B21区に所在する浅く細長い溝である。検出長14.5m、幅約50cm、深さ10cmを測る。主軸方位はN－5°－Wを示す。埋土は灰色シルトである。

出土遺物としては、土師器杯の高台片が1点及び土師器の細片が少量出土したのみである。

溝B－2（第13図、図版47・56）　B－1・2調査区、B・C21、A・B22区に所在する、東方へ彎曲しながら、落ち込みB－1～2、溝B－1を切り込んでいる浅く細長い溝である。検出長27.5m、幅約68cm、深さ約11cmを測り、埋土は大別して、Ⅰ～Ⅲ層に分層することができる。Ⅰ層は、暗茶灰褐色粘砂土、Ⅱ層は、灰色粘砂、Ⅲ層は、暗茶褐色粘土である。

出土遺物としては、須恵器、土師器の細片が少量出土した。確認できる器種としては、須恵器杯・水瓶・壺・甕、土師器高杯・壺・土釜・把手付甕等がいずれも細片で少量認められる。

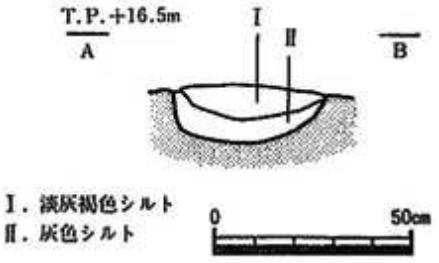
溝B－3（第14図、図版47）　B－1・2調査区、B・C21、A・B22区に所在する。溝B－2、土坑B－9を切り込み、南北方向へ伸びる浅く細長い溝である。検出長27.2m、幅約51cm、



第13図　溝B－2遺構断面図（1/20）

深さ11cmを測り、主軸方位はN—7°—Wを示す。埋土はⅠ～Ⅲ層に分層でき、Ⅰ層は淡灰褐色シルト、Ⅱ層は灰色シルトである。切り合い関係より、溝B—1～3を比較すれば、最も新しい時期の溝である。

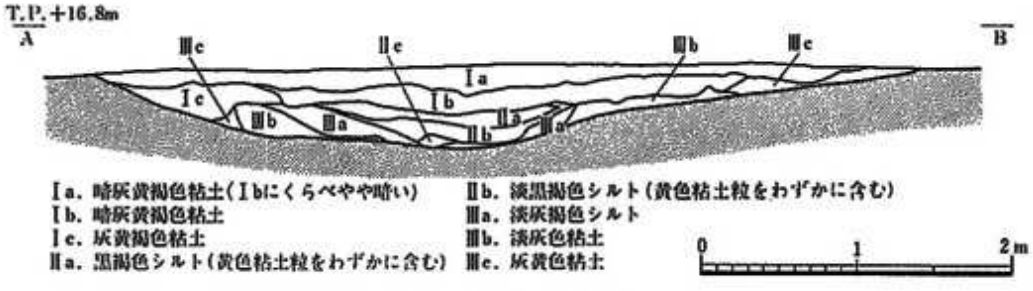
出土遺物としては、須恵器、土師器の細片が出土したのみであるが、その中で須恵器壺の細片が認められる。



第14図　溝B—3遺構断面図（1/20）

溝BW—6（第15図、図版50・57）　B—7調査区、A・B25、B・C・D26、D27区に所在する。B—7、B、W調査区を東西に横切る比較的規模の大きな溝であり、調査地区外においても比較的長く延びているものと考えられる。検出長約37m、幅5～6m、深さ60cmを測り、主軸方位はN—82°—Wを示す。溝底の標高を東西のはしで比較すれば、東がわずか約10cm高い。埋土は大別してⅠ～Ⅲ層に分層することができる。Ⅲ層は、灰色系の粘土及びシルトであり、a～cに細分できる。また以前の調査時には、Ⅰ層中に掘削時期の遺物に較べ比較的新しい時期の遺物である瓦器椀底部が出土したため、Ⅱ・Ⅲ層とⅠ層間には、埋没時期の差異を指摘することができ、最終的には、12世紀末～13世紀頃に埋没したものと考えられる。

出土遺物としては、Ⅰ層中に須恵器の杯・壺・提瓶の細片及び土師器の細片、平瓦片、Ⅱ・Ⅲ層中からは、土師器の皿及び細片、砥石等が出土している。

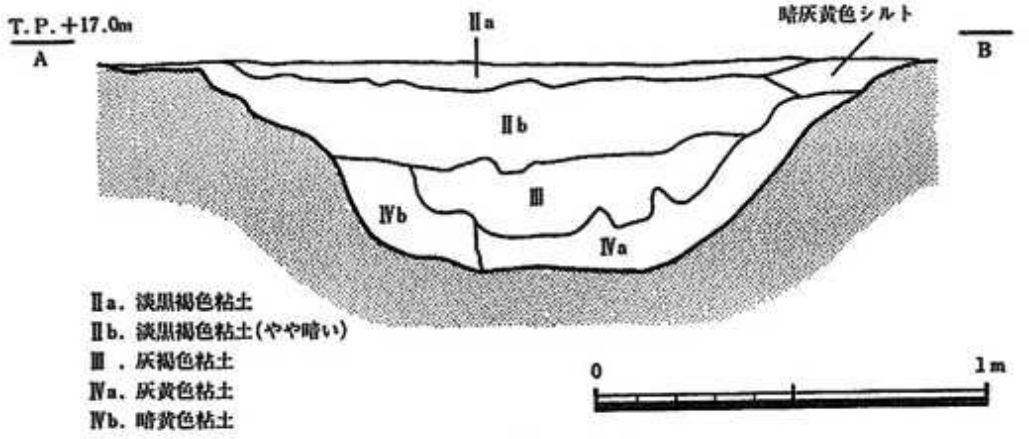


第15図　溝BW—6遺構断面図（1/60）

溝B—25（付図3、図版49）　B—6調査区、C—25区に所在する、溝B—8を切り込んでいる、短く細長い溝である。検出長2.76m、幅20～60cm、深さ6cmを測り、主軸方位はN—84°—Wを示す。埋土は灰色粘質土である。

出土遺物としては、須恵器の杯・壺・甕の細片及び土師器の細片、製塩土器片、石鏃等が出土している。

溝C—1（第16・18図、図版51・52・54・57・60）　C—1・3・8調査区に所在し、C調査区全域を南北に長く横断しB33区で溝C—2を切り込んでいる溝である。そのため調査区以外においても、比較的長く延びているものと考えられる。調査区間の未調査部を加えた検出長約64m、幅1.5m、深さ40cmを測り、主軸方位は約N—15°—Eを示す。溝底の標高を南北で比較すれ



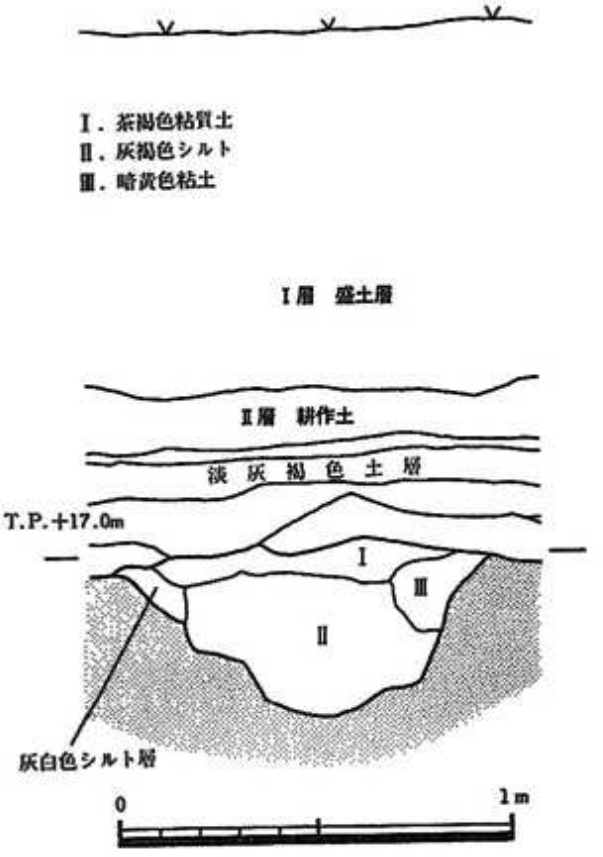
第16図　溝C－1遺構断面図（1/20）

ば、北がわずかに低い。埋土は大別してⅠ～Ⅳ層に分層できる。Ⅰ層は、淡灰黒褐色粘土、Ⅱ層は、暗黒褐色粘土でa～bに細分できる。Ⅲ層は、灰褐色粘土、Ⅳ層は、灰黄色粘土であり、a～bに細分できる。またⅠ層は今回の調査においては、確認することはできなかった。

出土遺物としては、Ⅱ・Ⅲ層中より、須恵器壺蓋・甕、土師器壺・皿、瓦器椀等の破片、平瓦が出土している。

溝C－2（第17、18図、図版53・54・59）　C－5・8・9調査区に所在し、C調査区を横断して、B34区付近で東方向へ彎曲し、ほぼ南北方向へ延びている。そのため調査区以外においても、比較的長く延びているものと考えられる。調査区間の未調査部を加えた検出長58m、幅0.94～2.1m、深さ33cmを測る。溝底の標高を南北で比較すれば、北がわずかに低い。埋土は大別してⅠ～Ⅲ層に分層できる。Ⅰ層は、茶褐色粘質土、Ⅱ層は、灰褐色シルト、Ⅲ層は暗黄色粘土である。なおⅠ層は以前の報告のⅢb、Ⅱ層はⅢc層にあたる。

出土遺物としては、須恵器杯・高杯・有蓋高杯・提瓶・甕・鉢、土師器椀、瓦器椀、丸瓦・平瓦の破片及びサヌカイトの剥片・砥石等が出土してい



第17図　溝C－2遺構断面図（1/20）

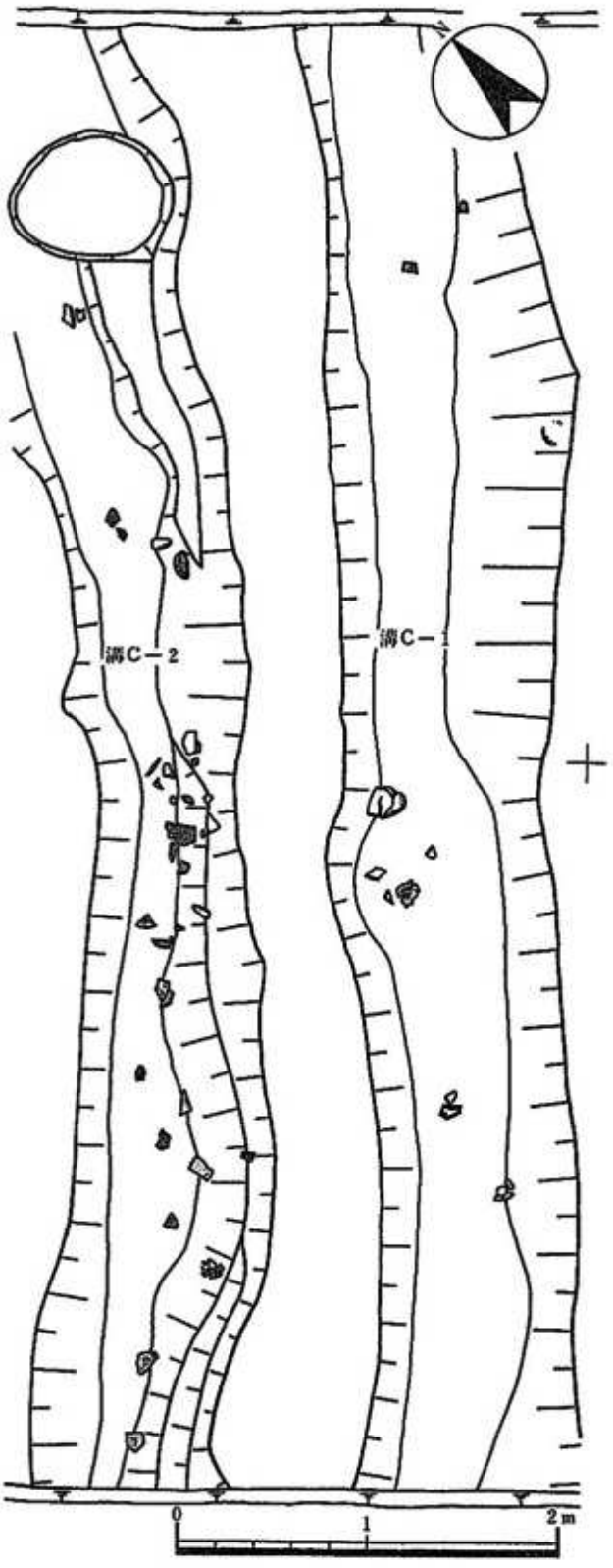
る。なお溝出土の遺物中には遺構外の淡灰褐色土層からの混入遺物と思われるものがある。

溝C－18（第19・20図、図版54・55・58・60）　C－8・9調査区、A35～36区に所在し、溝C－2及び上坑C－34により切り込まれている溝である。調査区間の未調査部を加えた検出長16m、幅1.2m、深さ45cmを測る。埋土は大別してⅠ～Ⅲ層に分層できる。Ⅰ層は、黒褐色粘土、Ⅱ層は淡灰緑色粘土、Ⅲ層は淡灰色粘土である。

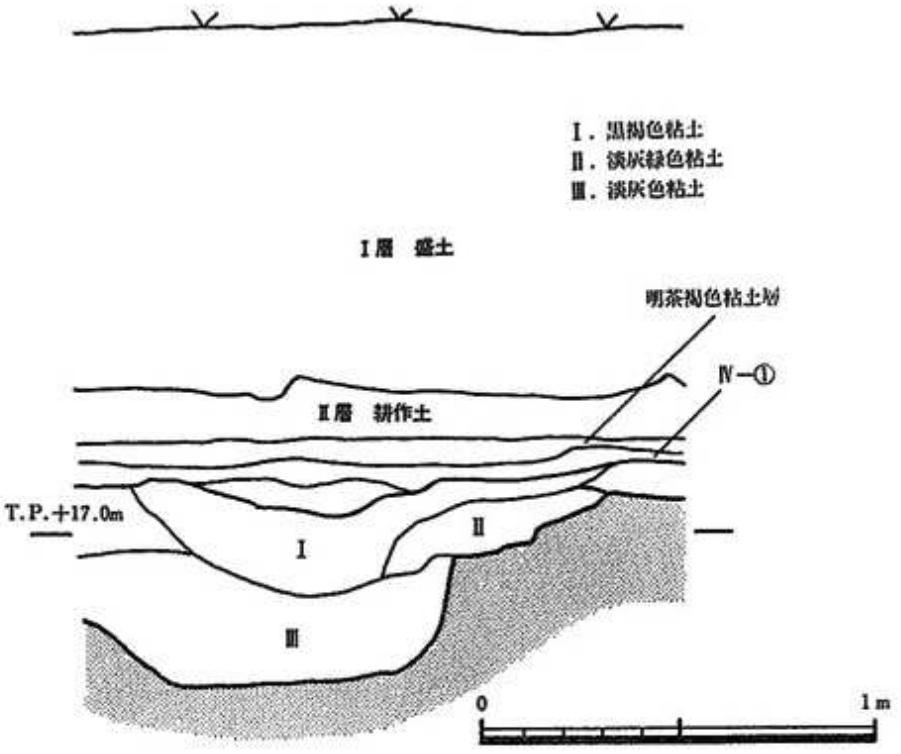
出土遺物としては、須恵器杯・台付壺・鉢、土師器椀等の破片、サヌカイトの剥片・楔形石器が出土している。なお台付壺及び鉢はⅠ、Ⅱ層間より出土している。

井戸C－4（付図5、図版51）
C－2調査区、B29区に所在する素掘りの井戸である。径1.4×1.3m、深さ4.9mを測る。埋土は大別してⅠ～Ⅲ層に分層できる。上層よりⅠ層は、淡灰褐色砂質土であり、層厚は26cm、Ⅱ層は、灰色粘土（黄褐色粘土ブロックを含む）であり層厚は78cm、Ⅲ層は、暗青灰色シルト（黄褐色粘土ブロックを含む）であり層厚は36cm、Ⅳ層は、青灰色砂質粘土（円礫を含む）であり層厚は3.46mである。

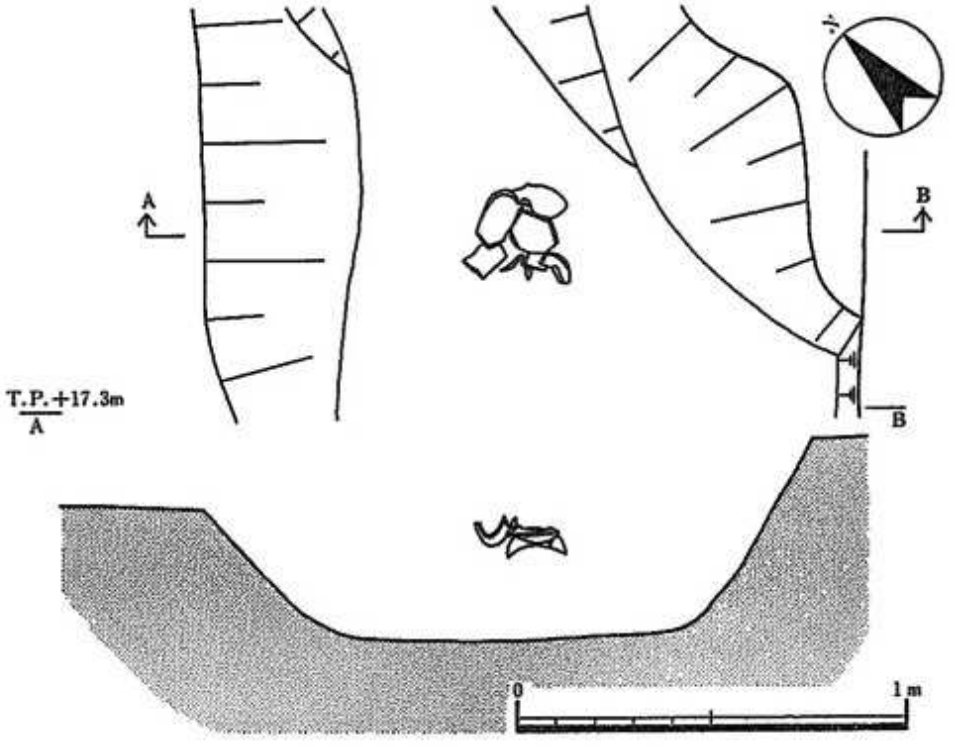
出土遺物としては、Ⅱ層より須恵器、土師器の細片が数点出土したが、混入の遺物であろう。



第18図　溝C－1・2遺物出土状況図（1/40）



第19図　溝C—18遺構断面図（1/20）



第20図　溝C—18遺物出土状況図（1/20）

井戸C－5（付図5、図版53）　C－5調査区、D33区に所在する素掘りの井戸である。径1.7×1.8m、深さ3.7mを測る。埋土は大別してⅠ～Ⅶ層に分層できる。上層よりⅠ層は、灰黄色土であり層厚は7cmを測る。Ⅱ層は、淡灰黄色土であり層厚は13cm、Ⅲ層は、暗黄色粗砂であり層厚は9cm、Ⅳ層は、灰色シルトであり層厚は13cm、Ⅴ層は、暗灰色シルトであり層厚は23cm、Ⅵ層は、暗灰色粘土であり層厚は8cm、Ⅶ層は、青灰色砂質土であり層厚は2.78mである。

出土遺物としては、Ⅰ～Ⅴ層より、須恵器杯・壺、瓦器椀の細片等が出土したが、混入の遺物であろう。

井戸C－6（付図5、図版54）　C－8調査区、B34区に所在する素掘りの井戸である。径1×0.54m、深さ5.35mを測る。埋土は大別してⅠ～Ⅴ層に分層できる。上層よりⅠ層は、灰色砂質土であり層厚は8cm、Ⅱ層は、暗灰色シルトであり層厚は1.3m、Ⅲ層は、暗灰茶色シルトであり層厚は15cm、Ⅳ層は、暗灰褐色シルトであり層厚は1.52m、Ⅴ層は、青灰色砂質粘土であり層厚は2.3mである。

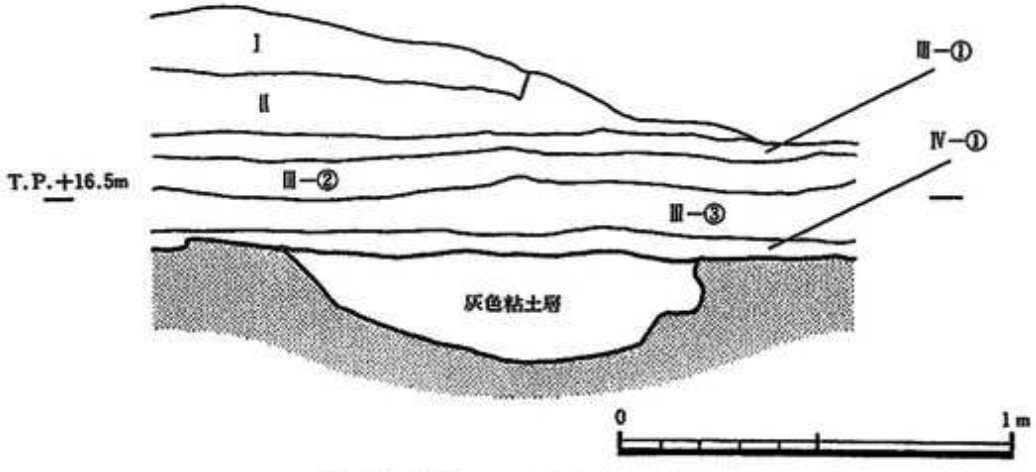
出土遺物としては、Ⅰ～Ⅲ層より須恵器及び土師器の細片が数点出土したが、混入したものであろう。

土坑B－9（第21図、図版47）　B－1調査区、C21区に所在し、溝B－2～3により切り込まれている土坑である。土坑の西半分は調査区外に延びていて、全貌は定かではない。径1.3m、深さ13cmを測る。埋土は灰色粘土（黄色粘土ブロック及び粗砂を含む）である。

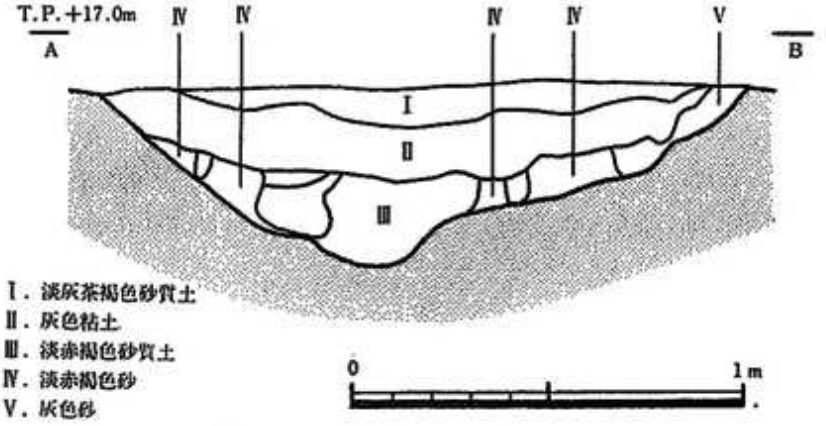
出土遺物としては、須恵器甕片、土師器の細片が出土している。

土坑C－27（第22図、図版53・59）　C－5調査区、D33区に所在、溝C－2を切り込んでいる土坑である。径1.66×1.46m、深さ43cmを測る。埋土はⅠ～Ⅴ層に分層でき、Ⅰ層は淡灰茶褐色砂質土、Ⅱ層は灰色粘土、Ⅲ層は淡赤褐色砂質土、Ⅳ層は淡赤褐色砂、Ⅴ層は灰色砂である。

出土遺物としては、須恵器、土師器、平瓦の細片及びサヌカイトの剥片等が出土している。



第21図　土坑B－9遺構断面図（1/20）



第22図　土坑C－27遺構断面図（1/20）

落ち込みB－6（付図3、図版47）　B－2調査区、B21区に所在する細長い不定形な落ち込みである。径1.8×0.5m、深さ約9cmを測る。埋土は黄灰色砂質土である。

出土遺物として、須恵器　甕、及び土師器片が出土している。

落ち込みC－3（付図6、図版54）　C－5・7調査区、D33、C・D34区に所在する不定形な落ち込みであり、調査区より北方へ比較的広くつづいているものと考えられる。深さは最深部で0.6mを測る。

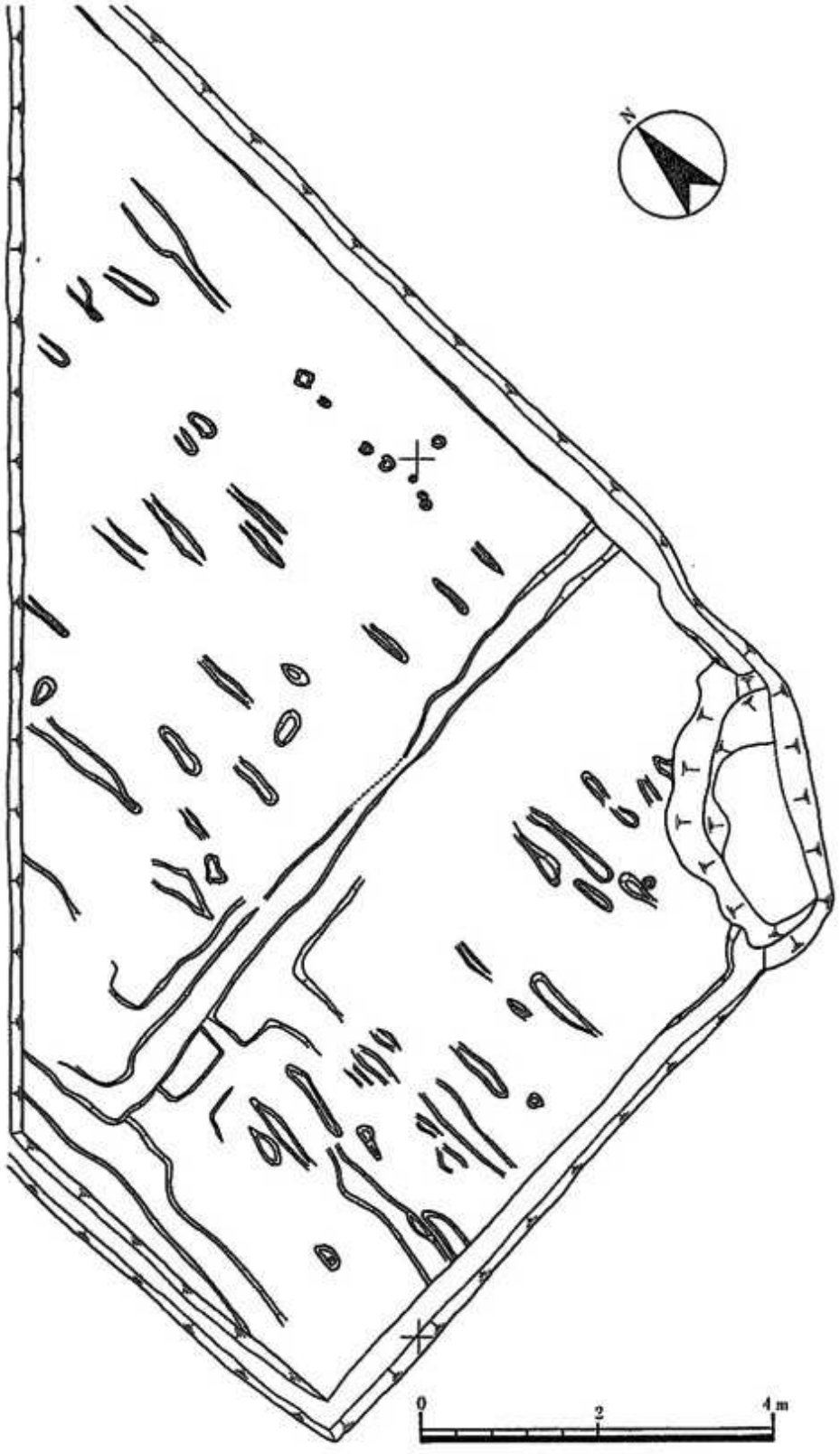
出土遺物としては、須恵器壺、陶器椀及び須恵器、土師器の細片、瓦器片、平瓦片が少量、円筒埴輪片、サヌカイトの剥片・楔形石器・太型蛤刃石斧等の出土をみている。

畦畔状遺構（第23図、図版50）　B－2調査区、B21、A・B22区に所在する。東西、南北、2つの方向に延びる畦畔が、調査区西端部付近で交わり、T字状の畦畔を形成している。また交差している付近には、水口を伴っている。東西方向に延びる畦畔の主軸は、N－83°－E、南北方向に延びる畦畔の主軸は、N－0.5°－Wである。畦部幅39cm、高さ約2cmを測る。畦畔部はⅣ－①層を削り出して形成しているが、後世の削平を受け残存状態は非常にわるい。畦畔を覆っている土層は黄灰色砂質土である。

畦畔を覆っている土層からの出土遺物としては、須恵器壺・甕・提瓶の破片、土師器の細片、瓦器椀の細片等が出土している。

小溝群（付図3・5）　C－7～10調査区を除くB・C調査区のほぼ全域、第1遺構面上に所在している細長い小溝群である。また所在範囲を詳細にみれば、Ⅳ層上面を遺構面のベースにしている範囲内を中心として、展開している。主軸方向は、大別して東西方向及び南北方向へ延びるものの2グループに別けられる。幅1～55cm、深さ約5cmを測る。溝の断面は、浅い「U」字形を呈する。埋土は地点により異なるが、一般的には、Ⅱ層及びⅢ層がそのまま埋土となる。

出土遺物は、少量ながら、須恵器、土師器、瓦器、陶器、磁器の細片が出土している。性格的には、農耕作業の際に掘られた溝と思われる。



第23図　時坪状遺構平面図（1/80）

第3節　遺　　物

今回の調査により出土した遺物は少量ながらも、土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器、埴輪、瓦、石器等各時代の多岐にわたる遺物が出土している。その中で代表的な遺物の概要を、1.土器 2.埴輪　3.瓦　4.石器の順に説明する。

1.　土器

当調査区で、最も普遍的な遺物である。遺物はいずれも細片化し、図化できるものは極めて少ない。以下各遺構単位でまとめる。

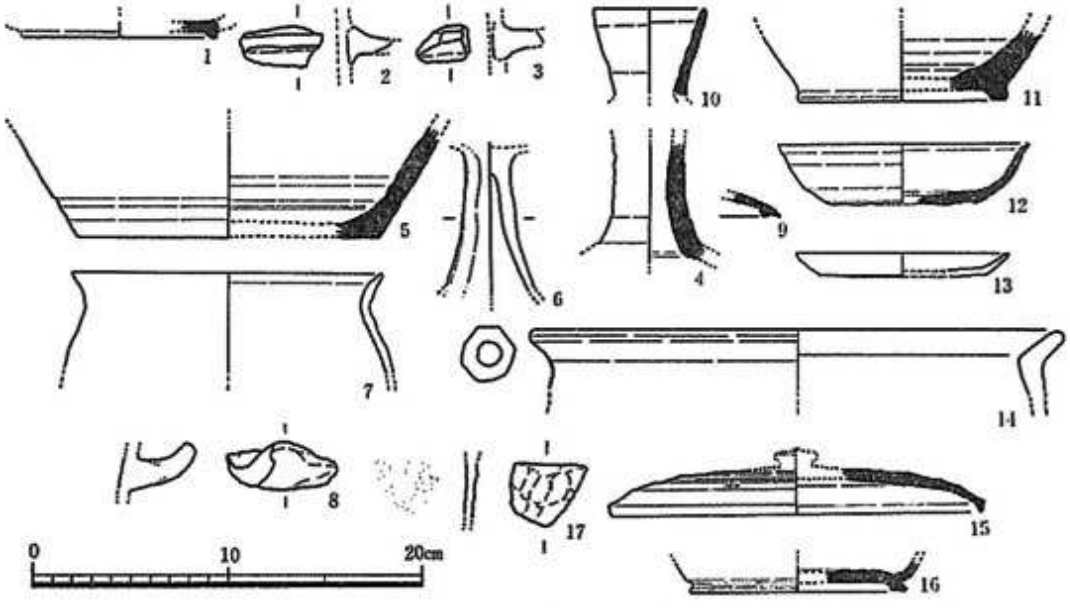
柵B－1出土土器（第24図1～3、図版62）　ＰＢ９～13の掘方埋土中及び柱痕部より、須恵器、土師器の細片が僅かに出土している。確認できる器種としては、ＰＢ12より、須恵器杯身、土師器　羽釜等が出土している。

（1）は須恵器杯身の高台部片である。（2）～（3）は土師器羽釜の鍔部片である。（1）～（3）共に、表面の摩滅が著しく、詳細な調整は不明である。

溝B－2出土土器（第24図4～8、図版62）　平行して延びる溝B－1～3の中でも、比較的遺物量が多い溝である。確認できる器種としては、須恵器杯・水瓶・壺、土師器高杯・壺・羽釜等があげられる。

（4）は須恵器の水瓶の頸部である。直立気味に外彎し口縁方向へ延びている。調整は内、外面共に、回転ナデである。（5）は壺の底部である。内面には回転ナデの凸凹が著しい、調整は内外面共に、回転ナデである。

（6）は土師器の高杯の筒部である。外面には七面の面取りをしている。調整は、表面の摩滅



第24図　B・C調査区出土土器（1）（¼）

が著しく詳細は不明であるが、内面は横ナデである。(7)は甕の口頸部及び体部上半部である。頸部は外彎し、口縁端部は丸くおさまる。調整は、表面の摩滅が著しく、詳細な調整は不明である。(8)は把手付甕の把手部である。外面はオサエ、内面は横ナデの後、ハケメ調整を施している。

溝BW－6出土土器（第24図9～14、図版62）　B・C調査区において、最も規模が大きい溝でありながら、出土遺物は比較的少量である。確認できる器種としては、須恵器杯蓋・提瓶・壺、土師器椀が出土している。その他器種のわからない土師器の細片が、少量出土している。

Ⅰ層の出土遺物は、須恵器杯蓋・提瓶・壺、土師器の細片が出土している。

(9)は須恵器の杯蓋口縁部である。蓋内面のかえりは、短かく肥厚している。調整は、内外面共に回転ナデである。(10)は提瓶口頸部である。頸部は、直立ぎみに、外上方へのび、口縁端部は尖りぎみに丸くおさまる。調整は、内外面共に回転ナデである。(11)は壺底部及び体部の下半部である。底部には「ハ」の字状に高台を貼り付けている。

Ⅱ層の出土遺物としてあげられる土器は、(12)～(14)である。これらの土器は、以前の報告時に、一度紹介したものであるが、今回の調査では、良好な資料を得ることができなかったため、再録することにした。

(12)は須恵器杯身である。底部と体部の境界から、外上方に内彎気味に立ち上り、口縁部は内傾する面を成す。底部外面は回転ヘラ切りのままである。内面には、仕上げナデが認められる。

(13)は土師器　小皿である。表面は摩滅のため詳細な調整は不明である。(14)は甕口頸部である。形態は「く」の字状を呈し、端部は丸くおさまる。表面は摩滅のため詳細な調整は不明。

溝B－25出土土器（第24図15～17、図版61・62）　確認できる器種としては、須恵器杯蓋・杯身・壺・甕の細片、があげられる。その他に器種の不明な土師器片及び製塩土器等も出土している。

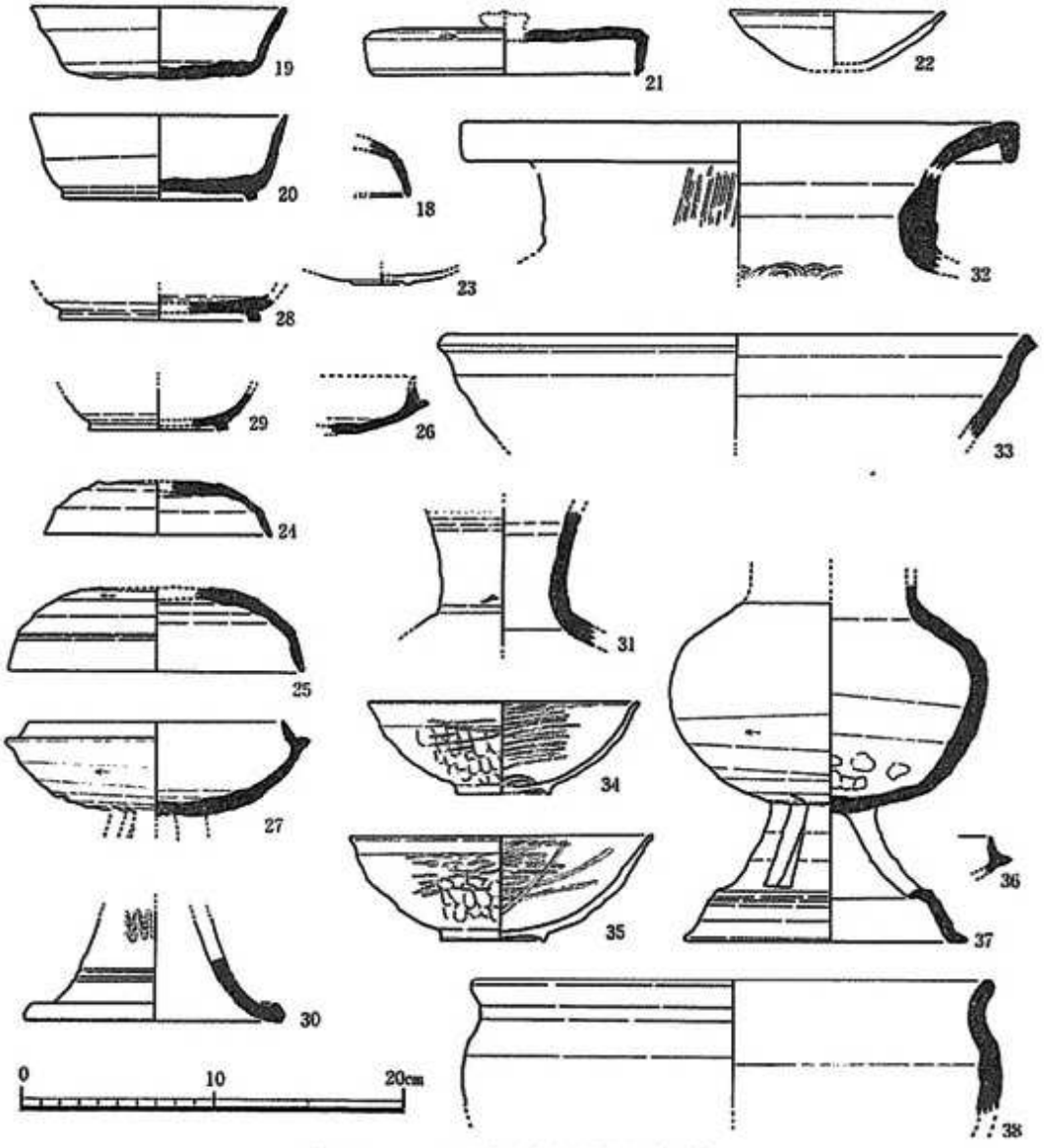
(15)は須恵器　杯蓋である。宝珠つまみは、欠損している。口縁端部は、下方へ短かく屈曲し、先端はにぶい稜をなす。天井部外面には、回転ナデ及び回転ヘラケズリを施している。内面には仕上げナデが認められる。(16)は杯である。底部及び体部下半部のみ残存し、底部には、「ハ」の字状に高台を貼り付けている。底部外面は、回転ヘラ切りの後横ナデ、内面には、仕上げナデが認められる。

(17)は製塩土器の体部片である。外面はオサエの後軽いナデ、内面には、布目痕が認められる。

溝C－1出土土器（第25図18～23、図版61・62）　確認できる器種としては、須恵器杯蓋・杯身・壺蓋・甕、土師器椀・壺、瓦器椀、平瓦等があげられるが、その他に器種の不明な須恵器及び土師器の破片が比較的多量に認められる。

(18)は須恵器　杯蓋である。口縁部及び天井部の一部のみ残存する。天井部と口縁部との境

いには、退化した稜線が施されている。口縁端部は尖りぎみに丸くおさまり、端部内面には、1条の稜が存在する。調整は回転ナデである。(19) は杯である。体部と底部の境は、膨らみを持ち、体部は外彎気味に口縁端部に至り、端部は丸くおさまる。底部外面は回転ヘラ切り、内面には仕上げナデが認められる。(20) は底部に「ハ」の字部の高台を貼り付けた杯である。体部と底部の境は、膨らみを持ち、体部は外彎気味に口縁端部に至り、端部は尖り気味に丸くおさまる。底部外面は、回転ヘラ切りの後横ナデ、内面には仕上げナデが認められる。(21) は壺蓋である。器形としては、宝珠つまみを持つ壺蓋であるが、宝珠つまみは欠損している。天井部は低くほぼ平で、口縁部へつづく。口縁部はやや内傾後、垂直気味に下り、端部外面は屈曲し角を持



第25図　B・C調査区出土土器（2）(1/4)

つ。天井部外面には回転ヘラケズリ、内面には仕上げナデが認められる。

(22) は土師器椀である。底部は欠損している。口縁端部は尖り気味に丸くおさまる。表面の摩滅が著しく、詳細な調整は不明である。

(23) は瓦器椀底部である。細い帯状の高台を貼り付けている。外面横ナデ、内面は摩滅が著しく暗文は確認できない。

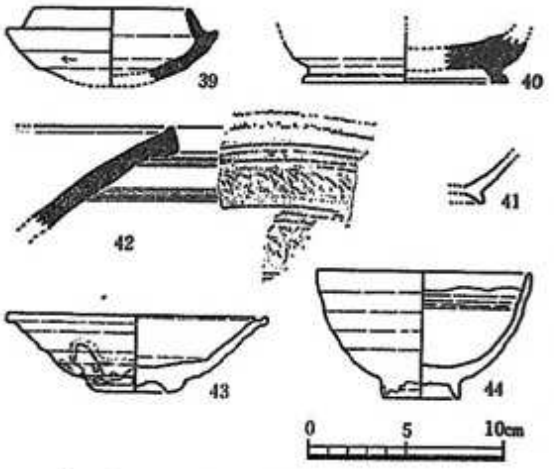
溝C－2出土土器（第25図24～35、図版61・62）　確認できる器種としては、須恵器杯蓋・杯・高杯・有蓋高杯・提瓶・甕・鉢、土師器椀、瓦器椀、丸瓦・平瓦等があげられる。その他に器種の不明は土師器・須恵器片等も比較的多量に出土している。

(24) は須恵器　杯蓋である。天井部中央は、ほぼ平坦であり、口縁部は外下方へ外彎気味にのび、端部は丸くおさまる。天井部外面には回転ヘラ切り、内面には仕上ナデが認められる。(25) は杯蓋である。天井部は丸味をもち口縁部へつづく。口縁部は外下方へのび端部は丸くおさまる。天井部と口縁部との境の稜線はにぶい。天井部外面には回転ヘラケズリが施されている。(26) は杯身である。底部は丸味を持ち受部へつづく。受部は肥厚し尖り気味に丸くおさまる。底部外面には回転ヘラケズリが施されている。(27) は脚部を欠く有蓋高杯である。底部は丸味を持ち、体部へつづいている。たちあがりは内傾し端部は尖りぎみに丸くおさまる。底部外面回転ヘラケズリ、内面には仕上げナデが認められる。(28)～(29) は、底部に高台の付く杯である。高台部は「ハ」の字状に外下方へひらき、端部は平坦である。(28) の底部内面には仕上ナデが認められる。(30) は透し穴のある高杯脚部である。脚端部は肥厚し丸くおさまる。裾部に2条の沈線及び櫛描波状文を施し、外彎気味に脚柱部へつづく。(31) は平瓶の頸部及び体部片である。頸部は外彎気味に口縁方向へのび2条の沈線を施している。(32) は甕口頸部である。頸部下半部は肥厚している。口縁部は下方へ屈曲し、端部は丸くおさまる。頸部外面は平行叩き、体部内面には同心円文が施されている。(33) は鉢口頸部及び体部上半部である。形状より考えて片口鉢になるものと考えられる。体部は外上方へのび、口縁端部は尖りぎみにおさまる。調整は回転ナデである。この鉢は播磨神出窯産のものに類似している。

(34)～(35) は高台付瓦器椀である。体部は内彎気味に口縁方向へのび、口縁端部は丸くおさまる。(34) の口縁端部内面には一条の沈線を施している。高台部は短かく尖りぎみにおさまる。暗文は体部外面及び内面に認められる。体部内面の暗文は、(34) は渦巻暗文、(35) は格子暗文が、不明瞭ながら認められる。

溝C－18出土土器（第25図36～38、図版61・62）　確認できる器種としては、須恵器杯身・台付壺・鉢、土師器椀等があげられる。

(36) は須恵器杯受部・たちあがり部の破片である。たちあがりは、外彎気味に上方にのび、尖り気味に丸くおさまる。調整は回転ナデである。(37) は口頸部を欠損している台付壺である。脚部には、細長い長方形の透しを1段三方につけている。体部は丸味を保ち頸部へつづいている。体部外面下半部は回転ヘラケズリ、内面にはオサエ痕が認められる。(38) は体部下半部が



第26図　B・C調査区出土土器（3）（1/4）

欠損している鉢である。口頸部は短かく、僅かに外反し端部へとつづく、端部は丸くおさまる。調整は回転ナデである。

井戸C－5出土土器（第26図39～41、図版62）　確認できる器種としては、須恵器杯身・壺、瓦器椀等があげられる。

（39）は須恵器杯である。肉厚な器壁をもつ口径の小さな杯身である。口縁端部は丸くおさまる。底部外面には回転ヘラケズリを施している。（40）は底部に（ハ）の字状に高台を貼り付けている壺底部である。調整は回転ナデである。

（41）は瓦器椀の底部片である。高台部は外下方へのび、端部は丸くおさまる。

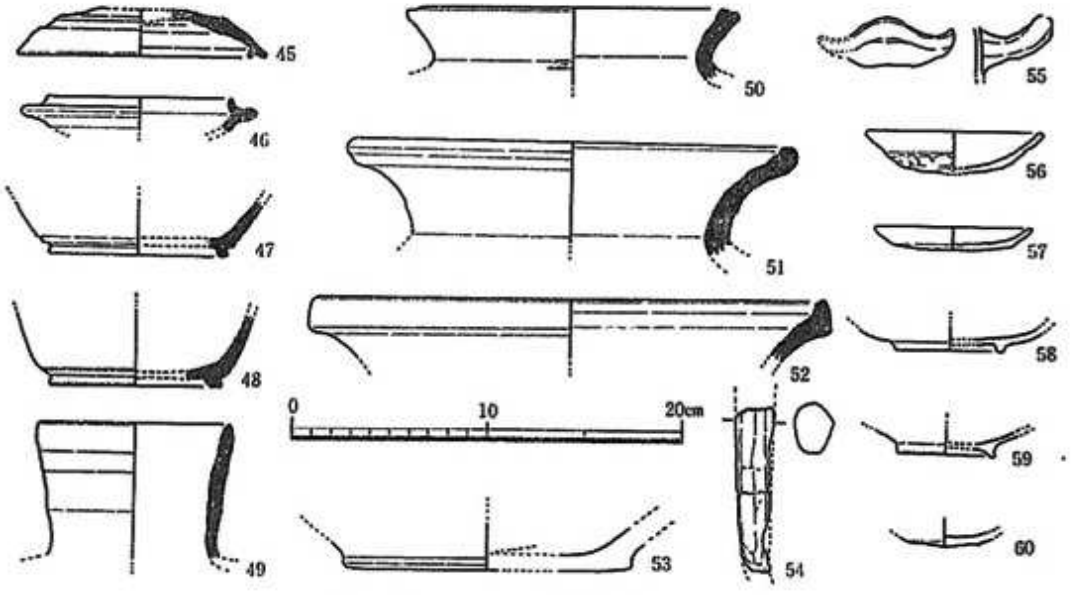
落ち込みB－6出土土器（第26図42、図版62）　確認できる器種としては、須恵器甕のみであるが、他に土師器片も出土している。

（42）は須恵器　甕の口頸部である。頸部には、沈線・カキ目・櫛描波状文が施されている。

落ち込みC－3出土土器（第26図43～44、図版61）　確認できる器種としては、須恵器壺、陶器椀等があげられる。その他器種不明の須恵器、土師器片が認められる。

（43）は唐津焼の陶器椀である。器面には、高台部を除き、淡灰緑色の釉薬がかけられている。

（44）は陶器椀である。外面及び口縁内面には、高台部を除き、淡緑黄色の釉薬がかけられて



第27図　B・C調査区出土土器（4）（1/4）

4. 石器

今回の調査により出土した石器類は、石核・剥片を合せて計44点である。出土状況は、いずれも遺構及びⅢ～Ⅳ層中に、原位置より遊離し混入している資料ばかりであるが、C調査区に集中する傾向を指摘できる。これらの石器類を、打製石器・磨製石器・礫石器とに大別し、石核・剥片等を加え概要をのべる。なお各々の石器の出土地点は第9表にまとめた。

A 打製石器

打製石器の中で石材がサヌカイトよりなる石器は39点、鄙石・かんらん石玄武岩よりなる石器は2点、計41点出土している。以下主要な器種ごとに説明していく。

石核（第30図1～3・第31図4、図版64）

石核として分類できるものは計4点出土している。（1）は今回の調査で明らかになった数少ない旧石器の、縦長剥片石核である。小円礫を素材とし、円礫上を直接加撃し礫の一辺を作業面としている。作業面の下端部には、反対方向からの加撃による剥離痕が認められ、両極打法によるものかもしれない。（2）は横長剥片石核である。b面には、素材の分割面と、複数の剥片剥離痕が認められる。（3）は小円礫を素材として、円礫の一端に平坦な打面を設け剥片剥離作業を行っている石核である。（4）は礫面上を打面として用い、多方向より剥片剥離作業を行っている石核である。c面には、比較的大きな剥離面が認められる。

剥片（第31図5～8、第33図16～17、図版64・65）

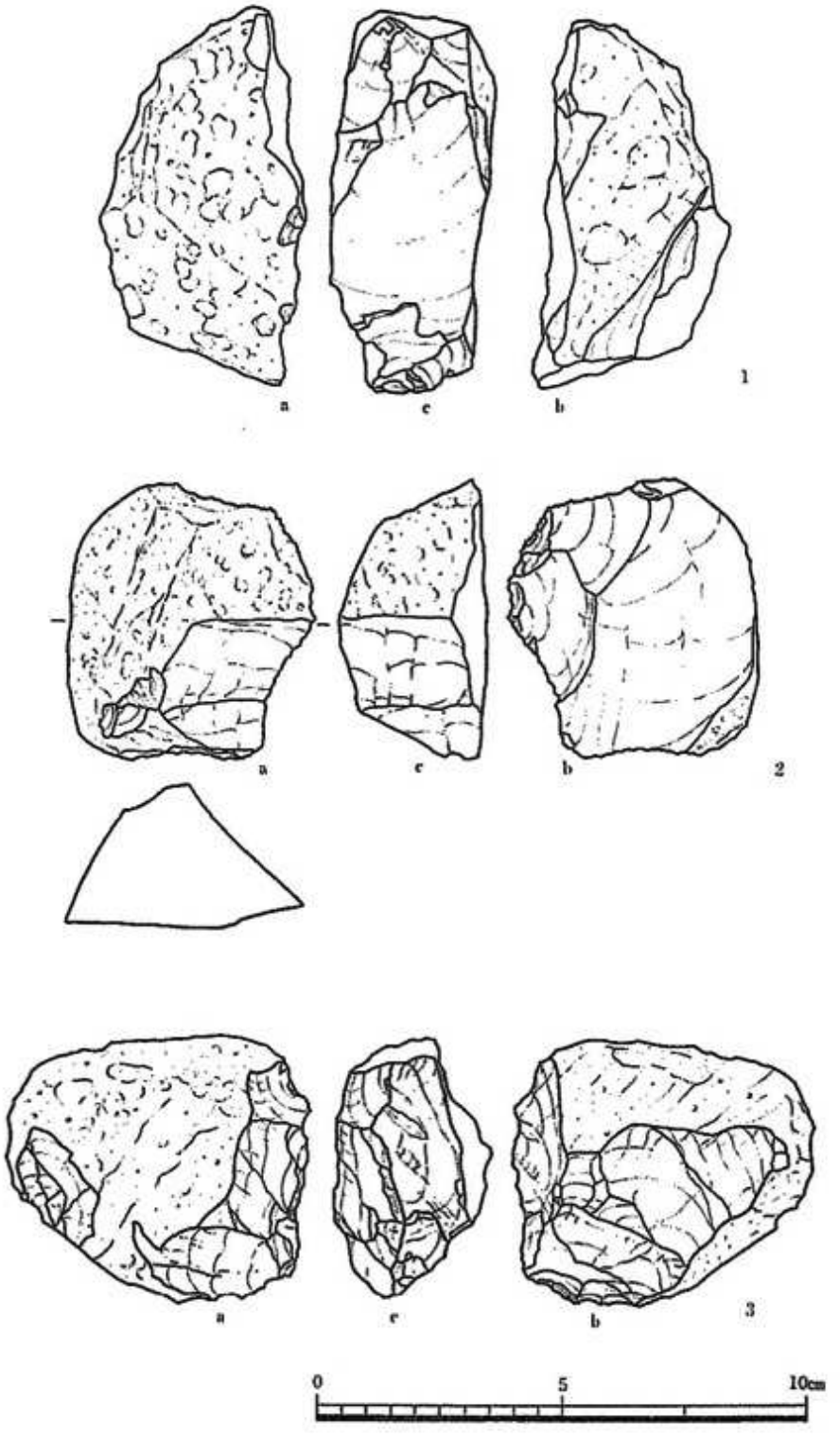
剥片として分類できるものは計27点出土している。（5）は礫面上を直接加撃して剥取った縦長状の剥片である。背面は礫面のみで形成される。打点部付近の側縁には折れ面が認められる。（6）は（5）同様に、礫面上を直接加撃して剥取った縦長状の剥片である。片側縁には、礫面を残している。（7）は、横長状の剥片である。打点は、平坦な打面と礫面の成す稜上に位置する。腹面には、バッルバスカーが顕著に認められる。（8）は（7）同様、横長状の剥片である。背面は、複数の剥離面により形成されている。打面は平坦打面である。（16）は鄙石・かんらん石玄武岩製の剥片である、詳細な石質は佐藤氏によるA_3にあたる。[2] 背面には、旧素材面と、先行する剥片剥離痕により構成される。打面は平坦打面である。（17）も（16）と同様鄙石・かんらん石玄武岩製の剥片である。詳細な石質は佐藤氏によるA_1にあたる。背面は旧素材面のみで形成される。打面は平坦打面である。

削器（第31・32図9・10、図版64）

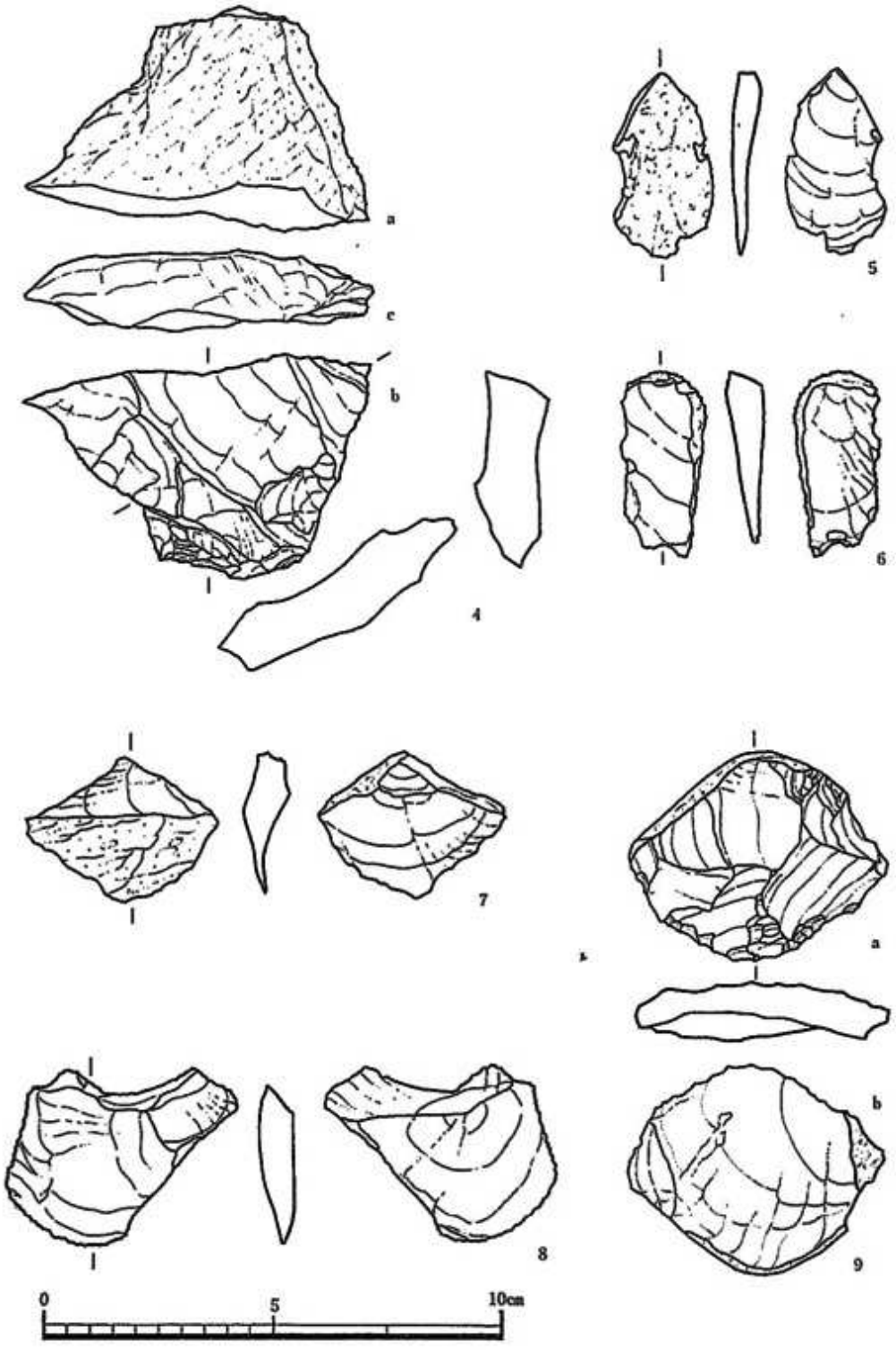
削器として分類できるものは計2点出土している。（9）は長辺の一辺を刃部としている削器である。a面は多方向からの加撃による複数の剥離面により形成されている。刃部はb面からの調整により形成される。b面はポジティブな素材の剥離面である。（10）はいわゆる石匙である。a面には、素材の剥離面、b面には礫面を残している。

楔形石器・楔形石器の削片（第32図11、12、図版64）

楔形石器・楔形石器の削片として分類できるものは計4点出土している。（11）は縦長状の形



第30図　B・C調査区出土石器（1）（3/4）



第31図　B・C調査区出土石器（2）(3/5)

態を呈する、楔形石器である。a面にはポジティブな素材の剥離面、b面には礫面を多量に残して、素材が肉厚な剥片であることが知れる。側縁部はa・b両面からの調整により鋭いエッヂをもつ。(12) は縦長状の楔形石器の削片である。d面には、ポジティブな主要剥離面が認められる。上下両端部は潰れ状を呈している。

石鏃（第32図13～14、図版64）

石鏃として分類できるものは計2点出土している。(13)～(14) は凹基無茎式の石鏃である。(13) の先端部は非常に鋭角である。

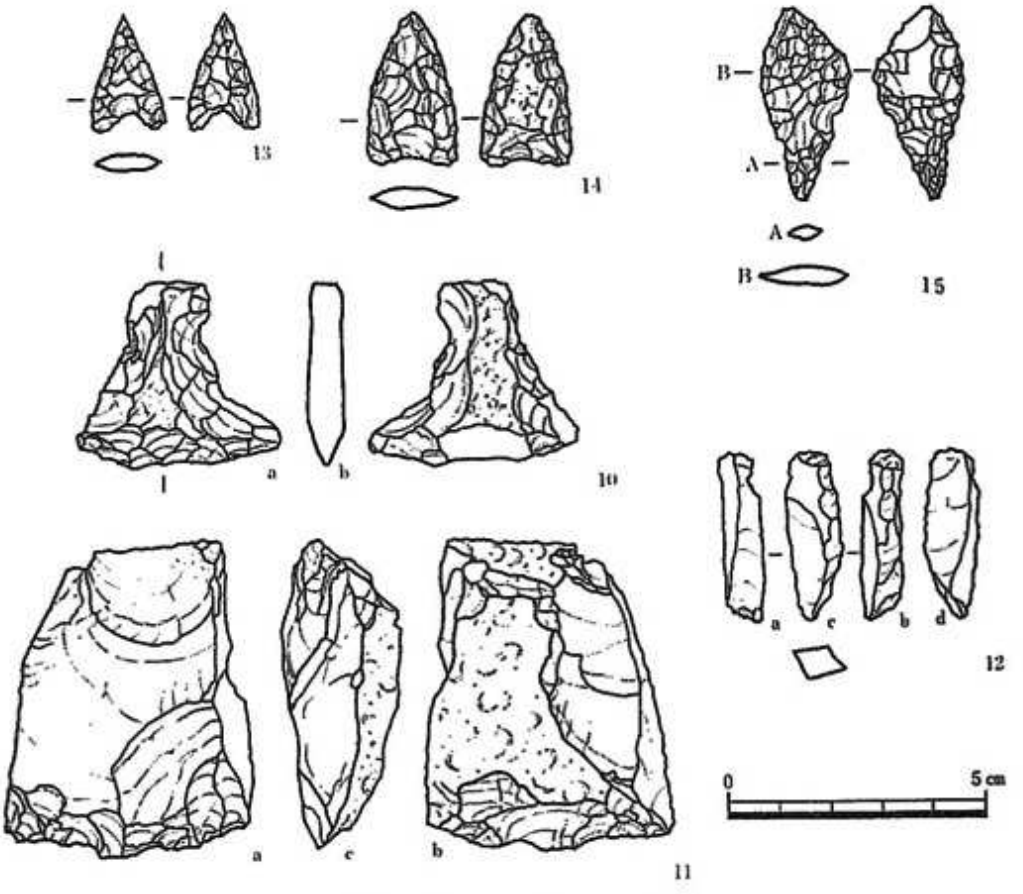
石錐（第32図15、図版64）

石錐として分類できるものは計1点出土している。(15) は楕円形の頭部下端が錐部になる。表裏両面共に調整がゆきとどいている。

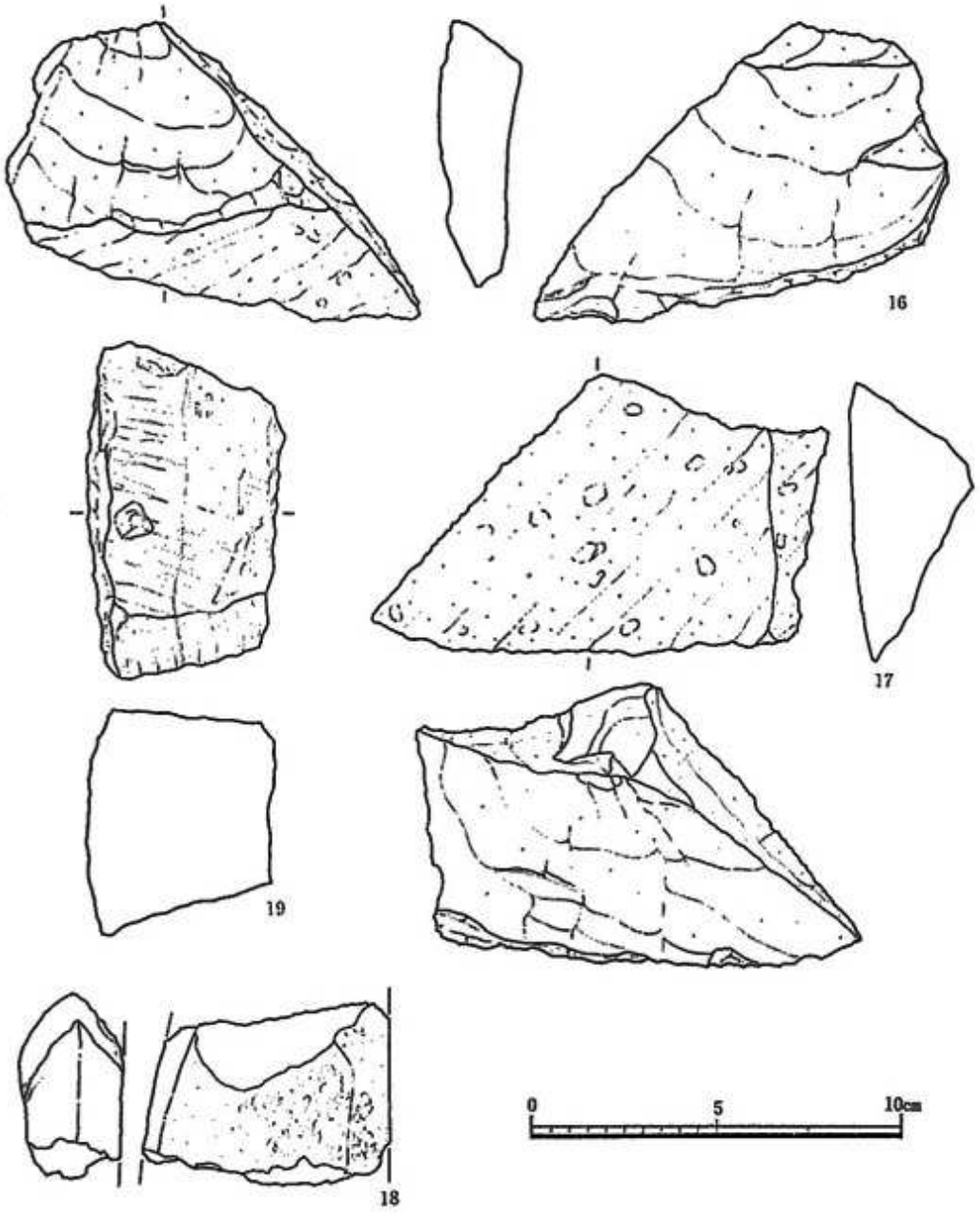
B　磨製及び礫石器

磨製及び礫石器として分類できるものは比較的少量であり、磨製石器では太型蛤刃石斧が1点、礫石器では砥石が2点のみ出土している。

太型蛤刃石斧（第33図18、図版65）　1点のみ出土している。(18) はホルンフェルス製の太型



第32図　B・C調査区出土石器（3）($\frac{1}{3}$)



第33図　B・C調査区出土石器（4）（1/2）

蛤刃石斧片である。器面には虫喰い状の敲打痕が著しく認められる。

砥石（第33図19、図版65）　2点出土している。(19) は立方体状を 呈する 砥石である。器面には比較的鋭利なものを磨いたためか直線上の使用痕が認められる。なお石材については佐藤隆春氏の[2]、御寄稿をいただいた。以下記載させていただく。

『2～3㎜の針状の斜方輝石の目立つ暗褐色の岩石である。

鏡下では斜方輝石のほか少量の単斜輝石斑晶がみられる。単斜輝石はしばしば斜方輝石斑晶と平行連晶をしている。斜方石斑晶は見られない。

石基は間粒状組織を示し、斜方輝石、単斜輝石、斜長石などからなる。

産地：肉眼では岩石Cに似るが斜長石の斑晶が存在しない点で、鏡下でも石基の粒径はCより粗粒である点で異なり、岩石Cとは別種の岩石である可能性が高い。二上山周辺での複輝石安山岩は柏原市東部の亀の瀬で溶岩流として、またその北部の信貴山周辺では岩脈として産している。亀の瀬での溶岩はドロドロ溶岩と呼ばれ（藤田崇　1967）ており、両輝石、斜長石を含む。信貴山周辺で岩脈として産するものは一般に斜長石斑晶を含まず、石基もやや粗粒である、したがって後者の岩石産地である可能性が高い。』

補註

（1）　（財）大阪文化財センター「大堀城跡発掘調査報告書―大和川下流東部流域下水道大井処理場放流幹線建設事業に伴う―」　1983

（財）大阪文化財センター「大堀城跡―近畿自動身道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書―」　1984

（2）　石器の石質鑑定及び原産地同定は、八尾東高等学校教諭佐藤隆春氏の肉眼鑑定及び顕微鏡観察による。なお佐藤先生には、現地に数度も足を運んでいただき、また鑑定についての寄稿をいただいた、厚く深謝したい。なお本文に記載している石質の分類記号は下記による。

佐藤隆春「大堀遺跡出土の石器を構成する岩石種と推定産地」「大堀城跡―近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書―」（財）大阪文化財センター　1984

第4節　小　　結

今回のB・C調査区の調査では、断片的ながら、旧石器時代から江戸時代にいたる遺構及び遺物を検出することができた。そこでこれらの成果を基に、当調査区の概要を時代別に概観してゆきたい。

旧石器時代の石器として認定できるものは、縦長剥片石核1点のみであるが、時期不詳の石器及び剥片類も存在し、旧石器の実数は増加するものと思われる。石器及び剥片類の出土状況は遺構及びⅡ～Ⅳ層、淡灰褐色土層中に混入しているものばかりであるが、平面的にはC調査区に集中する傾向が認められる。

縄文・弥生時代になっても当調査区には明確な遺構を見い出すことはできないが、石鏃、石錐、太型蛤刃石斧等の石器類が出土している。

古墳時代の遺構は今回検出することはできなかったが、遺構中に混入している土器、埴輪片及び先の調査で明らかになった溝、落ち込み等の遺構を踏まえれば、今後の調査の進展に伴い遺構、遺物は増加する可能性は高い。また埴輪の出土は、周辺域に古墳の存在を連想させる。

奈良時代の遺構及び遺物は、比較的豊富である。柵B－1、溝B－1～3、25、溝BW－6等の遺構があげられる。溝B－25、BW－6を除き、先の調査で明らかになった建物B－1を加えた諸遺構は、A調査区に所在する集落の範囲内に加えても差しつかえないであろう。また柵B－1の軸線を延長させた線上より南には、建物は認められず、同線上は、おおよそ8世紀代の集落居住域の南限を示しているものと思われる。なお溝BW－6について触れておく、溝BW－6の掘削時期は、Ⅱ・Ⅲ層中の遺物から判断して、7世紀後半より8世紀前半を想定でき、先の集落とはさほど時期差を有するものではなく、集落開始当初より存在していた可能性が高い。方向はほぼ東西方向であり、西は現在の上ノ池（旧開析谷）、東はA調査区の埋積谷方向へ、ほぼ段丘上を東西に横断している。性格的には、集落を画する溝及び灌漑用水路等の可能性があるが、いまだ結論を見い出すには至っていない。

例えば、集落を画する溝と捉えた場合、規模のわりに生活廃棄物と思われる遺物も少なく、そして同溝と先に述べた集落居住域の南限との空間には、建物は皆無であり、またその他の遺構の数も、極めて少ない。そのため集落との同時性は指摘できるが、直接的に結びつけるには若干の問題がある。また同溝が、上ノ池（旧開析谷）及びA調査区の埋積谷間の段丘上を横断するかのように延びているため、両開析谷間において、灌漑用水の調整を行ったとも考えられるが、現時点では周辺域には生産域を想定できていないうえ、上ノ池の築造時期がつかめていないので論ずることはできないが、今後の課題として検討を行う必要は十分あると思われる。また同溝の性格を一限的に捉える必然性もないことをつけ加える。以上の問題があげられるため、溝BW－6の性格については次報告に委ねたい。

平安時代末より鎌倉時代になると、主要な遺構は、溝に限定され、所在地もC調査区に集中す

る。溝C－1、2、18等の溝であり、性格的には、灌漑用水路と思われる。同溝群は遺存状態はよく、調査地外においても比較的長くつづいているものと考えられる。また溝C－1、2の方向より推測すれば、現在の上ノ池（旧開析谷）方向に向けて延びていくものと考えられる。

室町時代以降になると、農地化に向う。第1遺構面のベースになるⅣ層及び淡灰褐色土層は、14世紀頃に人為的に形成された整地層と捉えることができ、室町時代より江戸時代前半までの遺構の大半は、この遺構面上に展開している。主要な遺構をあげると、柵C－1～3、井戸C－4～7、土坑C－27、落ち込みC－3、畦畔状遺構、小溝群などである。

以上、当調査区の調査により明らかになった点を略述したが、残された課題は多い。今後周囲の遺跡との比較により、大堀遺跡の性格を明らかにしていく必要を感じる。

第7表　B・C調査区出土土器観察表(1)

遺構名	挿図・図版	器種	法量	胎土	焼成	色調
柵B－1	第24図－1 図版62	須恵器 杯(身)	高台径 100mm 残存高 9mm	0.5mm位の黒色砂粒	軟	淡黄色
	第24図－2 図版62	土師器 羽釜	残存高 21mm 残存幅 43mm	0.5～2.0mm位の砂粒金・黒雲母を含む。いわゆる生駒西麓の胎土	軟	暗茶褐色
	第24図－3 図版62	土師器 羽釜	残存高 19mm 残存幅 27mm	0.5～4.0mm位の白色砂粒黒雲母。	軟	外面－淡赤褐色 内・外面－茶褐色
溝B－2	第24図－4 図版62	須恵器 水瓶	残存高 60mm	0.2～1.0mm大の白色砂粒を含む。	堅緻	外面－淡灰黒色 内面－灰色 断面－暗紫色
	第24図－5 図版62	須恵器 壺	底　径 152mm 残存高 56mm	0.2～2.0mm位の白色砂粒を含む。	堅緻	外面－青灰色 内面－灰色 断面－灰色
	第24図－6 図版62	土師器 高杯	残存高 70mm	0.2～0.5mm位の白黒色砂粒を含む	軟	外・内面－淡赤褐色 断面－淡茶褐色
	第24図－7 図版62	土師器 甕	口縁径 158mm 残存高 50mm	0.2～0.3mm大の白色砂粒を含む	軟	外・内・断面－明茶褐色
	第24図－8 図版62	土師器 把手付甕		淡灰褐色の粘土粒が混じる。0.1～0.2mm大の砂粒を含む	やや軟	外・内面－淡乳茶色 断面－茶色
溝BW－6 Ⅰ層	第24図－9 図版62	須恵器 杯蓋	残存高21.5mm	0.2～1mmの黒色砂粒を含む	軟	外・内・断面－淡灰色
	第24図－10 図版62	須恵器 提瓶	口　径 57mm	0.1～0.5mmの白色砂粒を含む	堅緻	外面－暗灰色 内面－灰色 断面－淡青灰色
	第24図－11 図版62	須恵器 壺	高台径106.5mm 高台高 5mm 残存高 35mm	0.2～1mmの白色砂粒を含む。クサリ礫を含む	堅緻	外面－淡灰褐色 内・断面－淡茶色
溝BW－6 Ⅱ・Ⅲ層	第24図－12	須恵器 杯(身)	口　径 126mm 器　高 31mm	0.2～0.4mm大の白色砂粒を含む	堅緻	外・内・断面－暗灰色
	第24図－13	土師器 小皿	口　径 108mm 器　高 12mm	白色微砂粒を含む	軟	褐色
	第24図－14	土師器 甕	口　径 272mm 残存高 31mm	2.0～1.5mm大の白色砂粒を含む	堅緻	明褐色
溝B－25	第24図－15 図版61	須恵器 杯(蓋)	口　径 192mm 残存高 22mm	0.2～1mmの白色砂粒を含む	堅緻	外面－淡青灰色 内面－灰色 断面－淡青灰色
	第24図－16 図版62	須恵器 杯(身)	高台径 110mm 高台高 5mm	0.2～1mm大の白色砂粒を含む	堅緻	外面－暗灰色 内面－灰色 断面－淡青灰色
	第24図－17 図版62	製塩土器	厚　32mm 横　38.5mm	0.1～0.5mmの白色砂粒を含む	堅緻	外・内面－淡灰緑色 断面－茶褐色

第7表　B・C調査区出土土器観察表(2)

遺構名	挿図・図版	器種	法量	胎土	焼成	色調
溝C－1	第25図－18 図版62	須恵器 杯(蓋)	残存高　29mm	0.1～1.0mm大の白色砂粒を含む	堅緻	外・内・断面－青灰色
	第25図－19 図版61	須恵器 杯(身)	口　径 132mm 器　高　37mm	0.2～0.5mm位の白・黒色砂粒を含む	やや軟	外・内・断面－灰白色
	第25図－20 図版61	須恵器 杯(身)	口　径 132mm 器　高　44mm	0.2～0.5mm位の白色砂粒を含む	軟	外・内・断面－灰白色
	第25図－21 図版61	須恵器 壺(蓋)	口　径 136mm 残存高　24mm	0.2～4.0mm大の砂粒を含む	堅緻	外面－淡赤灰色 内面－青灰色 断面－淡灰紫色
	第25図－22 図版62	土師器 椀	口　径 112mm 器　高約31mm	0.1～3.0mm大の白色砂粒を含む	軟	外・内面－淡黒褐色
	第25図－23 図版62	瓦　器 椀	高台径　28mm 高台高　2mm 残存高　7mm	0.1～2.0mm大の白色砂粒を含む	やや軟	外面－黒色(イブシ) 内・断面－淡乳灰色
溝C－2	第25図－24 図版62	須恵器 杯(蓋)	口　径 118mm 器　高　28mm	0.2～0.4mm大の白色砂粒を含む	堅緻	外・内面－灰青色 断面－暗赤灰色
	第25図－25 図版61	須恵器 杯(蓋)	口　径 154mm 器　高　44mm	0.2～0.3mm大の砂粒を含む	軟	乳灰色
	第25図－26 図版62	須恵器 杯(身)		0.2～0.3mm大の砂粒を含む	軟	乳灰色
溝C－2	第25図－27 図版61	須恵器 有蓋高杯 (杯部)	口　径 132mm 器　高　49mm	0.2～1mm大の白色砂粒を含む	堅緻	外面－暗灰色 内面－灰色 断面－暗灰色
	第25図－28 図版62	須恵器 杯	高台径 104mm 高台高　5mm 残存高　14mm	0.2～0.4mm大の砂粒を含む	堅緻	外面－青黒色 内面－灰青色 断面－青灰色
	第25図－29 図版62	須恵器 杯(身)	高台径　72mm 高台高 2.5mm 残存高19.5mm	0.2～1mmの白色砂粒を含む	堅緻	内・外・断面－淡青色
	第25図－30 図版62	須恵器 高杯	残存高　54mm	0.2～1mmの白色砂粒を含む	堅緻	内・外・断面－淡紫色
	第25図－31 図版62	須恵器 平瓶	残存高　58mm	0.2～2.0mm大の砂粒を含む	堅緻	外・内面－淡灰褐色 断面－灰黒色
	第25図－32 図版62	須恵器 甕	口　径 292mm 残存高　23mm	0.2～0.5mm位の白・黒色砂粒を含む	やや軟	外面－黒灰色 内面－灰色 断面－灰色
	第25図－33 図版62	須恵器 鉢	口　径 300mm 残存高　54mm	0.5～4.0mmのの白色砂粒を含む	堅緻	外面－淡灰青色 内面－灰黒色 断面－淡灰褐色
	第25図－34 図版61	瓦　器 椀	口　径 140mm 器　高　48mm	0.2～1.0mm大の砂粒を含む	やや軟	外・内面－淡黒色 断面－淡灰黄色
	第25図－35 図版61	瓦　器 椀	口　径 156mm 器　高　54mm	0.2～1.0mm位の砂粒を含む	やや軟	外面－黒灰色 内面－淡黒色 断面－淡灰黄色
溝C－18	第25図－36 図版62	須恵器 杯(身)		0.1mm位の砂粒を含む	堅緻	暗黒灰色
	第25図－37 図版61	須恵器 台付長頸壺	口　径 146mm 残存高 185mm	0.3～1mmの白色砂粒を含む	堅緻	外面－暗青灰色 内面－淡青灰色 断面－淡青灰色
	第25図－38 図版62	須恵器 鉢	口　径 268mm 残存高　66mm	0.2～0.5mm大の白色砂粒を含む	堅緻	外面－暗青黒色 内面－暗青黒色 断面－セピア色
井戸C－5	第26図－39 図版62	須恵器 杯(身)	口　径　79mm 器　高　36mm	0.2mm大の黒・白色砂粒を含む	堅緻	外面－淡青灰色 内面－灰色 断面－淡青灰色
	第26図－40 図版62	須恵器 長頸壺	高台径 104mm 高台高　8mm	0.2～0.3mm位の砂粒を含む	堅緻	外面－淡青灰色 内面－淡灰褐色 断面－暗灰色
	第26図－41 図版62	瓦　器 椀	残存高　23mm	0.2～2mm大の砂粒を含む	やや軟	外・内面－黒色 断面－淡灰白色
落ち込み B－6	第26図－42 図版62	須恵器 甕	残存高52.5mm	0.2～0.5mm白色砂粒を含む	堅緻	外面－黒灰色 内面－青灰色 断面－紫灰色

第7表　B・C調査区出土土器観察表(3)

遺構名	挿図・図版	器種	法量	胎土	焼成	色調
落ち込み C－3	第26図－43 図版61	陶器 椀	口径 134mm 器高 39mm	4mm大の白色砂粒が1点認められる	やや軟	外・内面－淡灰緑色 断面－淡灰赤色
	第26図－44 図版61	陶器 椀	口径 110mm 器高 65mm	0.2～0.5mmの黒色砂粒を含む	堅緻	外面－淡緑灰色 内・断面－淡灰色
Ⅳ層	第27図－45	須恵器 杯(蓋)	口径 112mm 残存高 24mm	0.2mm大の白色砂粒を含む	堅緻	外面－灰色 内面－淡灰色 断面－灰白色
	第27図－46	須恵器 杯(身)	口径 94mm 残存高 17mm	0.5～1.0mm大の白色砂粒を含む・	堅緻	外・内面－淡灰青色 断面－淡灰色
	第27図－47	須恵器 杯(身)	高台径 92mm 残存高 28mm	0.2mm大の白色砂粒を僅かに含む	堅緻	外・内・断面－灰色
	第27図－48	須恵器 杯(身)	高台径 89mm 残存高 36mm	0.2mm大の白色砂粒を僅かに含む	堅緻	外・内・断面－淡灰色
	第27図－49	須恵器 平底	口径 98mm 残存高 68mm	0.2～0.5mm大の白色砂粒を含む	堅緻	外面－淡灰紫色 内・断面－淡青灰色
	第27図－50	須恵器 甕	口径 170mm 残存高 36mm	0.5～1.0mm大の白・黒色砂粒を含む	堅緻	外面－灰色 内・断面－淡灰色
	第27図－51	須恵器 甕	口径 230mm 残存高 56mm	3mm大の白色砂粒、3mm大の黒色砂粒を含む	堅緻	外面－白灰紫色 内面－淡灰色 断面－白灰紫色
Ⅳ層	第27図－52	須恵器 鉢	口径 262mm 残存高 30mm	0.5～2.0mm大の白色、黒色砂粒を多量に含む	堅緻	外・内・断面－淡灰色
	第27図－53	須恵器 鉢	底径 146mm 残存高 21mm	0.2～0.5mm大の白色、黒色雲母を含む	堅緻	外面－暗褐色 内・断面－淡茶褐色
	第27図－54	瓦器 鍋	残存長 85mm	2.5～5.0mm大の白色砂粒を含む	堅緻	外面－淡灰色
	第27図－55	土師器 把手付鍋		0.2～0.5mm大の白色砂粒を含む	堅緻	外・内面－淡茶色 断面－茶色
	第27図－56	瓦器 皿	口径 90mm 器高 21mm	0.5～1.0mm大の白色砂粒を含む	堅緻	外・断面－黄褐色 内面－暗黒色
	第27図－57	土師器 皿	口径 80mm 器高 12mm	0.5mm大の砂粒を含む	やや軟	外・内面－暗黒色 断面－淡灰色
	第27図－58	瓦器 椀	高台径 54mm 残存高 12mm	0.5～1.0mm大の白色・黒色砂粒を含む	やや軟	外面－淡茶褐色 内・断面－淡灰茶色
	第27図－59	瓦器 椀	高台径 50mm 残存高 13mm	0.2～0.5mm大の白色砂粒を含む	やや軟	外・内面－淡黒色 断面－淡黄色
	第27図－60	瓦器 椀	高台径 35mm 残存高 8mm	0.2～0.5mm大の黒色砂粒を含む	やや軟	外・内面－淡黒色 断面－淡灰色

第8表　B・C調査区出土瓦観察表(1)

遺構名	挿図・図版	器種	法量	胎土	焼成	色調
溝C－2	第29図－1 図版63	平瓦	残存長 85mm 残存幅 79mm 厚さ 19mm	1.0～3.0mm大の黒・白色砂粒を含む。	堅緻	凸面－灰色 凹面－灰色 断面－淡灰褐色
	第29図－2 図版63	平瓦	残存長 66mm 残存幅 70mm 厚さ 22mm	1.0～5.0mm大の砂粒を含む。	堅緻	凸面－灰黒色 凹面－淡灰黒色 断面－淡赤白色
	第29図－3 図版63	平瓦	残存長104mm 残存幅 97mm 厚さ 23mm	0.5～1.0mm大の白色、黒色砂粒を含む。	堅緻	凸面－淡黒色 凹面－淡灰褐色 断面－灰色
	第29図－4 図版63	平瓦	残存長 14mm 残存幅 80mm 厚さ 18mm	0.5～3.0mm大の白色・黒色砂粒を含む。	堅緻	凸面－灰白色 凹面－灰白色 断面－灰白色
	第29図－5 図版63	平瓦	残存長 96mm 残存幅113mm 厚さ 20mm	1.0～4.0mm大の白色砂粒を多量に含む。	軟	凸面－淡灰褐色 凹面－暗茶褐色 断面－茶褐色

第8表　B・C調査区出土瓦観察表(2)

遺構名	挿図・図版	器種	法量	胎土	焼成	色調
溝C－2	第29図－6 図版63	平瓦	残存長 89mm 残存幅106mm 厚　さ 19mm	1.0～3.0mm大の白色砂粒を多量に含む。	軟	凸面－淡灰褐色 凹面－淡赤褐色 断面－赤褐色
	第29図－9 図版63	丸瓦	残存長 93mm 残存幅 62mm 厚　さ 15mm	0.5～1.0mm大の白色砂粒を僅かに含む。	やや軟	凸面－淡灰褐色 凹面－淡黒灰色 断面－淡灰褐色
	第29図－10 図版63	丸瓦	残存長 84mm 残存幅112mm 厚さ 15.5mm	0.5～1.0mm大の白色砂粒を僅かに含む。	軟	凸面－暗青黒色 凹面－暗青黒色 断面－淡灰茶色
溝BW－6 Ⅰ層	第29図－8 図版63	平瓦	残存長 82mm 残承幅102mm 厚　さ 15mm	0.5～3.0cm大の白色砂粒を含む	軟	凸面－淡茶褐色 凹面－暗茶褐色 断面－暗茶褐色
土坑C－27	第29図－7 図版63	平瓦	残存長 79mm 残存幅112mm 厚　さ 20mm	1.0～4.0mm大の白色砂粒を多量に含む	軟	凸面－淡灰褐色 凹面－茶褐色 断面－赤褐色

第9表　B・C調査区出土石器類観察表(1)

器種＼項目	図版挿図番号	資料番号	出土地点	現長	現幅	厚さ	石質	備考
石核		C－062	溝C－18、Ⅲ層	50.8	65.8	15.8	S	
	第31図－4 図版64	C－019	C－8調査区、A－35区 明茶褐色土層	50	75	15	S	
	第30図－2 図版64	C－044	C－9調査区、A－36区 淡灰褐色土層	51.0	57 4	30.2	S	
	第30図－1 図版64	C－054	C－9調査区、B－36区 黄褐色土層	64.6	63.0	25.8	S	
	第30図－3 図版64	C－058	C－9調査区、A－36～37区 淡灰褐色土層	79	43	33	S	縦長剥片石核
剥片		C－001	C－1調査区、C－29区 Ⅲ層	37.5	17.0	3.9	S	
		C－003	C－1調査区、D－29区 Ⅲ層	96	97	24	S	
		C－005	C－5調査区、D－33区 落ち込みC－3	-35.3	22.6	13.0	S	
		C－006	C－5調査区、D－33区 溝C－2	29.1	16.8	3.9	S	
		C－007	調査区C－5、D－33区 土坑C－27	6.9	3.8	2.1	S	
		C－009	C－6調査区、A～B－32～33区、淡灰褐色土層	26.2	18.2	3.8		
		C－011	C－6調査区、A～B－33区 PC8	24.2	22.0	3.9	S	
		C－014	C－7調査区、D－34～35区 Ⅱ層	31.1	18.2	5.2	S	
	第33図－17 図版65	C－017	C－8調査区、A－34区 淡灰褐色土層	69.6	169.8	32.9	A_1	
		C－020	C－8調査区、A－35区 明茶褐色土層	30.1	10.0	8.0	S	
	第23図－16 図版65	C－028	C－8調査区、B－34区 Ⅳ－①層	64.9	121.0	19.1	A_2	
		C－038	C－8調査区、B－35区 溝C－2、Ⅰ層	40.4	21.2	10.4	S	

第9表　B・C調査区出土石器類観察表(2)

項目 / 器種	図版掛図番号	資料番号	出土地点	現長	現幅	厚さ	石質	備考
剥片		C－042	C－9調査区、B－36区 淡灰褐色土層	60.9	40.5	12.0	S	二次加工あり
	第31図－8 図版64	C－045	C－9調査区、A－36区 淡灰褐色土層	27	50	8	S	
		C－048	C－9調査区、A－37区 暗茶褐色土層	35.0	39.7	7.3	S	
	第31図－6 図版64	C－050	C－9調査区、B－37区 暗茶褐色土層	40	19	8	S	縦長状
		C－051	C－9調査区、A－37区 淡茶色粘土層	17.6	28.9	6.3	S	
	第31図－5 図版64	C－052	C－9調査区、A－36区 溝C－18Ⅲ層	40	22	7	S	縦長状
		C－060	C－9調査区、A－36区 耕作上より下層の灰褐色土層	42.2	25.3	12.0	S	二次加工あり
		C－055	C－9調査区、A－36～37区 淡灰褐色土層	18.2	17.0	4.8	S	
		C－056	C－9調査区、A－36～37区 淡灰褐色土層	33	56	6	S	
	第31図－7 図版64	C－057	C－9調査区、A－36～37区 淡灰褐色土層	33	35	3	S	
		C－059	C－9調査区、A－36区 淡灰褐色土層	29.1	28.9	7.6	S	二次加工あり
		C－061	C－9調査区、B－36区 淡灰褐色土層	21.6	18.4	3.0	S	
		C－063	C－9調査区、B－36区 淡灰褐色土層	38	34	12	S	
		C－067	C－9調査区 Ⅰ層	26.3	16.3	3.8	S	
		B－005	B－3調査区、D－21区 Ⅳ層	62.2	39.1	8.2	S	
削器	第32図－10 図版64	C－002	C－1調査区、D－29区 Ⅲ層	35.5	40.1	7.9	S	石匙
	第31図－9 図版64	C－049	C－9調査区、B－37区 暗茶褐色土層	41.8	49.4	12.1	S	
楔形石器・楔形石器の剥片	第32図－11 図版64	C－015	C－7調査区、D－34～35区 Ⅱ層	33	11	8	S	楔形石器の剥片
	第32図－11 図版64	C－016	C－7調査区 落ち込みC－3	45.9	59.8	22.4	S	
		C－047	C－9調査区、A－37区 暗茶褐色土層	56.0	28.8	15.0	S	
		C－053	C－9調査区、A－36区 溝C－18　Ⅲ層	58.8	42.9	12.7	S	
石錐	第32図－14 図版64	B－004	B－3調査区、D－21区 Ⅳ層	44	65	15	S	
	第32図－13 図版64	B－006	B－6調査区、C25区 溝B－25	29.3	16.9	3.9	S	
石錐	第32図－15 図版64	B－001	B－1調査区、C20区 Ⅳ層				S	
太型蛤刃石斧	第33図－18 図版65	C－065	C－7調査区、C34区 落ち込みC－3	62	47	22	H	
砥石	第33図－19 図版65	C－046	C－9調査区 溝C－2　Ⅱ層	75.8	52.8	50.4		
		B－007	B－7調査区、B25区 溝BW－6　Ⅰ層	78	66	28		

(注) 単位㎜　石質－S：サヌカイト　A：輝石・かんらん石玄武岩　H：ホルンフェルス

第Ⅴ章　まとめ

はじめにも述べた様に、大堀遺跡に関しては、試掘および特殊マンホール部の調査を含めて計4回の調査を実施している。

これらの調査結果を踏まえて以下まとめてゆく。

旧石器時代～弥生時代

旧石器時代では、ナイフ形石器、翼状剥片石核、翼状剥片、横長剥片石核、横長剥片、そして縦長剥片石核を検出したが、それらはすべて後世の遺構やⅡ～Ⅳ層から出土しており、原位置を留める可能性をもつものはないと考えられる。また旧石器時代の遺物包含層を確認することもできなかった。この他にサヌカイト製石核、剥片、削器、楔形石器も出土しているが、時代は、旧石器時代・縄文時代・弥生時代のいずれに属するものか、確定しえない。

縄文時代・弥生時代でも遺構は認められず、石鏃、石錐、太型蛤刃石斧、ハンマーストーン等の石器および弥生時代前期の壺の破片が出土しただけである。通観してみれば、後期旧石器時代～弥生時代に至るまで、当地は居住空間にはならないまでも、生活の場であったことが理解される。

この他に、玄武岩および安山岩製の石器が多数出土しており、打製石器の中でも相当の割合を占めているが、残念ながら、時期不詳であり、この時期に属する根拠は見出せなかった。

古墳時代

この時代の遺構は、今回、A調査区において溝A－2の延長部分を確認したにすぎない。しかし、前回までの調査で、竪穴住居2棟（竪穴住居A－1・2）、溝4条（溝A－1・2、溝BW－7、溝C－3）、落ち込み1基（落ち込みB－7）を検出している。出土遺物は、6世紀後半～7世紀初頭の須恵器や土師器であり、古墳時代後期といえる。A調査区開析谷東側部分に居住域があり、B・C調査区にかけてまばらに溝や落ち込みがひろがっていることが理解される。

また、C調査区・A調査区において埴輪片が出土しており、その周辺に古墳の存在を推定することが可能である。

奈良・平安時代

当遺跡は、この時代の遺構、遺物が最も豊富であり、A調査区～C調査区北端部にかけて遺構が拡がっており、特にA調査区南半部の開析谷西側部分～B調査区北端部にかけて集落が存在した。今回検出された遺構も含めて、掘立柱建物11棟（掘立柱建物A－1～10、B－1）、塀4条（塀A－1・3～5）、柵1条（柵B－1）、井戸3基（井戸A－1～3）、溝11条（溝A－3～8、溝B－1～3・25、溝BW－6）、土坑5基（土坑A－1～5）、落ち込み3基（落ち込みB－1～3、CW－1）、溝状遺構などである。

検出された遺物は、須恵器、土師器、灰釉陶器、黒色土器、製塩土器、瓦などであり、8世紀～9世紀後半、即ち奈良時代～平安時代前半にあたる。

なお、7世紀後半の遺構は、溝BW－6が判明したにすぎないが、井戸A－2の排水溝の一部と考えられる溝A－23・24には、7世紀後半の土器が多量に混入しており、埋積谷西側の掘立柱建物よりなる集落の形成は7世紀後半にさかのぼるものと考えられる。

また、奈良・平安時代の遺物として、前回の概報でも既に報告しているが、土師器、須恵器のほかに、包含層より、骨銅製帯金具の巡方、四耳壺等の灰釉陶器、溝A－4から円面硯が出土しており、今回の調査では、それらに付け加えるものはなかったが、集落の範囲が南北方向にひろがり、やはり前回にも指摘があったように、一般集落でも優位な部分に位置する集落といえる。

平安時代末～鎌倉時代

この時期の主要な遺構は溝に限定され、調査区全体の中でもC調査区に集中している。溝C－1・2・18の3条が検出されたにすぎない。溝C－1・2は旧開析谷（現、上ノ池）にのびており、性格的には灌漑用水路と考えられる。

室町時代以降江戸時代

B・C調査区では、14世紀頃に整地され、A調査区埋積谷は13世紀～14世紀に埋め立てられたとの事であり、この頃当遺跡周辺は農地化されたと考えられる。主な遺構として、柵3条（柵C－1～3）、井戸10基（井戸A－4～6、井戸C－1・2・3～7）、土坑13基（土坑C－1、土坑E－8、土坑E－4～6、土坑C－12～16・27・土坑B－6・7）、溝7条（溝A－43、溝A－10・11～13・14、溝BW－5、小溝53条以上（溝A－44～63・85～94・100、小溝B－1～8、小溝C－1～8、小溝E－6～10、小溝W－9）、落ち込みC－3、畦畔状遺構等、農耕用遺構がひろがっている。井戸は総て素掘りの農耕用井戸であり、畦畔状遺構は水田、小溝は畑作の畝溝の痕跡である。しかし、これらの遺構は時期差のあるものが含まれており、井戸C－1・2、土坑C－1、土坑E－8、畦畔状遺構、小溝B－1～8、小溝C－1～8、小溝E－6～10等は室町時代以降に属し、この他は江戸時代以降である。しかし遺構の性格として、農地ととらえられるので一括してとり扱かった。なお、A調査区では、奈良・平安時代の遺構が廃絶して以来、16～17世紀頃まで遺構は検出されず、B・C調査区は整地以降耕地として利用されていたが、A調査区部分は、近世以降利用されだしたことがわかる。

なお、前回の概報『大堀城跡』第Ⅱ章第2節において指摘された、奈良時代～平安時代初頭における様々な問題点について、今回の調査結果をふまえ、以下述べていきたい。

1.　集落の範囲と規模

集落の占める範囲は次の通りであろう。集落の東側はA調査区で検出された開析谷で画される。この開析谷の東側では遺構の検出量が極めて少ない。西側は現在、上ノ池の所在する開析谷までは拡がる事はないものと思われる。南側はB調査区の柵B－1、広く考えても溝BW－6が南限に相当するだろう。北側については全くわからない。集落の範囲を長さで示すと、東西方向で幅150m弱になると考えられる。この集落がB地区でかいま見たように柵B－1、溝BW－6等で区画されるような規画性を持った集落と仮にした場合、東西1町、南北2町が長方形区画と

して取れる範囲である。

2. 集落の単位

前回の報告では、A調査区南側の集落部分以外にも、A調査区の北端部である東除川河道に削られた部分近くで、掘立柱建物になる可能性がある柱掘方を認め、これらの一群と先に述べた集落の一群、あわせて2単位の集落が存在するのではないかと指摘した。しかし、今回の切り拡げ調査では、A調査区北側の柱掘方は新たに検出し得ず、前回に指摘した点に関して積極的な新たな根拠を見い出せなかった。ただ東除川の北側の地域については、今後とも注意の必要があるだろう。

3. 集落の生産基盤

洪積段丘面の集落は　一体生産基盤をどこに置いていたのであろうか。前回の概報の第Ⅱ章第2節では、東側に広がる肥沃な沖積平野の水田や上ノ池となっている開析谷の谷水田および段丘上での畠作を予測した。今回の調査の結果、段丘上でも一部水田耕作が行なわれていた可能性を考えたい。これに関する事実として、奈良時代の溝は集落域に集中するが、集落を離れた所でも、溝幅1m以内、深さ30cm未満のもので直線的なもの、もう一つは幅20～30cm、深さ20cm前後を測る細い溝が認められた。これらの溝については当時の水田耕作に関連するものではないかと考える。ただこの事は前回の概報で指摘のあった畠作の可能性をすべて否定するものではない。

4. 集落の廃絶について

前回の調査では、9世紀前半に集落が廃絶する事を考えていたが、井戸A－3の出現により少なくとも9世紀後半、少し長く見れば10世紀初めまで集落は存続していたようである。この期間のうち、集落の最盛期は8世紀後半から9世紀前半までである。

5. 『大堀廃寺』に関連して

出土遺物は前回報告した、銙金具・灰釉陶器・墨書土器以外には新たな知見は無い。

平瓦から分析すれば、この寺院は白鳳期に創建され、中世までは存続していない古代寺院として推定されるという指摘については、次の様に考えられる。E調査区内の土坑から梵字文を刻み込んだ軒丸瓦が出土している事が、仮称して呼んでいる『大堀廃寺』に直接むすび付くかどうかは明らかではないが、当遺跡調査で得られた知見では、梵字文軒丸瓦は鎌倉、室町時代のものとして考えられ、可能性としてはこの頃まで継続していた事も考えられる根拠の一つとなった。しかし、もしそうであるならば後にも述べるが寺院の継続年代と集落の継続年代があわない事が問題として指摘し得るし、また梵字文瓦をどの様に位置付けるかがまた問題となる。そして継続期間だけでなく、寺院の位置、寺域、伽藍配置等も含めて今後も検討してゆく問題点は多く、現在では何一つとしてわかっている事がない状態である。

次に前回の報告でも長原遺跡出土の石帯等から両遺跡を同一視野で見る事が指摘されていたが、このほかに軒丸瓦の類似等があり、また墨書土器の残された字は『長』に読み得る事など、その可能性は強いと言わなければならず今後とも深く考察してゆく必要がある。

6.　竪穴住居と掘立柱建物の関係

竪穴住居と掘立柱建物の関係で、両者が継続していたのか断絶していたのかの問題点については、次の通りである。今回の調査では、竪穴住居に関連する新たな知見はなかった。竪穴住居に居住する集団と掘立柱建物に居住している集団に関係して言えば、土師器甕A類・B類の比率では古墳時代後期の竪穴住居に伴う溝A－2からは圧倒的にB類が多いが、奈良平安時代に入ると逆にA類が多くなる傾向を見せる。もっとも土師器甕A類とB類の比率の問題が、はたして集団の出自の差を示すかどうか、弥生時代ならばいざ知らず、奈良時代においても、この様な事が言えるのかどうかはなはだ心もとない。今後とも検討してゆくべき課題である。

7.　出土遺物について

次に土師器の問題である。今回の調査では良好な資料は得られなかったが、前回の概報でも指摘した通り、6世紀後半の土師器甕の大半はB類（第Ⅱ章第3節参照）であるが、奈良時代に入るとA類に（第Ⅱ章第3節参照）に変わる。また須恵器の鉢を祖型とすると思われる土師器鉢も8世紀初頭ごろから出土している。この点、鉢形の土師器鉢をほとんど見ず、A類の甕の出土率の低い和泉地方とは異なる様相を示している。

8.　製塩土器について

製塩土器については前回の概報で、和泉で出土する製塩土器は紀州とその周辺の産であり、南河内ではそれに加えて、筑前産のものと産地不明のものとが見られる事実と、この両地域の差は何に起因するのか、また内陸地における製塩土器出土の意味についても問題提起された。今回の概報では製塩土器を8つのタイプに分類しそれぞれの産地を推定した。（第Ⅱ章第5節参照）

第Ⅵ章　考　　察

第1節　奈良平安時代遺構の変遷について

前回の調査では集落部分は、幅10mのトレンチ調査で遺構の切り合いの確認作業で終えたが、今回の調査では柱穴の立ち割りおよび遺構の完掘および幅30mにわたる集落部分の完掘を行なった。この結果新たな知見が相当数増加した事と、前回報告した結果とをまとめあわせて、奈良平安時代の建物の変遷を述べてゆきたい。

方法としては　①切り合い関係　②各遺構内出土遺物　③建物掘方の形状から判断した。

①切り合い関係

建物A－1　←　建物A－2、建物A－7、溝A－4　→　建物A－1　→　建物A－3、塀A－1、溝状遺構A－1

建物A－2　←　溝A－36　→　建物A－2　→　建物A－7、建物A－1、土坑A－1

建物A－3　←　建物A－1、建物A－2、建物A－7、溝A－4、溝A－5　→　建物A－3　→　塀A－1、溝状遺構A－1

建物A－4　←　建物A－5　→　建物A－4　→　溝状遺構A－2

建物A－5　←　建物A－5　→　建物A－4、溝状遺構A－2

建物A－6　←　溝状遺構A－1　→　建物A－6

建物A－7　←　建物A－2、溝A－36　→　建物A－7　→　建物A－1、塀A－1、土坑A－1

建物A－8　←　溝A－6　→　建物A－8　→　建物A－9

建物A－9　←　建物A－8、溝A－6　→　建物A－9

塀A－1	建物A－1 建物A－2 建物A－7 溝A－4 溝状遺構A－1 溝A－5 →塀A－1
溝A－4	溝A－4→建物A－1 建物A－3 溝状遺構A－1
溝A－5	溝A－5→溝状遺構A－1 建物A－3 塀A－1
溝A－6	溝A－6→溝A－34 土坑A－4・A－5 建物A－8 建物A－9 溝状遺構A－2
溝A－34	溝A－6⟶溝A－34
溝A－36	溝A－36→建物A－2 建物A－7
井戸A－1	井戸A－1⟶土坑A－1
	建物A－1　A－2とは共存しない。
井戸A－2	井戸A－2⟶溝状遺構A－2
土坑A－1	建物A－2 建物A－7 ⟶土坑A－1⟶溝A－37
土坑A－4	溝A－6⟶土坑A－4⟶溝状遺構A－2
土坑A－5	溝A－6 溝状遺構A－2 →土坑A－5
溝状遺構A－1	建物A－1 建物A－3 溝A－4 溝A－5 →溝状遺構A－1⟶塀A－1

溝状遺構A－2　建物A－4
建物A－5
井戸A－2
土坑A－4
溝A－6
→溝状遺構A－2 ⟶土坑A－5

②次に建物の掘方から出土した遺物について調べると、時期は次の通りとなる。

建物A－1
建物A－2　奈良時代中葉の遺物が見られる。
建物A－3　平安時代初頭の遺物が見られる。
建物A－4　奈良時代前半後葉の遺物が見られる。
建物A－5
建物A－6
建物A－7　奈良時代前半後葉
建物A－8
建物A－9　奈良時代前半
建物A－10　奈良時代前半後葉の遺物が見られる。

何も記していない建物は、遺物から判断できなかった為である。掘方内から出土した遺物は上記であるが、切り合い関係とは合致しない個所も見られる。

③次に掘方形状は方形、隅丸方形、円形と分類したがこの分類では次の通りとなる。

建物A－1・2・5・10　方形
建物A－4・7・9　隅丸方形
建物A－3・6・8　円形

掘方形状から一概に比較する事は危険であるが、同一集落内で建物規模もほとんど大小の差は少ないという条件下であれば、それぞれの柱掘方を比較する事は意義があり、柱掘方の形状の変化は時間の推移を表わしていると考えてさしつかえないと思う。すなわち方形から隅丸方形へ、そして円形へと推移していると考えて良いと思う。

これらを取りまとめた一覧表が第10表である。掘立柱建物は最大3棟が同時に併存し、6回の建て替えを行なっているし、時期的には少くとも8世紀には出現し9世紀前半まで建て替えられている。その他にも建物としてはまとまらなかったものの柱掘方を数多く検出している。一方遺跡内からは少量の7世紀前半代の遺物とかなりの量の7世紀後半代の遺物が出土している。以上のことから7世紀代に掘立柱建物からなる集落が形成されていたことを推測しえよう。

第10表　奈良・平安時代遺構の変遷表

時　期	遺	構
8世紀前半	井戸A－1 建物A－4、建物A－10	溝A－4、溝A－5
8世紀後半	井戸A－2 建物A－2 建物A－7、建物A－5、建物A－8 建物A－1、	
9世紀前半	建物A－3 塀A－1、建物A－6	溝状遺構A－1、溝状遺構A－2 土坑A－1、土坑A－5
9世期後半	井戸A－3	

第2節　溝について

当大堀遺跡A調査区では、数多くの溝を検出した。これらの溝を考察するために分類を行った。

Aタイプ　幅0.5～1.0m、深さ0.2～0.5mを測り、蛇行している。断面はU字形である。南北方向に流れるものが多い。

Bタイプ　幅0.5～1.0m、深さ0.2～0.5mを測りつつ、一直線に溝られている。断面形はU字形であり、東西方向に流れるものが多い。

Cタイプ　幅0.5～1.0m、深さ0.1～0.2mを測る浅い溝であり、蛇行していることが多い。全長は短かいものが多い。

Dタイプ　幅2～3m、深さ1.5m前後を測るもの。断面形状は溝斜面がV字形であり、底部が少し丸みを帯びている。平面形は円弧を描いている。

Eタイプ　幅0.2～0.3m、深さ0.1～0.3mを測る、細く真直な溝である。断面は、V字溝ないしU字溝である。長さは最も長いものでも、10mまでである。

Fタイプ　幅10m程度、深さ0.5m前後を測る、幅広いものである。

調査区が細長い条件に制約されて、全体を発掘すれば方形にめぐる溝なのか、円形にめぐる溝なのか、不定形に伸びていくのかなどについては、ほとんど判断し難いことは、これらの溝を分類する上で大きな障害となっているので、ここでの分類基準は、直線か、蛇行かと溝幅、溝の深さや断面形状等が主とならざるを得ない。したがって、性格の追求には今一歩踏み込めない分析となることはいたしかたない。

次にそれぞれのタイプにはどの溝が該当するか列記すると以下である。

Aタイプ　溝A－20～A－25

Bタイプ　溝A－3、4、5、6

Cタイプ　溝A－32、104、105

Dタイプ　溝A－1

Eタイプ　溝A－16、17、18、44～63、85～94、100

Fタイプ　溝A－43

次にこれらの溝について、気付く点について記すと次の通りである。

Dタイプの溝は、中位段丘を横切り、開析谷と低位段丘の間を結ぶと思われるものである。溝の堆積層は下層が粘土、上層が砂層からなる。下層の堆積層を詳細に見た場合、中央部分の色調は濃く、溝の壁面に近い部分では色調は薄い。すなわち、砂層を堆積するには至らないまでの水流が存在していたと思われ、堆積層序も幾度かの改修作業をうかがわせる。断面形も底部が丸くなり、両斜面は斜めである。灌漑用として考えたい。

Bタイプの溝は、掘立柱建物の主軸と方位を同じか、あるいは直交して位置し、相関性を持っ

ていると思われる。溝A－4～6はほぼ平行である。しかも直線を呈し、溝幅も、深さもほとんど一定である。これらの溝は、排水用、灌漑用といった水を流す性格ではなくむしろ、区画性を重視したい。位置的にも掘立柱建物に近い位置にあり、掘立柱建物を区画していると考えたい。C－3・4地区に検出した溝（溝A－31）は、至近距離に柱穴を検出しており、溝A－4～6と同様な性格を保有していたものと思われるが、東除川の削平のためによくわからない。

Aタイプの溝は、開析谷段丘上面に、5、6本互いに並んで存在している。この溝の主な性格は、井戸A－2に伴う排水用の性格と考えている。

Cタイプの溝は、浅く常に水が流れることはなく、雨落ち溝的な性格と考えられる。

Eタイプの溝は、大別して2時期に、奈良時代と近世以降のものに別れる。奈良時代については、溝A－16・17・18は単独で存在し数本が併存することはない。近世以降は、溝A－44～63・85～94・100など数十本が同時に存在したと考えられる。奈良時代の溝の性格は、明らかではないが、近世以降の溝は、畑作の畝溝ではないかと考えられる。

以上、簡単に取りまとめたが、これらのように、6種類の溝が時期を違えて掘られていた。

第3節　奈良時代土器の型式分類と器種構成

奈良時代の出土遺物のうち多く出土した遺物についてのみ型式分類を行なった。土師器　杯・甕、須恵器甕である。ただここでの型式分類は前回の概報（『大堀城跡』）の分類とは異なっている。

土師器　杯

口径と底径の比率と高台の有無、底面の形状の差によってA・B・C・Dに分類した。

A類　高台のないもの。口径にくらべると底部の径が大きいもの。さらに口縁部はあまり長くなく比較的垂直近く立ち上るもの、口縁端部は二種類ある。

B類　有高台のもの、他はA類と同じ。

C類　小さな底部をもち、斜め外上方に立ち上る口縁部を持つもの。

D類　底部は丸くなっているもの。

A類　には（5）、（6）、(13)、(15)、(16)、(22)、(26)、(68) などがある。

C類には（1）、（3）、(10)、(11)、(12)、(14)、(24)、(30)、(32) などがある。

B類、D類は図示していない。

年代の概略を示すと、A類、B類は8世紀、C類は9世紀、D類は7世紀におさまる。

土師器　皿

型式分類の主な指標にしたのは口縁部形状である。

A類　口縁部はあまり長くなく比較的垂直近く立ち上るもの。無高台である。

B類　口縁部はあまり長くなく比較的垂直近く立ち上るもの。有高台である。

C類　口縁部は斜め上方に45°よりゆるやかな角度で立ち上るもの。

D類　底部のやや丸いもの。

A類には (61)、B類には (62)、C類には (23)、(28)、(29)、(82)、(85)、(90)、D類には (21) 等がある。

年代の概略は、A類、B類は8世紀、C類は9世紀、D類は10世紀を示すと思われる。

土師器　甕

甕は大半が破片であり、器形全体がわかる遺物は少ない。口縁部形状と体部上半の調整および胎土を組み合わせて分類した。

A類　体部は比較的横に広がり、口縁部は外反している。胎土はきめ細かく、色調は茶褐色を示すもの。

B類　体部はあまり横に広がらず、口縁部は外反している。胎土は微砂粒質で色調は黄灰色を示すもの。

C類　A類・B類に属さないもの。たとえば先端を丸めるもの等がある。破片が小さいため、体部の調整、器形等についてはわからない。

A類には、(9)、(19)、(25)、(31)、(36)、(37)、(40)、B類には、(41)、(42)、(43)、(44)、(45)、(46)、(48)、(50) などがある。

詳細に見れば微妙な差異は多くあり、A類では体部外面に指頭圧痕が認められ、B類では、ハケ目が認められる事は多いが、B類にもナデや指頭圧痕を認めるものも存在する。

甕の型式分類では、古墳時代後期の溝A－2から甕B類が多く出土したのに対して、奈良時代にはA類が多く出土し、B類はごくわずか出土するにとどまる事を指摘し得る。

須恵器　杯

全体の形状でA・B・C・D類に分類した。

A類　無高台で、底部から斜め外上方に真直ぐ伸びる口縁部を持つもの。

B類　高台を有するもので、底部から斜め外上方に真直ぐ伸びる口縁部を持つもの。

C類　立ち上り部、受部を有するもの、底面は平らであったり、曲線からなったりする。

D類　高台を有し、口縁部はB類より大きく開き横になるもので、端部はさらに外反するもの。

B類には（2)、(7)、(20)、(78)、D類は（4)、(91) 等がある。A類も出土しているが図示していない。次に年代であるが、A類、B類は7世紀後半から8世紀を示し、C類は6世紀から7世紀前半を示す。D類は9世紀を示すと思われる。

次に各土器の器種の構成を数量的に見たものが第11表である。ただし表中の杯A・Bなどの型式分類は、前回の概報（『大堀城跡』）の表とあわせた為前述の型式分類とは異なっている。両分類の対応関係は以下の通りである。また今回も主要な遺構に限って器種構成を表にした。

前回の概報（『大堀城跡』）において、土師器　杯・皿では、A類としたものを今回の型式分類では、A・C・D類に細分し、B類はそのままにした。土師器　甕は、前回は型式分類を行なわなかったが、今回は甕A・B・C類に分類した。須恵器　杯は前回B類としたものを、今回は、B・D類に細分し、A・C類はそのままにした。

大堀遺跡の調査結果からは、明らかな傾向を見る事はできなかったが、須恵器と土師器の比率、あるいは食器と煮沸具との比率等々を明確にする事は、たとえば官衙と一般集落の差、あるいは河内の和泉との地域の特徴を知る上で有効な方法であろう。

第11表　A調査区出土土器器種構成表(1)

		溝A－2			溝A－6			溝A－19			溝A－20			溝A－21			溝A－22		
		個数	出土土器全体に対する%	上師器・須恵器の中での%	個数	出土土器全体に対する%	上師器・須恵器の中での%	個数	出土土器全体に対する%	上師器・須恵器の中での%	個数	出土土器全体に対する%	上師器・須恵器の中での%	個数	出土土器全体に対する%	上師器・須恵器の中での%	個数	出土土器全体に対する%	上師器・須恵器の中での%
土師器	杯A										8	20.5	40				1	33.3	50
	杯B																		
	皿A																		
	皿B																		
	杯皿(口縁部)				2	22.2	50												
	杯蓋				1	11.1	25												
	椀																		
	鉢										1	2.6	5						
	高杯口縁部																		
	高杯脚部	1	5.3	12.5	1	11.1	25	2	10.5	50	6	15.4	30	1	33.3	50			
	盤																		
	壺																		
	甕	3	15.8	37.5				1	5.3	25	4	10.3	20	1	33.3	50	1	33.3	50
	甑																		
	鍋																		
	かまど																		
	羽釜	4	21.1	50				1	5.3	25	1	2.6	5						
	たこ壺																		
	ミニチュアの高杯																		
	総　数	8	42.2	100	4	44.4	100	4	21.1	100	20	51.4	100	2	66.6	100	2	66.6	100
須恵器	杯A				1	11.1	20				5	12.8	26.3						
	杯B													1	33.3	100			
	杯B蓋				1	11.1	20				1	2.6	5.3						
	杯C	3	15.8	27.3				6	31.6	40	2	5.1	10.5						
	杯C蓋	2	10.5	18.2				5	26.3	33.3	4	10.3	21.1						
	かえり付き杯蓋										1	2.6	5.3				1	33.3	100
	杯A、B(口縁部)				2	22.2	40	1	5.3	6.7	2	5.1	10.5						
	皿A																		
	皿B																		
	鉢(擂鉢)							1	5.3	6.7	3	7.7	15.8						
	高杯																		
	壺(大) 口縁部	4	21.1	36.4															
	壺(大) 底部																		
	壺(小) 口縁部							2	10.5	13.3	1	2.6	5.3						
	壺(大) 底部																		
	甕				1	11.1	20												
	横瓶	2	10.5	18.2															
	平瓶																		
	総　数	11	57.9	100.1	5	55.5	100	15	79	100	19	48.8	100.1	1	33.3	100	1	33.3	100
	合　計	19	100.1		9	99.9		19	100.1		39	100.2		3	99.9		3		

第11表　A調査区出土土器器種構成表(2)

		溝A－23			溝A－24			溝A－25			溝A－26			溝A－27			溝A－28		
		個数	出土遺全体に対する%	上師器・須恵器の中での%	個数	出土遺全体に対する%	上師器・須恵器の中での%	個数	出土遺全体に対する%	上師器・須恵器の中での%	個数	出土遺全体に対する%	上師器・須恵器の中での%	個数	出土遺全体に対する%	上師器・須恵器の中での%	個数	出土遺全体に対する%	上師器・須恵器の中での%
土師器	杯A							2	50	100	6	27.3	35.3						
	杯B				1	12.5	50							1	20	100			
	皿A																		
	皿B																		
	杯皿(口縁部)																		
	杯蓋																		
	椀																		
	鉢										1	4.5	5.9						
	高杯口縁部																		
	高杯脚部										2	9.1	11.8						
	盤																		
	壺																		
	甕				1	12.5	50				6	27.3	35.3						
	甑																		
	鍋																		
	かまど																		
	羽釜	1	33.3	100							2	9.1	11.8						
	たこ壺																		
	ミニチュアの高杯																		
	総　数	1	33.3	100	2	25	100	2	50	100	17	77.3	100.1	1	20	100			
須恵器	杯A				1	12.5	16.7				1	4.5	20				4	40	40
	杯B				1	12.5	16.7	1	25	50	1	4.5	20	1	20	25	1	10	10
	杯B蓋				1	12.5	16.7	1	25	50	1	4.5	20	1	20	25	2	20	20
	杯C										2	9.1	40						
	杯C蓋				1	12.5	16.7												
	かえり付き杯蓋																		
	杯A、B(口縁部)	2	66.7	100	1	12.5	16.7							2	40	50	3	30	30
	皿A																		
	皿B																		
	鉢(擂鉢)																		
	高杯																		
	壺(大) 口縁部																		
	壺(大) 底部																		
	壺(小) 口縁部																		
	壺(大) 底部				1	12.5	16.7												
	甕																		
	横瓶																		
	平瓶																		
	総　数	2	66.7	100	6	75	100.2	2	50	100	5	22.6	100	4	80	100	10	100	100
	合　計	3	100		8	100		4	100		22	99.9		5	100		10	100	

第11表　A調査区出土土器器種構成表(3)

		溝A—29			溝A—34			溝A—36			溝A—37			溝A—104		
		個数	出土土器全体に対する%	上師器・須恵器の中での%	個数	出土土器全体に対する%	上師器・須恵器の中での%	個数	出土土器全体に対する%	上師器・須恵器の中での%	個数	出土土器全体に対する%	上師器・須恵器の中での%	個数	出土土器全体に対する%	上師器・須恵器の中での%
土師器	杯A				2	10	25	25	14.7	24	21	44.7	60			
	杯B				1	5	12.5				1	2.1	2.9			
	皿A															
	皿B															
	杯皿(口縁部)							1	0.6	1.0						
	杯蓋															
	椀															
	鉢				1	5	12.5	1	0.6	1.0						
	高杯口縁部	1	16.7	100							3	6.4	8.6			
	高杯脚部							7	4.1	6.7						
	甕															
	壺				1	5	12.5									
	甕				3	15	37.5	52	30.6	50	10	21.3	28.6	1	16.7	100
	甑															
	鍋															
	かまど															
	羽釜							18	10.6	17.3						
	たこ壺															
	ミニチュアの高杯															
	総　数	1	16.7	100	8	40	100	104	61.2	100	35	74.5	100.1	1	16.7	100
須恵器	杯A	1	16.7	20	1	5	8.3	11	6.5	16.7	9	19.1	75			
	杯B				2	10	16.7	11	6.5	16.7	1	2.1	8.3	3	50	60
	杯B蓋				5	25	41.7	8	4.7	12.1	1	2.1	8.3			
	杯C	1	16.7	20				1	0.6	1.5						
	杯C蓋				1	5	8.3	2	1.2	3.0				1	16.7	20
	かえり付き杯蓋															
	杯A、B(口縁部)	2	33.3	40										1	16.7	20
	皿A							2	1.2	3.0						
	皿B							1	0.6	1.5						
	鉢(擂鉢)							1	0.6	1.5						
	高杯															
	壺(大) 口縁部							6	3.5	9.1						
	壺(大) 底部							8	4.7	12.1						
	壺(小) 口縁部				1	5	8.3	7	4.1	10.6	1	2.1	8.3			
	壺(大) 底部							2	1.2	3.0						
	甕	1	16.7	20	2	10	16.7	6	3.5	9.1						
	横瓶															
	平瓶															
	総　数	5	83.4	100	12	60	100	66	38.9	99.9	12	25.4	99.9	5	83.4	100
	合　計	6	100.1		20	100		170	100.1		47	99.9		6	100.1	

第4節　瓦について

切り拡げ調査では、コンテナ2箱分の瓦を出土し、A－12調査区の出土量が最も多い。遺構別にみると、埋没谷の出土量が最も多く、基本層序Ⅲ、Ⅳ層、溝、Pit がほぼ同じ程度の数点の出土である。瓦を持つ遺構の中心は、A－12調査区の近くにあると推定される。次に平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦の中では平瓦が最も多い。形態分類では、平瓦は前回の報告のものをそのまま使用し、丸瓦については前回の報告では数量的に分類し得なかったので、型式分類を行なった。分類方法は、平瓦と同様な観点からである。

Ⅰ類　分割裁面が未調整のまま残っているもの。

Ⅱ類　分割裁面をヘラ削りで調整しているもの。

このⅡ類を側縁の調整方法によりさらに2種類に分類した。

Ⅱ－1類　側縁内側のヘラ削りが一面になっているもの。

Ⅱ－2類　側縁内側のヘラ削りが二面になっているもの。

また凸面は縄目叩きの後の調整で分類した。当遺跡出土の丸瓦の凸面は、以下に述べる2種類の調整しか認められないので、丸瓦には縄タタキの後、未調整のタイプは認められない。

a　縄叩きをすり消したにもかかわらず、わずかに痕跡の残っているもの。

b　縄叩きが完全に消されているもの。

上記の分類を組み合わせて、丸瓦を類別した。

Ⅰ－a類　Ⅰ－b類　Ⅱ－1－a類　Ⅱ－1－b類　Ⅱ－2－a類　Ⅱ－2－b類　である。

図示した遺物では、(104) Ⅱ－2－a、(103) Ⅱ－1－a、(105) Ⅰ－aである。また内面布目のはずであるが、摩耗の為、明らかでないものもある。

行基瓦か玉縁瓦かについては、判断できる良好な資料は、数量的にめぐまれていない。玉縁瓦は数点出土したのみである。

また軒平瓦、軒丸瓦は各一点ずつ出土している。軒平瓦、軒丸瓦とも、奈良時代後半以降のものと思われるが、詳細な点に関しては検討中である。このほかに塼を数点出土した。新しい時期と思われる瓦では、離れ砂を使用している。

第5節　製塩土器の若干の考察

前回の調査に加え今回の切り拡げ調査においても、新たに製塩土器を出土した。出土遺構の種類は多岐にわたっており、建物の掘方埋土、溝、土壙、井戸の掘方、埋積谷、溝状遺構、包含層等である。これらのうち、大半は出土点数5個以下であり、最も多量に製塩土器を出土した遺構は井戸A－2掘方内であった。これらの遺構から出土した製塩土器は、ほぼ奈良時代後半に属するものと思われる。なお、前回の報告時の分類をさらに細分し、一類新たにつけ加える等、改変を行なった。以下、この製塩土器の型式分類を行ない、次にそれぞれの産地同定について触れたい。

A類　器壁の内外面をナデるものをA類とした。このうち、器形、胎土、その他の特徴からさらに3種類の小類別を行なった。

A－1類（第34図、図版66）　口縁部は急な立ち上りを示し、上端面は水平に近い面をもつ。また、口縁部は体部の約2倍の厚さである。調整は外側には指圧痕が認められ、内側は丁寧な横ナデを施している。胎土は細かな砂粒を少し含む。色調は淡黄色・淡黄灰色・灰色を示し、須恵質の焼成のものも存在する。体部の器壁は5㎜前後である。

A－2類（第34図、図版67）　口縁部は内彎し、端部は内側につまみ上げる。体部外面には、粘土ひもの痕跡が認められる。体部外側は指頭圧痕、内側は端部が横ナデ、体部は縦方向の横ナデのものと、横方向の横ナデのものが認められる。胎土はきめ細かな粘土に石英長石の2㎜前後の砂粒を少し含む。色調は淡黄色・白灰色・淡黄灰色・灰色とさまざまな色調を示す。体部器壁は10～13㎜の厚さである。

A－3類（第34図、図版68）　口縁端部はやや外反気味に立ち上り、口縁部下3～4㎝の所で一旦くびれている。全体の形状はわからない。体部器壁内外面は、指頭圧痕が認められる。胎土は、砂粒を含むものと含まないものがある。色調は淡灰黄色を示す。器壁は、5～8㎜を示し少し薄手である。

B類　外面にはナデ調整を施し、内面には布目痕の残るものである。

B－1類（第34図、図版69）　口縁部は、少し外開きになった筒形で、端部は指でナデ切っている。内側は布目痕が認められ非常に細く、経糸×緯糸2㎝四方では70×70本である。内型があり、これに布をまきつけ、この上から粘土を貼り付けていると思われる。瓦の製作技法に似ると思われる。

B－2類（第35図、図版70）　B－1類と器形・製作技法は類似しているが、胎土および内面の布目痕が異なる。布目痕は非常に荒く、2㎝四方では、経糸×緯糸は15本×13本である。また、砂粒は2㎜前後の砂粒を含み、金雲母を含むものも存在する。色調は黄色・淡黄白色・暗茶色を示し、器壁の厚さは10～12㎜を測る。

C類（第35図、図版71）　筒状の器形を示すと思われるが、口縁端部を短く外反させている。

調整は、外側には指頭圧痕が認められ、内側には横方向の刷毛目調整が認められる。胎土中には砂粒を多く含み、色調は淡黄灰色・淡褐色・灰色・暗灰青色までさまざまな色調を示す。中には、須恵質の硬い焼成も認められ、器壁の厚さは9～6㎜である。

D類（第35図、図版72）　体部のみの破片で、やや球形状を呈する事だけが判明し、口縁部、底部の形状については不明。調整は、外面はタタキ目を、大半は水平に施している。タタキ目に使用したタタキ板は、木目平行に溝が掘られている。山と山の間隔は大きく8～10㎜である。内面には横ナデを施している。胎土は、小さな砂粒を多く含み、2㎜前後の砂粒が多い。色調は黄灰色・灰褐色・暗灰色を呈す。体部器壁の厚さは6～9㎜を測る。

E類（第35図、図版73）口縁端部のみ判明しているだけであるが、上方にまっすぐ伸びる形状で上方につまみ上げて先端は丸めている。調整は、外側には指頭圧痕が認められ、内側は横ナデである。胎土は、きめ細かい粘土で砂粒は含まない。この土器の胎土中に籾殻を含んでいる。[1] 色調は淡黄白色・淡褐色・淡灰色と薄い色調が多い。検出したものは5点のみで、体部器壁は5～9㎜の厚さを測る。

以上、5類8種の類別を行なった。それぞれの類似資料を他の遺跡の出土品中に求めてみよう。

A－1類　既発表資料のうち、類似するのは　和歌山県　おそ越の鼻遺跡、しょうぶ谷遺跡、藻江遺跡、G類（おそ越の鼻式）[2]、大阪府　小島東遺跡[3]　丸底Ⅱ式、大阪府　田山遺跡[4]　Ⅱa類　等の遺跡から出土している。これらの他にも　報告されていないものがある。[5] A－1類はこれらの遺跡の遺物と砂粒を少し含む所、さらに口縁部を内外に厚くする所が類似する。それゆえA－1類は大阪府の南部から和歌山にかけて生産されたものと考えられる。紀淡海峡の調査報告書では煎熬用土器とされている。しかしA－1類には桃色、赤色に変色したものは認められない事から、A－1類を煎熬用と考えるのは難しく、むしろ焼き塩用と考えた方が良いと思われる。

A－3類　この製塩土器に類似する遺物は、大阪府　田山遺跡　Ⅱ－a類のうち薄手[7]、香川県　大浦浜遺跡　Ⅳ－2・3類[8]など東部瀬戸内沿岸の遺跡から出土している。A－3類では、変色したものは全く認められない事などから、用途は焼き塩用ではないかと推測される。田山遺跡では焼き塩用とされている。大浦浜遺跡では煎熬用、焼き塩用とは明記していない。

B－1類・B－2類　主に福岡県北部から山口県にかけての遺跡、山口県　筏石遺跡[9]　六連式、福岡県　海の中道遺跡[10]　Ⅱ類などの製塩土器に類似するもので、焼き塩用と言われている。B－1類とB－2類は、その土質、布目の細粗の差などから今後産地や時期のちがいを明らかにできるかも知れない。

C類　C類に類似するものは、大阪府　貴振遺跡[11]や、やや時代が下って平安時代のものではあるが福井県　吉見浜遺跡[12]の出土品の一部に認められる。このうち吉見浜遺跡の製塩土器は、口縁部が外反する点で大堀遺跡のものと類似するが、内面の調整などは必ずしも一致しないようである。変色する遺物が認められない事から焼き塩用と考えたい。

D類　D類に類似する大きなタタキ目を持つ製塩土器には、福岡県　海の中道遺跡[13]Ⅰ類がある。ただし海の中道遺跡の遺物のタタキ目は、タタキ用具の木目がタタキ目と直交しており、タタキ目の大きな窪みの中に溝と直交方向の細い溝が認められ、また内面にもあて具痕が認められるものがあるのに対し、大堀遺跡の出土遺物には、こうした特徴が認められないなど詳かい点では異なる。胎土が桃色に変色した遺物が、認められない事から焼き塩用ではないかと推測される。

なおA－2類については現在の所類似資料を知らない。

以上　大堀遺跡の製塩土器の類似資料を他に求めてきた。その結果は、一部に疑問な要素を残すものの、大阪湾沿岸のみならず備讃瀬戸や北部九州など広範な地域との関連もうかがえた。このことは、大堀遺跡への塩の供給先を考える場合に重要である。

なお製塩土器の調査については、多くの方々にお世話になった。深く感謝の意を表わしたい。

註（1）　三重県小海遺跡の志摩式製塩土器（10世紀代）の表面にも叩痕が認められる。
近藤義郎「小海遺跡」　磯部町教育委員会　1976年。

（2）　森 浩一、白石太一郎ほか「紀淡海峡地帯における古代漁業遺跡調査報告書」「紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告」同志社大学文学部考古学調査報告第2冊、同志社大学文学部文化学科　1968年。

（3）　広瀬和雄「岬町遺跡群発掘調査概要」一小島東遺跡・淡輪遺跡一大阪府教育委員会　1978年。

（4）　国乗和雄、小島正元「田山遺跡」淡輪、箱作海岸地区海岸堤防整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、大阪文化財センター　1984年。

（5）　「京都大学年報」　昭和55年、和歌山県　北沖代遺跡　瀬戸遺跡

（6）　森浩一、石部正志ほか「若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査」　同志社大学文学部考古学調査報告第4冊・同志社大学文学部文化学科　1971年。

（7）　(4)に同じ。

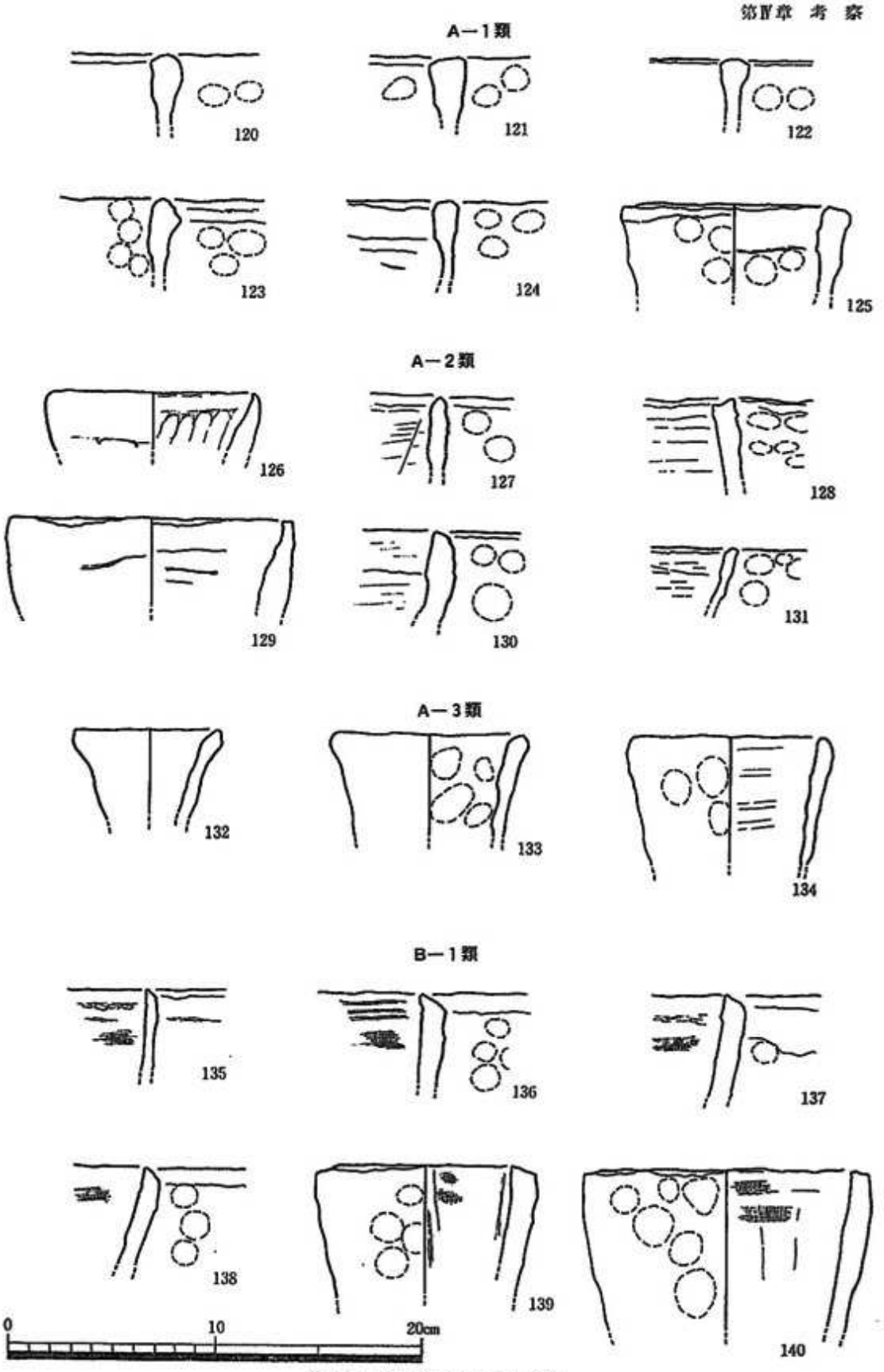
（8）　大山真充、東山輝明、安田和文、真鍋昌宏「西方遺跡、大浦浜遺跡、羽佐島遺跡」「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（V）」香川県教育委員会本州四国連絡橋公団　1982年。

（9）　小野忠熙「筏石遺跡」「山口県文化財概要」第4集　山口県教育委員会　1961年。

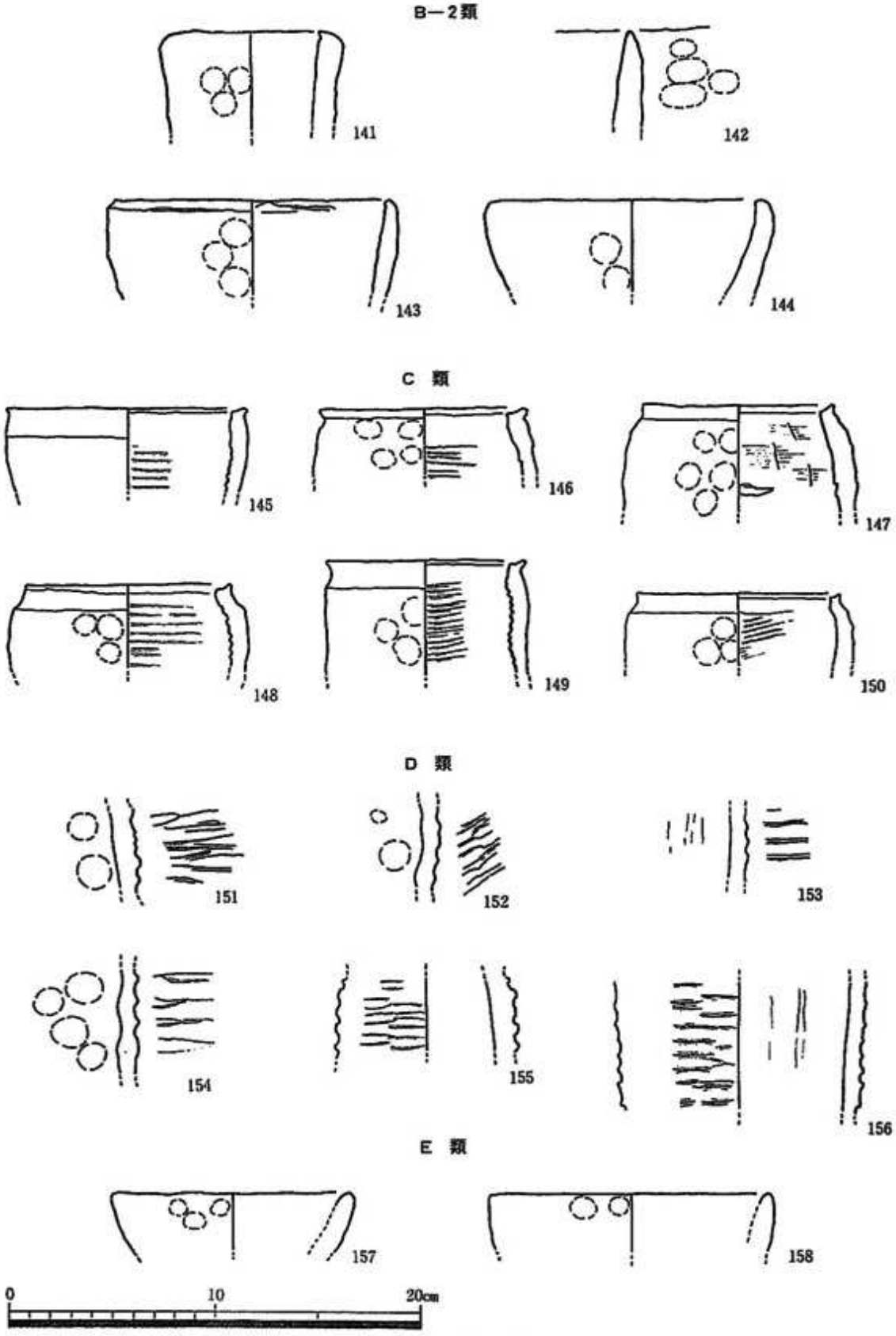
（10）　横山浩一、山崎純男編「福岡市海の中道遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告第87集、福岡市教育委員会　1982年。

（11）　現地にて実見させていただいた。

（12）　若狭考古学研究会「吉見浜遺跡」　大飯町教育委員会　1974年。



第34図 製塩土器各型式(1) (1/3)



第35図　製塩土器各型式(2) (1/4)

第12表　A調査区出土製塩土器観察表(1)

製式名	遺構名	遺物番号	写真図版番号	挿図番号	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存率(%)
A-1	井戸 A－2	120	図版66	第34図	口径、小片の為不明 残存高　3.2	口縁は内側、外側にも肥厚している。	外側　指頭圧痕。 内側　横ナデ。	粗　砂粒を少し含む	堅　緻	黄白色	黄白色	黄白色	3
〃	〃	121	〃	〃	口径、小片の為不明 残存高　3.1	口縁端部は内側に肥厚し、体部に比べると、約2倍の厚さを示す。	外側　指頭圧痕。 内側　指頭圧痕の後横ナデ。	粗 砂粒を含む	堅　緻	黄白色	黄白色	黄白色	3
〃	〃	122	〃	〃	口径、小片の為不明 残存高　2.9	口縁端部は内側と外側ともに肥厚している。上端はゆるやかな丸みを帯びている。	外側　指頭圧痕。 内側　指頭圧痕の後横ナデ。	粗 砂粒を非常に多く含む	堅　緻	灰黄色	灰　色	灰　色	3
〃	〃	123	〃	〃	口径、小片の為不明	口縁部外側が肥厚している。内側も稜をもつ。	外側　指頭圧痕。 内側　指頭圧痕。	粗 砂粒を非常に多く含む	堅　緻	灰　色	灰　色	灰　色	3
〃	〃	124	〃	〃	口　径　不明 残存高　3.7	口縁部は内側に肥厚する。口縁端部は平坦面である。	外側　指頭圧痕。 内側　横ナデ。	粗　砂粒を多く含む	堅　緻	黄灰色	黄灰色	黄灰色	3
〃	〃	125	巻頭カラー	〃	口　径　9.0 残存高　4.0	口縁部と体部を比較して、口縁部は2倍の厚さである。	外側　指頭圧痕の後横ナデ。 内側　指頭圧痕の後横ナデ。	粗　砂粒を多く含む	堅　緻	黄白色	黄白色	黄白色	3
A-2	〃	126	図版67	〃	口　径　9.4 残存高　2.8	外側へ張り出し気味の口縁部は端部を内側へつまみ出す。	外側　横ナデ。 内側　口縁端部付近横ナデ。 体部、縦方向に近くまで傾斜したナデ。	きめ細い粘土に砂粒を少し含む	堅　緻	白　色	淡桃色	白　色	5
〃	〃	127	〃	〃	口　径　不明 残存高　3.5	口縁端部は上方につまみ上げる。	外側　指頭圧痕。 内側　縦方向と横方向のナデ。	きめ細い粘土に砂粒をバラバラ含む	堅　緻	灰褐色	黄灰色	灰　色	3
〃	〃	128	〃	〃	法　量　不明 残存高　4.0	口縁部付近は少し厚くなり、上端部は内側に傾斜した面を作る。	外側　指頭圧痕。 内側　横ナデ。	きめ細い粘土に砂粒を少し含む	堅　緻	灰黄色	灰黄色	灰黄色	5
〃	〃	129	〃	〃	口　径　14.2 残存高　4.5	口縁部は体部に比べて薄くなり、端部には平坦面を作る。	外側　横ナデ。 内側　横ナデ。	きめ細い粘土に砂粒を少し含む	堅　緻	黄灰色	黄灰色	黄灰色	5
〃	〃	130	〃	〃	口径、小片の為不明 残存高　4.4	口縁部は少し厚くなり、端部は内側につまむ。	外側　指頭圧痕。 内側　横ナデ。	きめ細い粘土に砂粒を含む	堅　緻	暗褐色	黄褐色	灰　色	5

第12表　A調査区出土製塩土器観察表(2)

型式名	遺構名	遺物番号	写真図版番号	挿図番号	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存率(%)
A-2	井戸 A－2	131	図版67	第34図	口径 不明 残存高 2.6	斜め外上方に伸びる口縁部と先端を丸めた口縁端部からなる。	外側 指頭圧痕。 内側 横ナデ。	密 砂粒をほとんど含まない	堅 緻	黄灰色	黄灰色	黄灰色	3
A-3	〃	132	図版68	〃	口径 6.8 残存高 4.3	口縁部は上方につまみ上げ、体部は下方へすぼまってゆく。	剥離して明らかではないが指頭圧痕及び横ナデと思われる。	粗 砂粒を多く含む	やや軟	白灰色	白灰色	白灰色	5
〃	溝状遺構A-2	133	巻頭カラー	〃	口径 8.6 残存高 4.9	口縁部から除々にすぼまる体部を持つ。器壁は最も口縁部が厚い。	外側 剥離の為明らかではない。 内側 指頭圧痕。	粗 砂粒を少し含む	軟	黄灰色	黄灰色	黄灰色	5
〃	堀積谷Ⅲ層	134	図版68	〃	口径 8.8 残存高 6.2	口縁部付近が最も厚く体部は厚さが薄くなる。体部はすぼまってゆく形をなす。	外側 指頭圧痕。 内側 横ナデ調整か。	密 砂粒は含まない	やや軟	黄灰色	黄灰色	黄灰色	5
B-1	井戸 A－2	135	図版69	〃	残存高 3.9	口縁端部を内側につまみ上げる。口縁端部内側下1cmに一条の窪みが認められる。これは注意して見ればひもが交互に出て来た痕跡である。	外側 指頭圧痕。 内側 上部 ナデ。 下部 布目痕。	密 砂粒を含まず	堅 緻	黄灰色	褐灰色	褐灰色	1
〃	〃	136	〃	〃		口縁端部を内側につまむ。	内側は細い布目痕。内側口縁端部下1cmの所に一条の凹線が認められる。 外側 指頭圧痕。	密 砂粒を含まず	堅 緻	茶灰色	黄灰色	黄灰色	3
〃	〃	137	〃	〃	残存高 4.8	口縁部の内側端部をつまみ上げる。内側、口縁端部から1cm下の所に凸帯状のものが一条認められる。	外側 指頭圧痕。 内側 布目痕。	密 砂粒はほとんど含まない	堅 緻	暗灰褐色	灰 色	暗灰褐色	3
〃	pit出土	138	〃	〃	残存高 4.5	少し外傾した口縁部は内側端部を上方につまみ上げる。	外側 指頭圧痕。 内側 布目痕。	密 砂粒をほとんど含まず	堅 緻	褐黄色	褐黄色	褐黄色	3
〃	井戸 A－2	139	〃	〃	口径 8.0 残存高 5.3	やや開き気味の口縁部は体部にそのまま続き、端部は横にナデ切っている。	体部外側 指頭圧痕。 内側 きめ細い布目痕。	粗 砂粒を多く含む	堅 緻	灰茶色	灰黄色	灰褐色	5
〃	〃	140	巻頭カラー	〃	口径 13.4 残存高 7.8	少し開き気味の体部はそのまま口縁部となり、先端をナデ切っている。	外側 指頭圧痕。 内側 布目痕。	粗 砂粒を非常に多く含む	堅 緻	暗灰茶色	褐 色	暗灰黄色	5
B-2	〃	141	図版70	第35図	口径 7.0 残存高 4.3	口縁部体部から少し開き端部を内側にナデてつまんでいる。胴部底部は欠損している為不明。	外側 指頭圧痕。 内側 荒い布目痕。 縦糸1cm/7本 横糸1cm/6本。	密 砂粒は含まない	堅 緻	乳白色	乳白色	乳白色	5

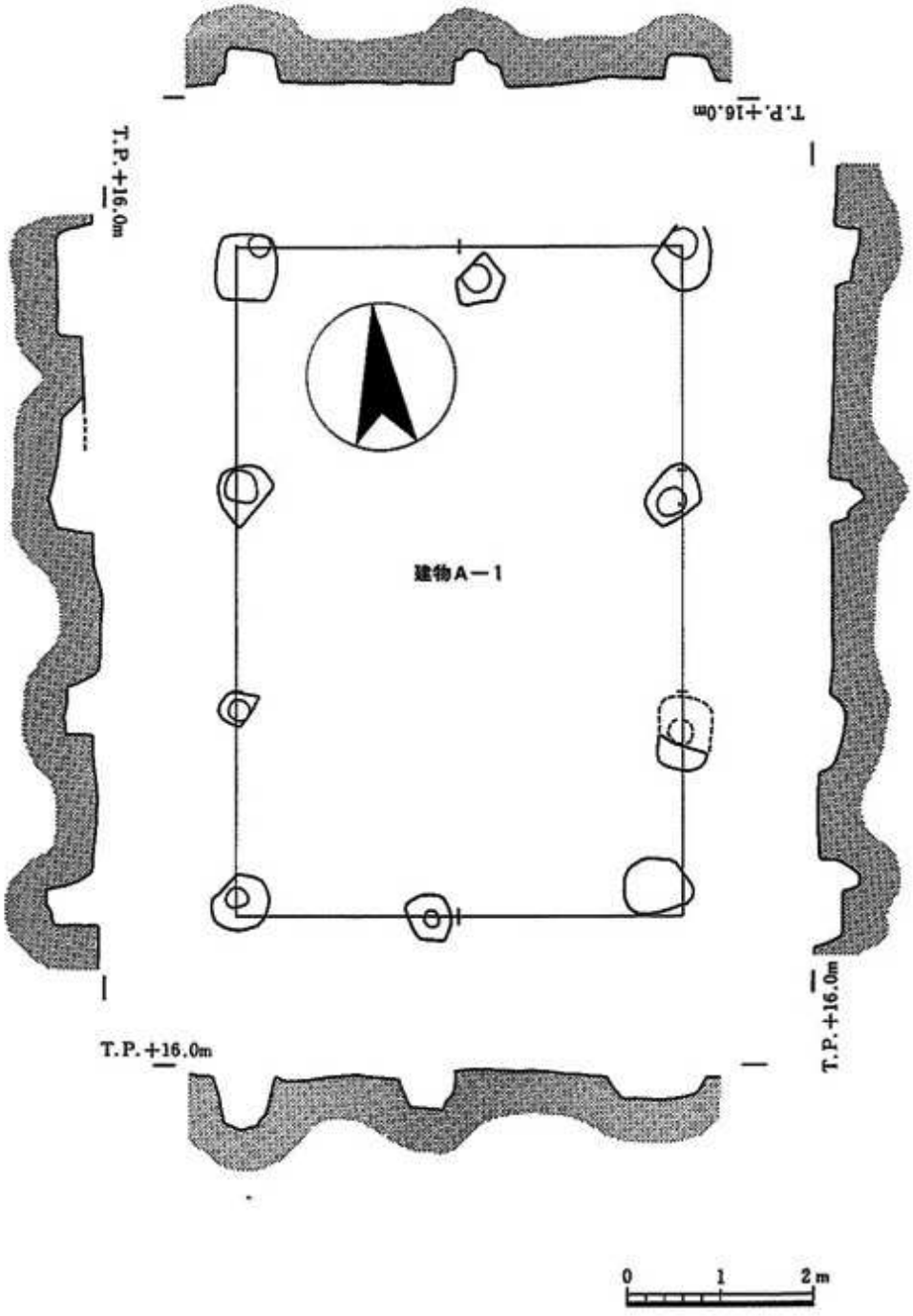
第12表　A調査区出土製塩土器観察表(3)

型式名	遺構名	遺物番号	写真図版番号	挿図番号	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存率(%)
B-2	井戸 A－2	142	図版70	第35図	口径、小片の為不明 残存高　4.5	口縁部は上方につまみ上げる。	体部外側　指頭圧痕 内側　荒い布目痕。	粗　砂粒を少し含む	堅　緻	灰　色	灰　色	灰　色	5
〃	〃	143	巻頭カラー	〃	口　径　13.0 残存高　4.5	垂直に近い口縁部は雑に内側上方につまみ上げている。	外側　指頭圧痕。 内側　布目痕。	密 胎土は細い	堅　緻	灰黄色	黄灰色	灰黄色	5
〃	〃	144	図版70	〃	口　径　11.6 残存高　4.5	口縁端部は内側につまみ上げ、体部は徐々にすぼまる。	外側　指頭圧痕。 内側　細い布目と荒い布目が認められる。	粗 砂粒を多く含む	堅　緻	暗茶灰色	灰　色	灰　色	5
C	〃	145	図版71	〃	口　径　11.2 残存高　4.0	口縁部はわずかに外反し、上面はナデる為少し窪んでいる。体部は口縁下2cmほどが最大径部を示し、これより下方は少しすぼまる。	口縁部内外面　横ナデ。 体部外側　ナデ。 体部内側　刷毛目。	粗 砂粒を含む	堅　緻	褐灰色	灰褐色	灰褐色	5
〃	〃	146	〃	〃	口　径　9.7 残存高　3.3	口縁部端部を少し外側につまみ出し、上端部は上からナデている。体部は口縁部から少し外側に張り出している。	口縁部内外面　横ナデ。 体部外側　指頭圧痕。 体部内側　刷毛目。	粗 砂粒を多く含む	堅　緻	褐灰色	灰褐色	灰褐色	5
〃	〃	147	〃	〃	口　径　9.0 残存高　5.1	口縁部は短く外反し、体部はそれよりも口径が大きい。口縁端部は内傾する面を作る。	体部外側　指頭圧痕。 体部内側　刷毛目かヘラナデか明確ではないが器壁を削り取っている。 口縁部内外面　横ナデ。	粗 砂粒を含む	堅　緻	褐灰色	褐灰色	褐灰色	5
〃	〃	148	〃	〃	口　径　9.6 残存高　4.2	口縁部はななめ外上方につまみ出すとともに内側に傾斜する面を作る。体部は口縁部から少し径が大きくなる。底部その他の形状はわからない。	口縁部付近　横ナデ。 体部外側　ナデか指頭圧痕。 体部内側　刷毛目を施す。この刷毛調整は間隔が荒く1cm。2条～3条を見す。	粗 砂粒を多く含む	やや軟	灰黄色	灰黄色	灰黄色	5
〃	〃	149	巻頭カラー	〃		口縁端部は上端を外上方に少しつまみ出している。体部は判明する範囲内では筒形を示す。	口縁部内外面　横ナデ。 体部外側　指頭圧痕。 体部内側　刷毛目調整。						
〃	〃	150	図版71	〃	口　径　9.8 残存高　2.9	口縁部は上方につまみ上げるとともに内側に傾斜する面を作る。体部は口縁部より径は大きい。	口縁部は回転ナデ。 体部外側　ナデ。 体部内側　ヘラ削りか刷毛目を施し	粗 砂粒を多く含む	堅　緻	暗灰色	暗灰色	暗灰黄色	5

第12表　A調査区出土製塩土器観察表(4)

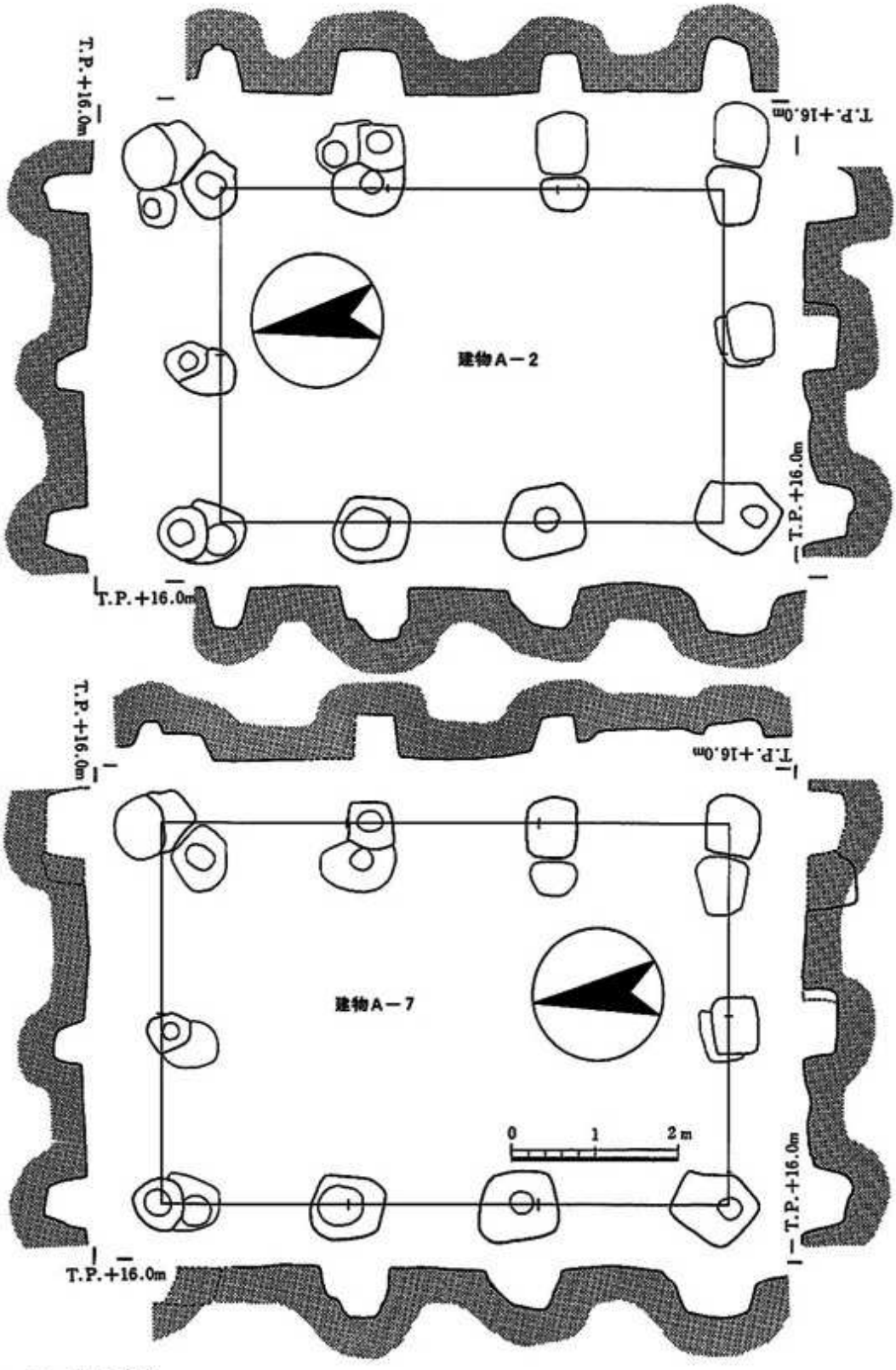
型式名	遺構名	遺物番号	写真図版番号	挿図番号	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存率(%)
	井戸 A－2					(注) 体部のはり出しは口縁部のひずみによる可能性もあって、口縁部より大きくなっている可能性があり、実際はもう少しすんなりした形状と思われる。	て削っている。						
D	〃	151	図版72	第35図	口径 不明 残存高 3.8		タタキ調整。 タタキ目は3cm3条で幅広いものである。タタキ目は木目平行である。	砂粒を非常に多く含む	堅緻	褐灰色	黄灰色	黄灰色	3
〃	〃	152	〃	〃	口径 不明		外側 タタキ目、幅広く浅い。 内側 指頭圧痕。	砂粒を少し含む	堅緻	灰色	灰黄色	灰黄色	3
〃	〃	153	〃	〃	口径 不明 残存高 3.3		タタキ目は幅広く浅い。 2cmに3条である。	砂粒を多く含む	堅緻	茶褐色	黄灰色	黄灰色	3
〃	〃	154	〃	〃	口径 不明 残存高 4.9		外側 タタキ目は幅広く浅い。 内側 指頭圧痕。	粗 砂粒を非常に多く含む	堅緻	暗灰色	黄灰色	黄灰色	5
〃	〃	155	〃	〃	口径 8.4 残存高 3.5	タタキ目を施している。このかたむきは正確ではない。 全体の器形は不明である。	タタキ目は2cmに3条で深い。	密 きめ細い粘土に砂粒を少し含む	堅緻	淡褐色	淡褐色	淡褐色	5
〃	〃	156	巻頭カラー	〃	最大径 11.6 残存高 6.3	まっすぐな体部である。	タタキ目を施す。 タタキ目は3cm／4条の極めてあらいものである。	きめ細い粘土に砂粒を含む	堅緻	暗褐色	淡褐色	淡褐色	5
E	〃	157	巻頭カラー	〃	口径 12.0 残存高 2.8	体部は少し外反し、口縁端部は上方へつまみ上げる。体部下半がどの様な形状を示すかは全くわからない。体部器壁は約1cm前後である。計測し得るものはこれ一点。	外側 指頭圧痕が口縁部付近にならぶ。 内側 剥離の為全くわからない。 胎土中にもみが入る。	密 もみを含む	やや軟	灰白色	白灰色	白灰色	5
〃	〃	158	図版73	〃	口径 13.0 残存高 2.7	やや外側に傾斜した口縁部は端部を丸めている。	外側 指頭圧痕の上に横ナデ調整。	密 籾殻を多量に含む	やや軟	灰白色	灰白色	灰白色 一部分黒色	5

図　　版



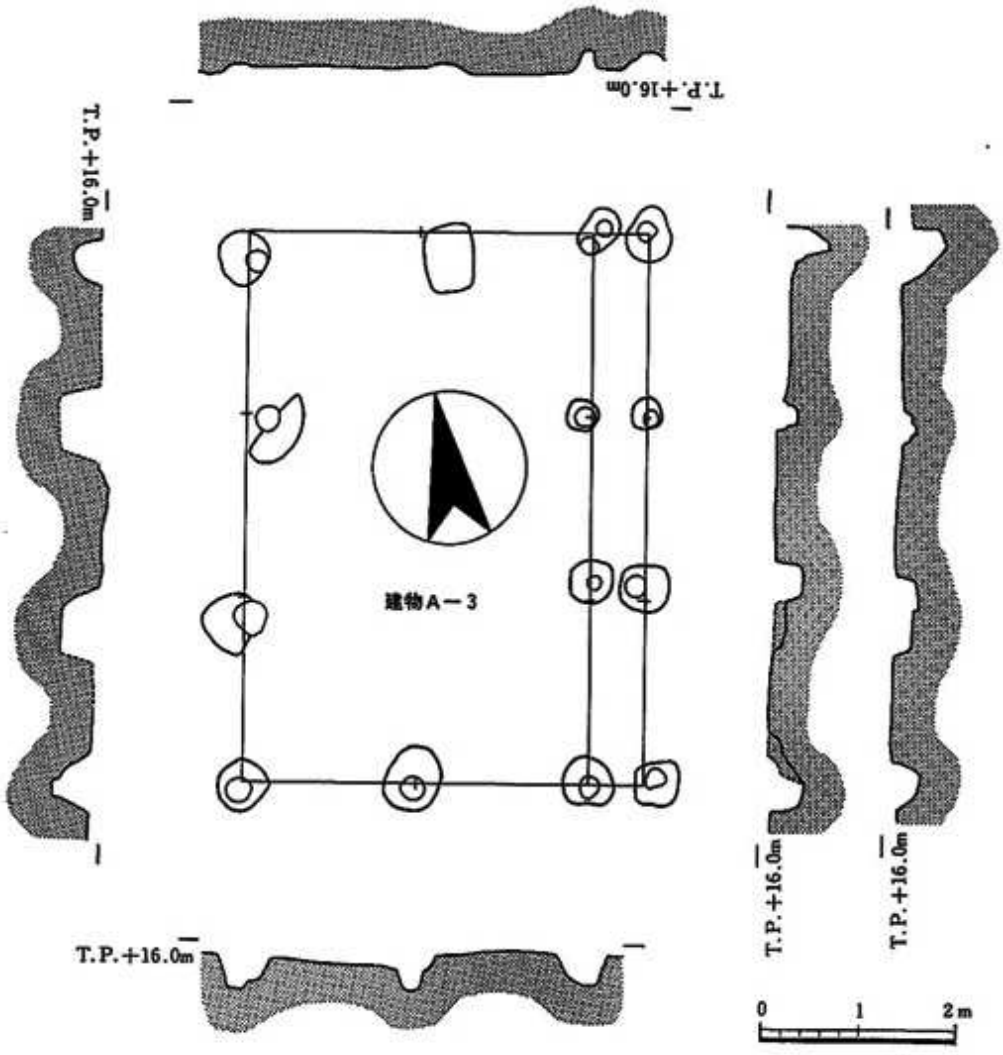
建物A－1 (1/80)

図版二　遺構平面、断面図(2)



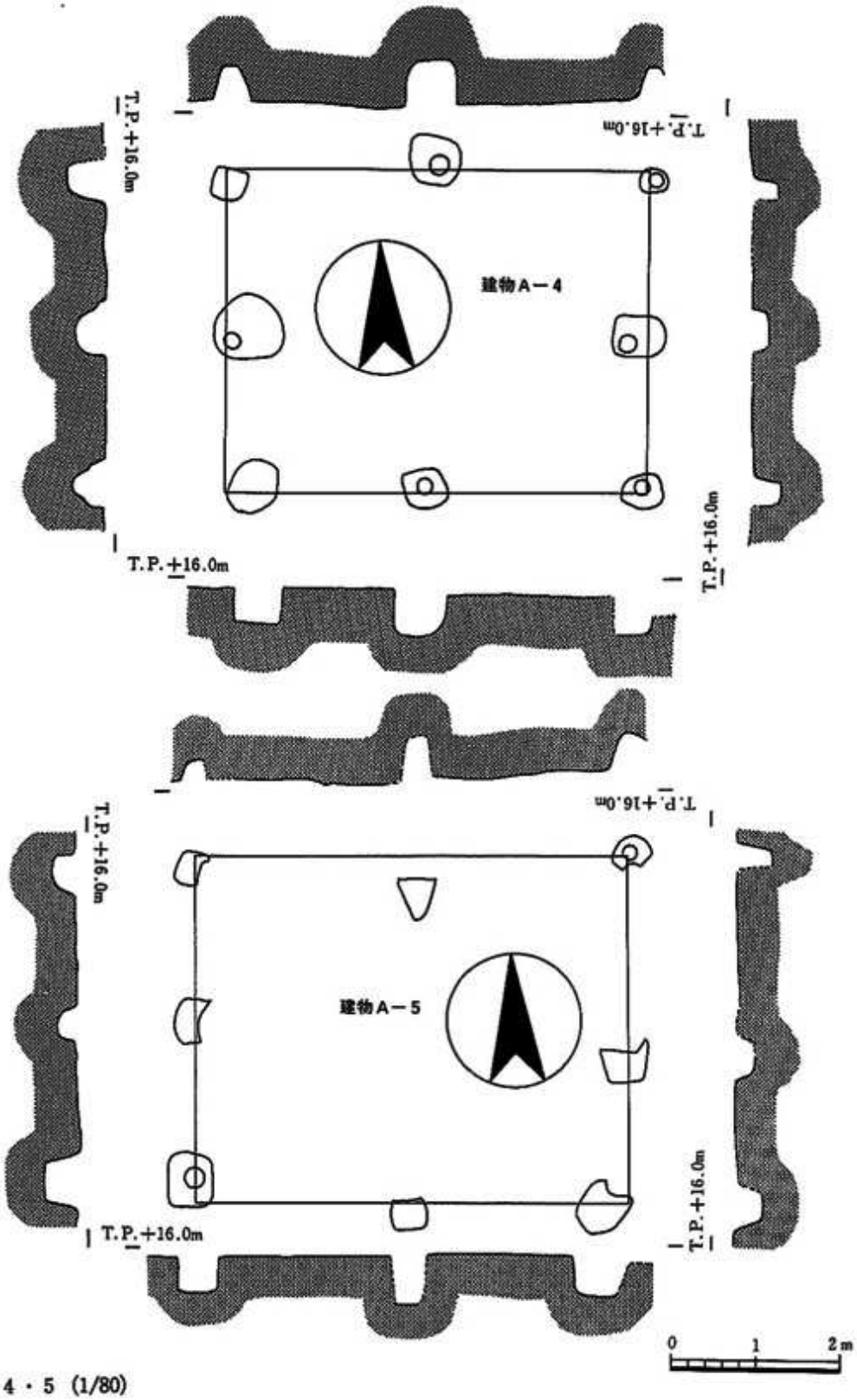
建物A－2・7 (1/80)

図版三　遺構平面、断面図(3)

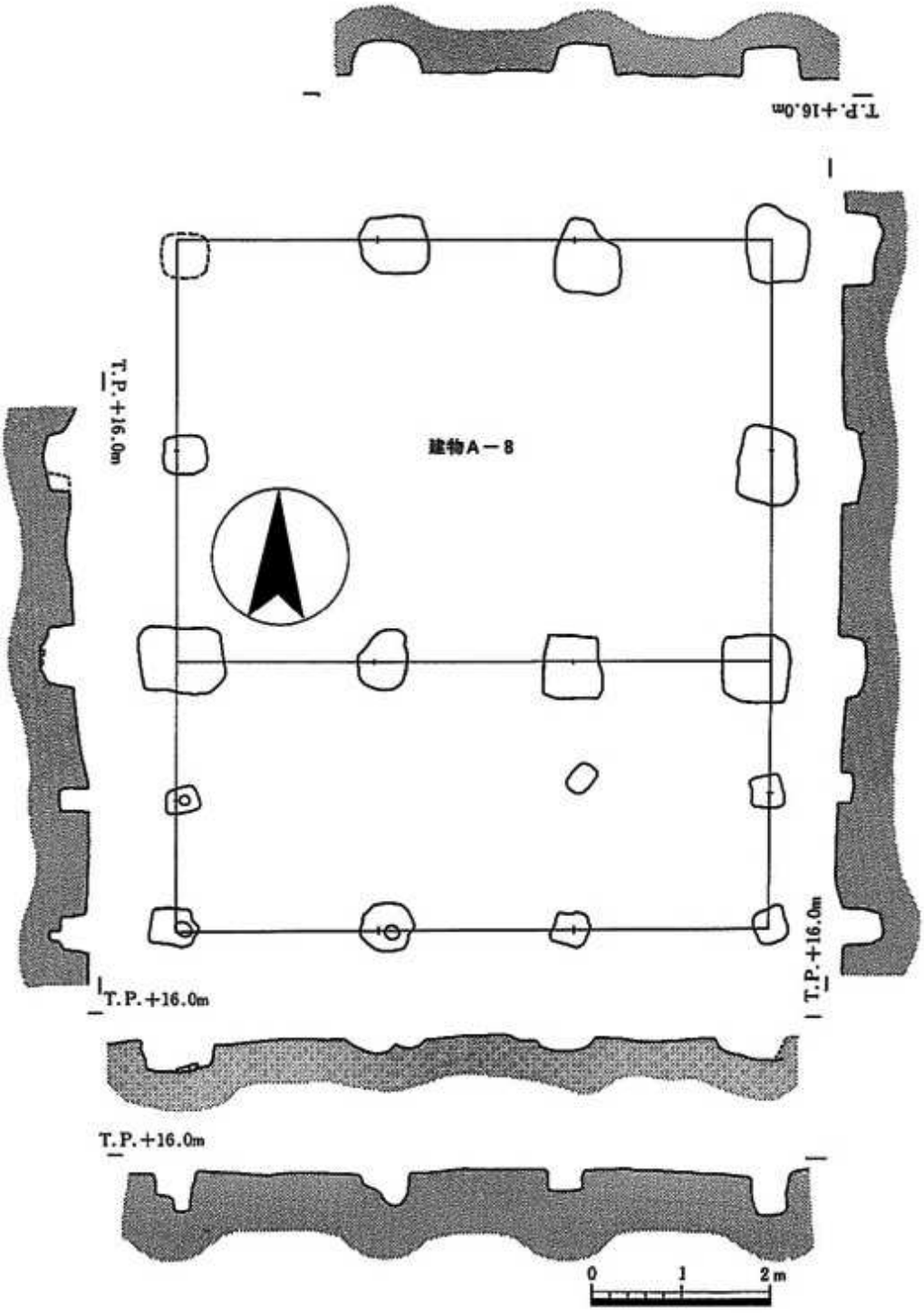


建物A－3 (1/80)

図版四　遺構平面、断面図(4)

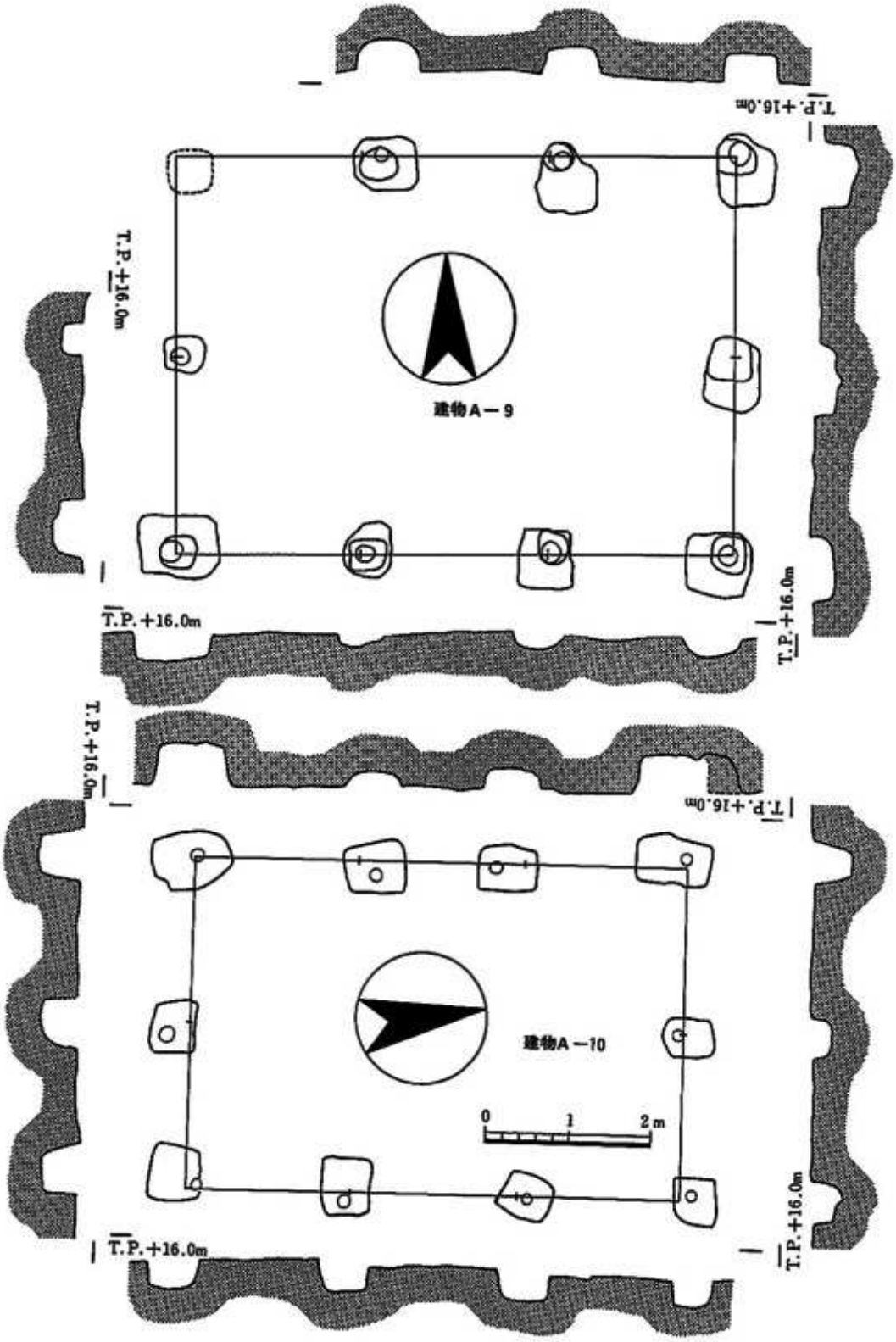


建物A－4・5 (1/80)



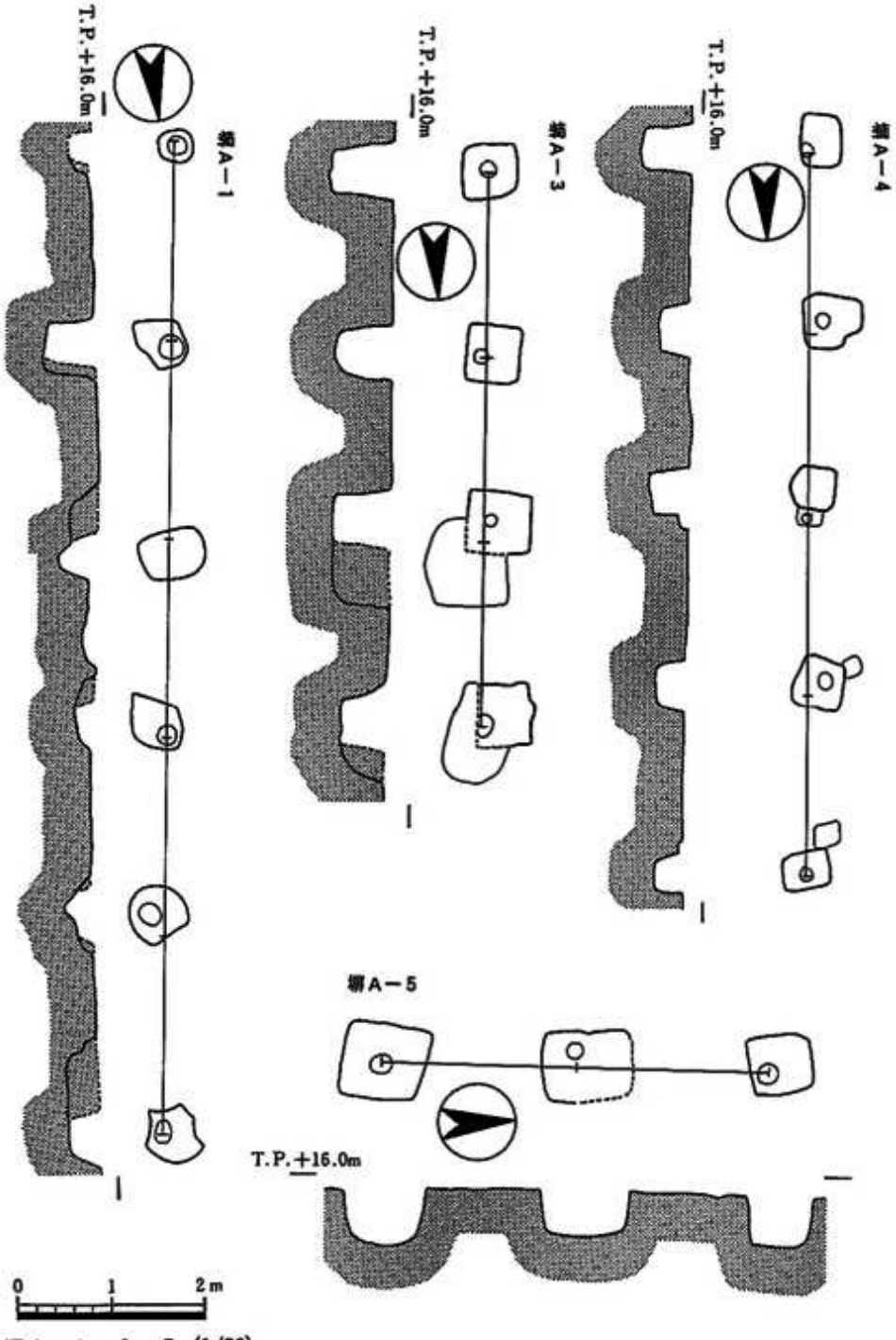
建物A－8（1/80）

図版六　遺構平面、断面図(6)



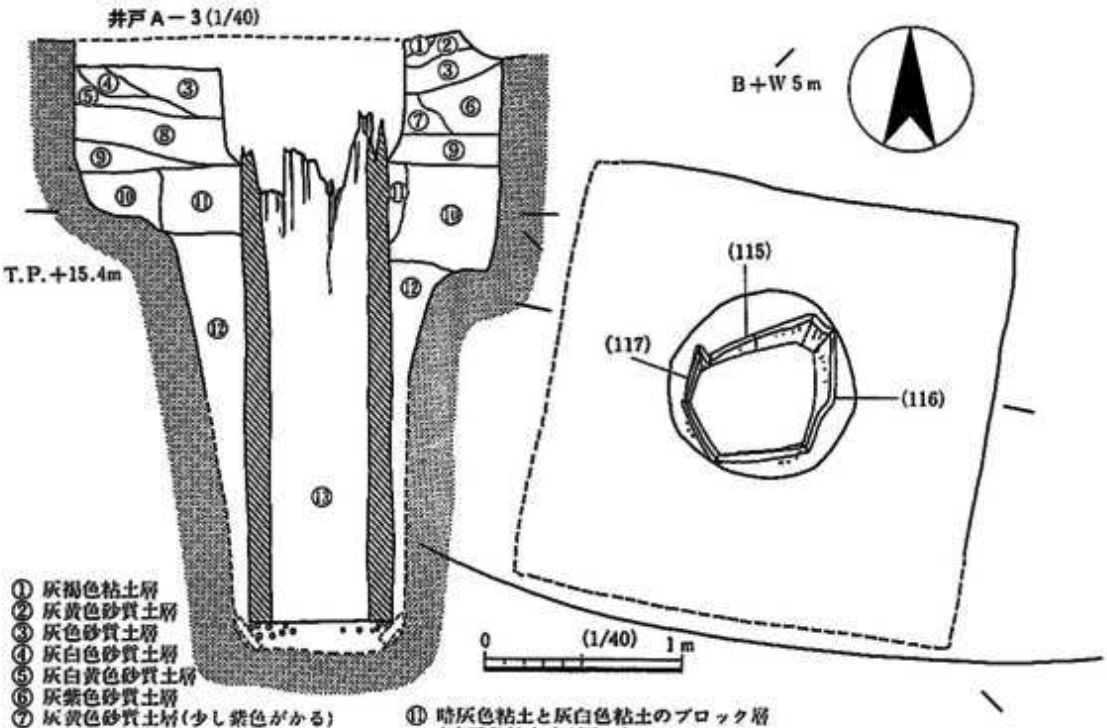
建物9・10（1/80）

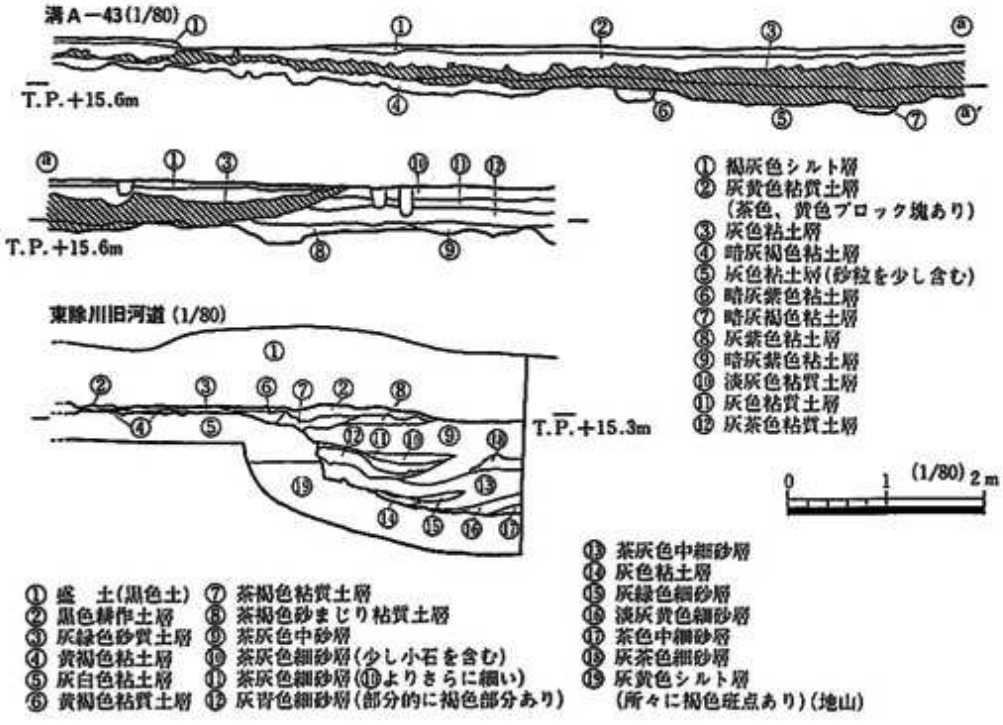
図版七　遺構平面、断面図(7)



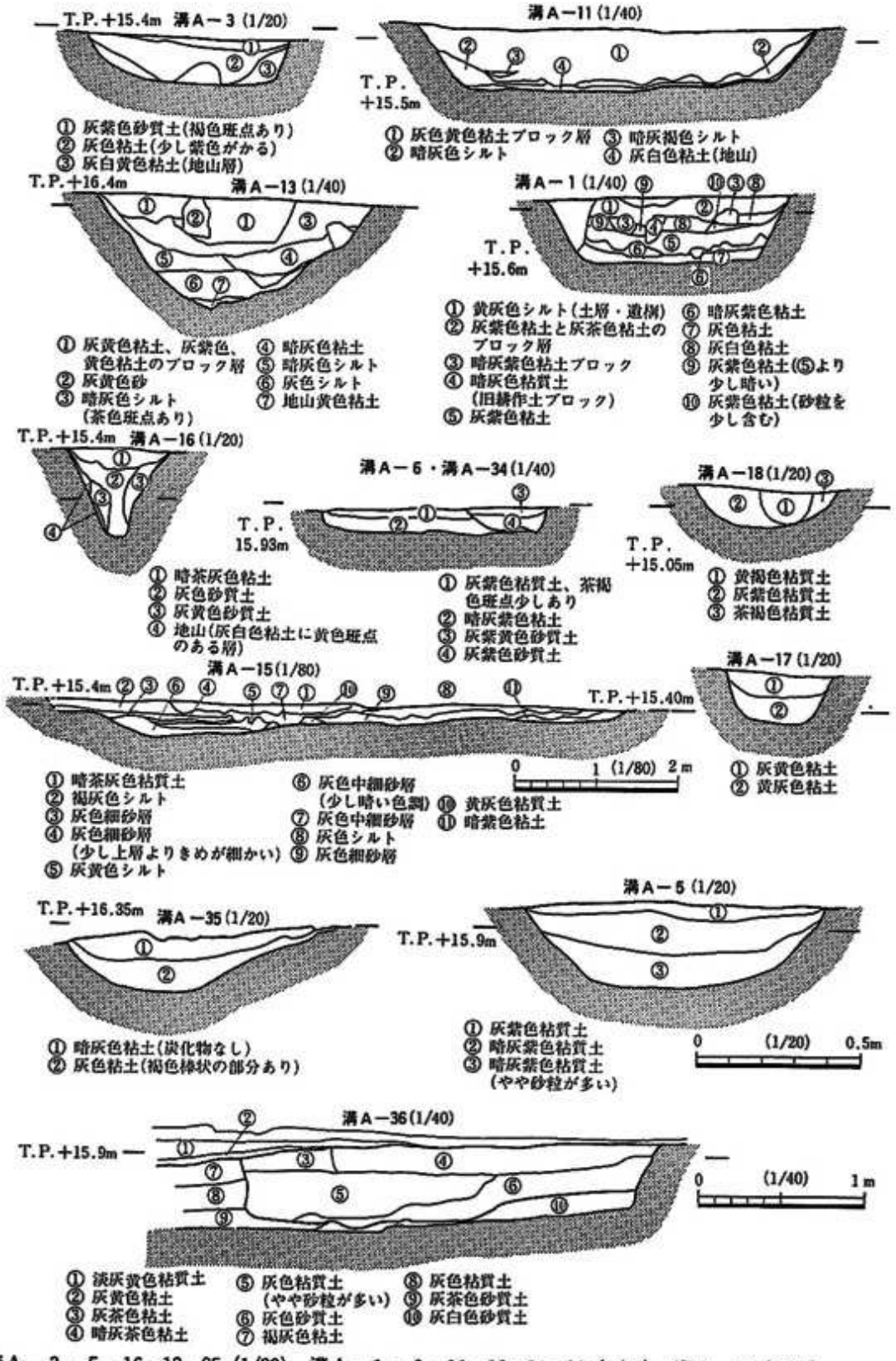
堀A－1・3～5 (1/80)

図版八　遺構平面、断面図(8)及び遺構断面図(1)





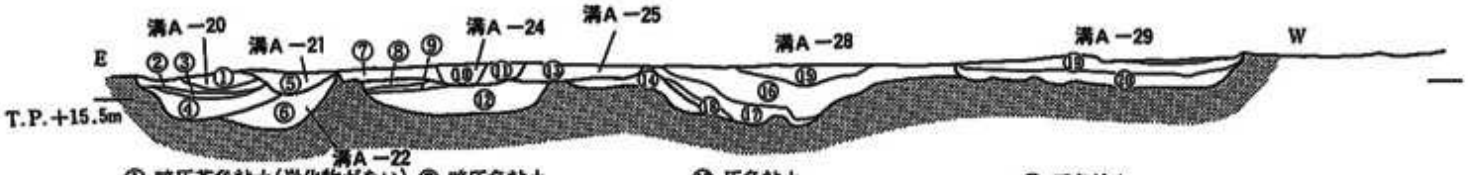
井戸A－3 (1/40)，溝A－43，東除川旧河道 (1/80)



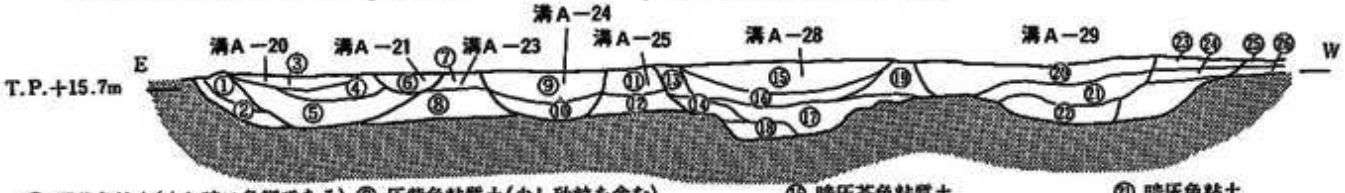
溝A－3・5・16～18・35 (1/20)，溝A－1・6・11・13・34・36 (1/40)，溝A－15 (1/80)

図版10　溝遺構図③

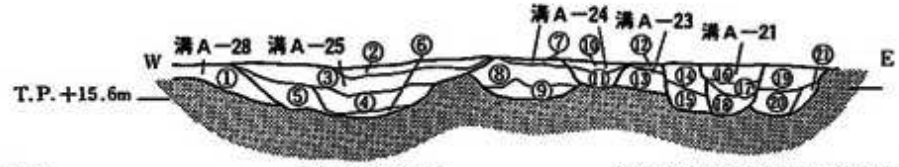
溝A－20～25・28・29（1/40）



① 暗灰茶色粘土（炭化物がない）
② 暗灰茶色粘土（炭化物を含む）
③ 暗灰茶色粘土（炭化物がない）
④ 暗灰紫色粘土
⑤ 灰褐色粘土
⑥ 暗灰紫色粘土（褐色部分あり）
⑦ 暗灰色粘土
⑧ 灰黄色粘土
⑨ 暗灰色粘土（炭化物なし）
⑩ 灰色粘土（少し白味が強い）
⑪ 暗灰色粘土
⑫ 灰色粘土
⑬ 灰色粘土
⑭ 灰色粘土（灰黄色粘土ブロックを含む）
⑮ 暗灰紫色粘土（砂を多く含む）
⑯ 暗灰紫色粘土
⑰ 灰白色粘土（灰色粘土を少し含む）
⑱ 灰色粘土
⑲ 暗灰紫色粘土（褐色斑点あり）
⑳ 暗灰色粘土

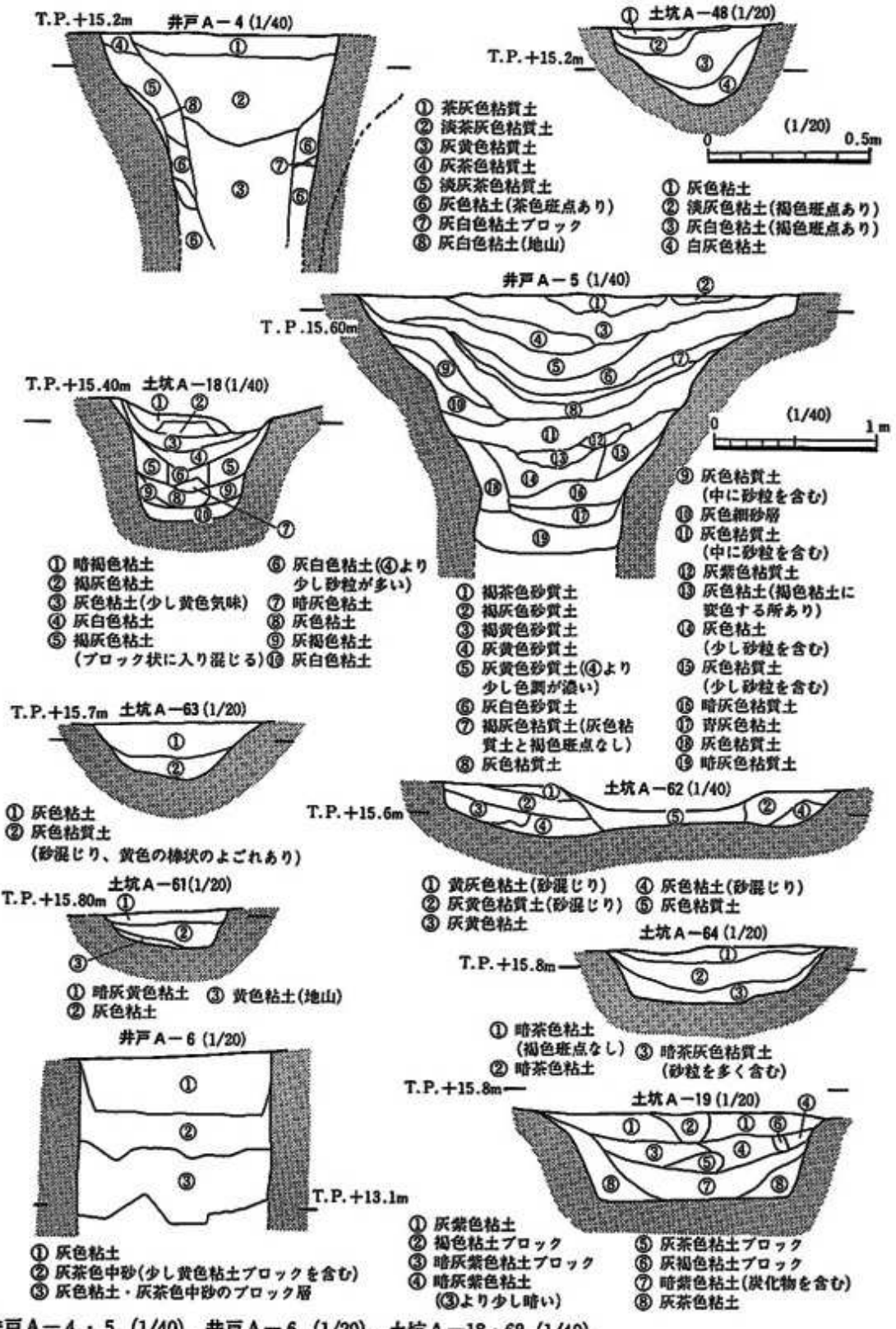


① 灰黄色粘土（少し暗い色調である）
② 黄灰色粘土（少し暗い色調である）
③ 灰紫色粘土（褐色斑点あり）
④ 暗灰紫色粘土
⑤ 暗紫灰色粘土（炭化物を含む）
⑥ 黄灰色粘質土
⑦ 黄灰色粘質土
⑧ 灰紫色粘質土（少し砂粒を含む）
⑨ 暗紫灰色粘土
⑩ 暗紫灰色粘土（灰白色粘土ブロックを含む）
⑪ 茶灰色粘土
⑫ 灰茶色粘土
⑬ 暗茶灰色粘質土
⑭ 暗灰色粘質土（灰白色粘土ブロックを含む）
⑮ 暗灰茶色粘質土
⑯ 暗灰色粘土（灰白色粘土ブロックを含む）
⑰ 暗灰色粘土（炭化物を含む）
⑱ 灰白色粘土（灰色粘土ブロック層）
⑲ 暗茶灰色粘土層
㉑ 暗茶灰色粘質土
㉑ 暗灰色粘土
㉒ 暗灰色粘土（灰白色粘土ブロックを含む）
㉓ 茶灰色粘質土
㉔ 暗灰茶色粘質土
㉕ 暗灰色粘質土
㉖ 灰色粘土



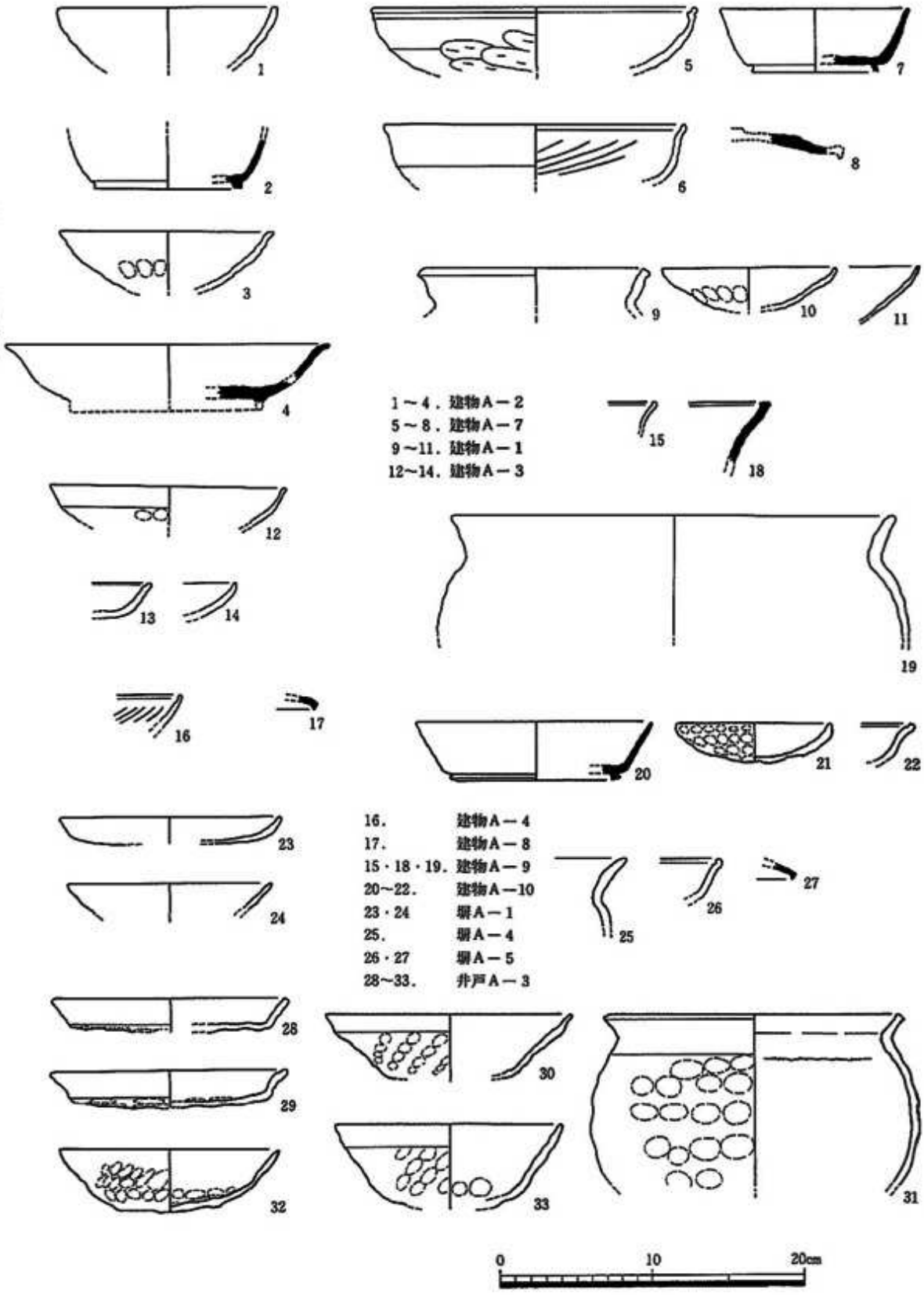
① 灰白色粘土
② 黒灰紫色粘土
③ 暗灰茶色粘土
④ 暗灰紫色粘土
⑤ 暗灰色粘土（黄色粘土ブロックを含む）
⑥ 灰白色粘土（少し灰色粘土を含む）
⑦ 暗灰紫色粘土
⑧ 暗茶灰色粘土
⑨ 灰茶色粘土
⑩ 暗灰紫色粘土（⑦より少し暗い）
⑪ 灰紫色粘土
⑫ 灰色粘土
⑬ 灰白色粘土（少し暗灰色粘土を含む）
⑭ 暗茶灰色粘土
⑮ 茶灰色粘土
⑯ 暗灰紫色粘土
⑰ 暗灰紫色粘土（⑯より少し薄い色調）
⑱ 暗灰色粘土
⑲ 暗茶灰色粘土
⑳ 茶灰色粘土
㉑ 茶灰色粘土（⑳より少し明るい色調）

(1/40)
0　1 m

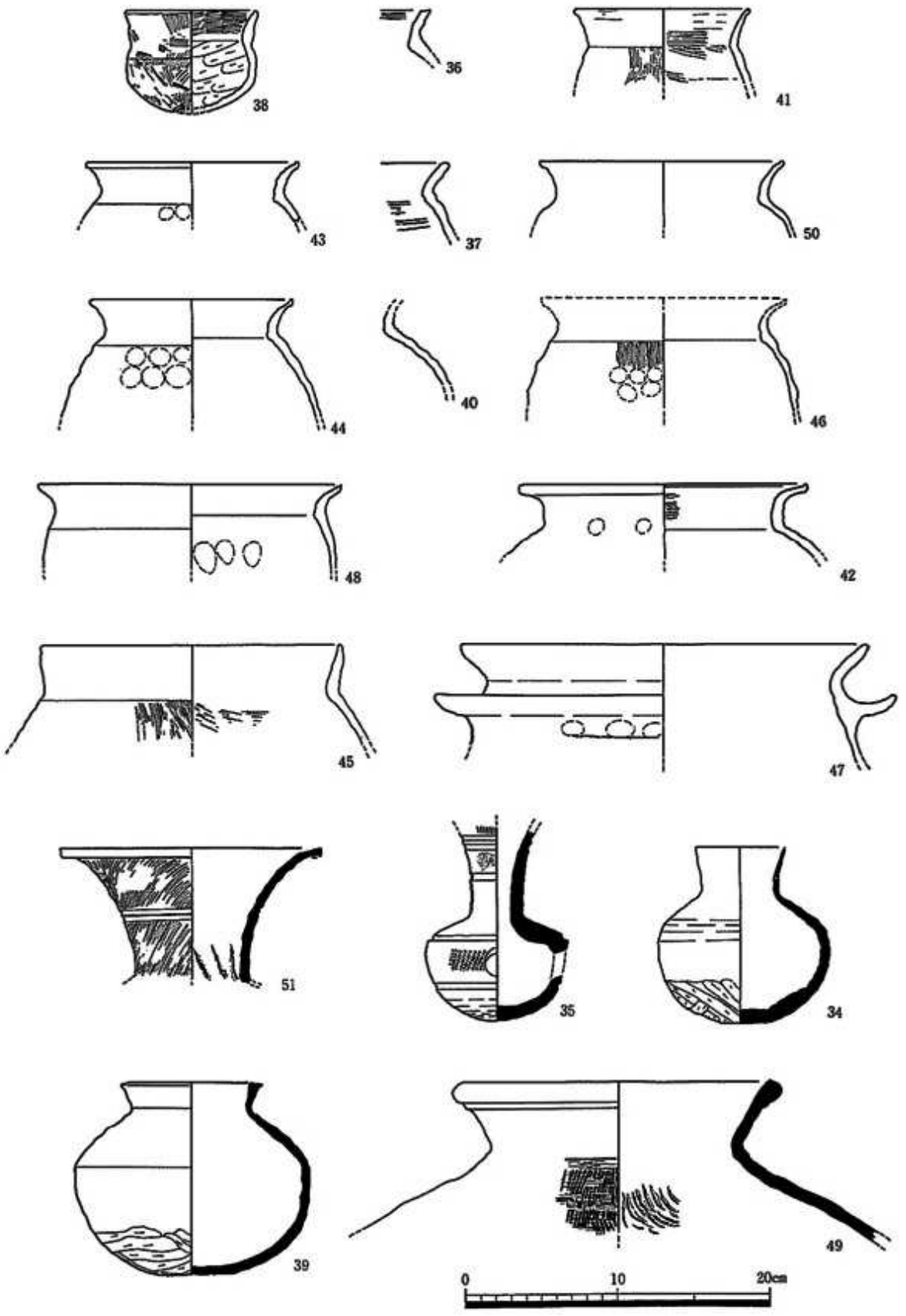


井戸A－4・5 (1/40)，井戸A－6 (1/20)，土坑A－18・62 (1/40)，
土坑A－19・48・61・63・64 (1/20)

図版一二　遺物実測図A調査区出土土器(1)

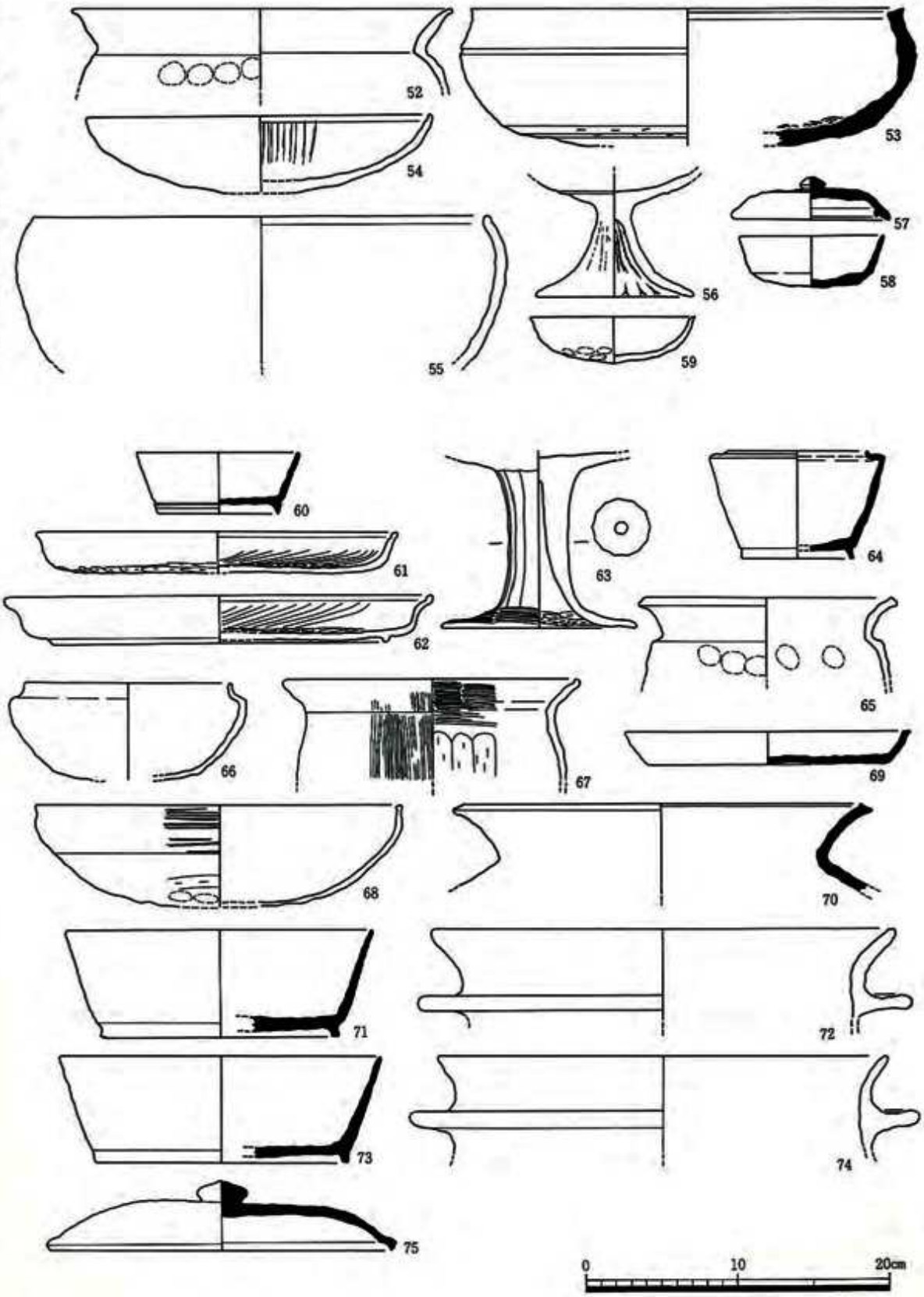


(1/4)



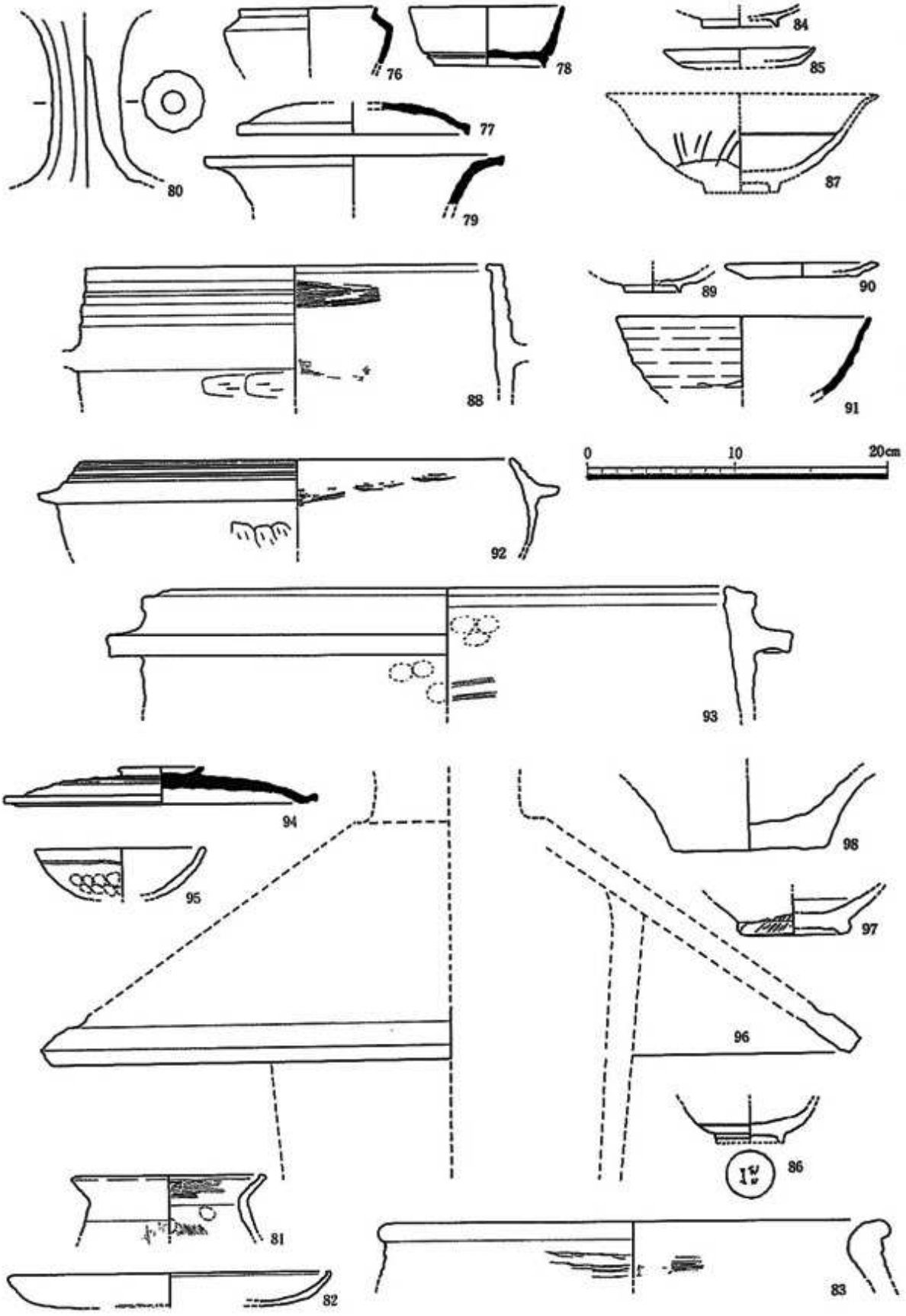
溝A－2（34～51）（1/4）

図版一四　遺物実測図A調査区出土土器(3)



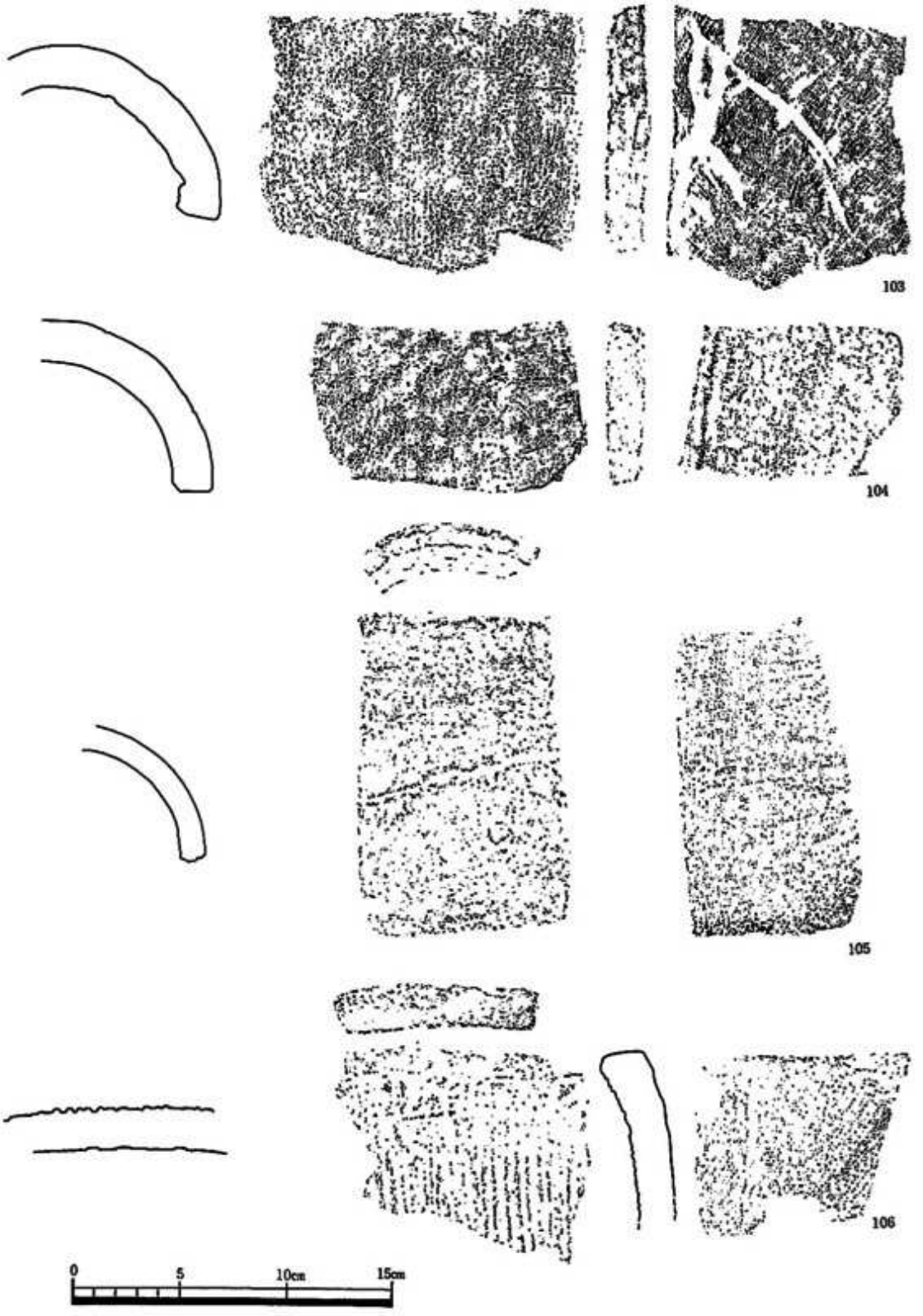
溝A－20（52～59），溝A－36（60～75）（1/4）

図版一五　遺物実測図A調査区出土土器(4)

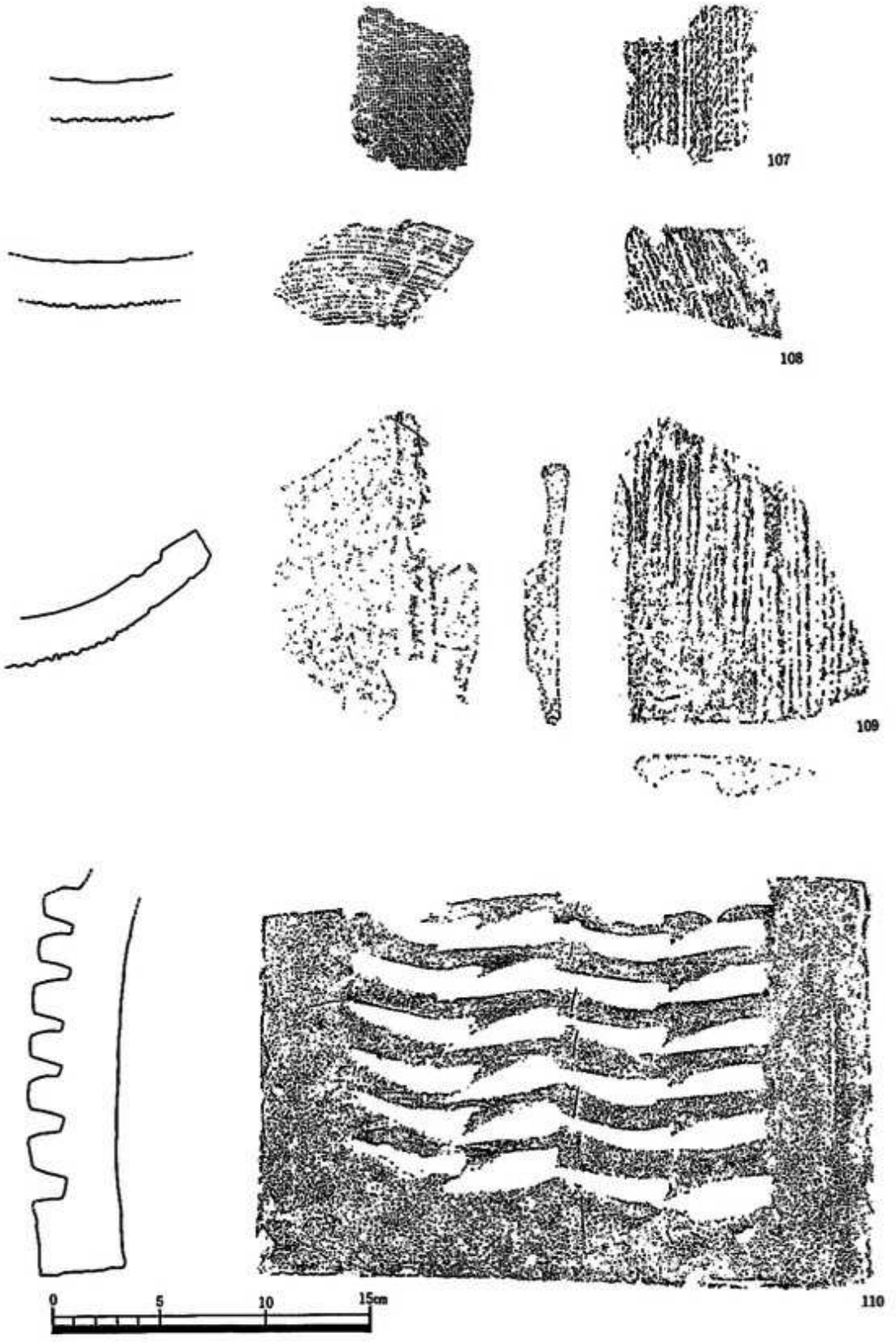


井戸A－5(88)，溝A－11(96)，溝A－22(81・82)，溝A－34(76～80)，溝A－40(83・86)，土坑A－59(89～91)，東除川旧河道(92・93)，A－6調査区黄灰色粘土層(84・85・87)，A－8調査区埋積谷灰茶色粘土層(98)，A－9調査区埋積谷灰色粘土層(95)，A－10調査区褐灰色粘土層(97)，A－12調査区埋積谷褐灰色シルト層(94)(1/4)

図版一六　遺物実測図A調査区出土瓦(1)

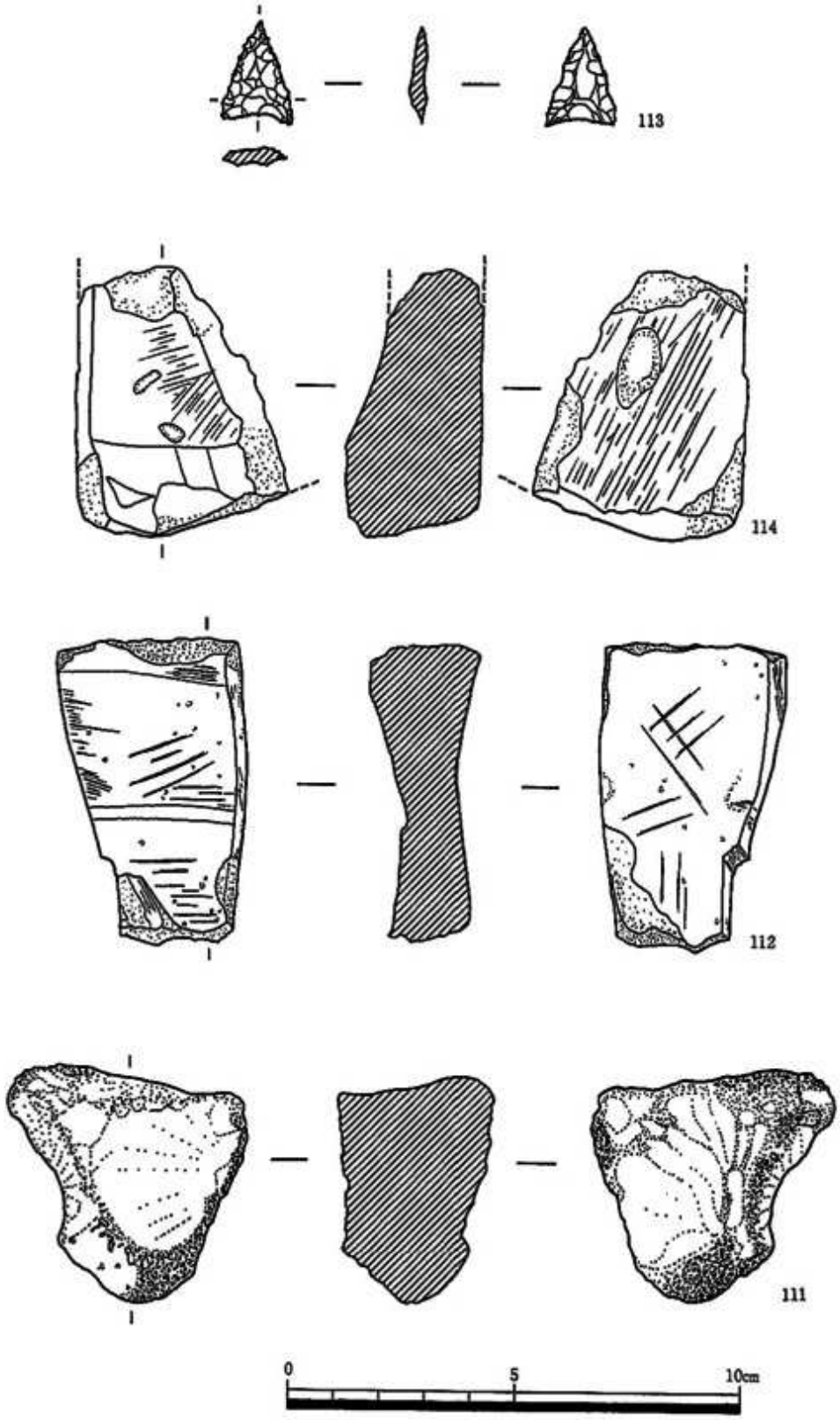


PA−66 (103)，溝A−35 (104)，溝A−34 (105)，井戸A−3井筒底部 (106) (1/3)

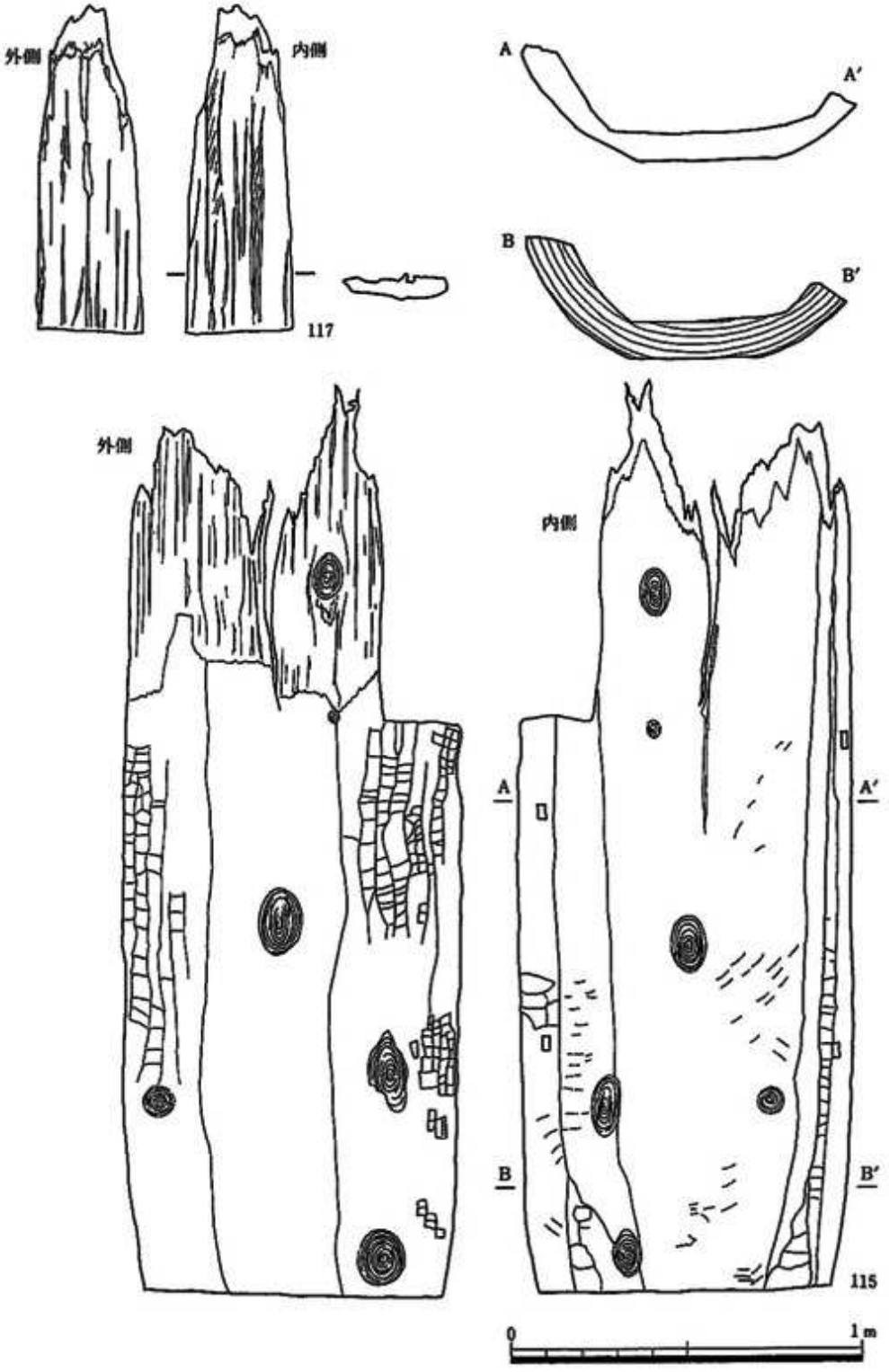


A－12調査区側溝（107），同Ⅱ層灰色粘質土(108)，井戸A－3井筒底部（109），東除川旧河道（110）（1/3）

図版一八　遺物実測図A調査区出土石器

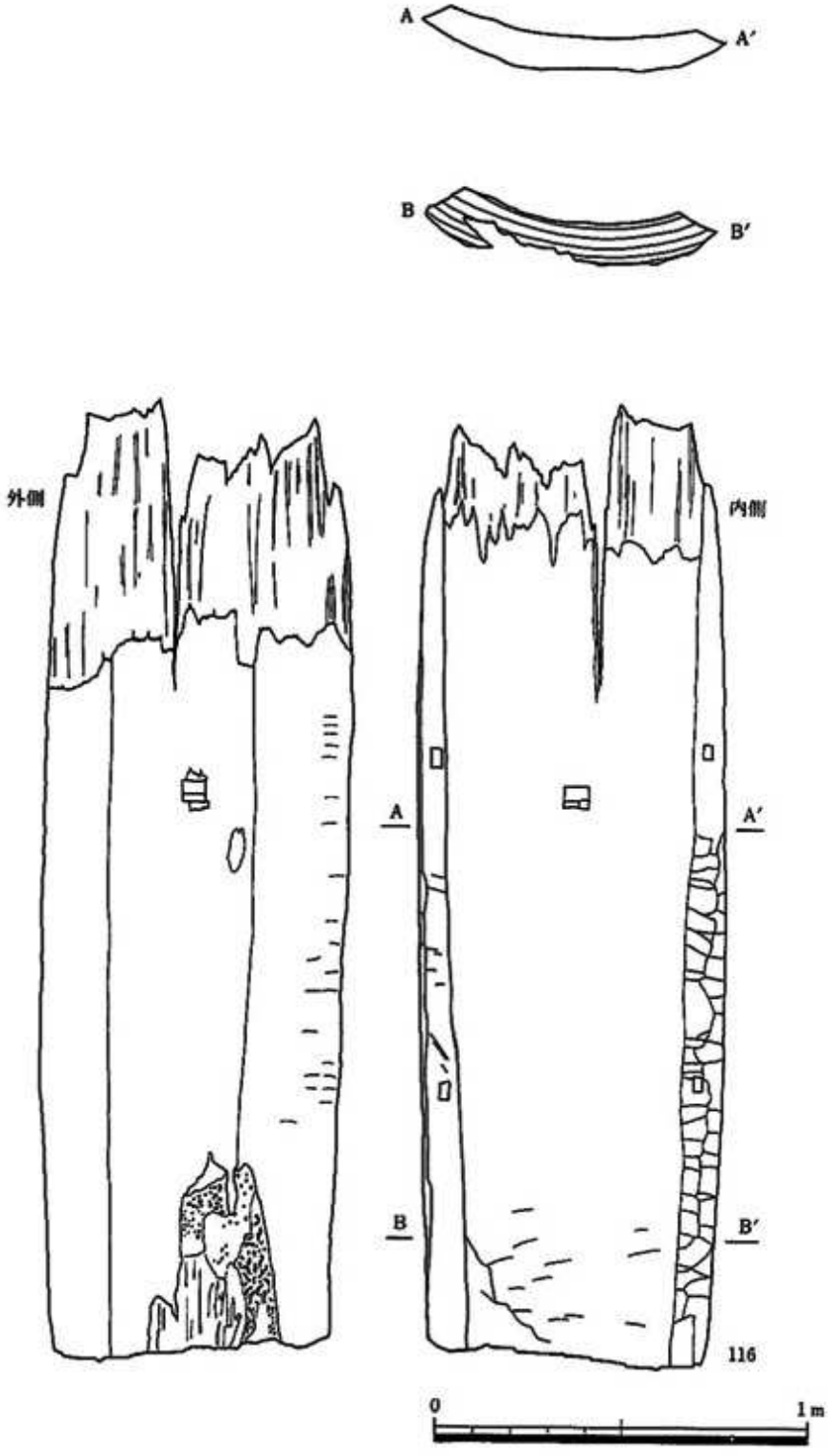


溝A－13下層（111），溝A－2灰茶色粘土層（112），溝A－40黄灰色粘質土（113），A－4調査区（114）（2/3）



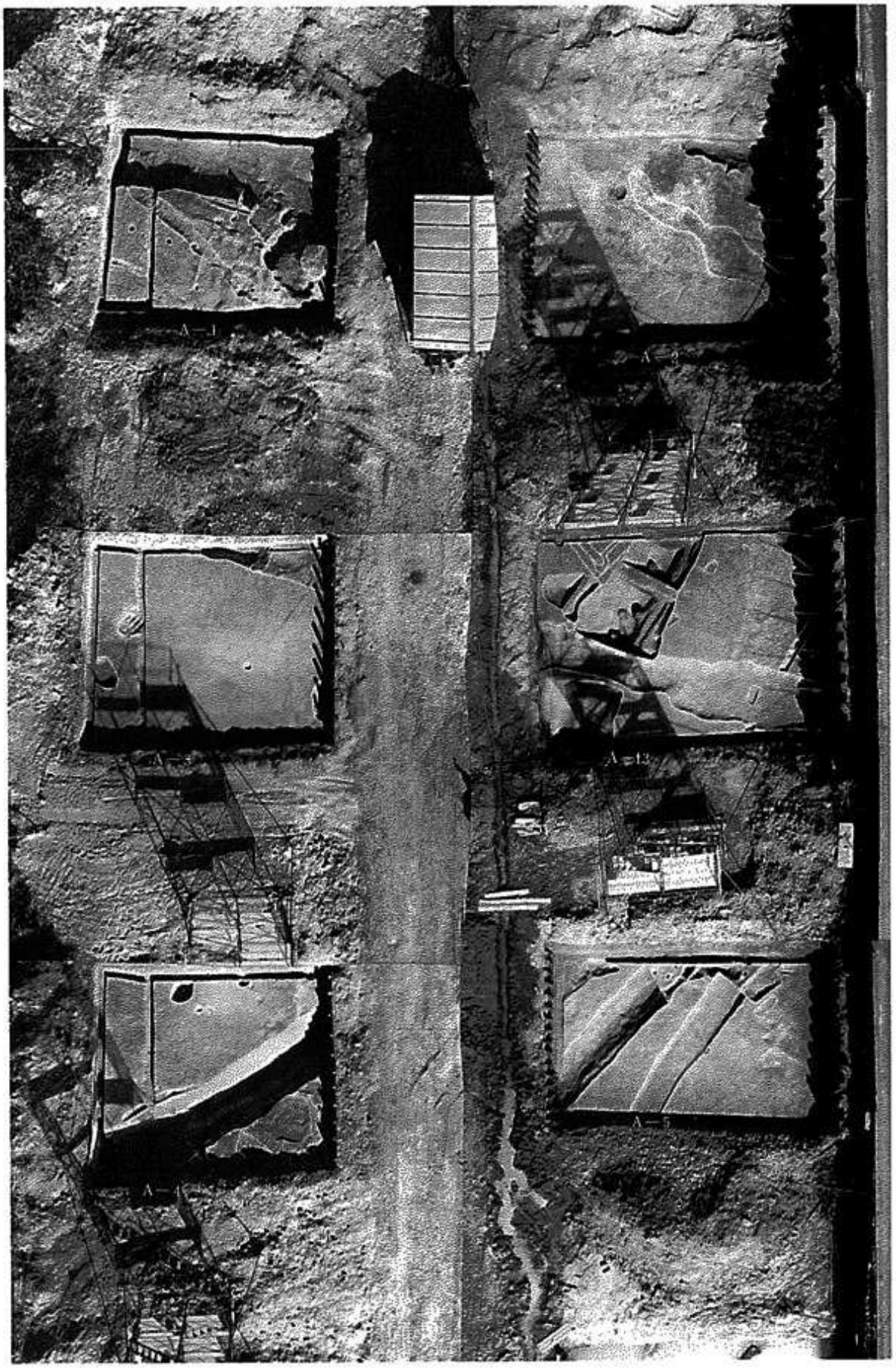
井戸A－3井筒材（115・117）（1/20）

図版二〇　遺物実測図井戸A—3井筒材(2)



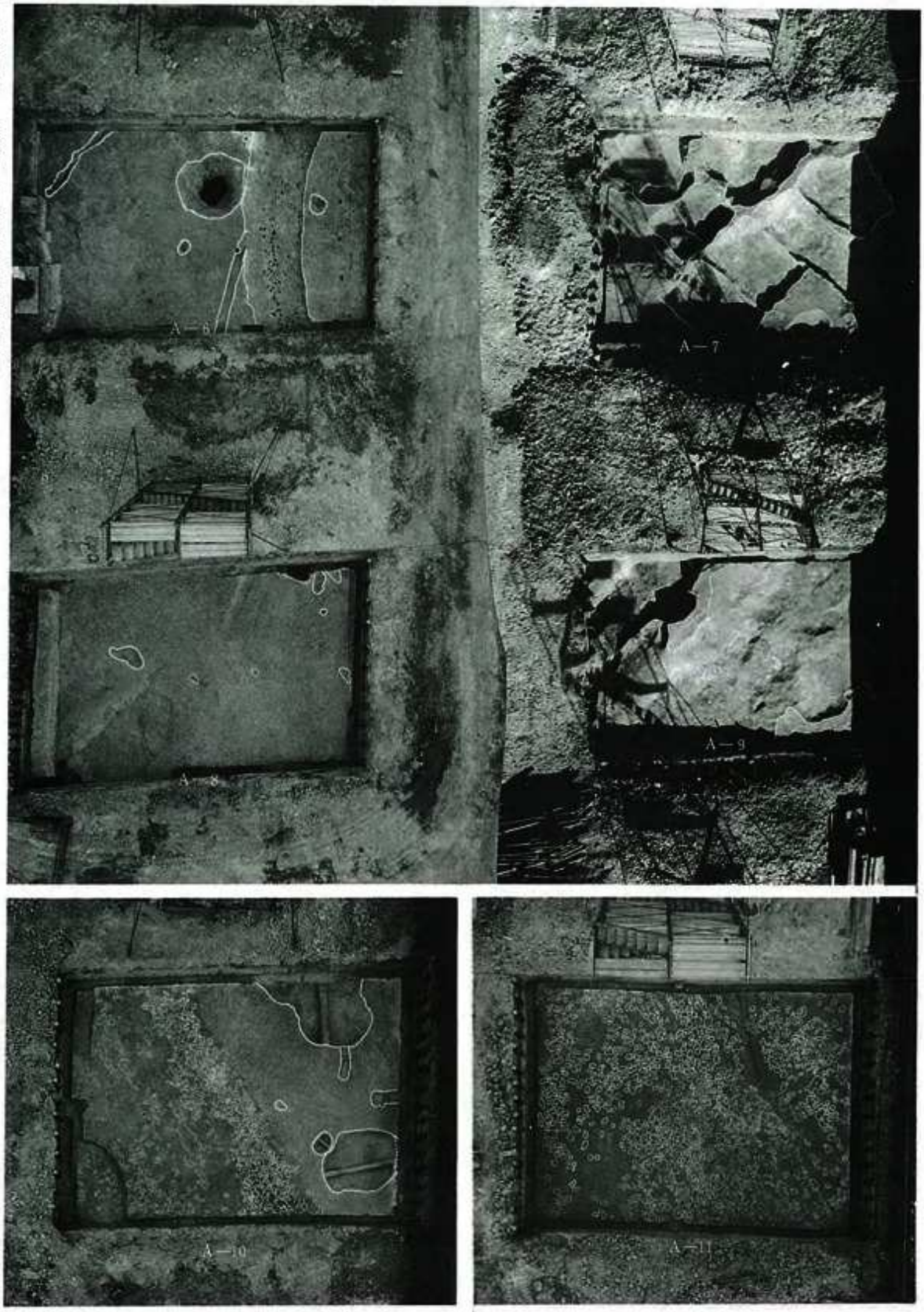
井戸A—3井筒材（116）（1/20）

図版二一　遺構A調査区航空写真(1)



A－1～5・13調査区

図版二二　遺構A調査区航空写真(2)



A－6～11調査区

図版二三　遺構A調査区航空写真(3)

A—12調査区

図版二四　遺構A—5・6調査区全景

A—5調査区全景（北西より）

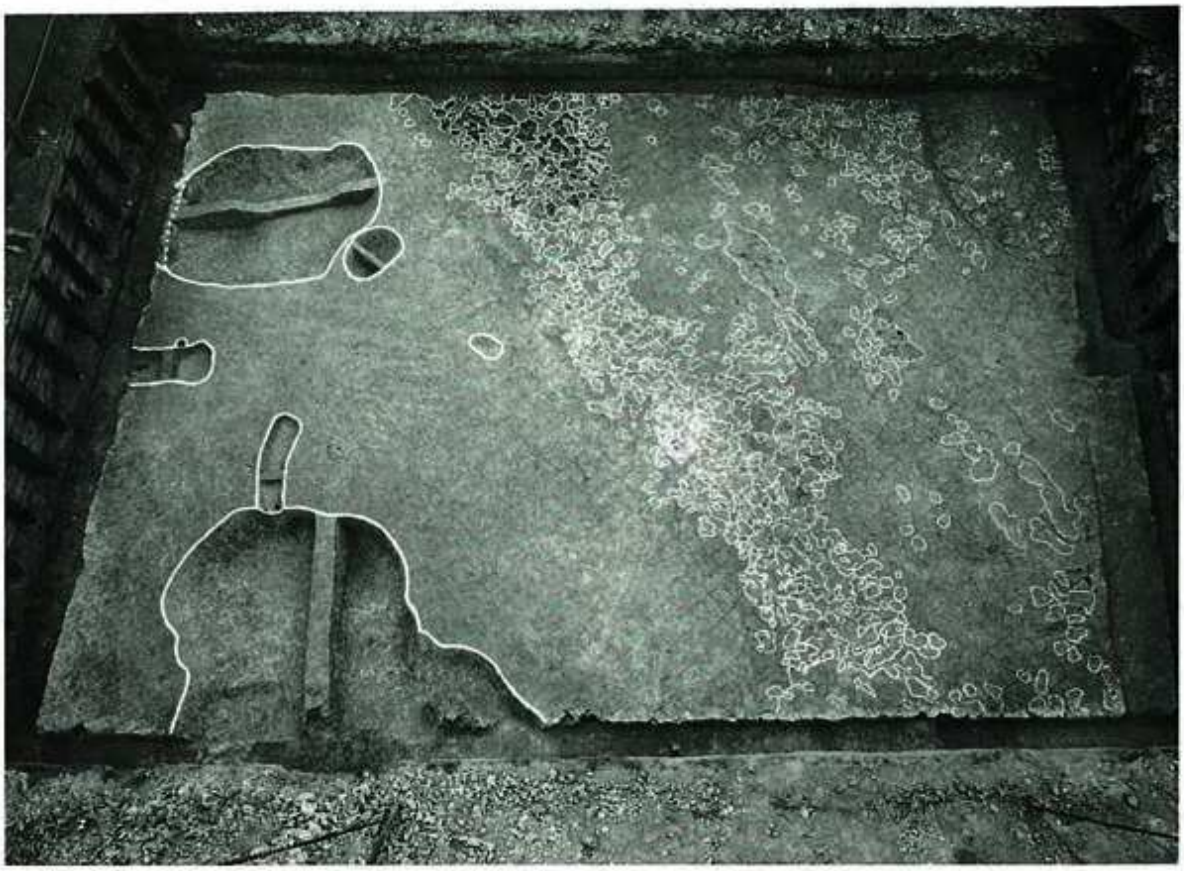
A—6調査区最終遺構面全景

図版二五　遺構A—7・8調査区全景

A—7調査区土坑A—40～45

A—8調査区

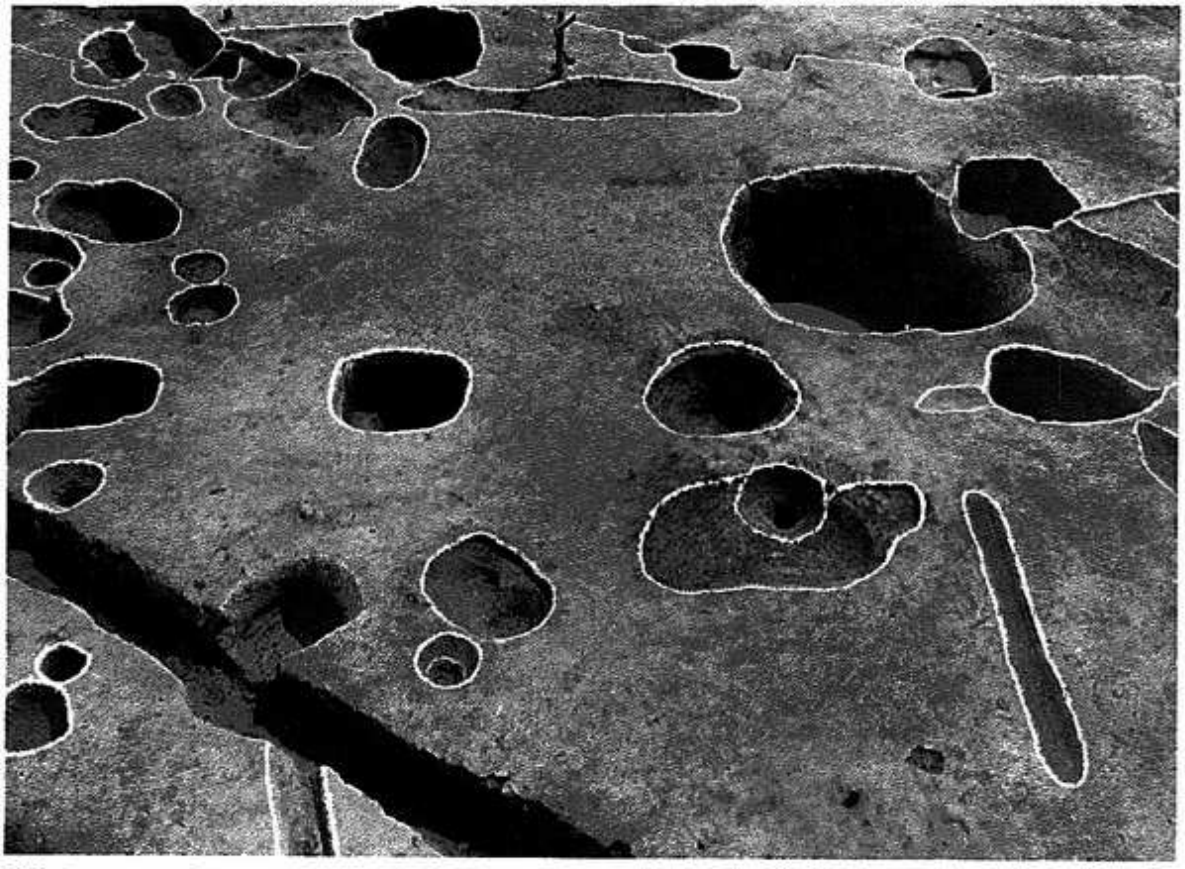
図版二六　遺構A—10・11調査区全景



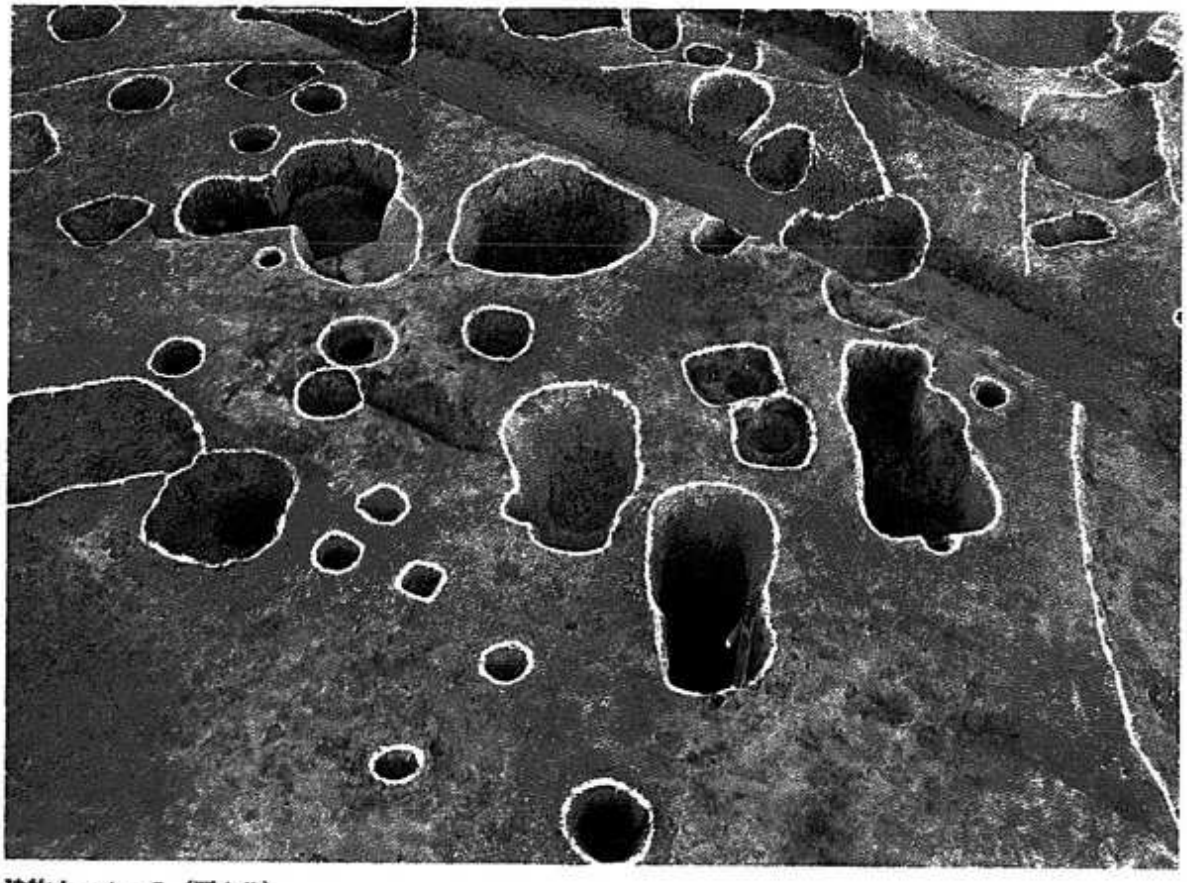
A—10調査区

A—11調査区

図版二七　遺構A—12調査区各遺構(1)



建物A—2・7（西より）

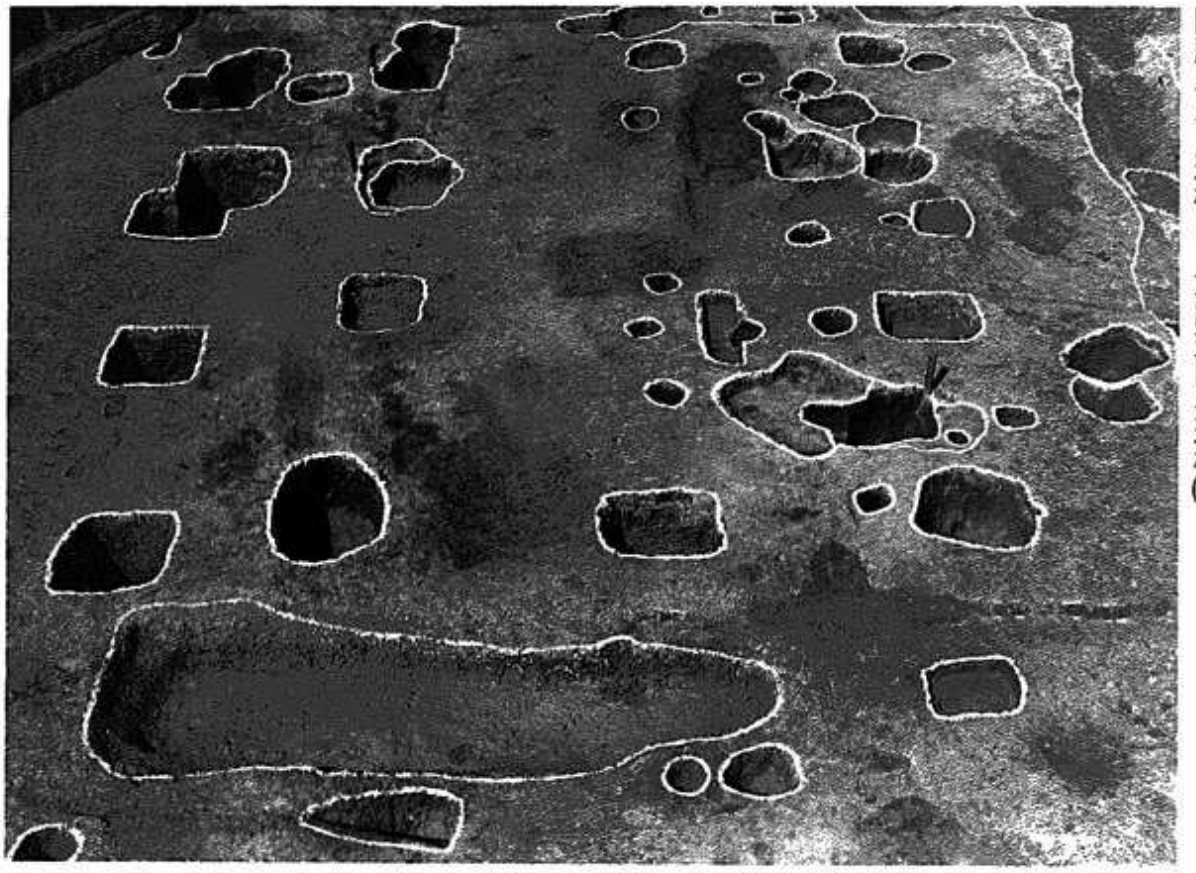


建物A—4・5（西より）

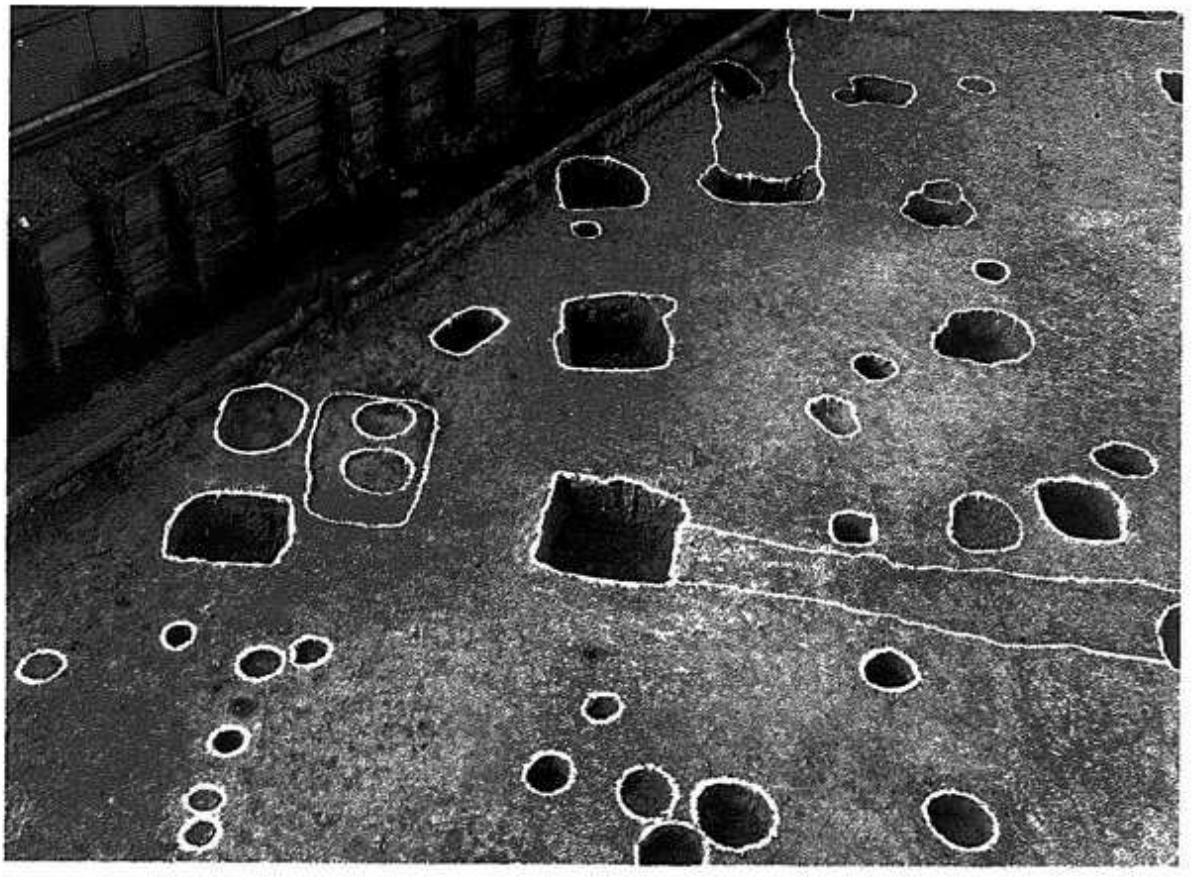
図版二八　遺構A—12調査区各遺構(2)

建物A—9（東より）

建物A—8（東より）

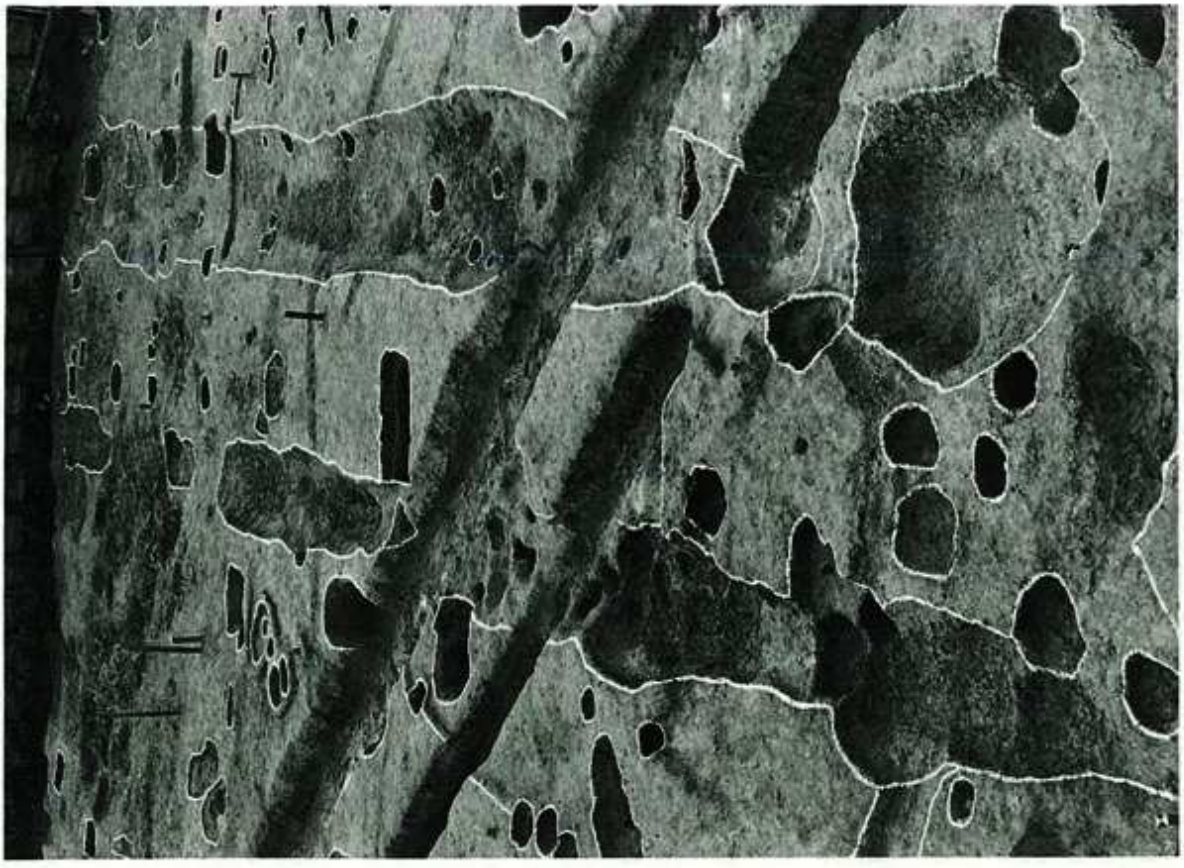


建物A—10・塀A—3（南より）



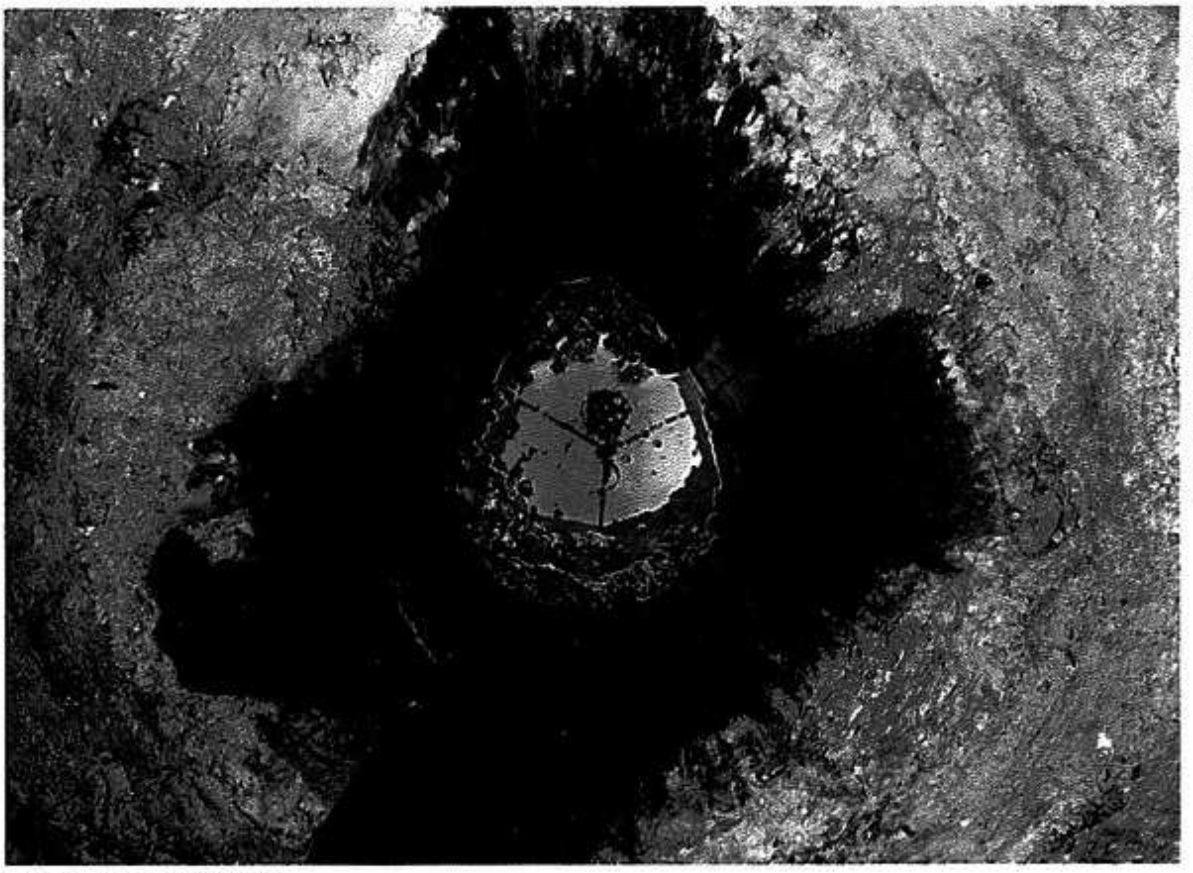
塀A—4・5（南より）

溝A—20～29（南より）

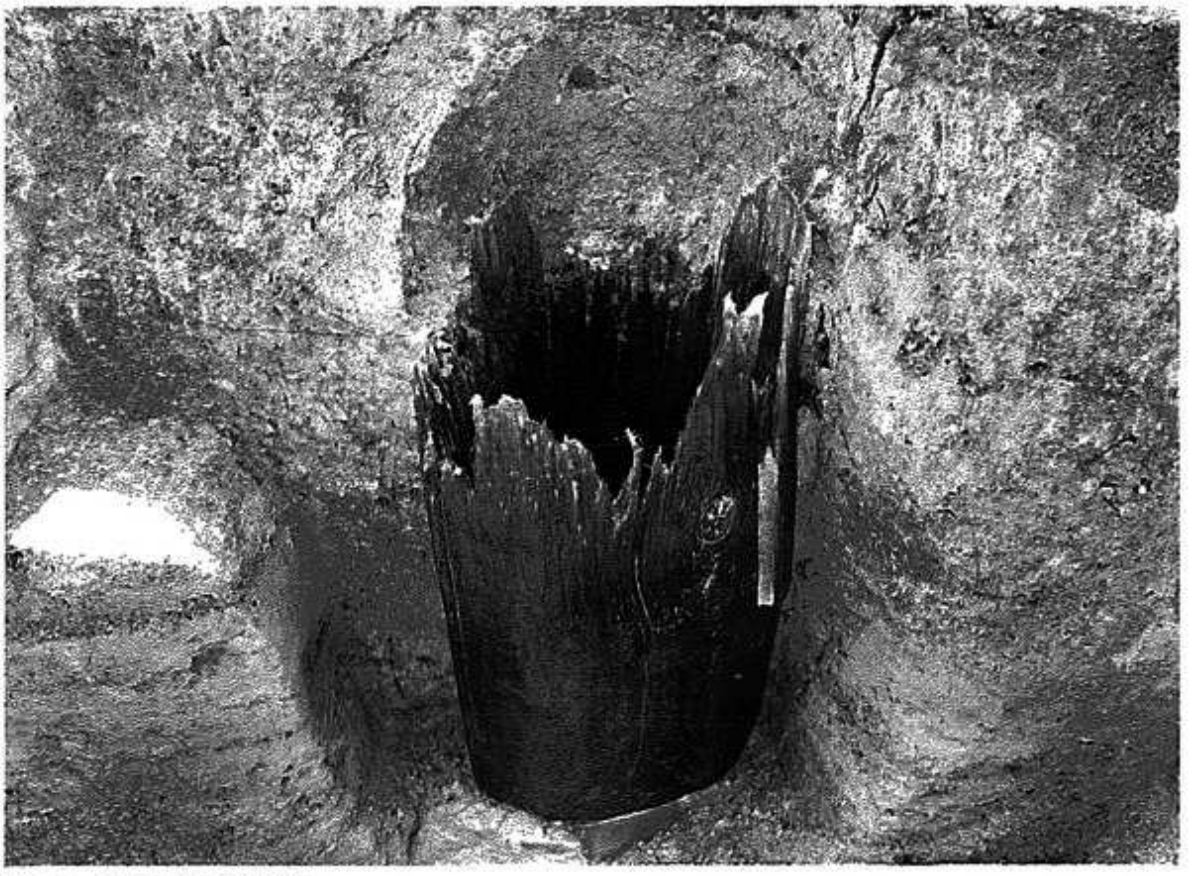


溝A—5（上）、溝A—6（下）

図版三一　遺構A—12調査区各遺構(5)



井戸A—3井戸枠検出状況



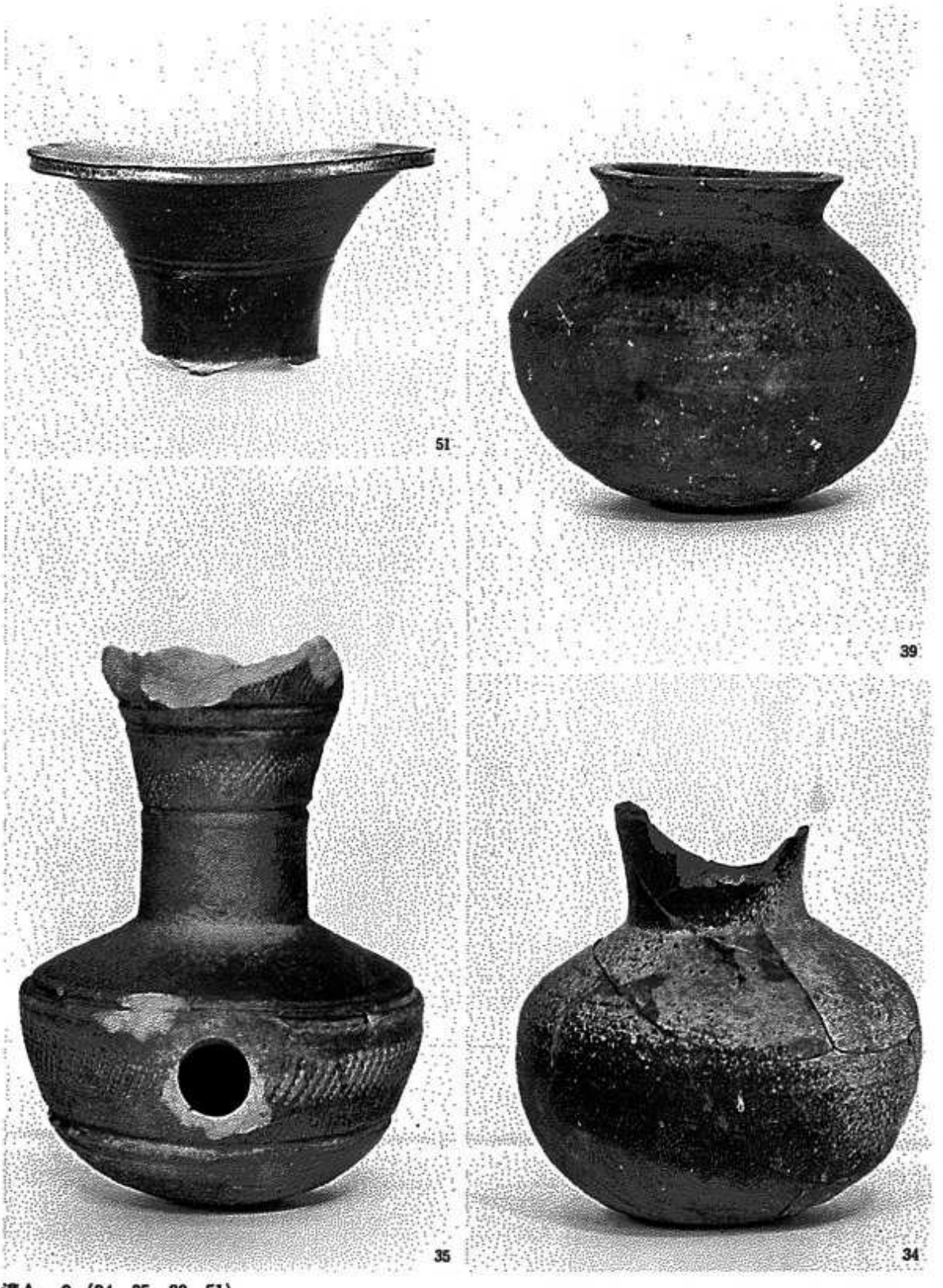
井戸A—3掘方たち割り状況

図版三一　遺構A—1・6調査区遺構断面

A—6調査区井戸A—5

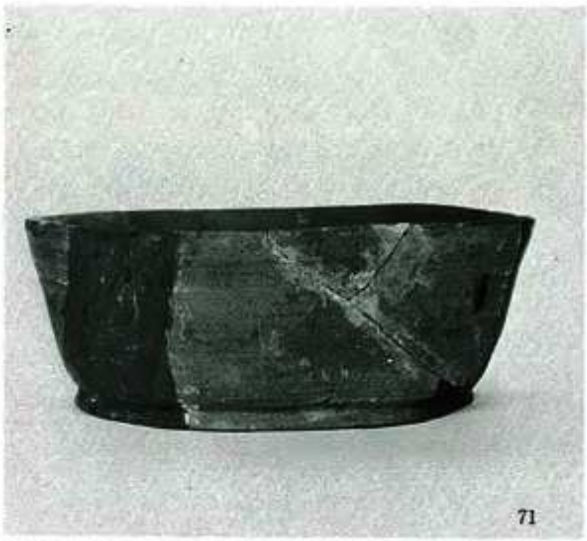
A—1調査区東除川旧河道

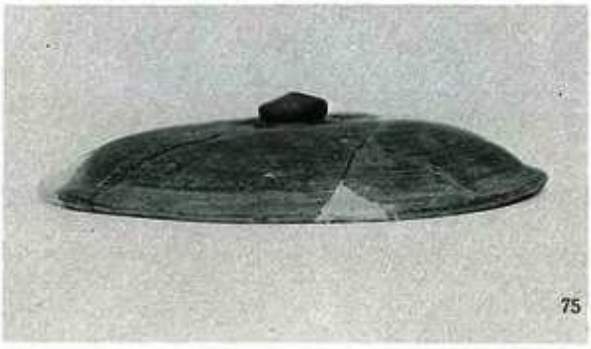
図版三三　遺物A調査区出土土器(1)



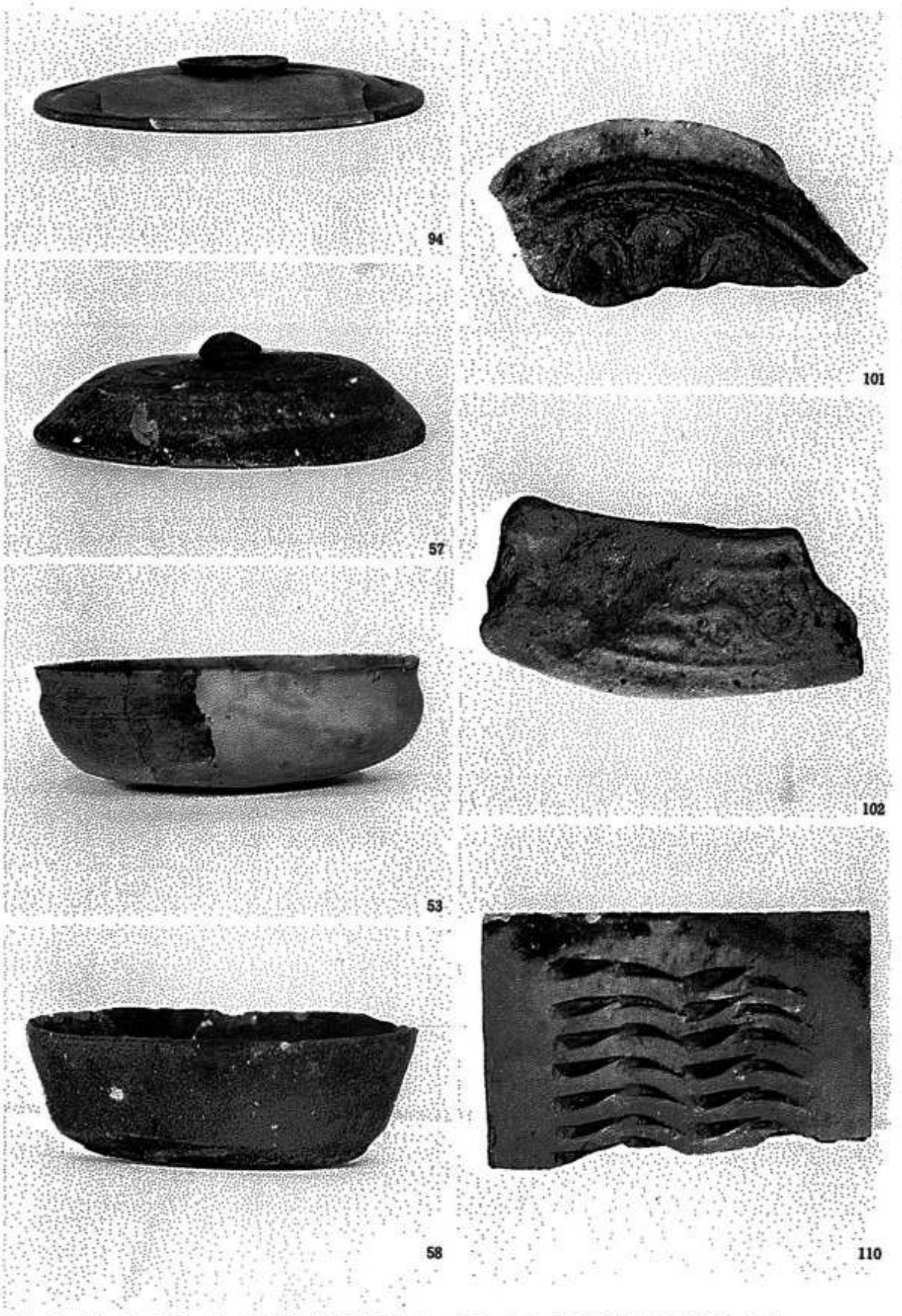
溝A－2（34・35・39・51）

図版三四　遺物A調査区出土土器(2)



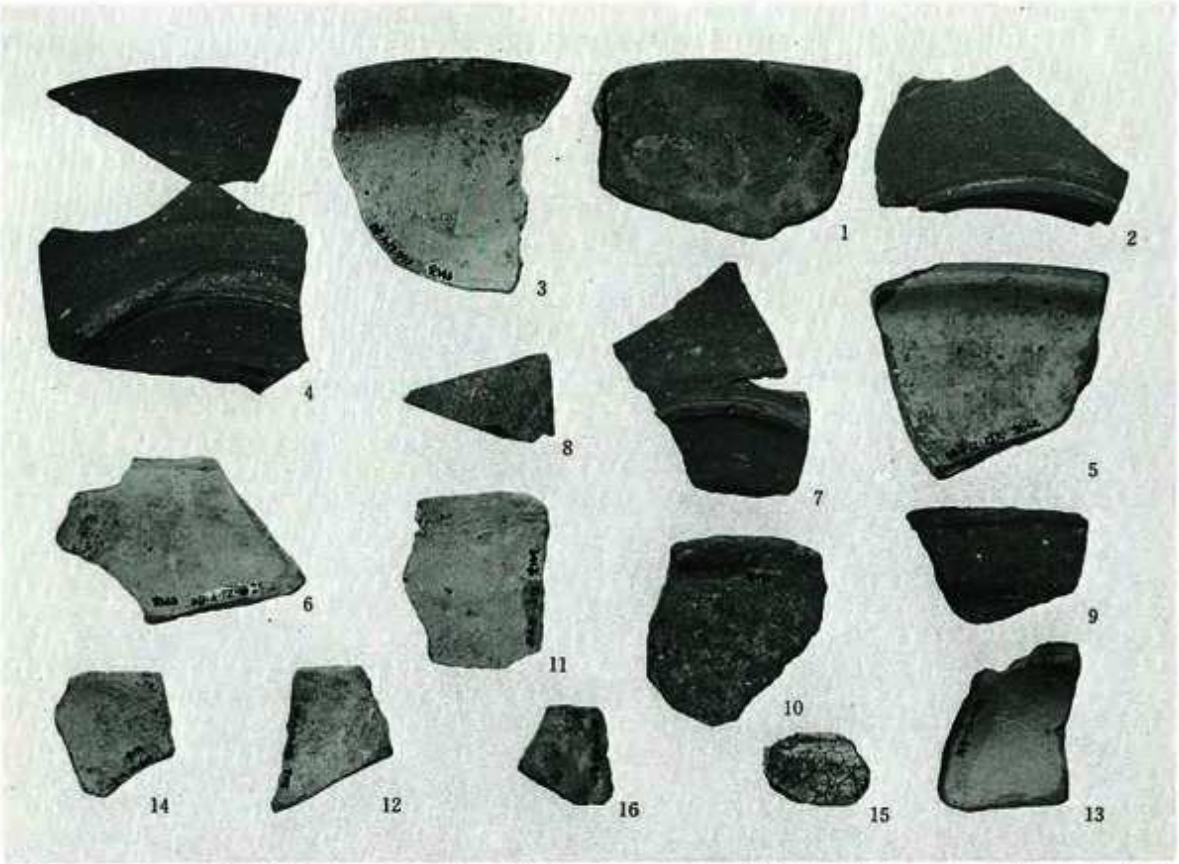


溝A—36 (60・63・64・71・73・75)，溝A—34 (78)

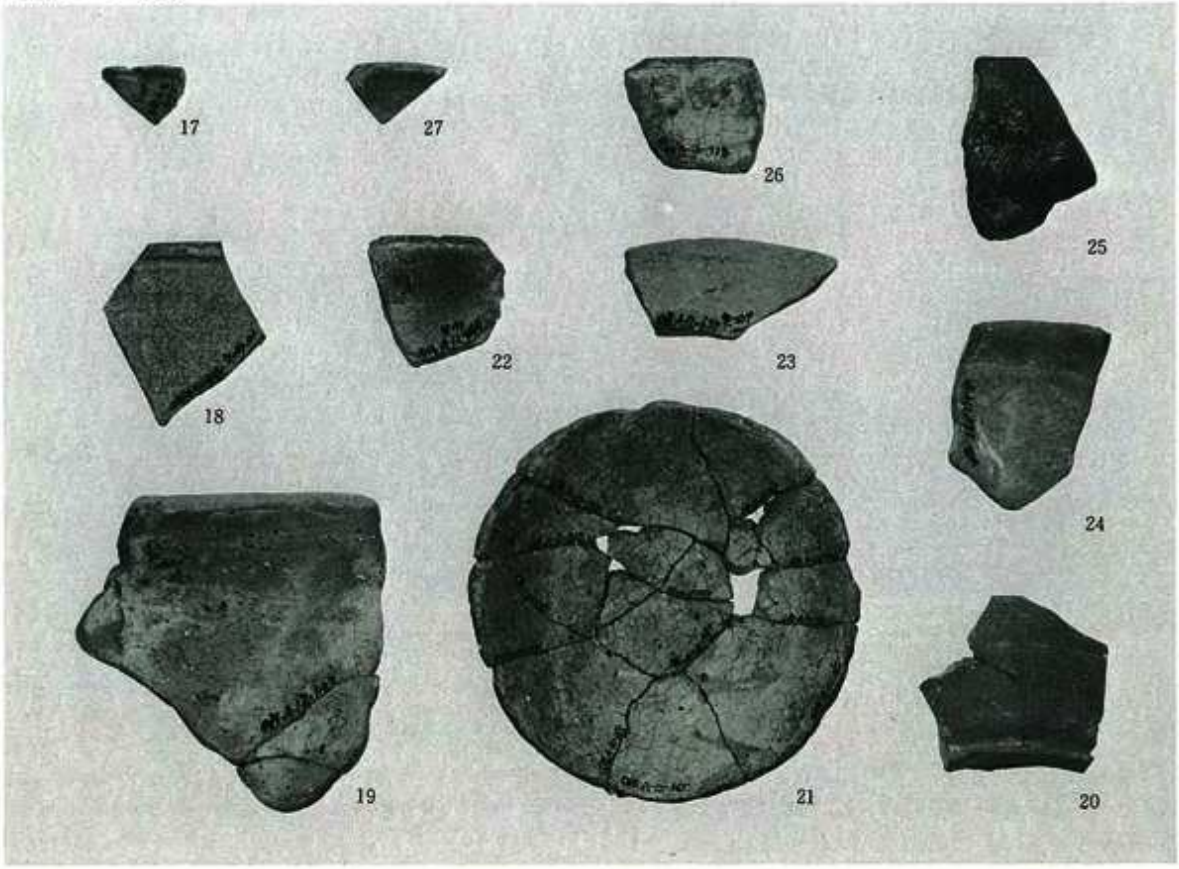


溝A—20（53・57・58），A—12調査区埋積谷褐灰色シルト層（94），同Ⅰ層淡灰色粘質土層（101），同褐灰色シルト層（102），東除川旧河道（110）

図版三六　遺物A調査区出土土器(4)

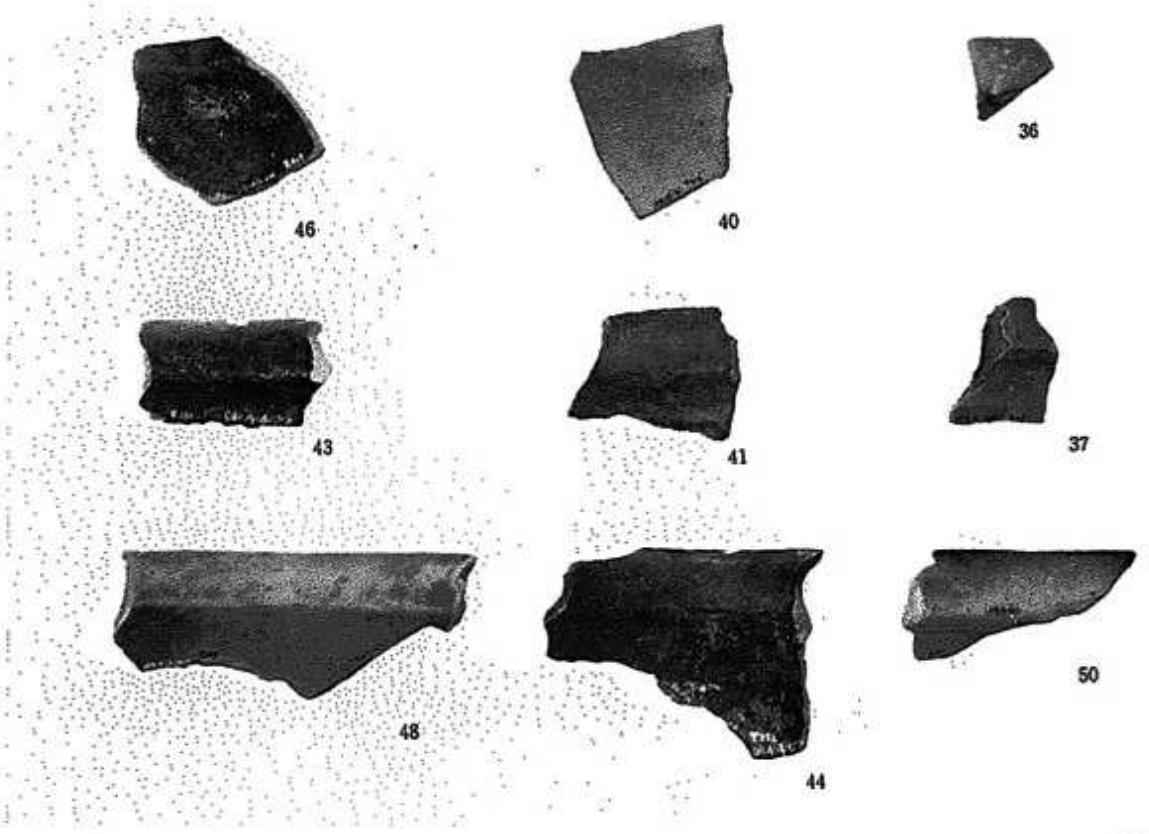


建物A－2（1～4），建物A－7（5～8），建物A－1（9～11），建物A－3（12～14），建物A－9（15），建物A－4（16）

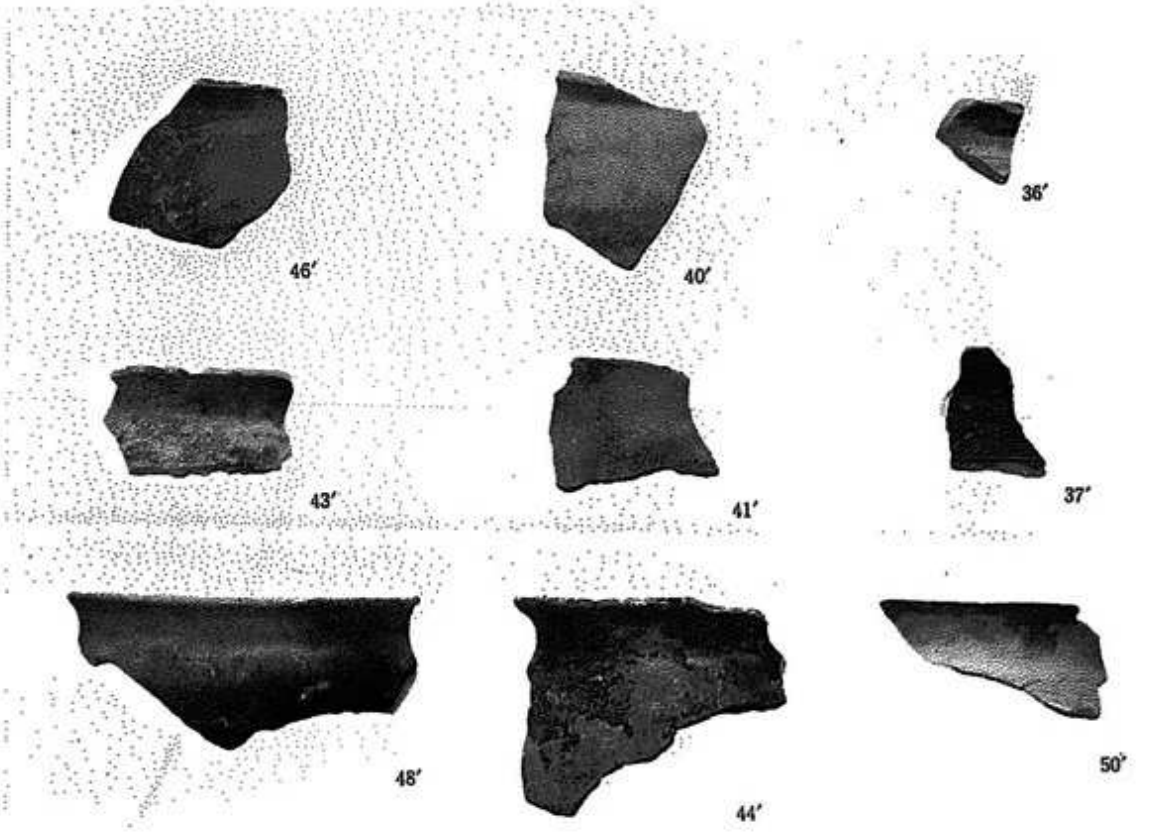


建物A－8（17），建物A－9（18・19），建物A－10（20～22），塀A－1（23・24），塀A－4（25），塀A－5（26・27）

図版三七　遺物A調査区出土土器(5)



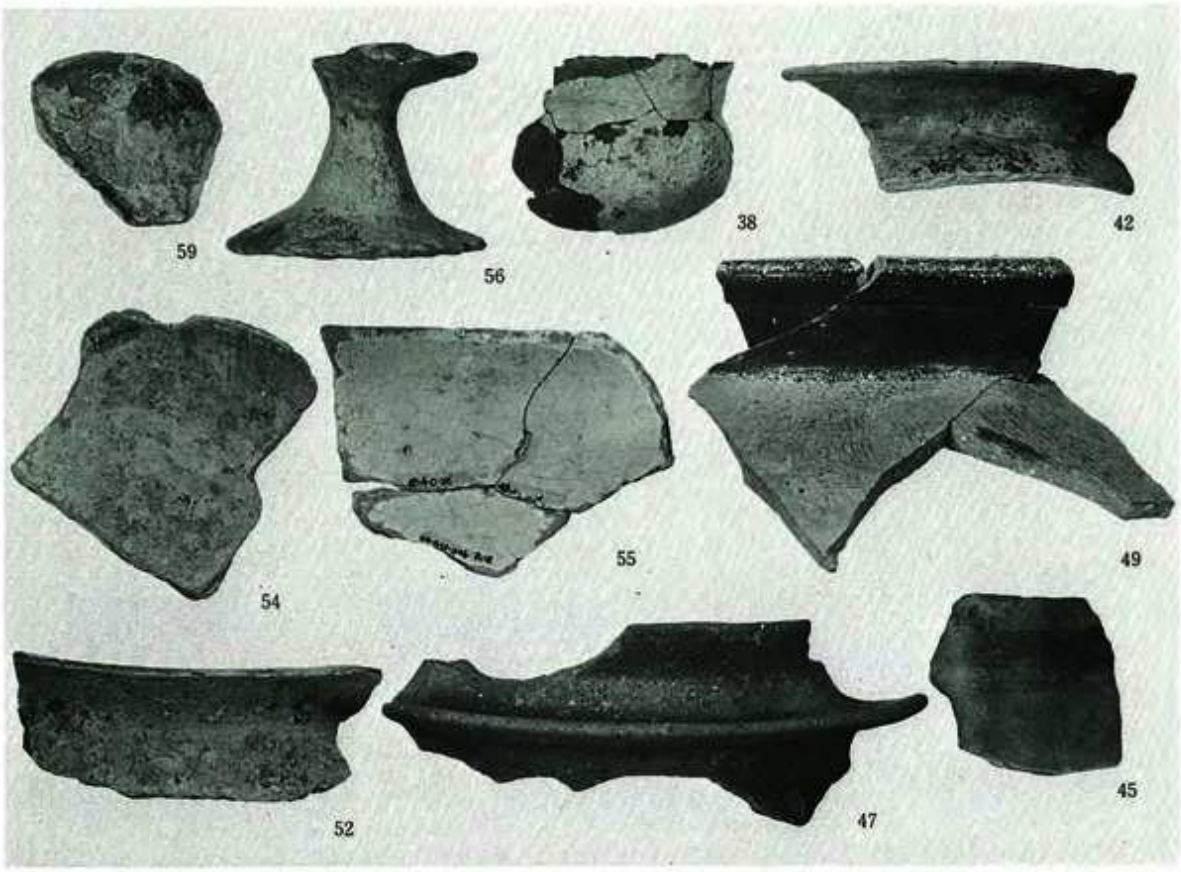
(内側)



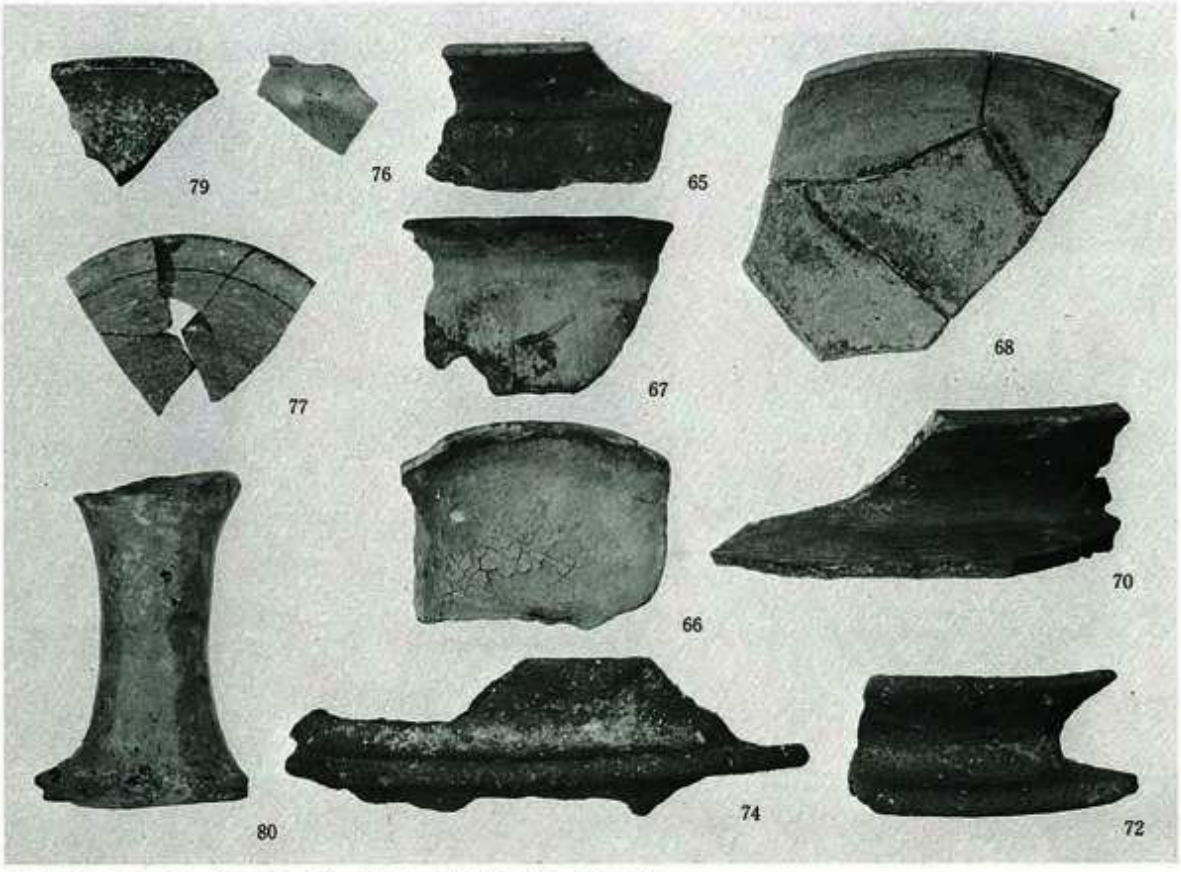
溝A—2 (36・37・40・41・43・44・46・48・50)

(外側)

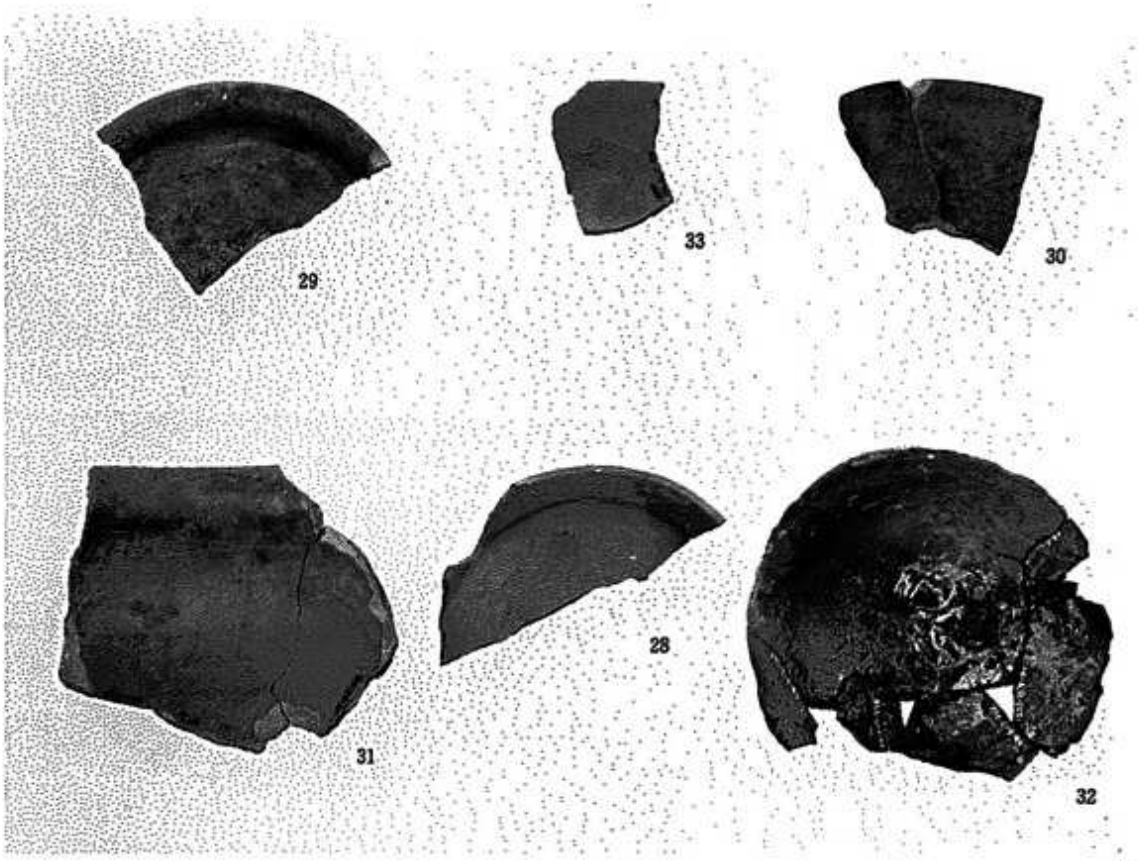
図版三八　遺物A調査区出土土器(6)



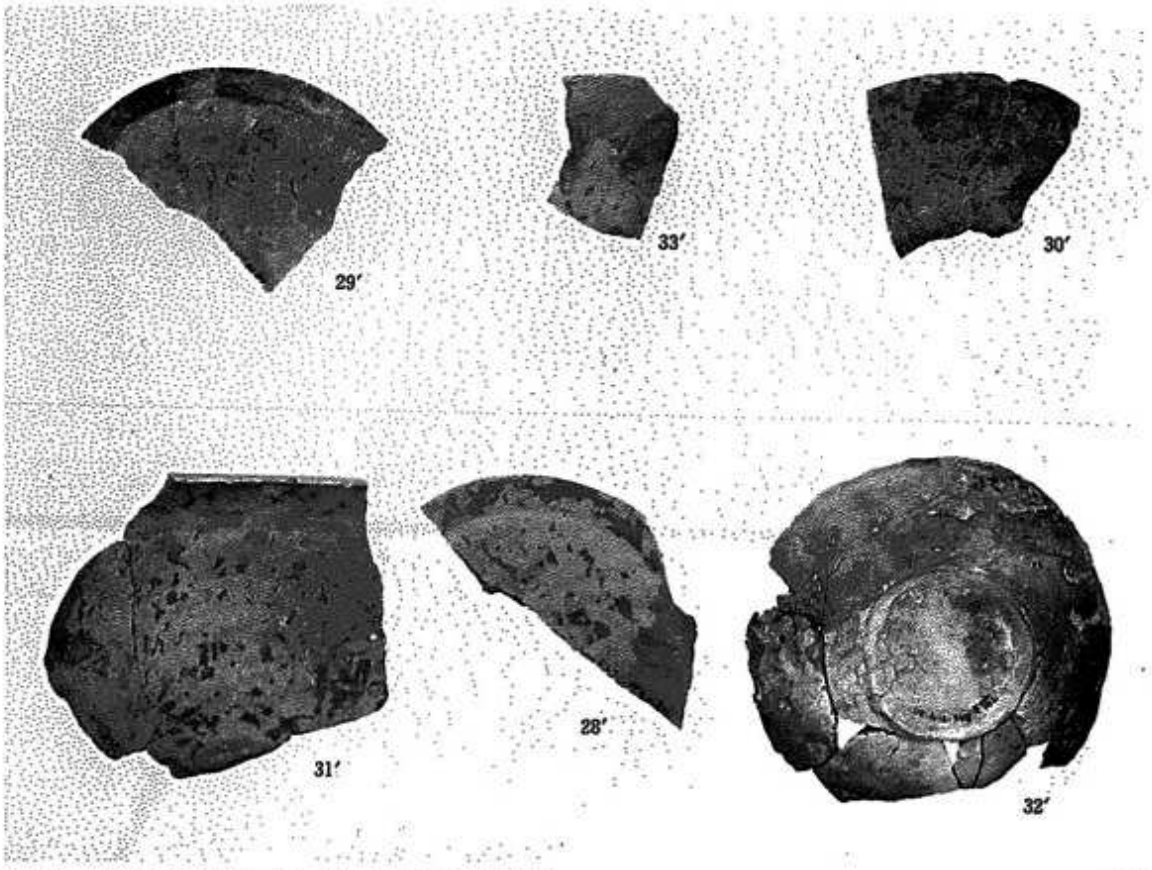
溝A－2（38・42・45・47・49），溝A－20（52・54～56・59）



溝A－36（65～68・70・72・74），溝A－34（76・77・79・80）



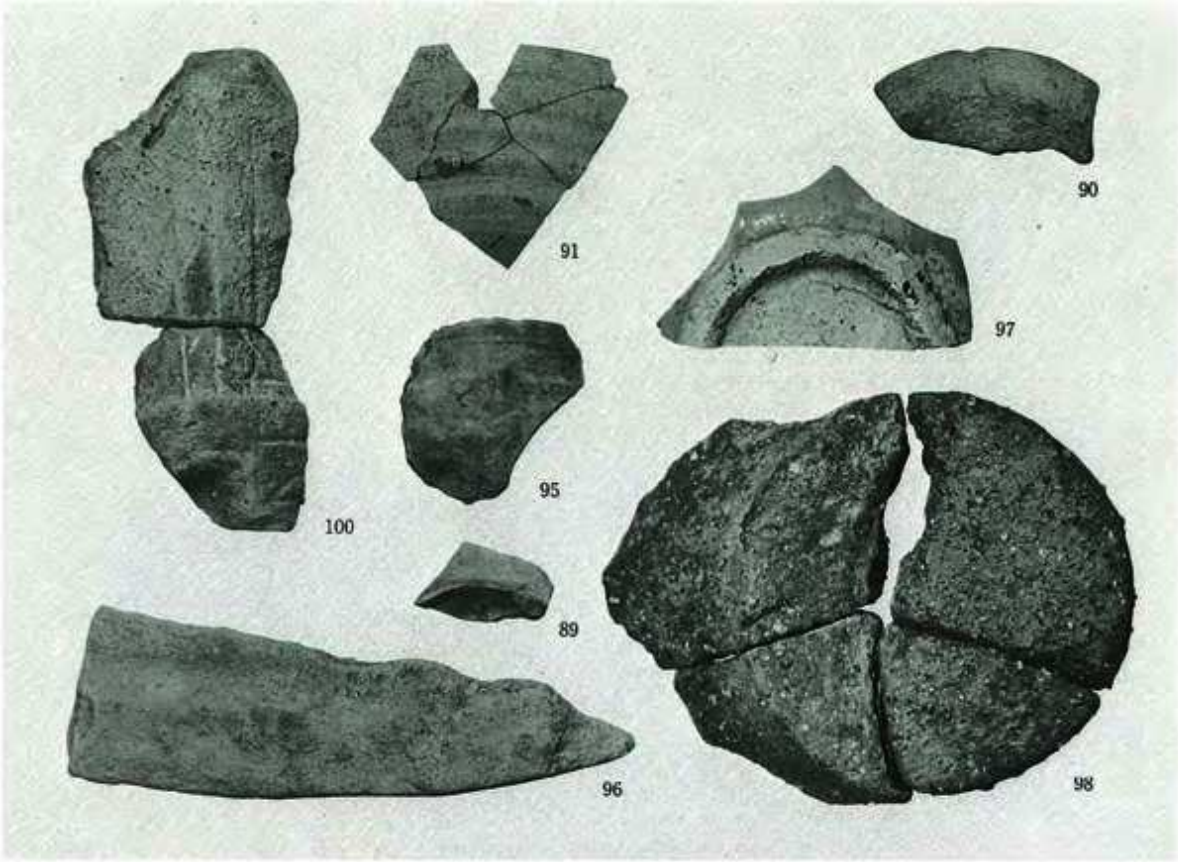
(内側)



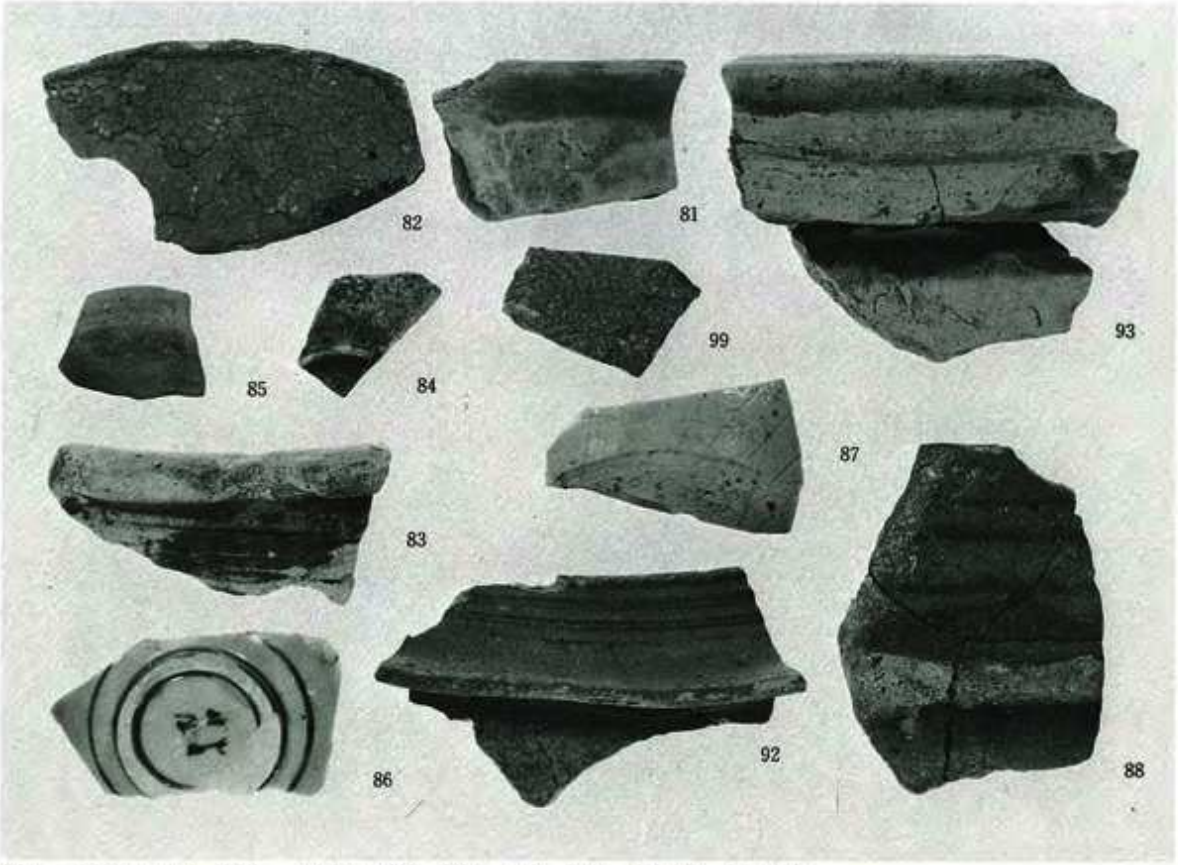
井戸A－3井筒下層（28～31・33），同井筒上層3(32)

(外側)

図版四〇　遺物A調査区出土土器(8)

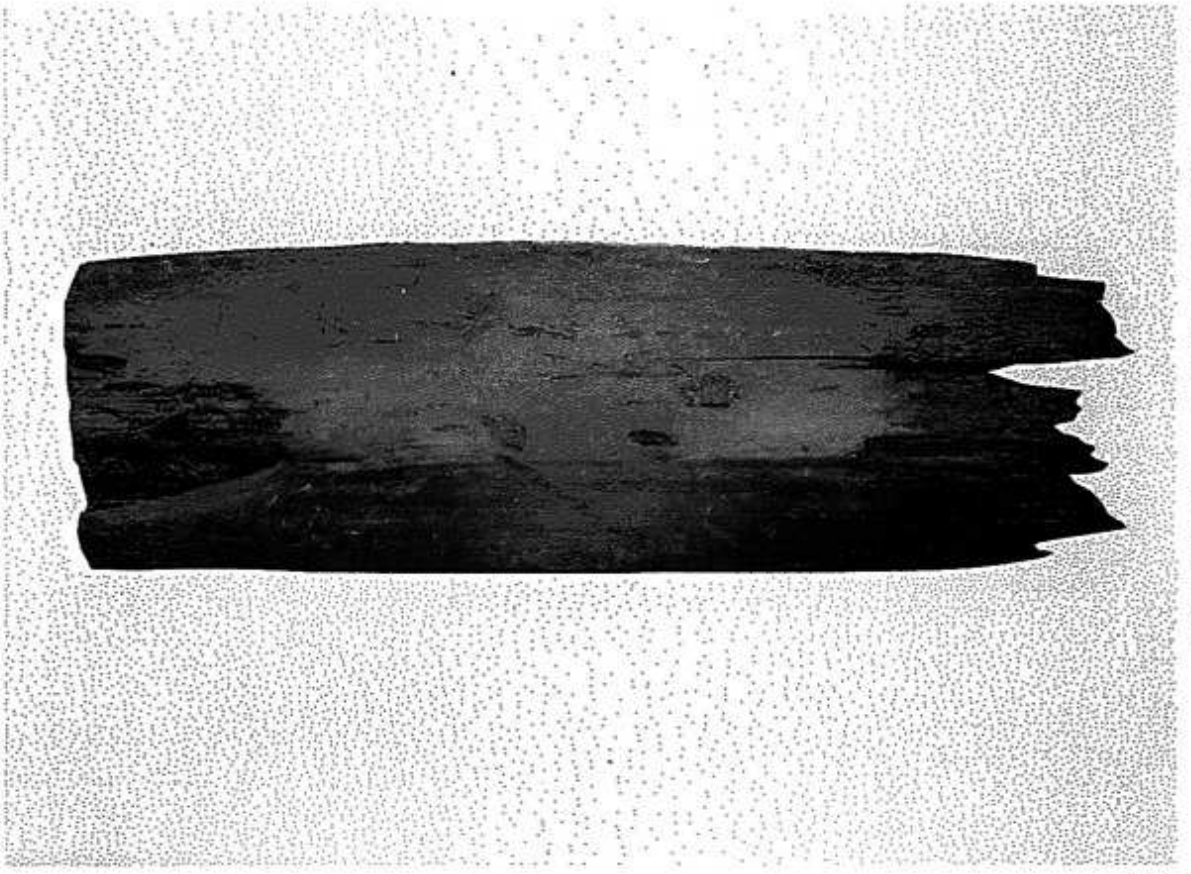


土坑A—59（89～91），溝A—11（96），A—8調査区埋積谷灰茶色粘土層（98・100）
A—9調査区埋積谷灰色粘土層（95），A—10調査区埋積谷褐灰色粘質土層（97）

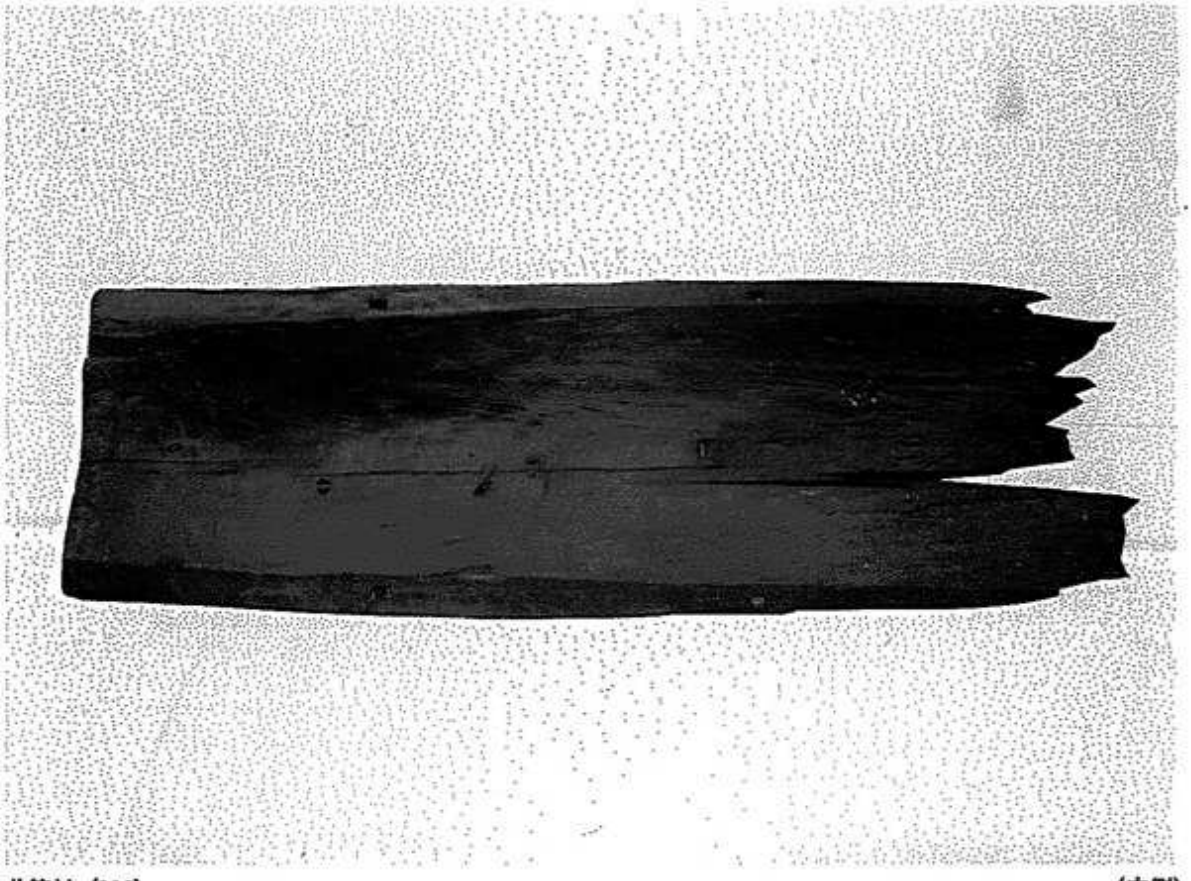


溝A—22（81・82），溝A—40（83・86），溝A—104（99），井戸A—5（88）
東除川旧河道（92・93），A—6調査区黄灰色粘土層（84・85・87）

図版四一　遺物A調査区井戸A—3出土井筒材(1)



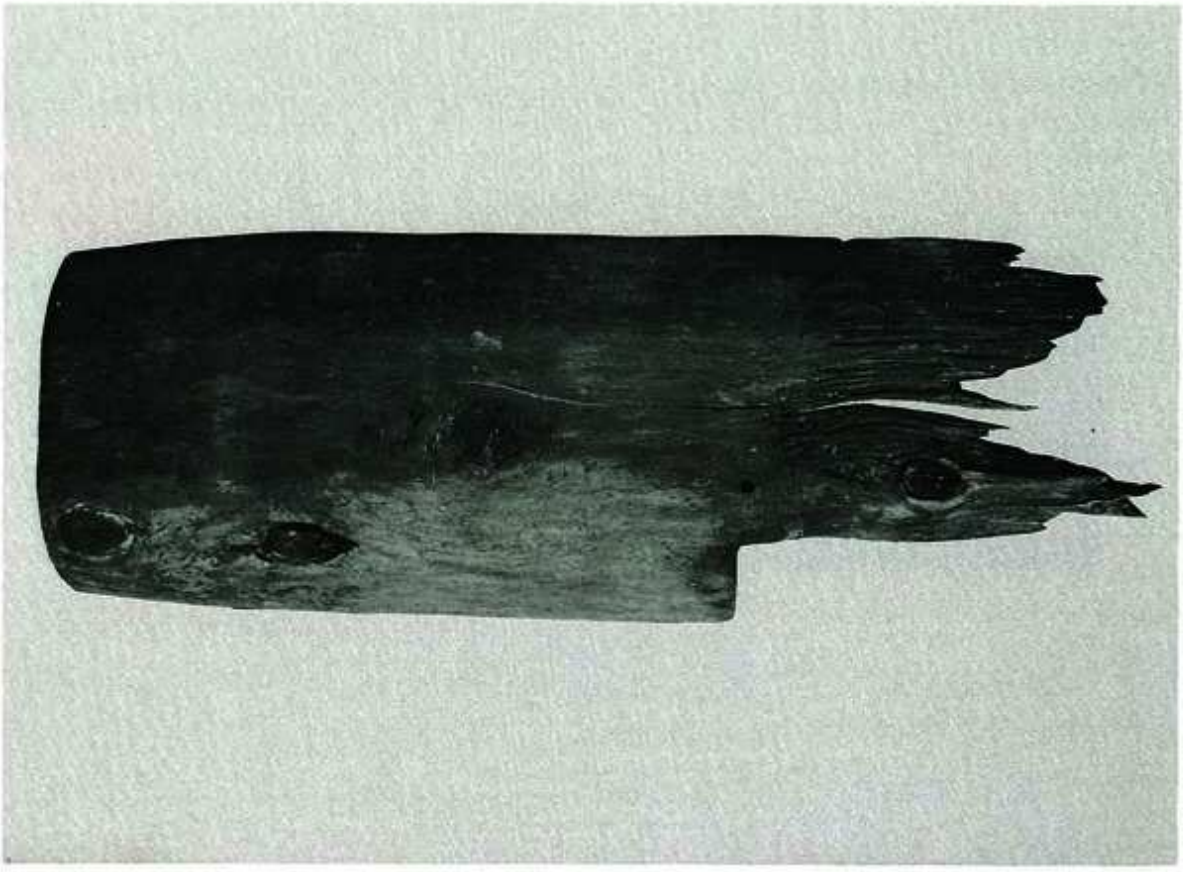
(外側)



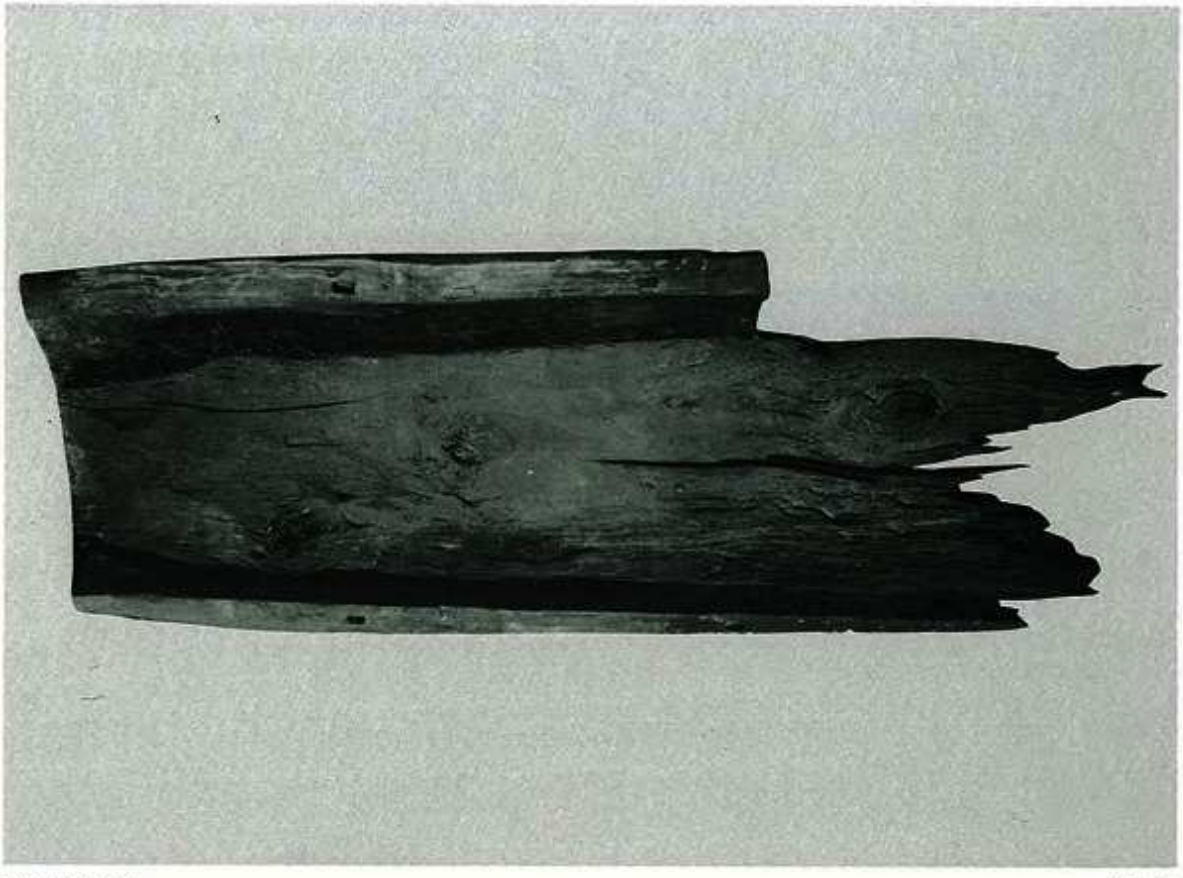
井筒材 (116)

(内側)

図版四二　遺物A調査区井戸A—3出土井筒材(2)

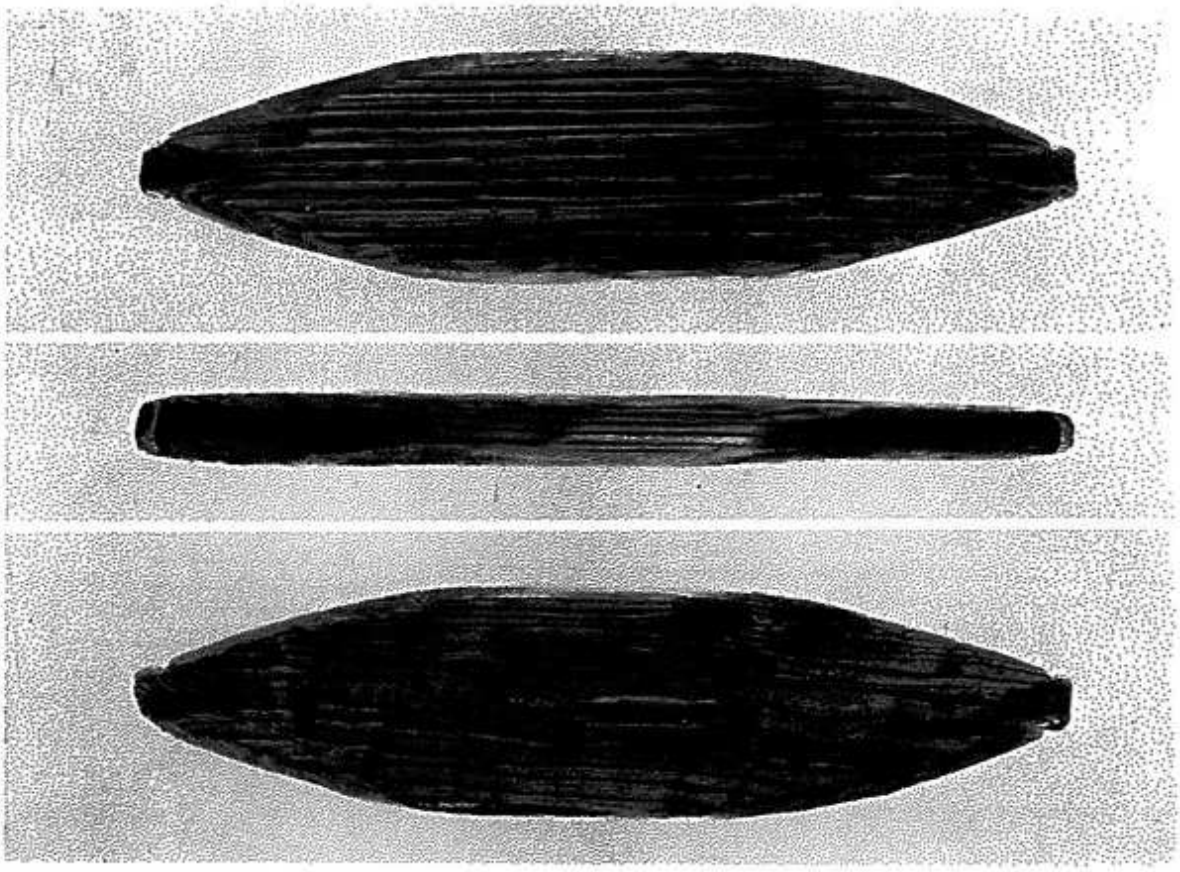


(外側)

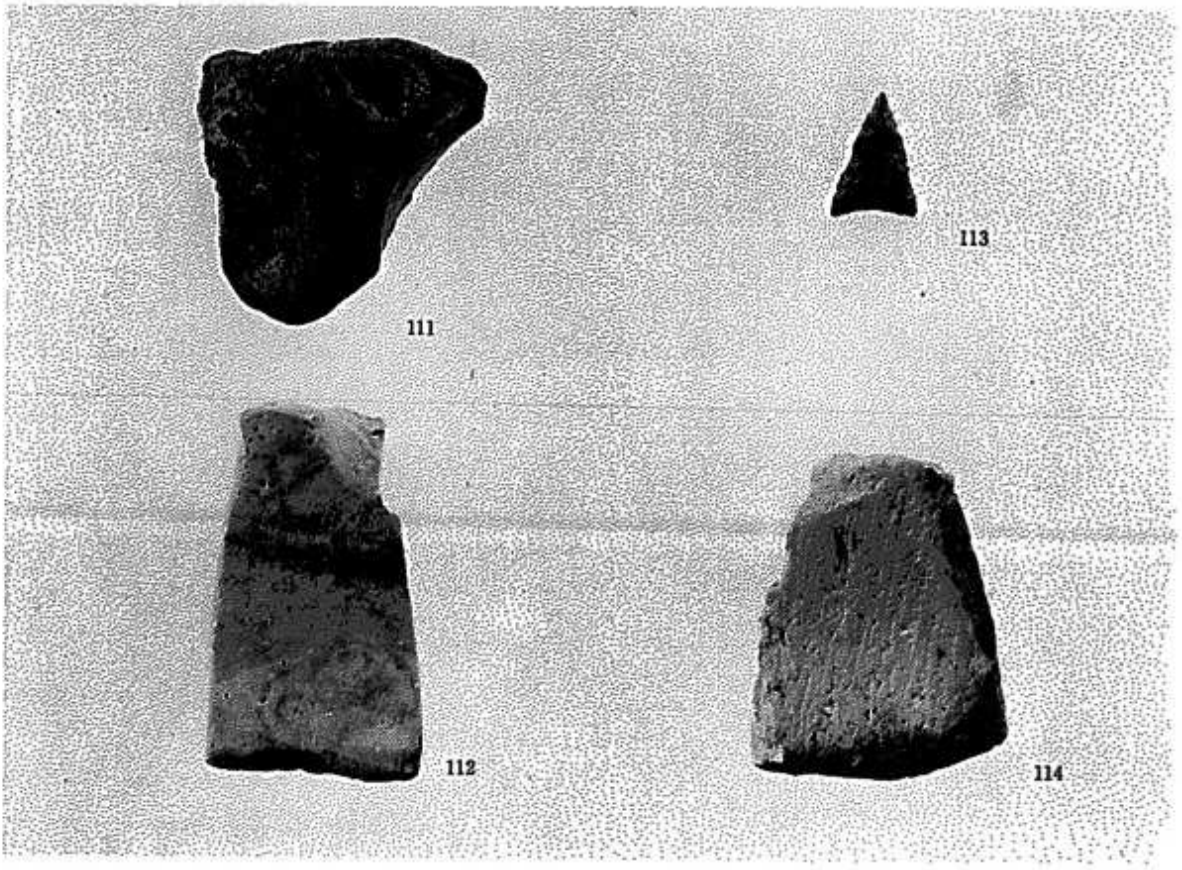


井筒材 (115)　　(内側)

図版四三　遺物A調査区井戸A—3井筒内出土木製品及びA調査区出土石器

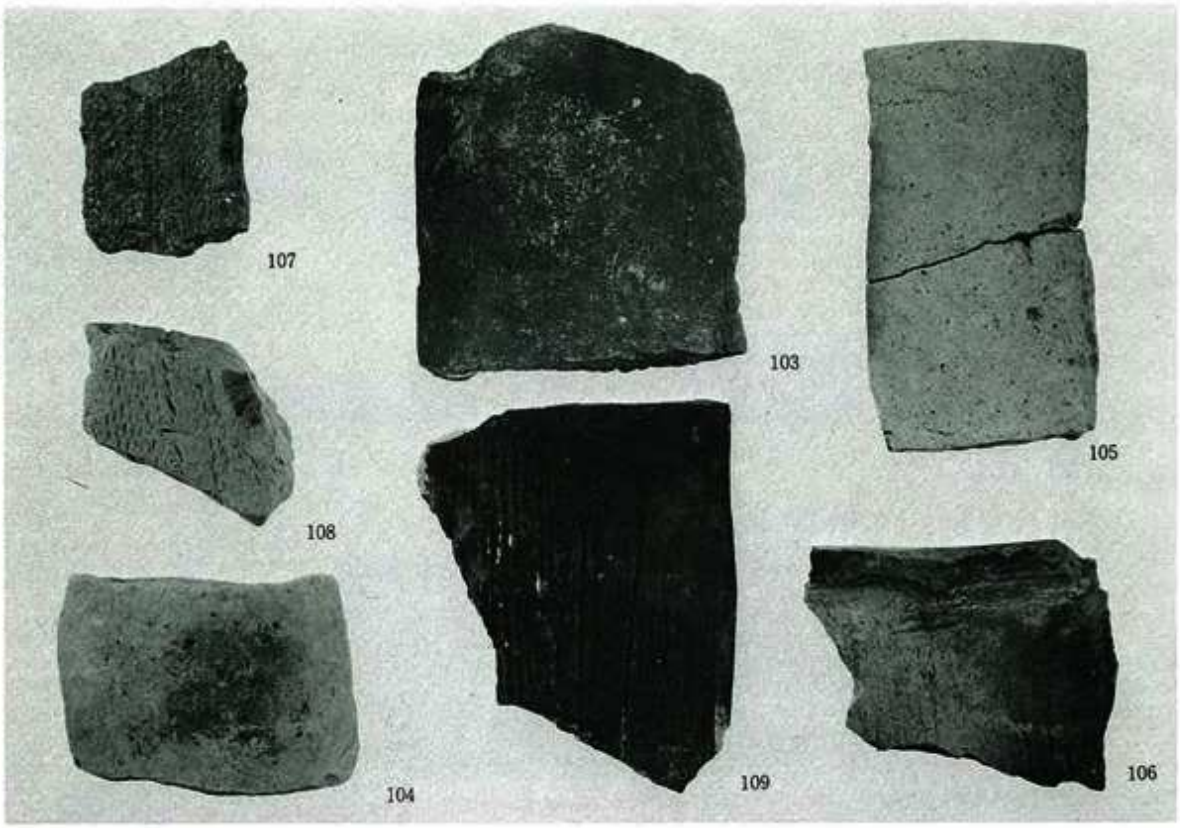


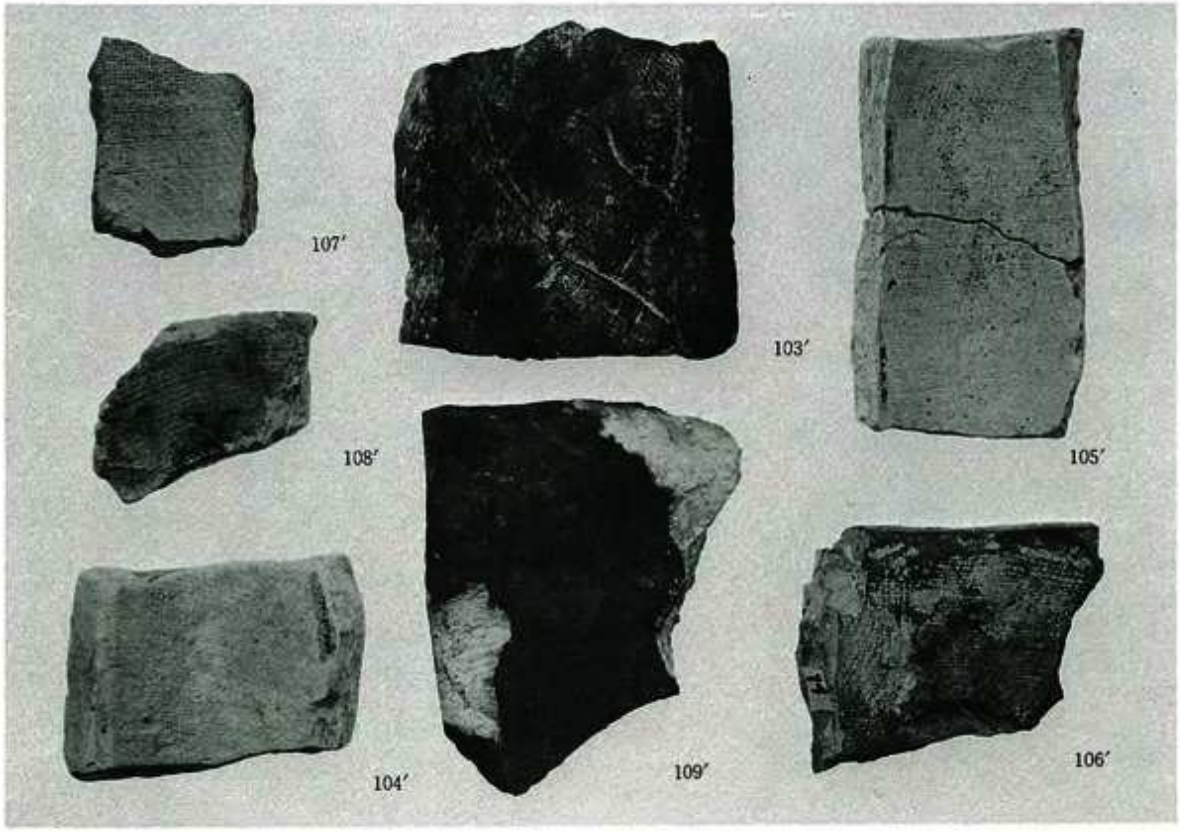
用途不明不製品（118）



A調査区出土石器

図版四四　遺物A調査区出土瓦





PA—66 (103)，溝A—35 (104)，溝A—34 (105)，井戸A—3井筒底部 (106・109)，A—12調査区側溝 (107)，同灰色粘質土 (108)

図版四五　遺構B調査区航空写真

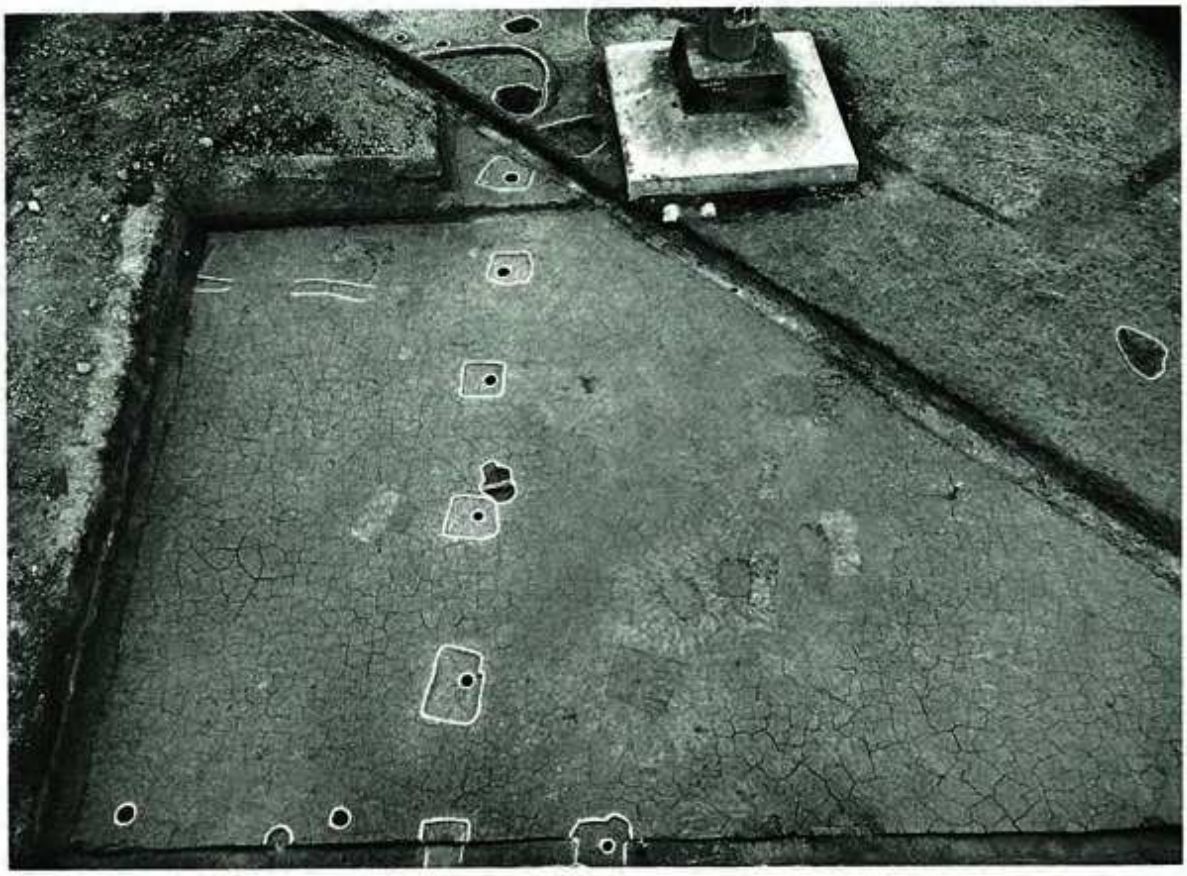
図版四六　遺構C調査区航空写真

図版四七　遺構B1・2調査区全景

B－1調査区（西より）

B－2調査区（南より）

図版四八　遺構B—3・4調査区全景

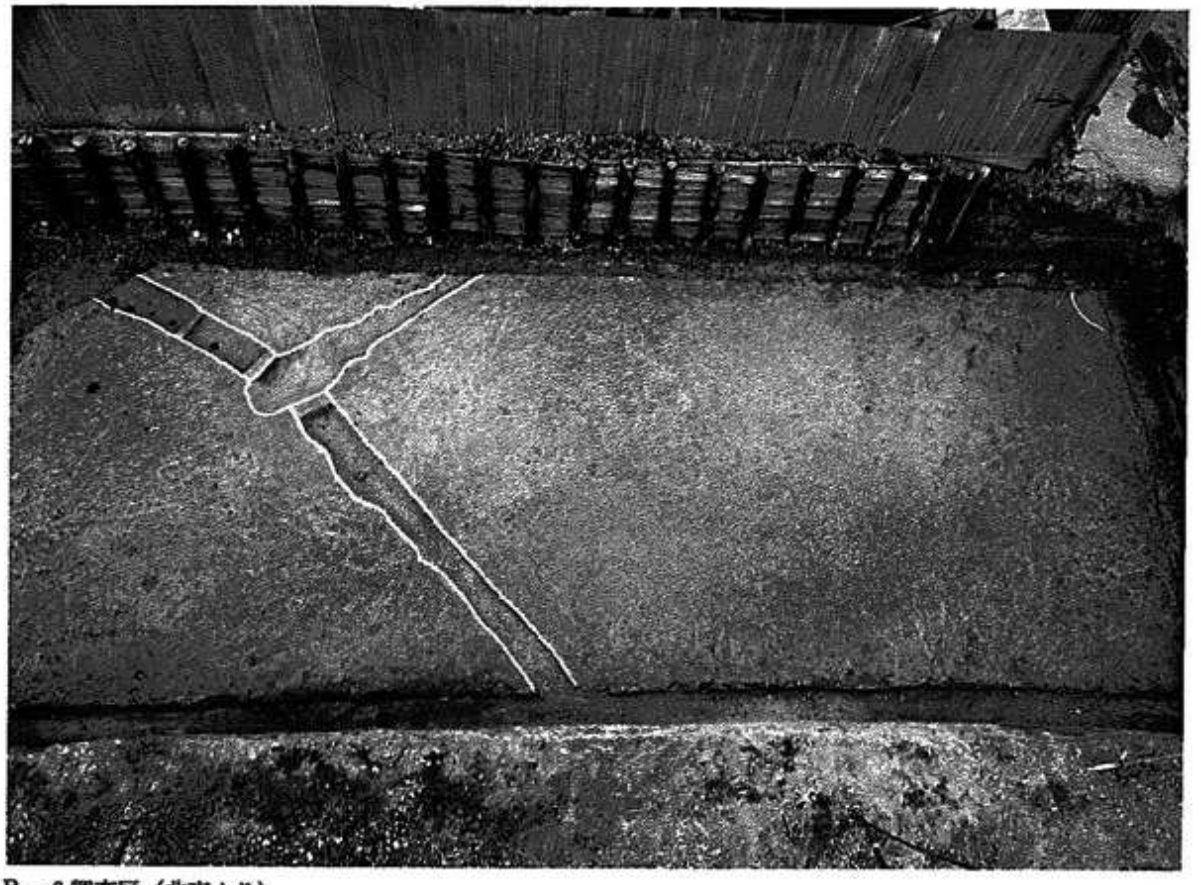


B—3調査区（西より）

B—4調査区（南西より）

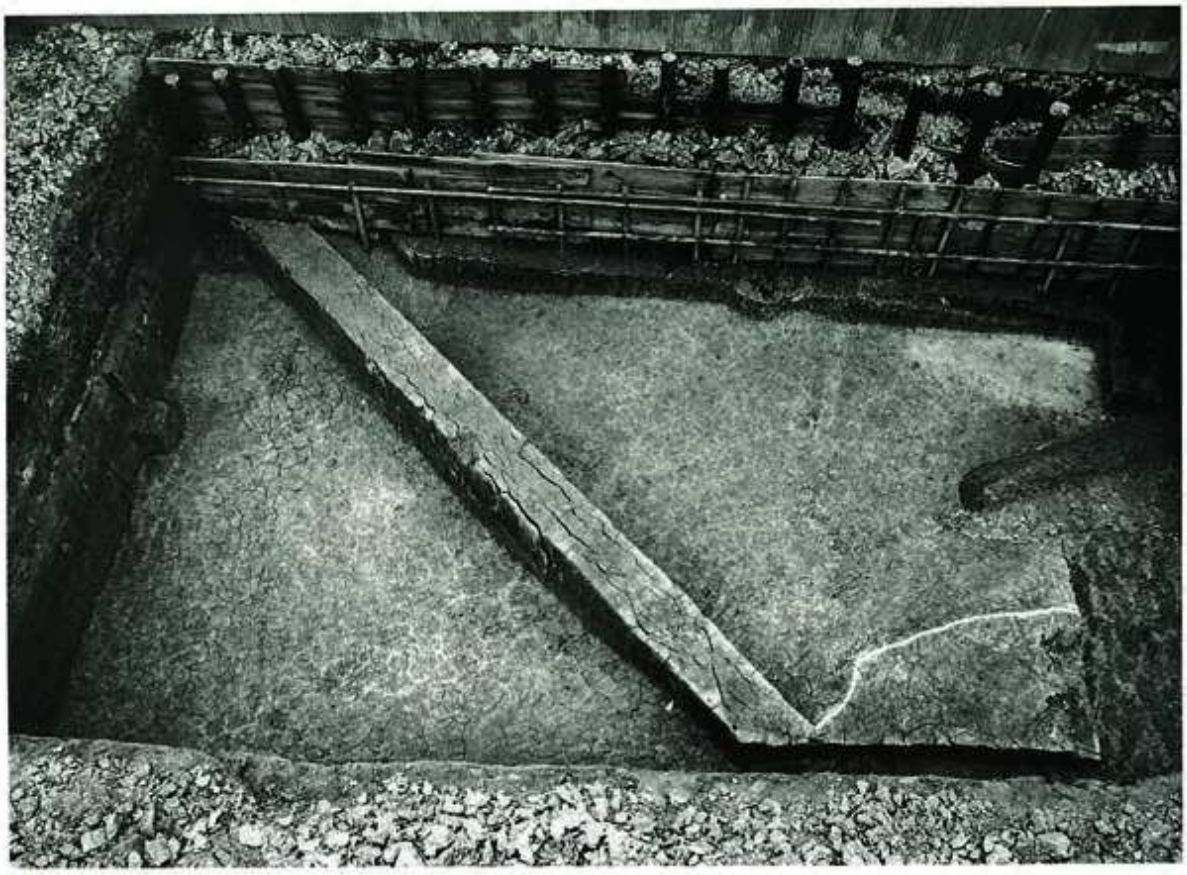
図版四九　遺構B—5・6調査区全景

B—5調査区（第1遺構面）（南西より）



B—6調査区（北東より）

図版五〇　遺構B—7・2調査区全景

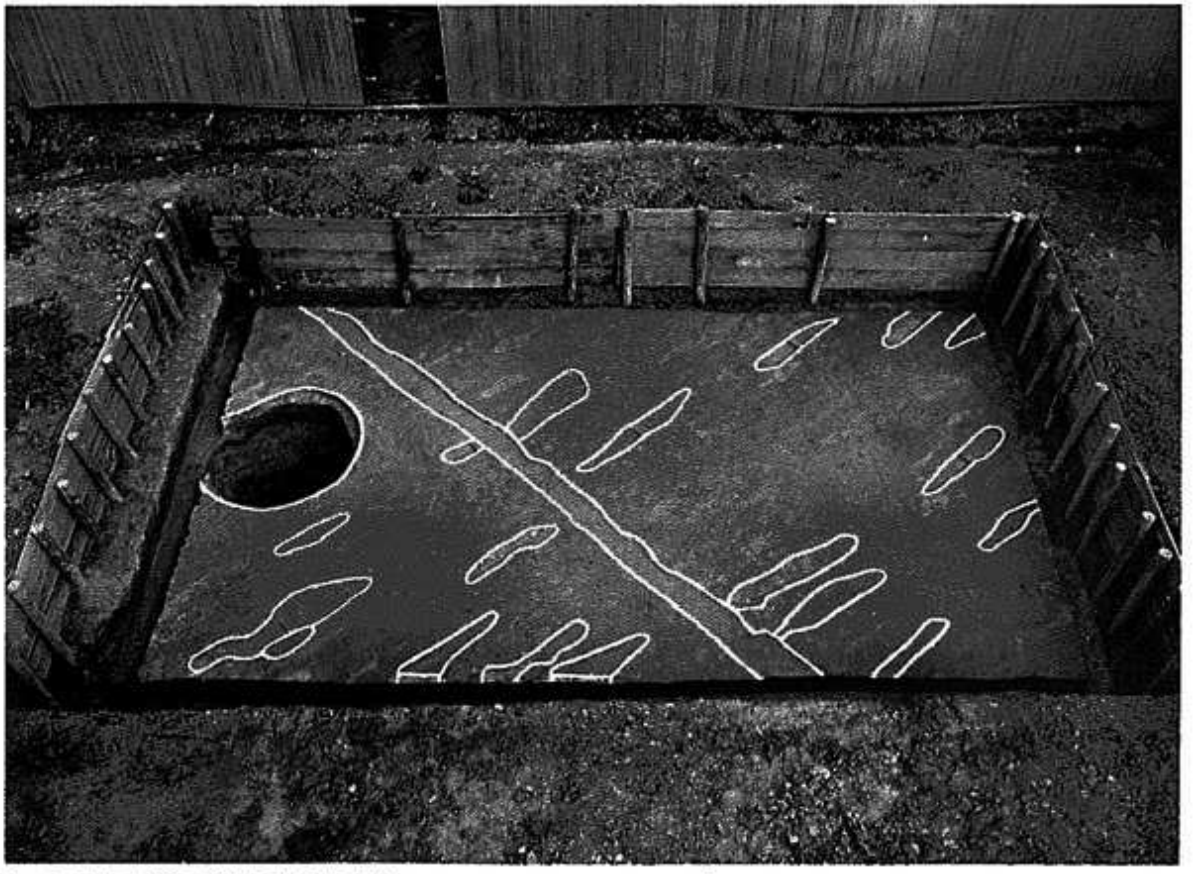


B—7調査区（北東より）

B—2調査区（第1遺構面）（南より）

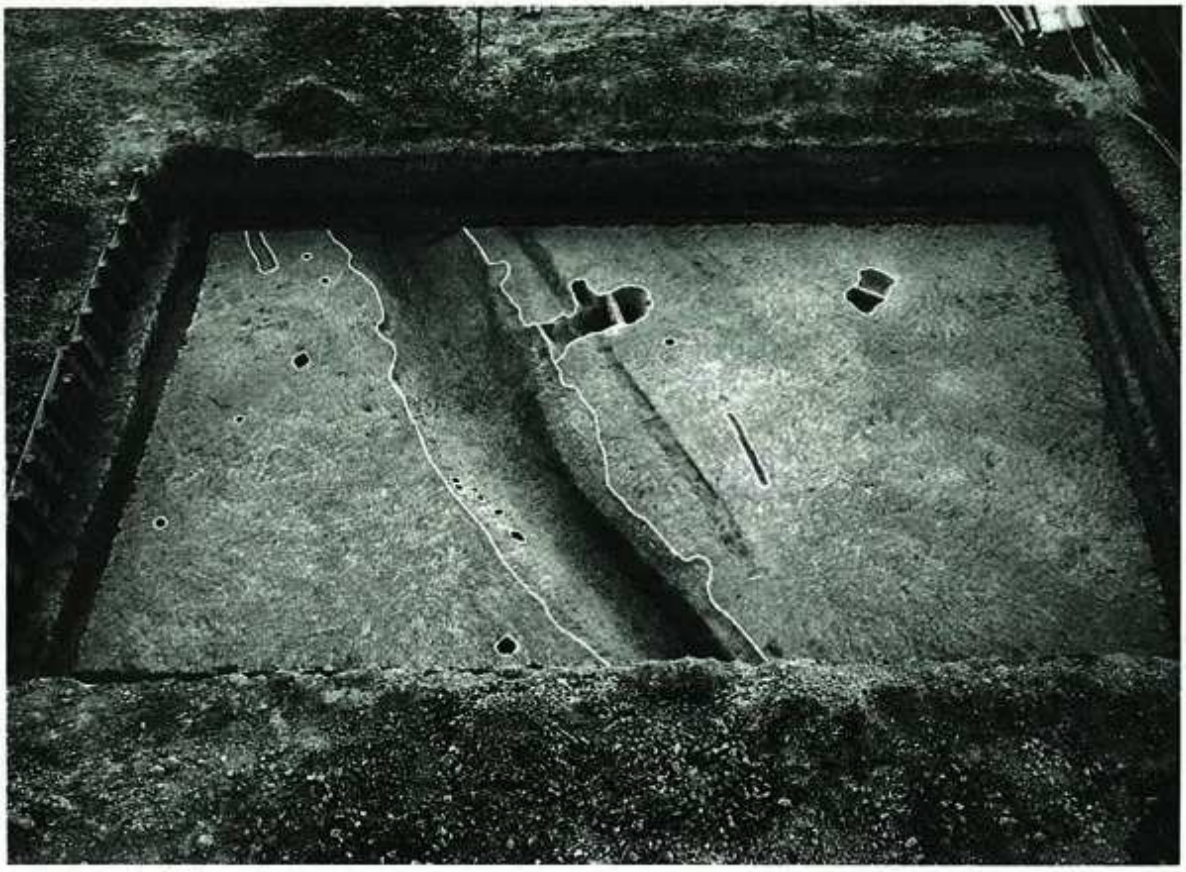
図版五一　遺構C—1・2調査区全景

C—1調査区（南西より）

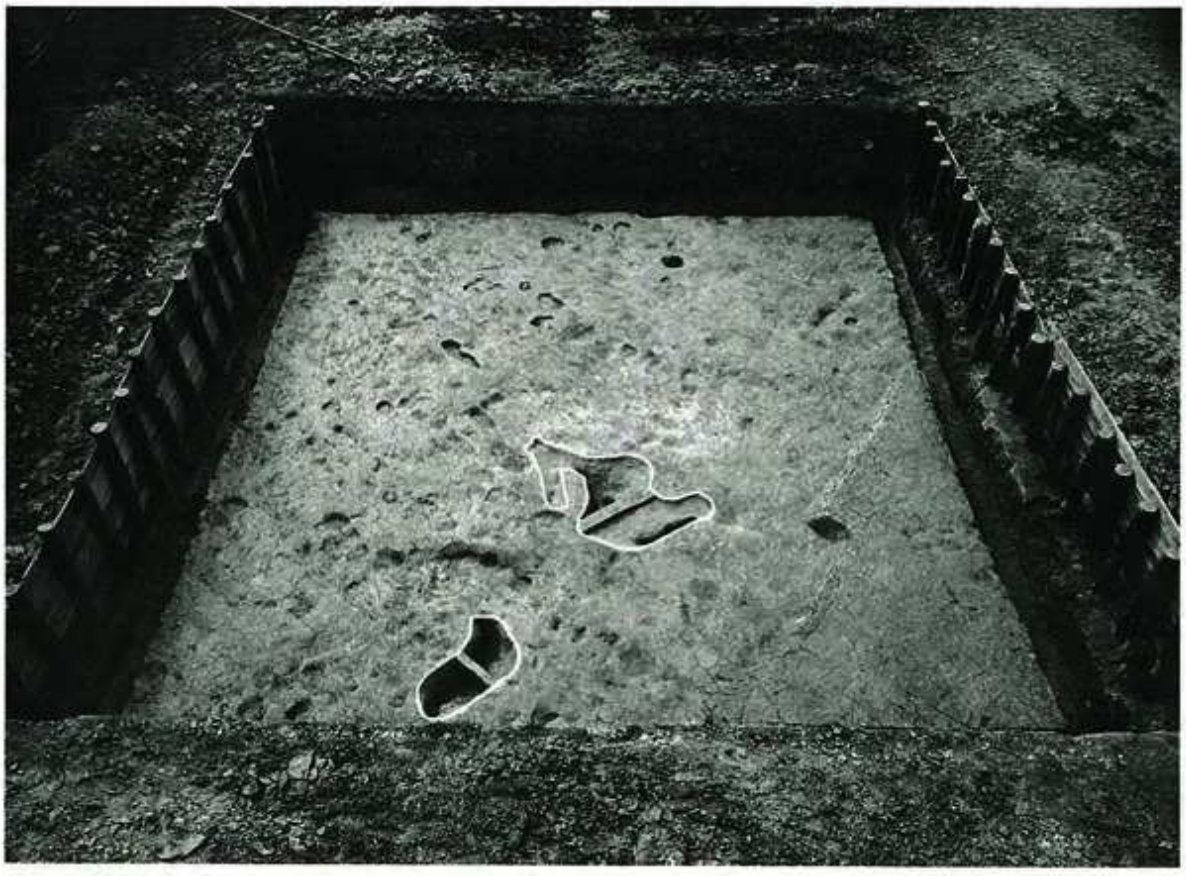


C—2調査区（第1遺構面）（南西より）

図版五二　遺構C—3・4調査区全景

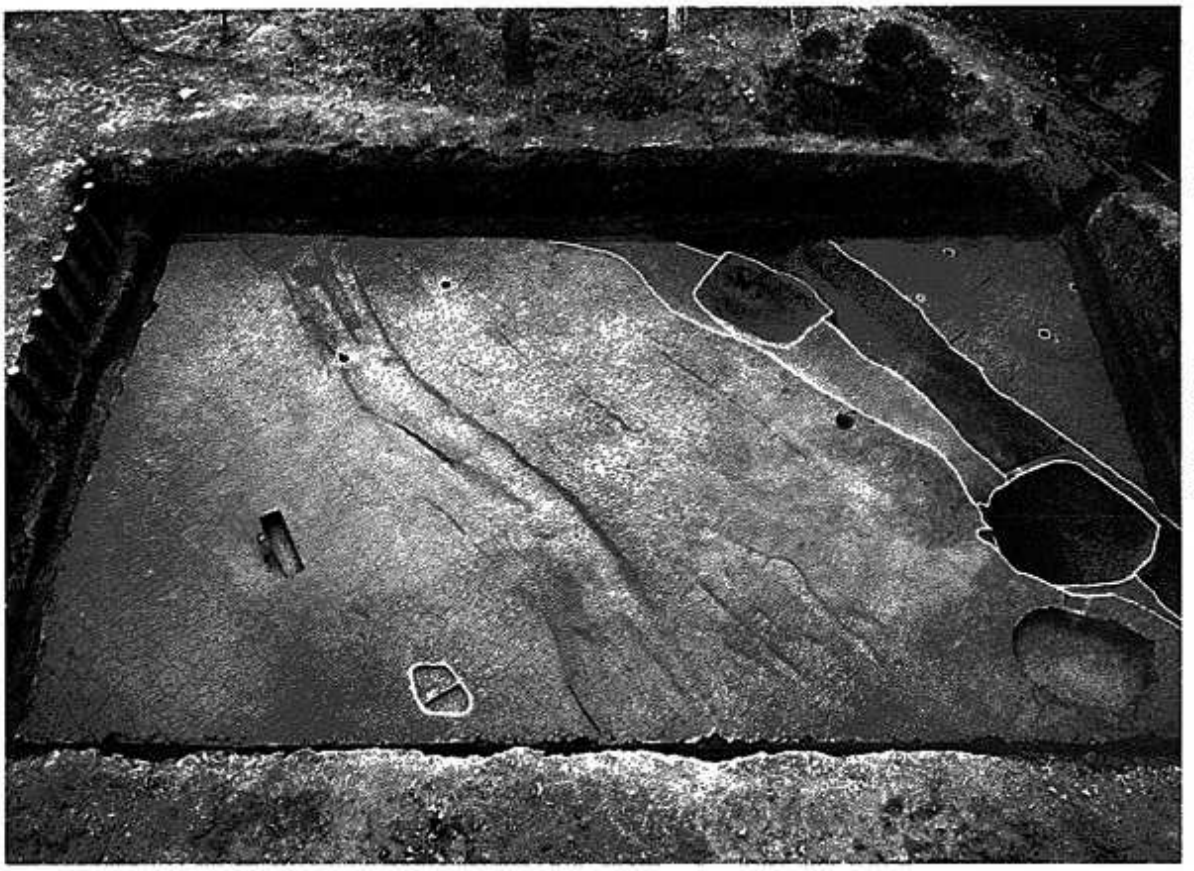


C—3調査区（北東より）

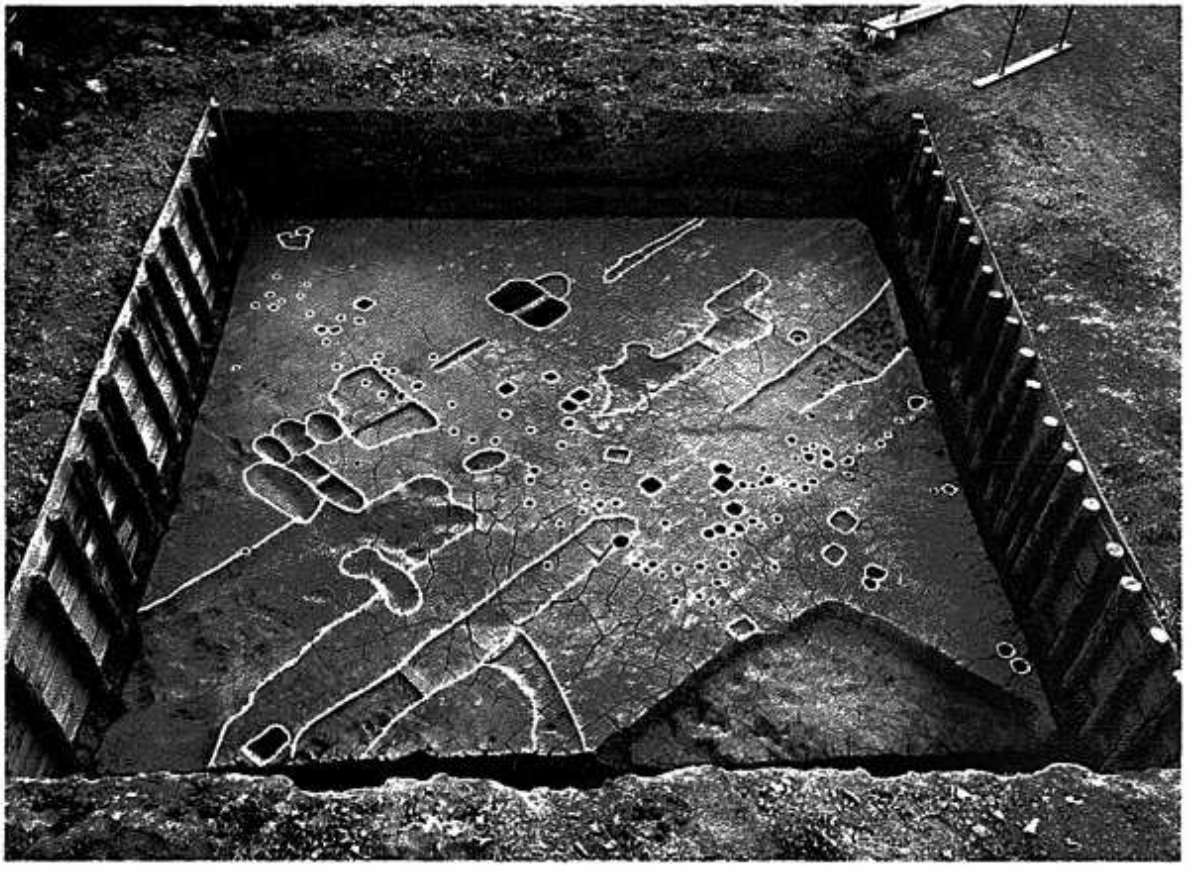


C—4調査区（北東より）

図版五三　遺構C—5・6調査区全景

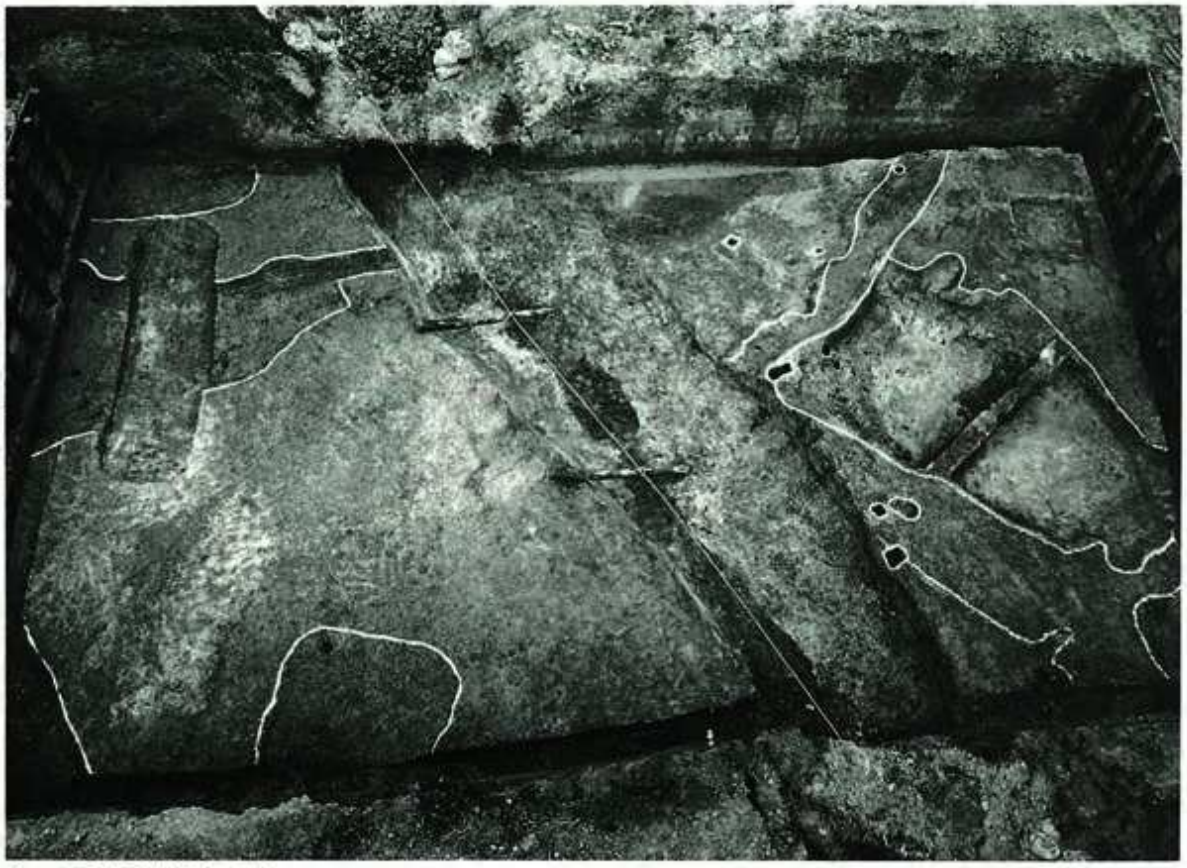


C—5調査区（北東より）

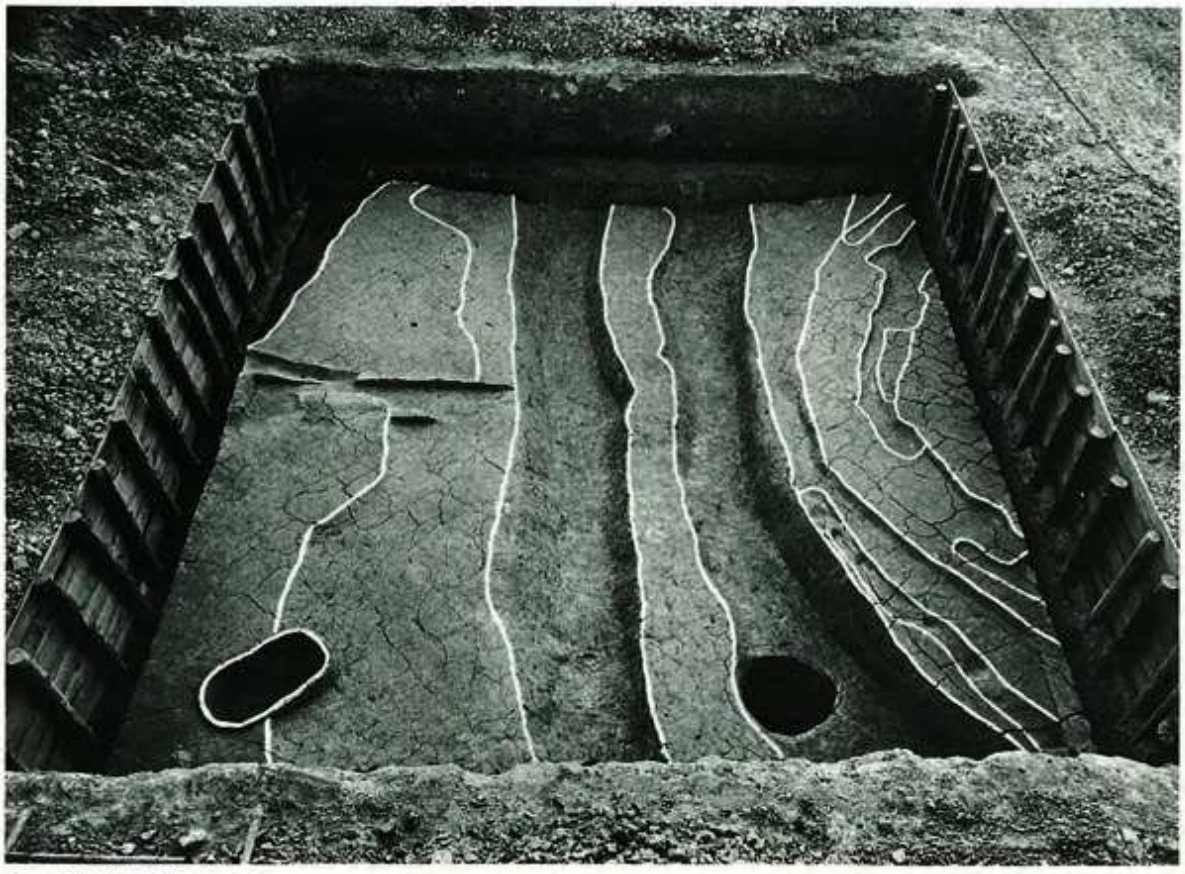


C—6調査区（第1遺構面）（北東より）

図版五四　遺構C—7・8調査区全景



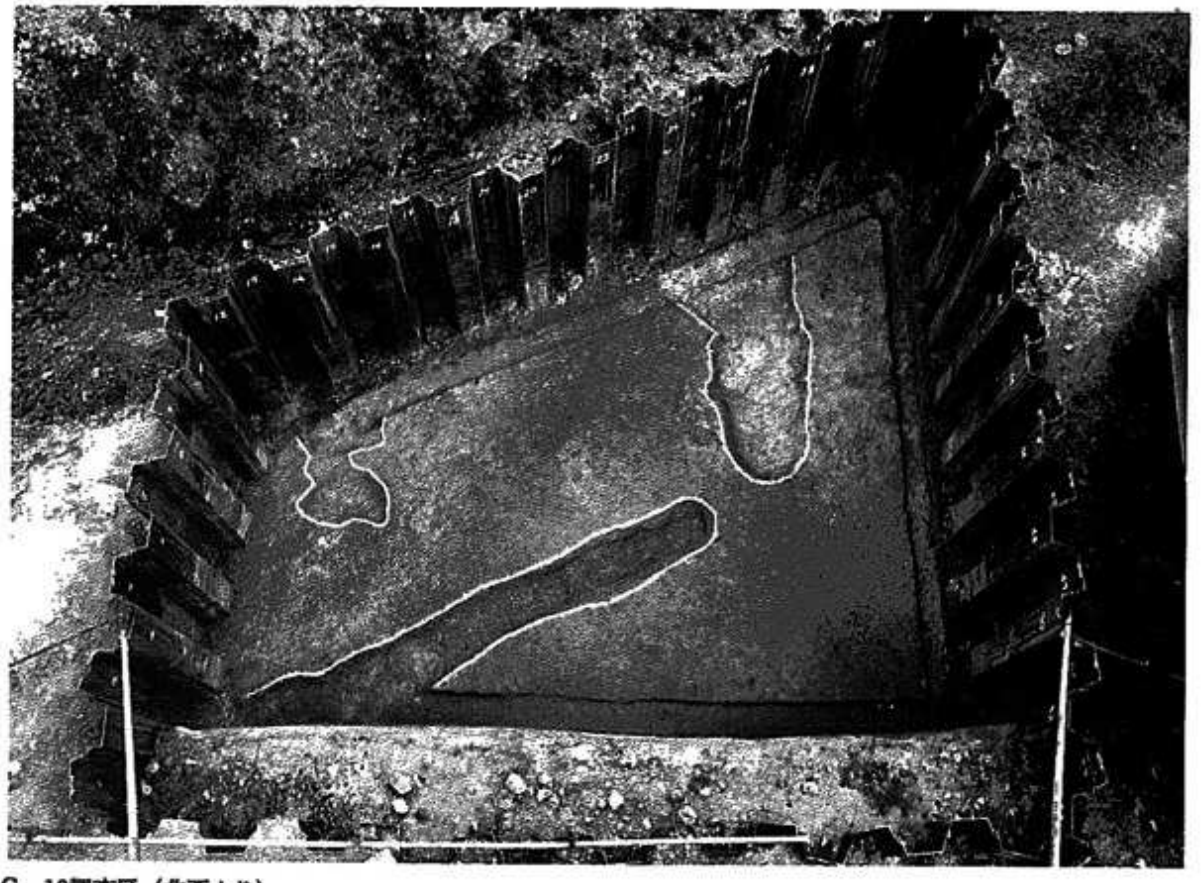
C—7調査区（南西より）



C—8調査区（北東より）

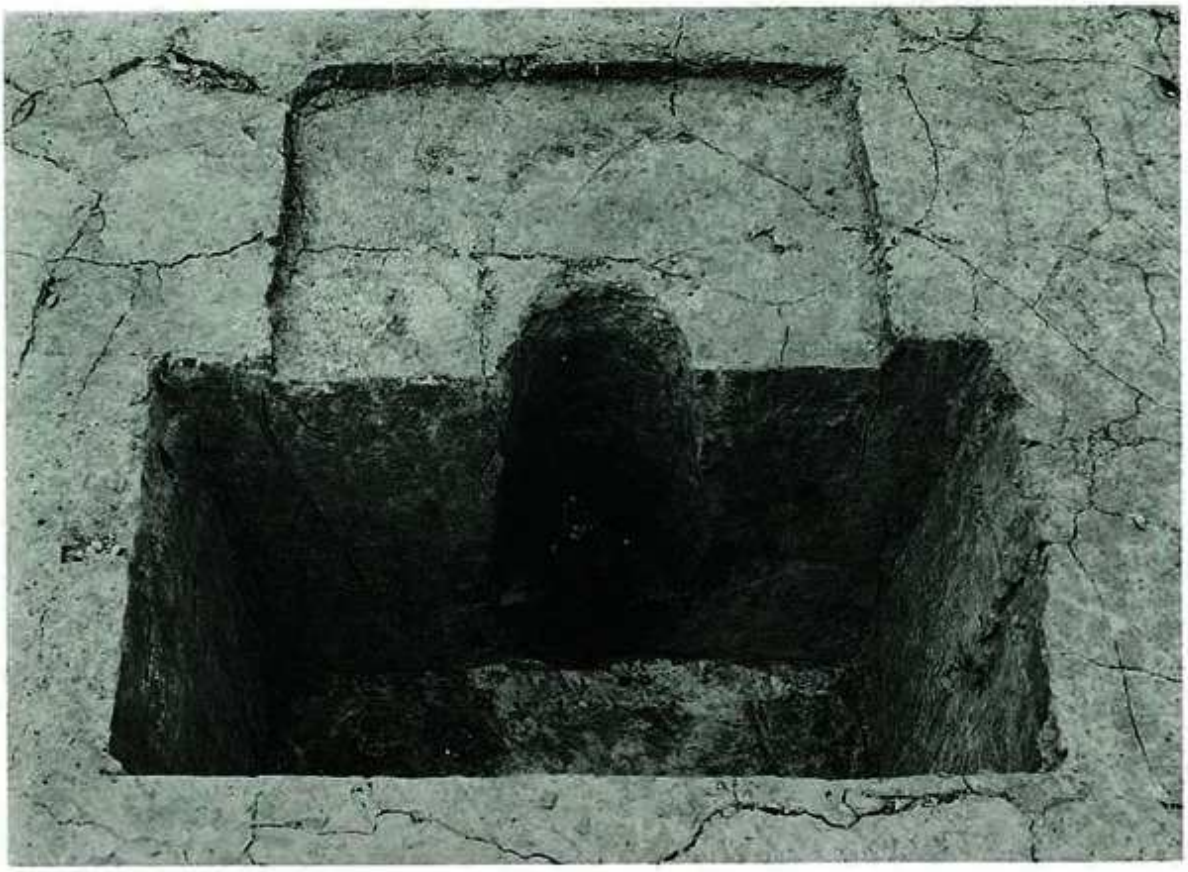
図版五五　遺構C—9・10調査区全景

C—9調査区（北東より）

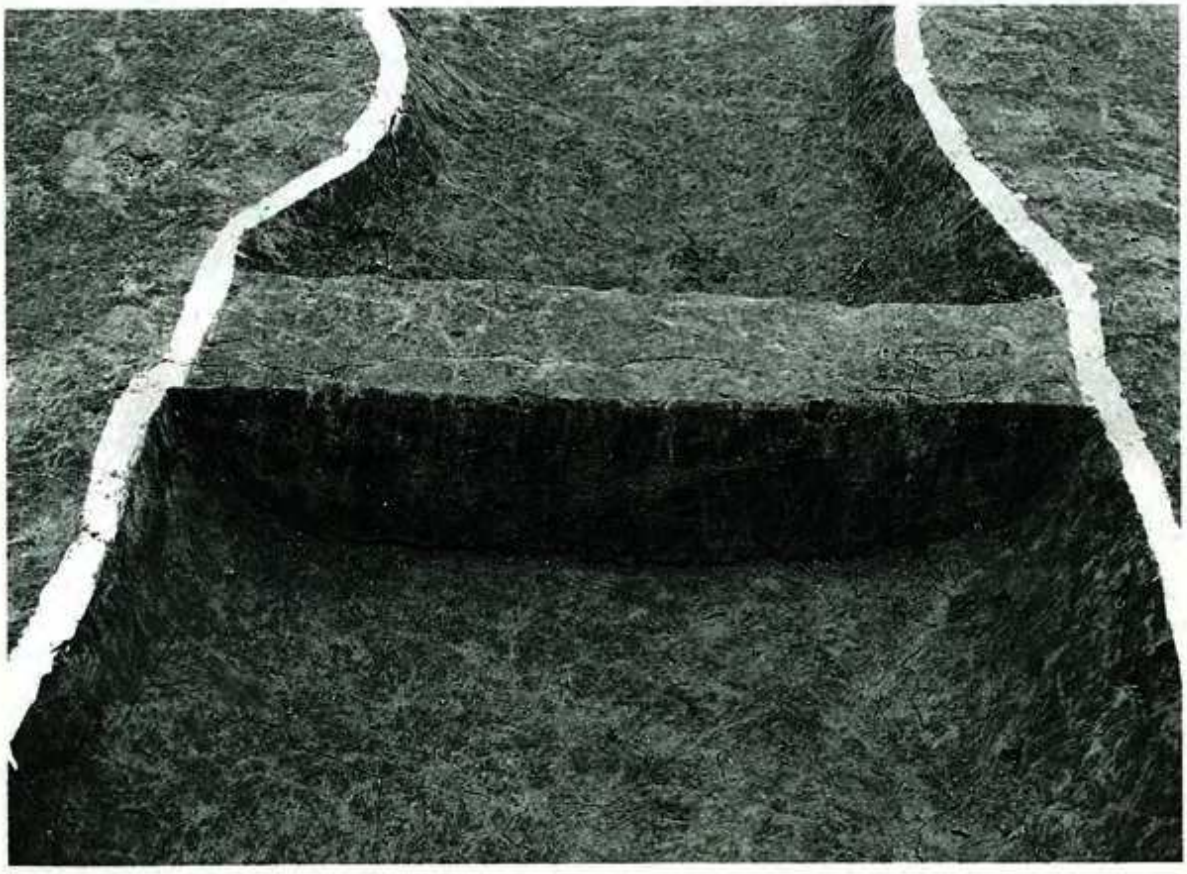


C—10調査区（北西より）

図版五六　遺構B調査区遺構断面(1)

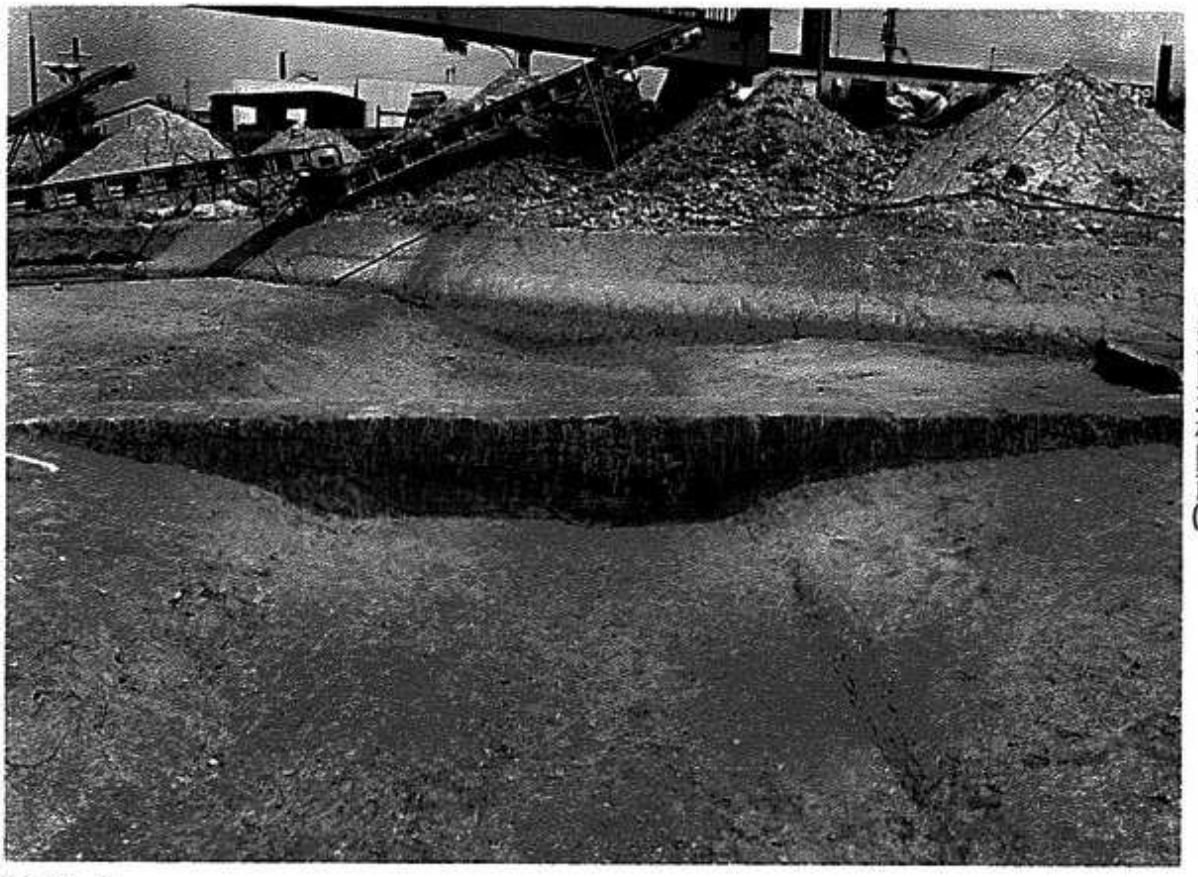


樋B－1（PB11）掘方

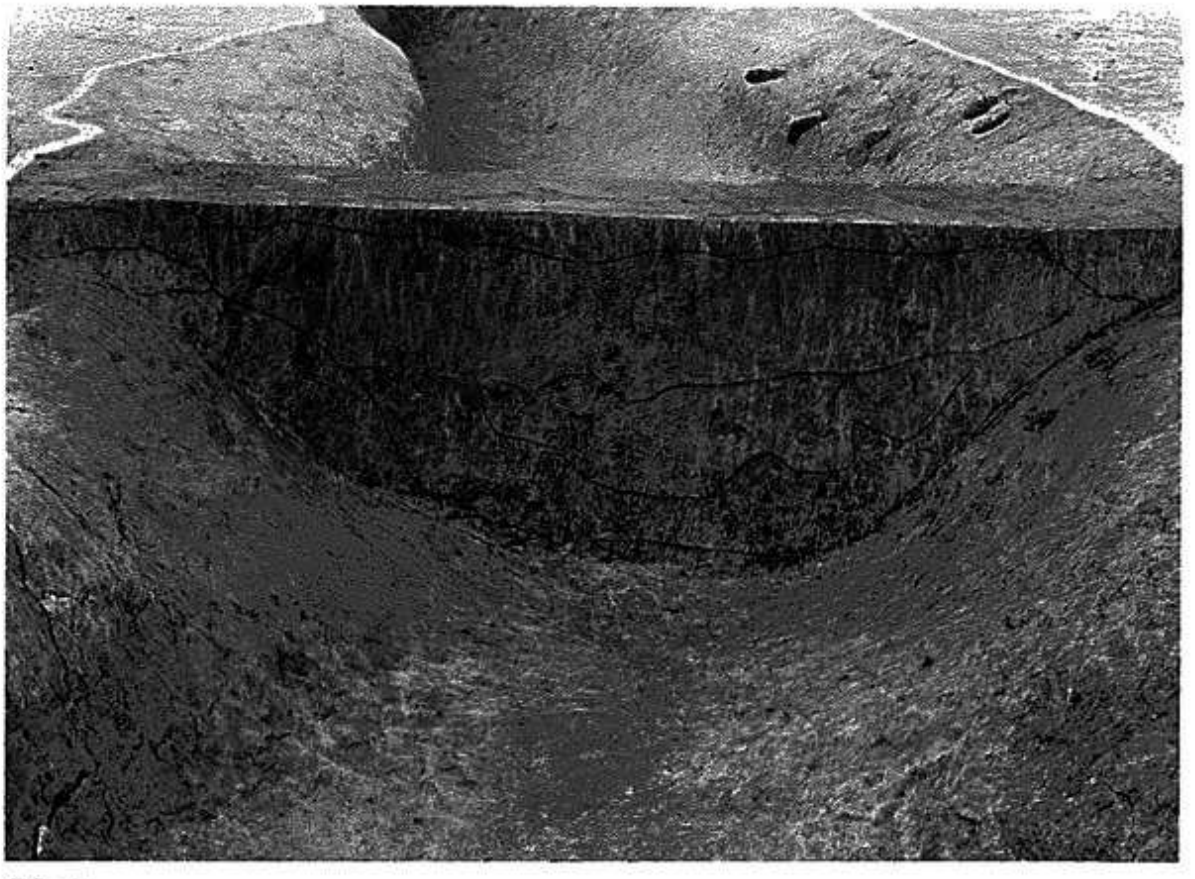


溝B－2

図版五七　遺構B・C調査区遺構断面(2)

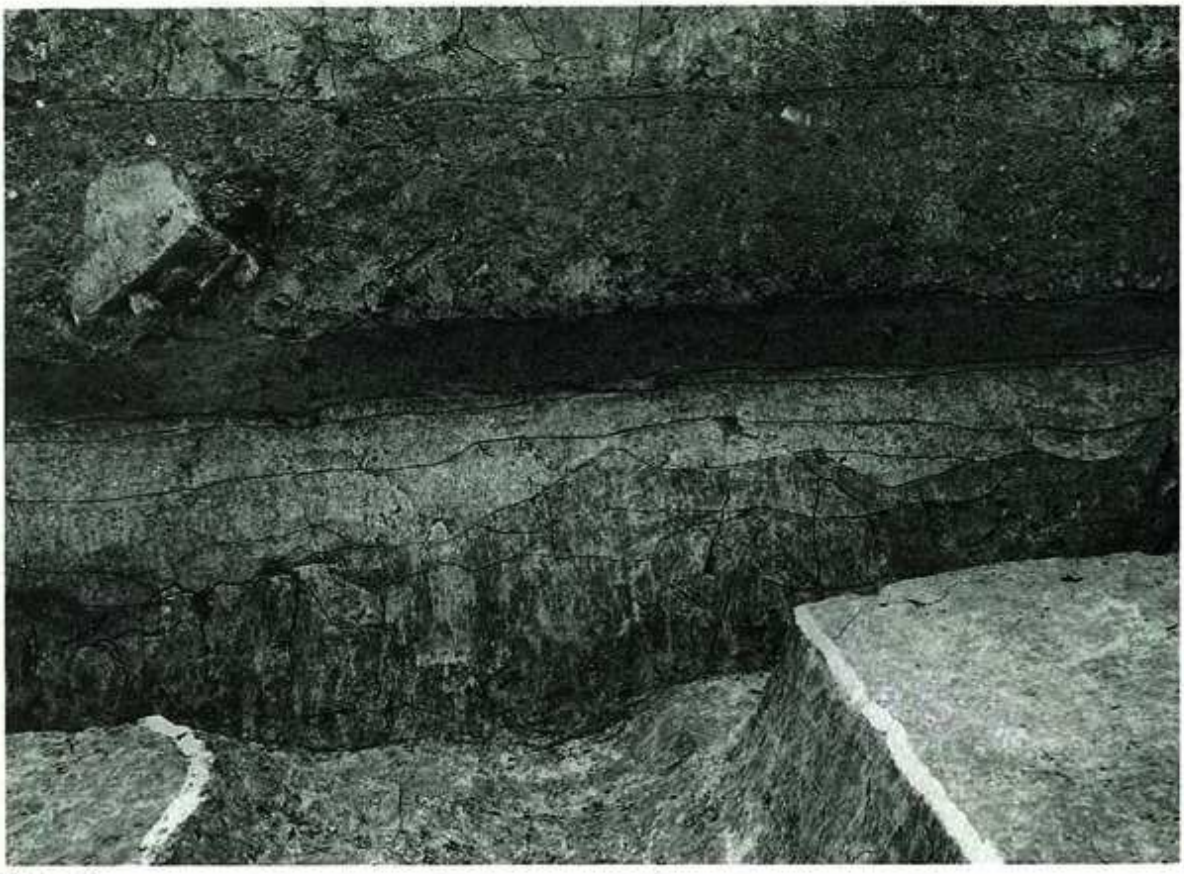


溝BW－6



溝C－1

図版五八　遺構C調査区遺構断面(3)



溝C—2

溝C—18

図版五九　遺構C調査区遺構断面(4)・遺物出土状況(1)

土坑C—27

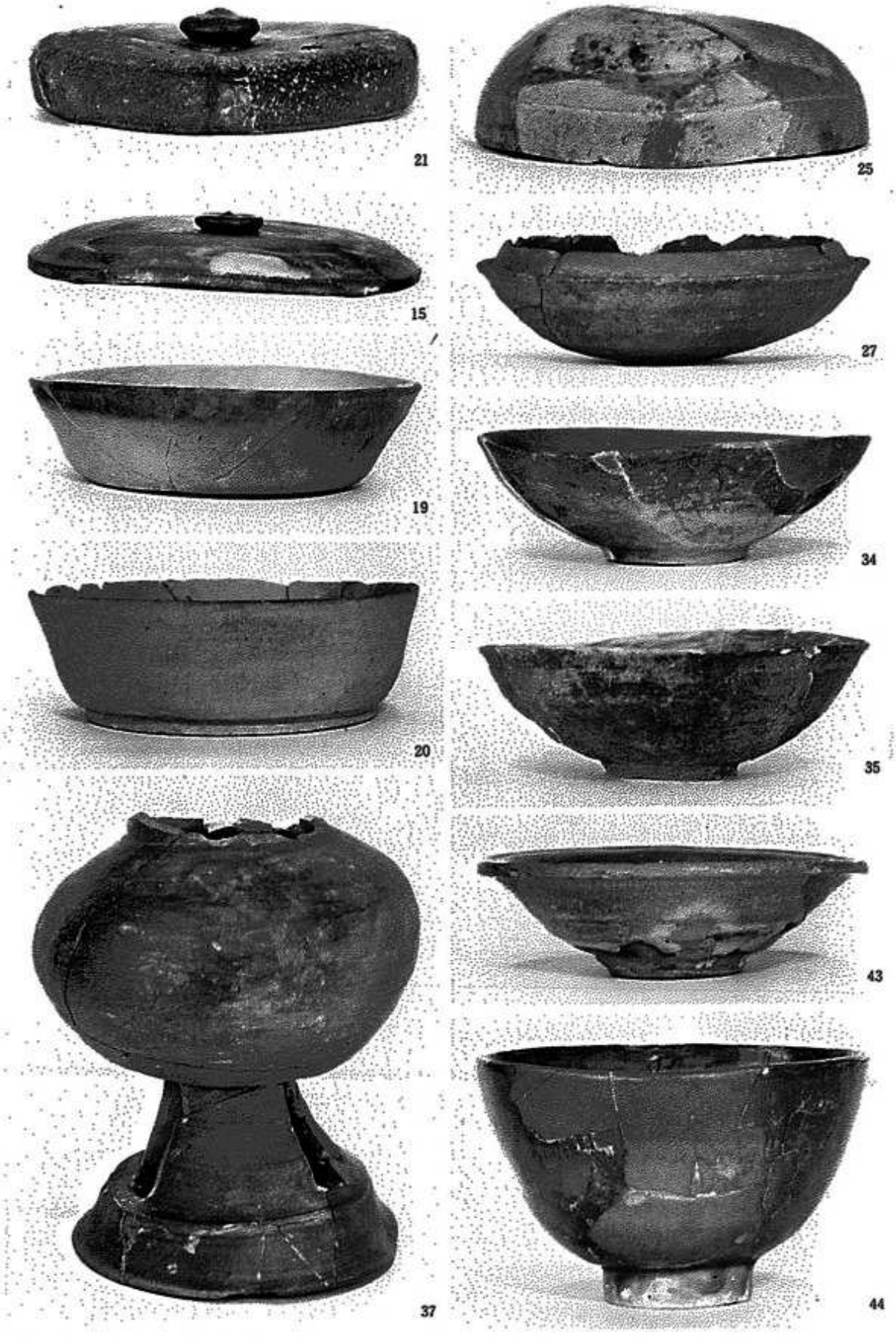
溝C—1～2遺物出土状況全景

図版六〇　遺構C調査区遺物出土状況(2)

溝C—1

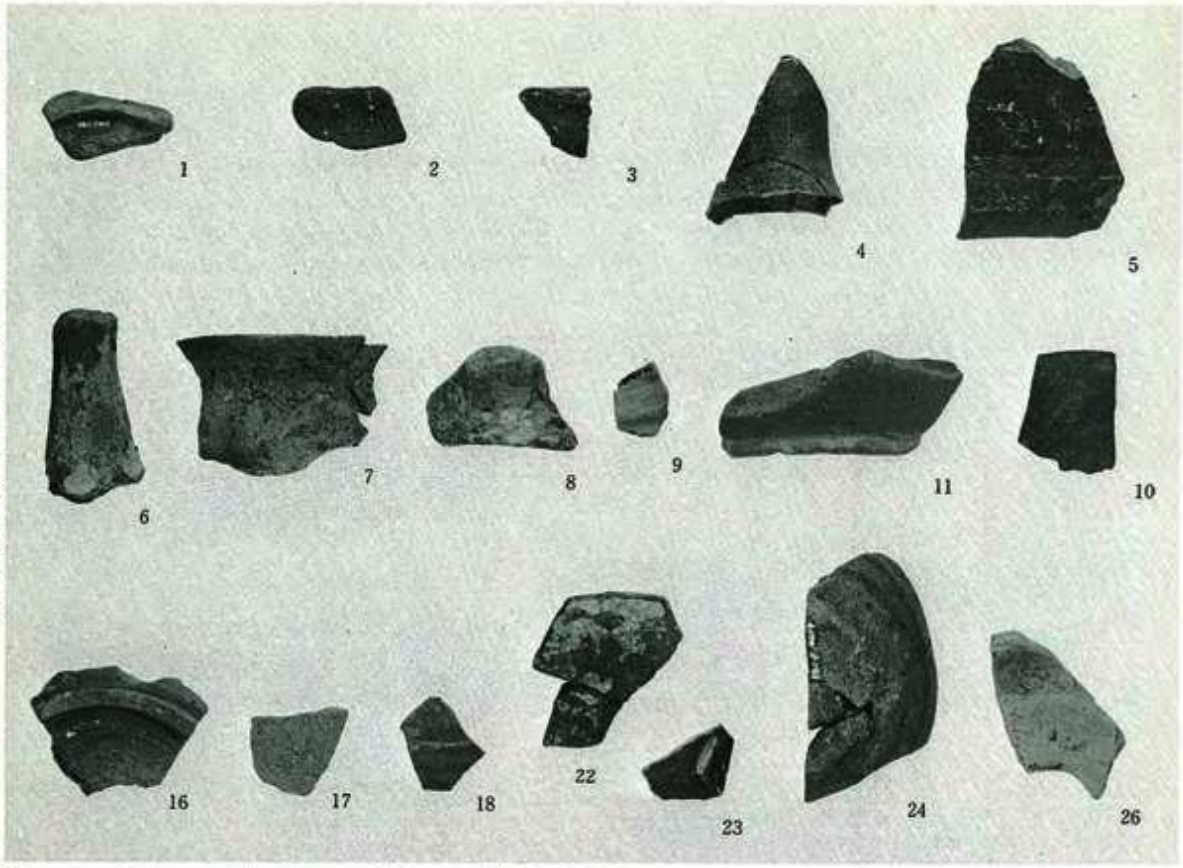
溝C—18

図版六一　遺物B・C調査区出土土器(1)

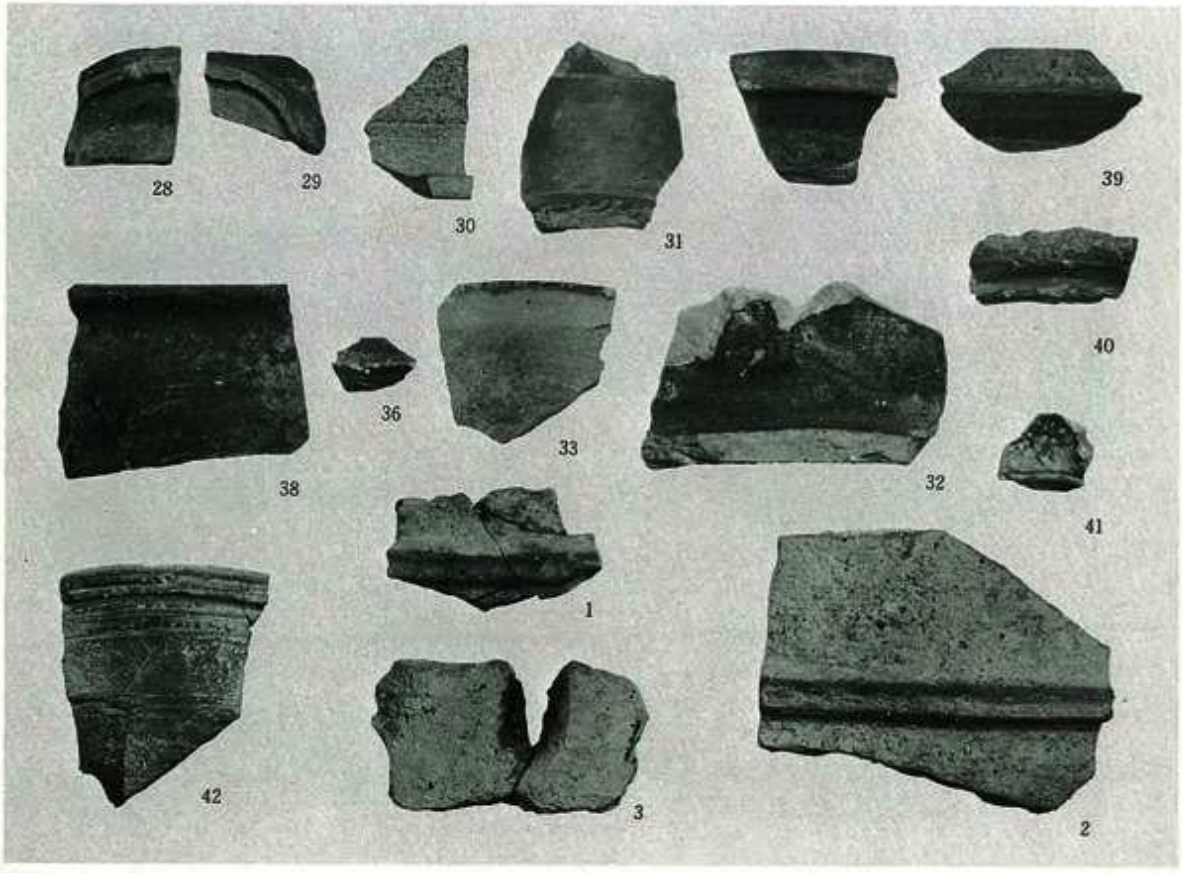


溝B—25, 溝C—1・2, 落ち込みC—3

図版六二　遺物B・C調査区出土土器(2)及び埴輪

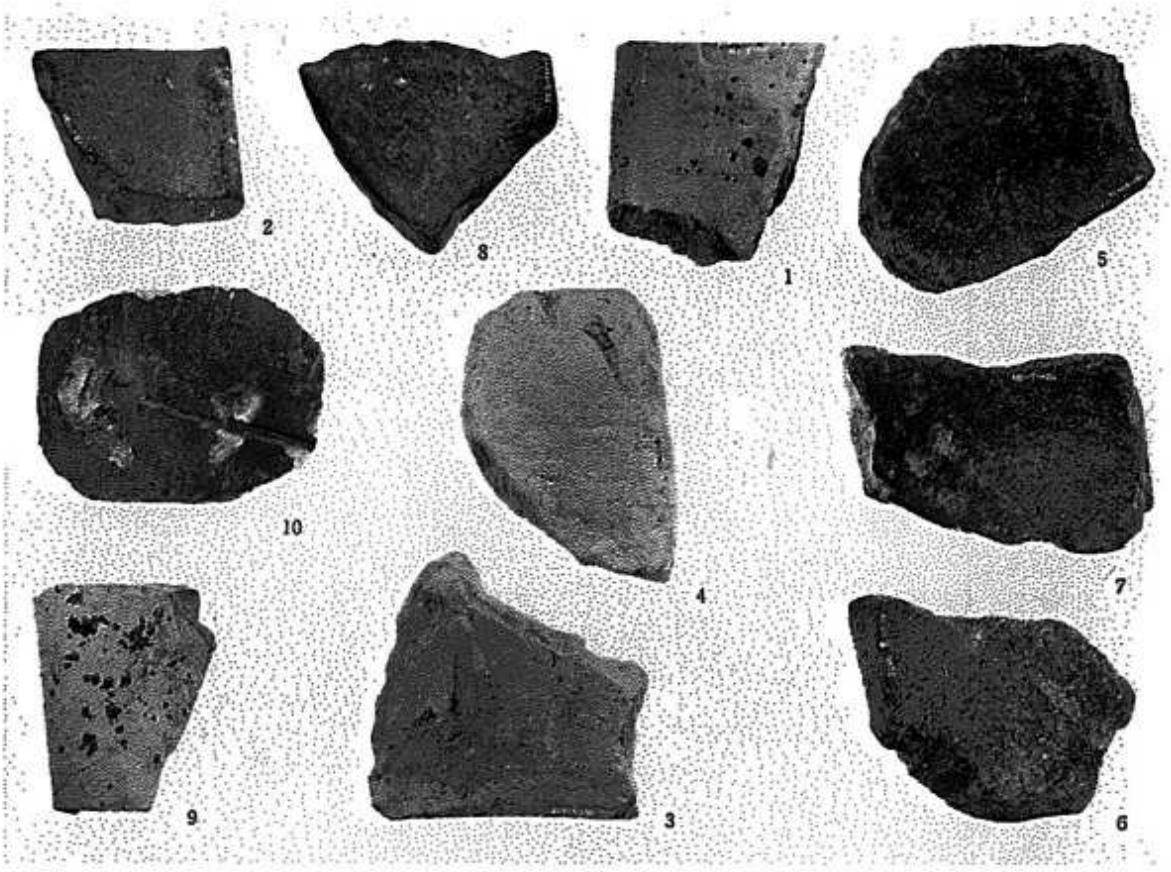


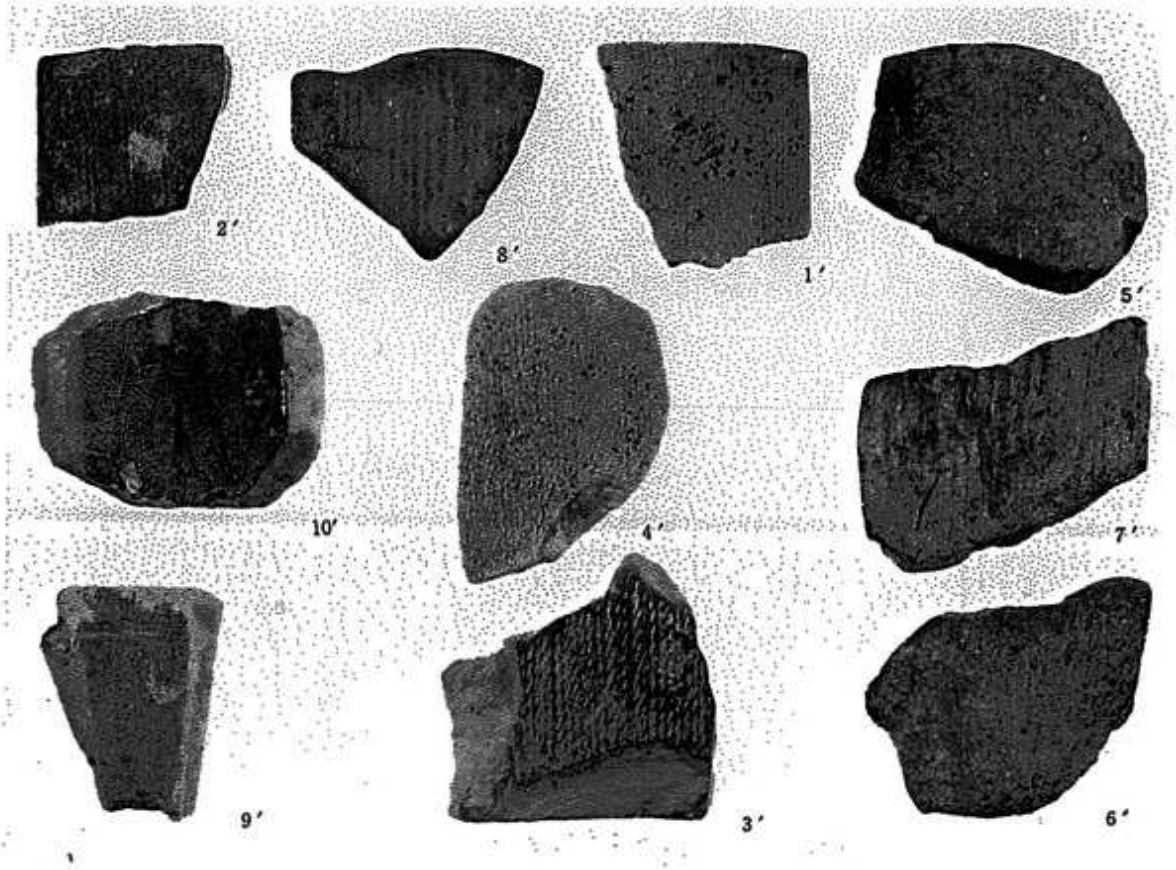
柵B－1，溝B－2，溝BW－6，溝B－25，溝C－1・2



溝C－2，溝C－18，井戸C－5，落ち込みB－6，埴輪

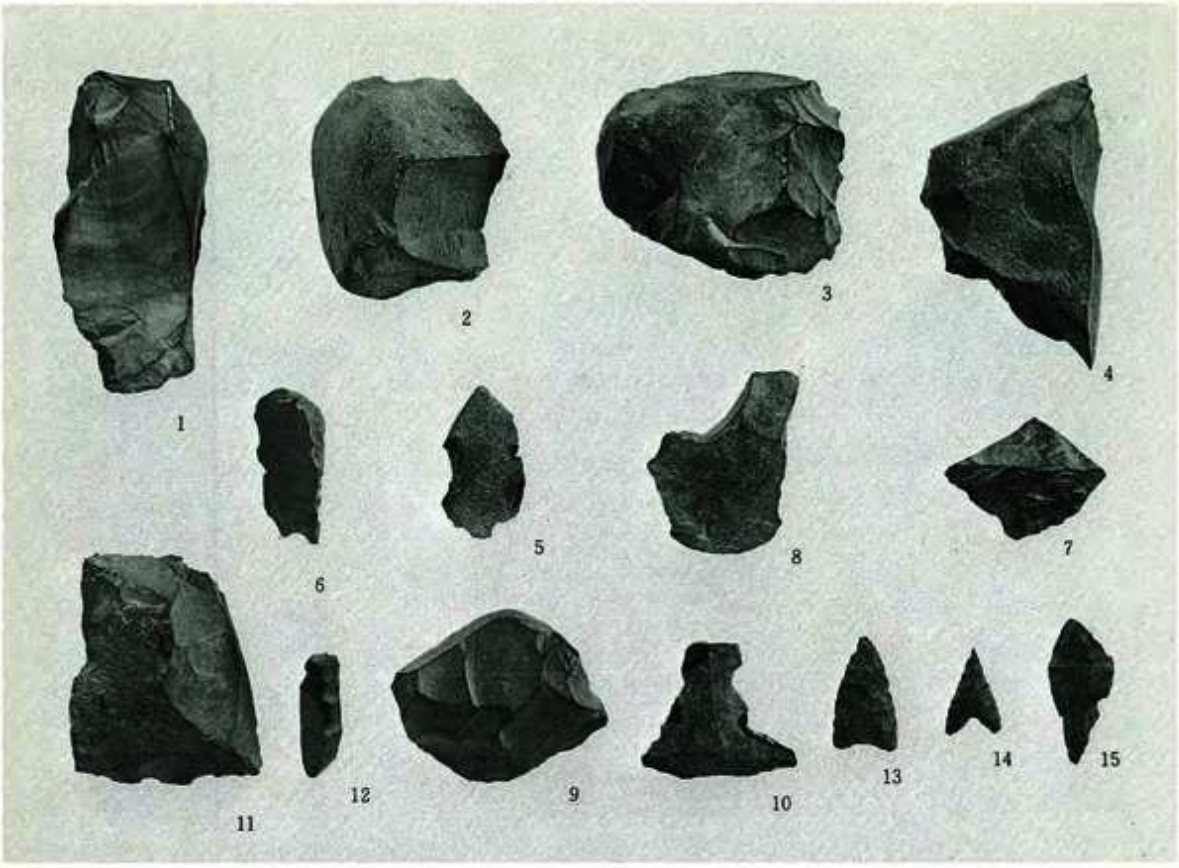
図版六三　遺物B・C調査区出土瓦

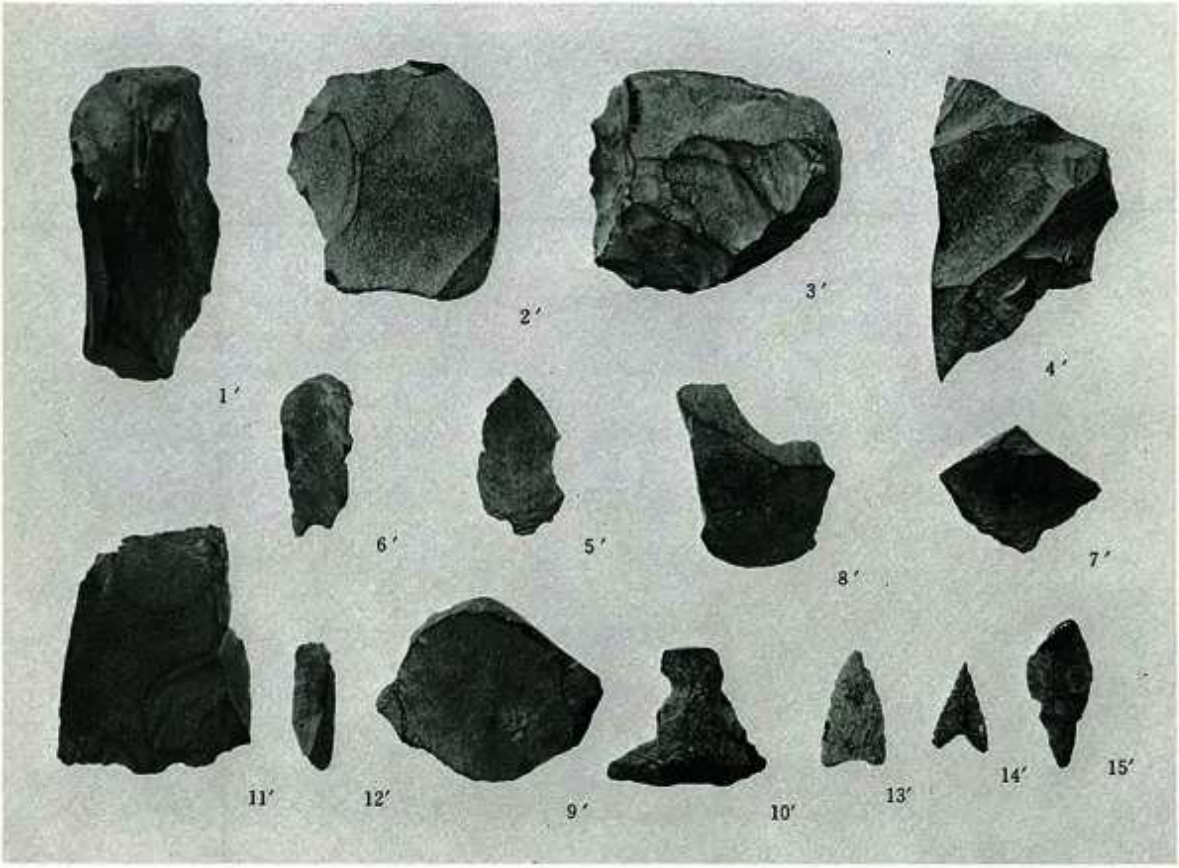




平瓦（1～8），丸瓦（9・10）

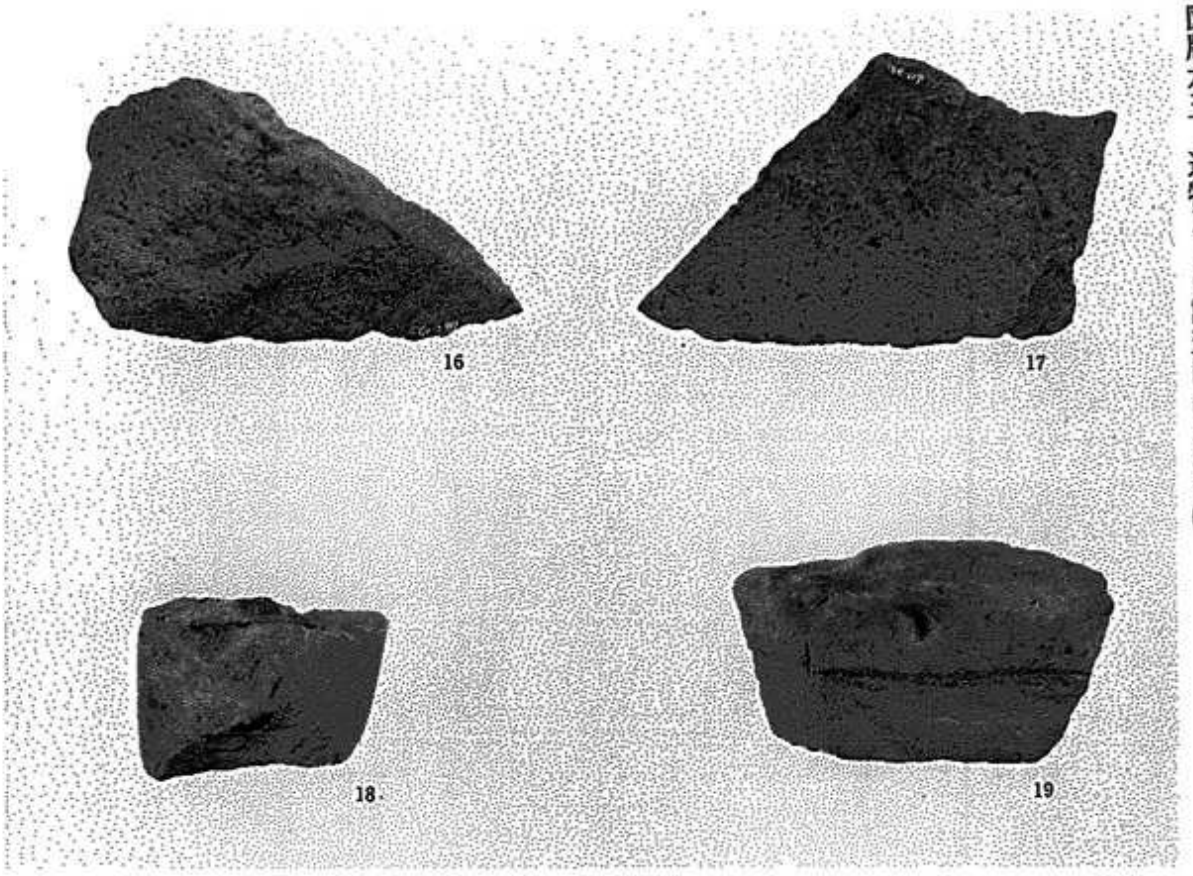
図版六四　遺物B・C調査区出土石器(1)

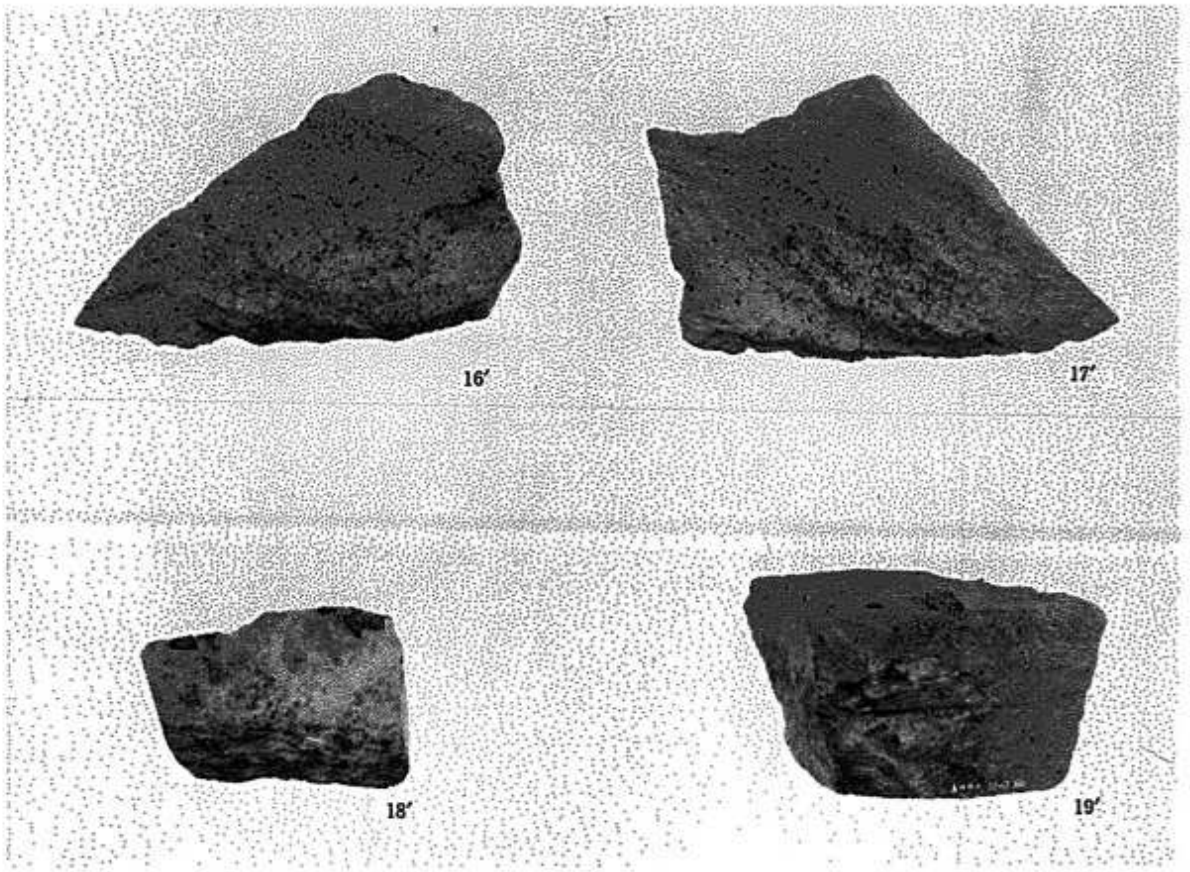




石核（1～4），剥片（5～8），削器（9・10），楔形石器（11），楔形石器の削片（12），石鏃（13・14），石錐（15）

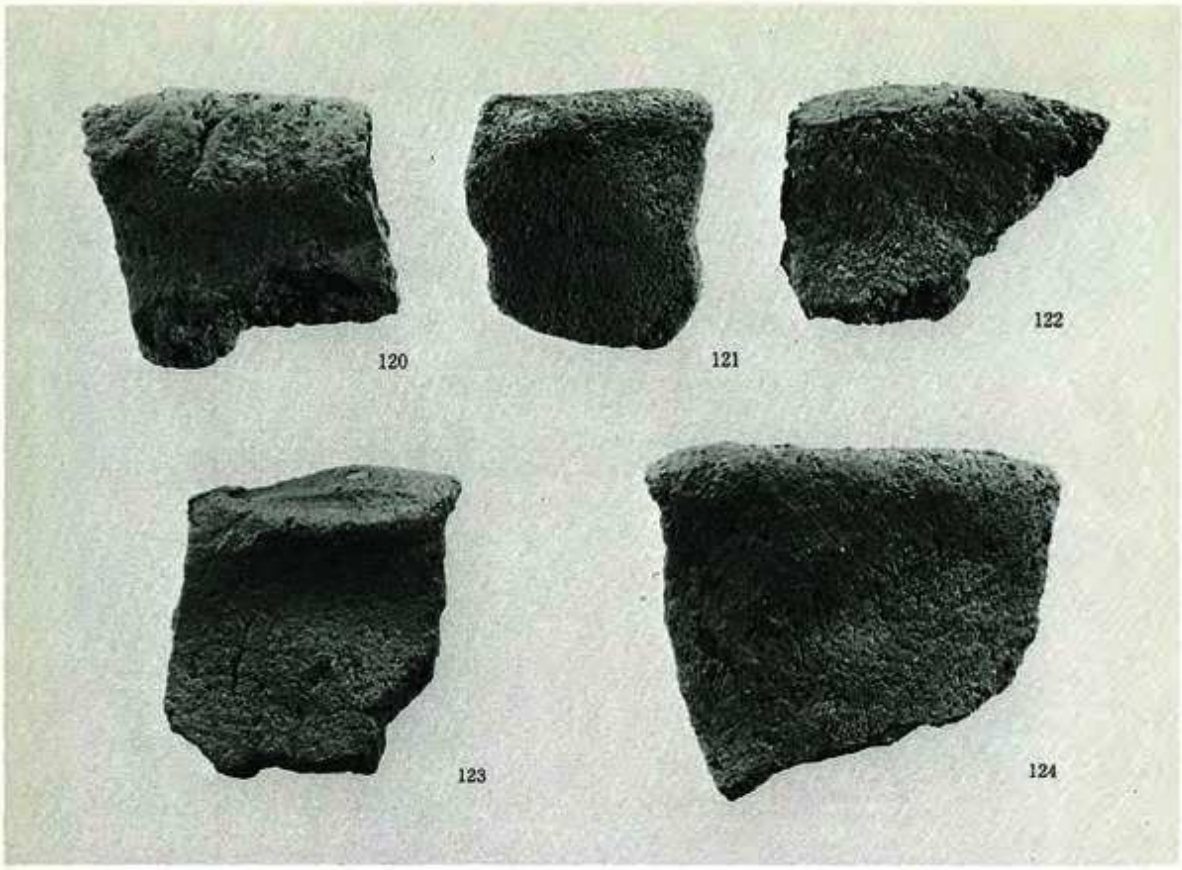
図版六五　遺物B・C調査区出土石器(2)



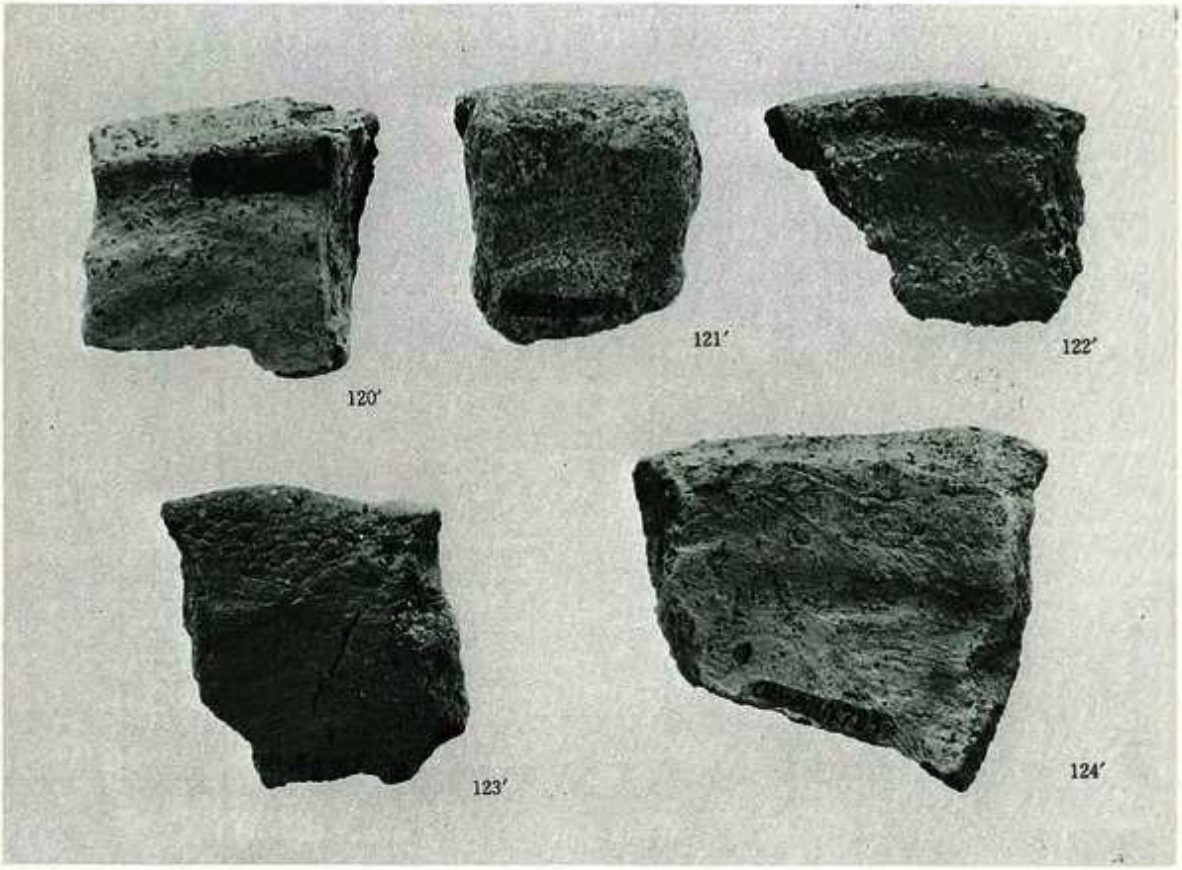


剥片（16・17），太型蛤刃石斧（18），砥石（19）

図版六六　製塩土器各型式(1)



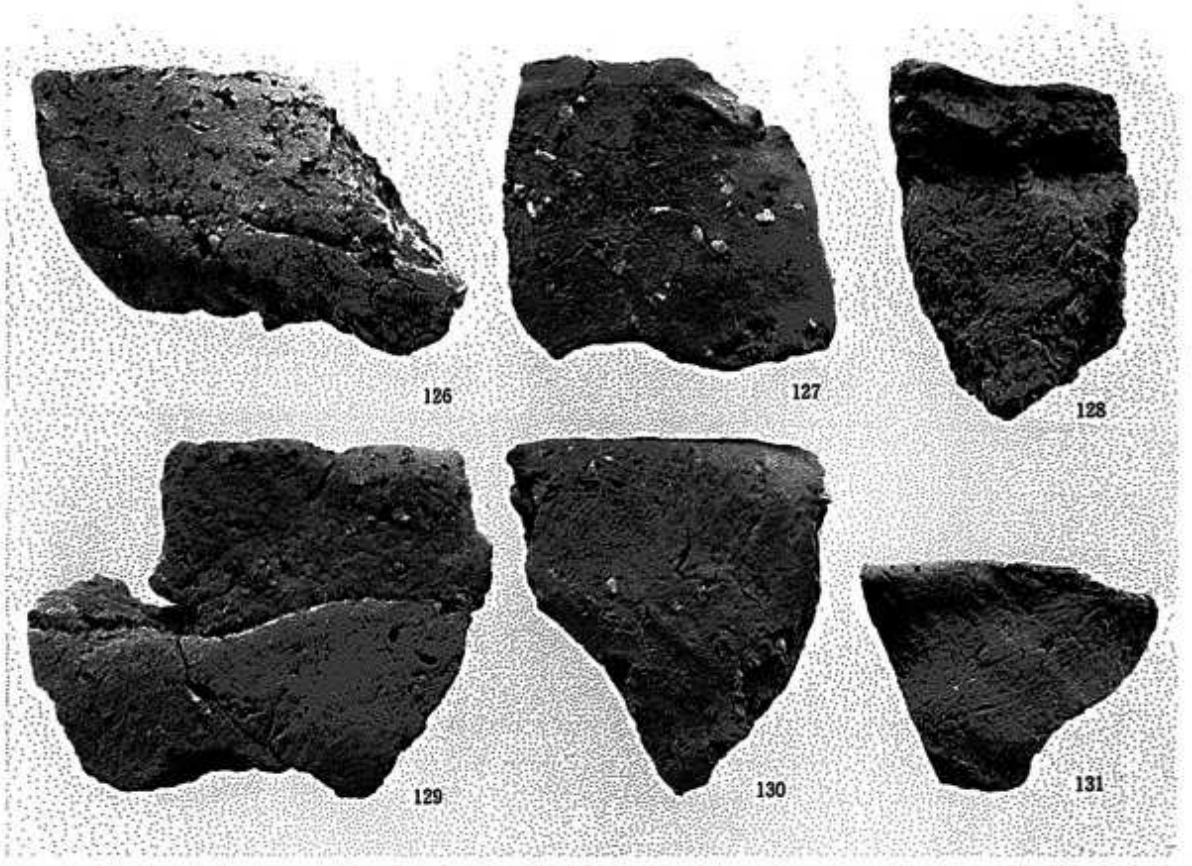
(外側)



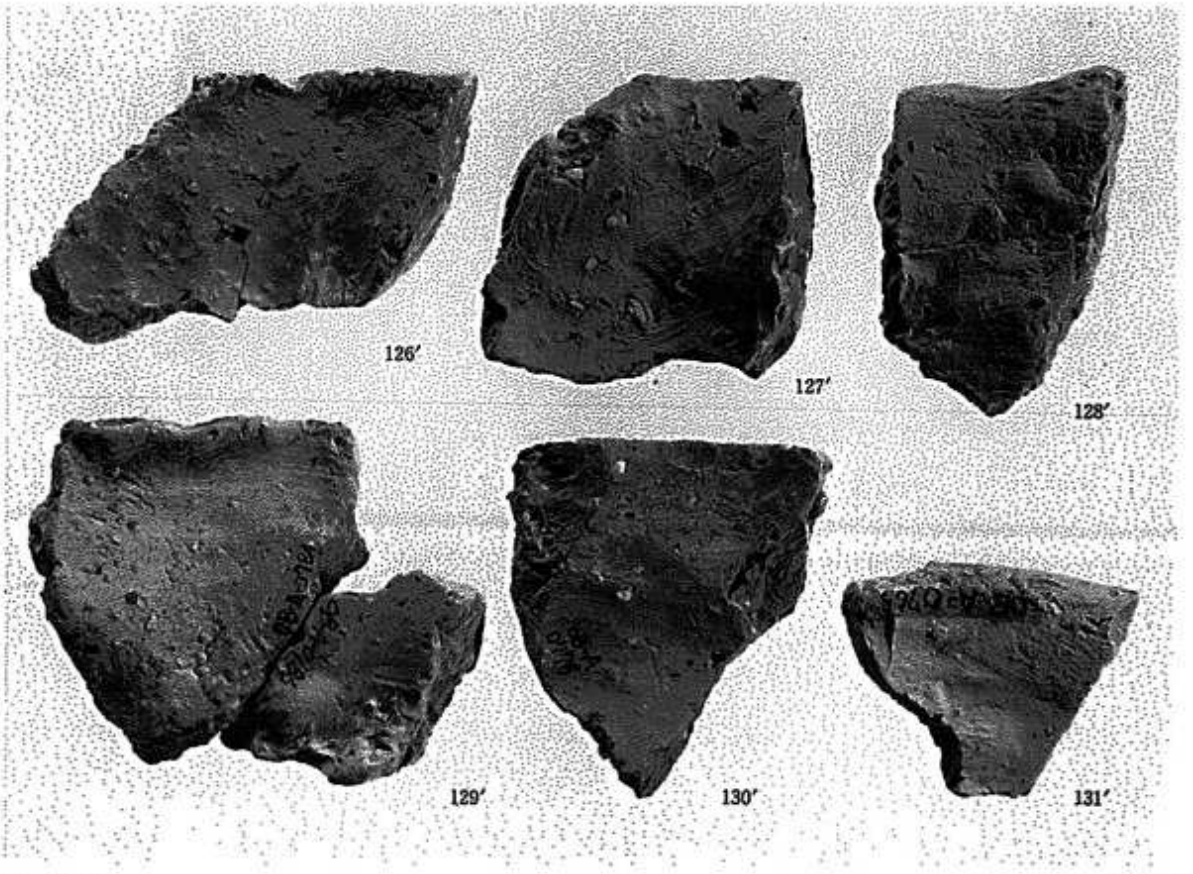
A－1類

(内側)

図版六七　製塩土器各型式(2)



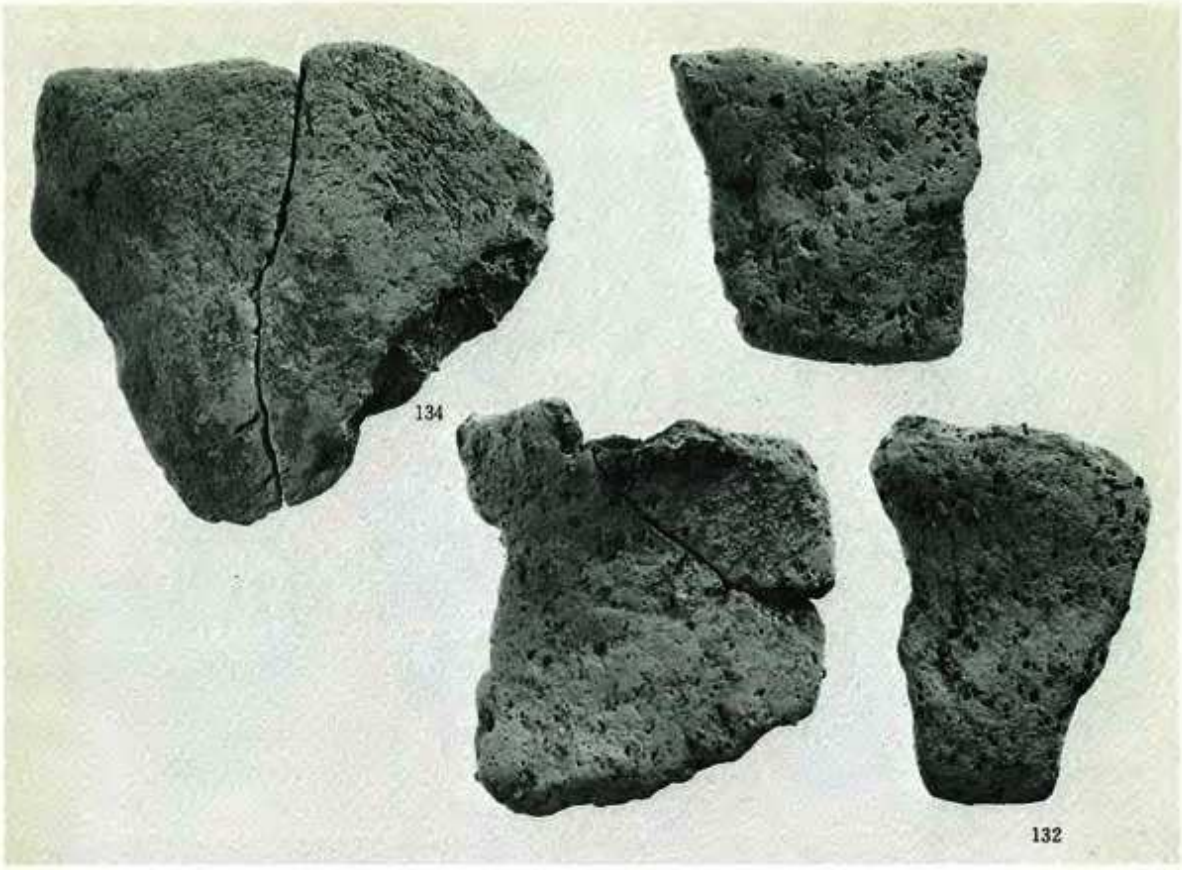
(外側)



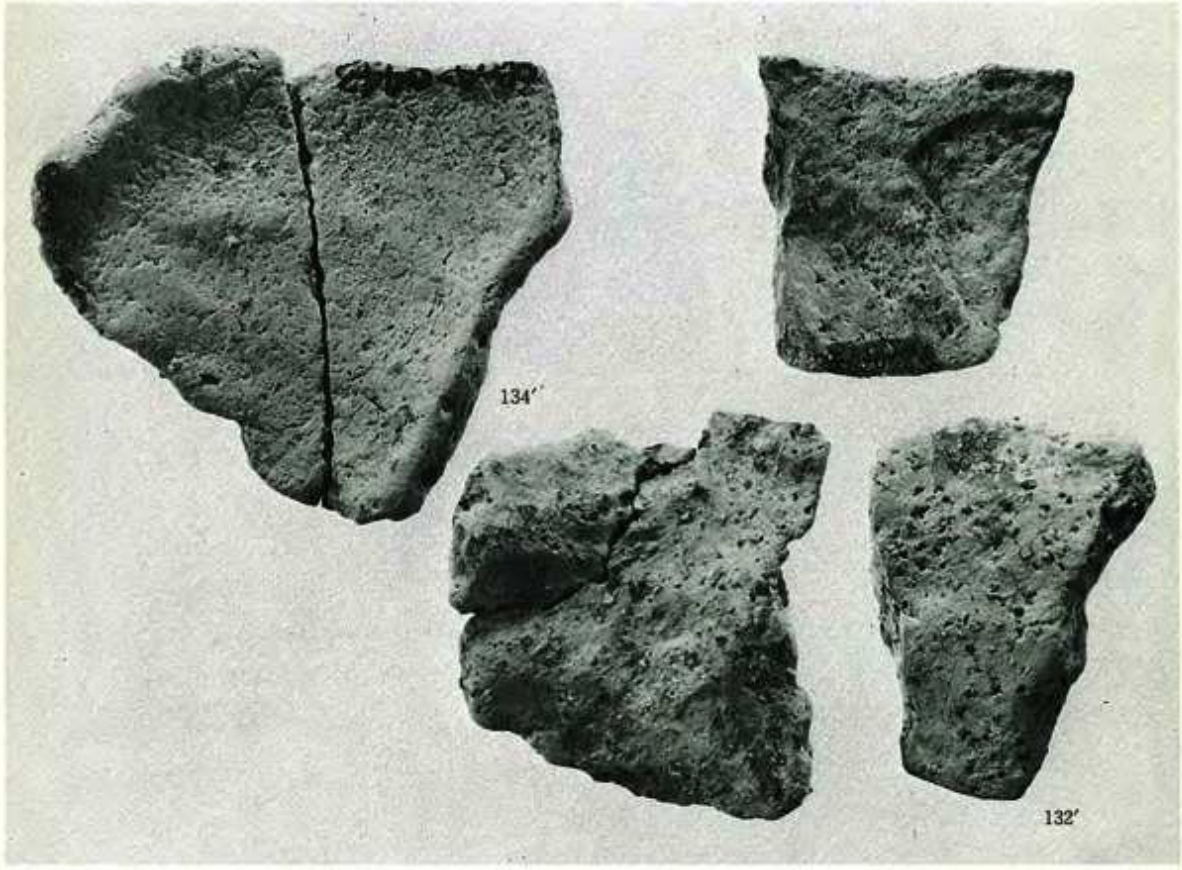
A－2類

(内側)

図版六八　製塩土器各型式(3)



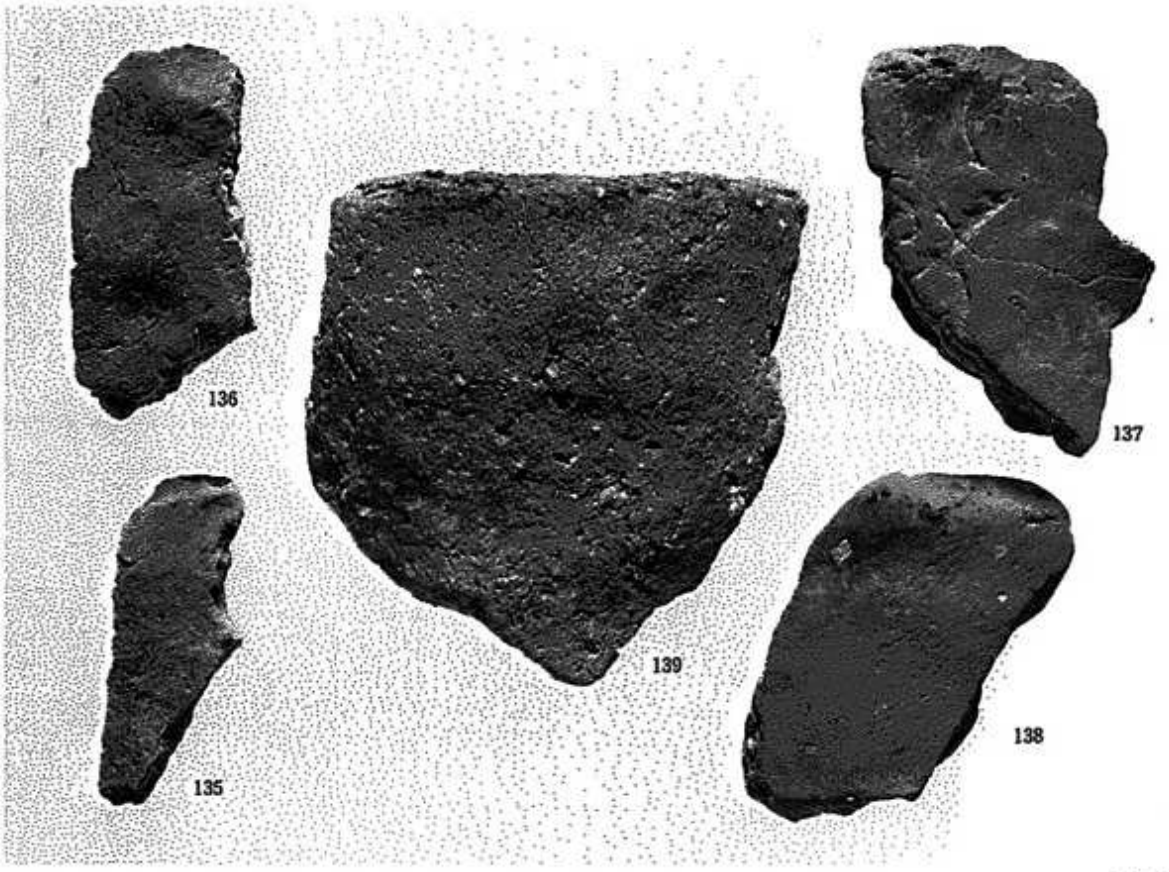
(外側)



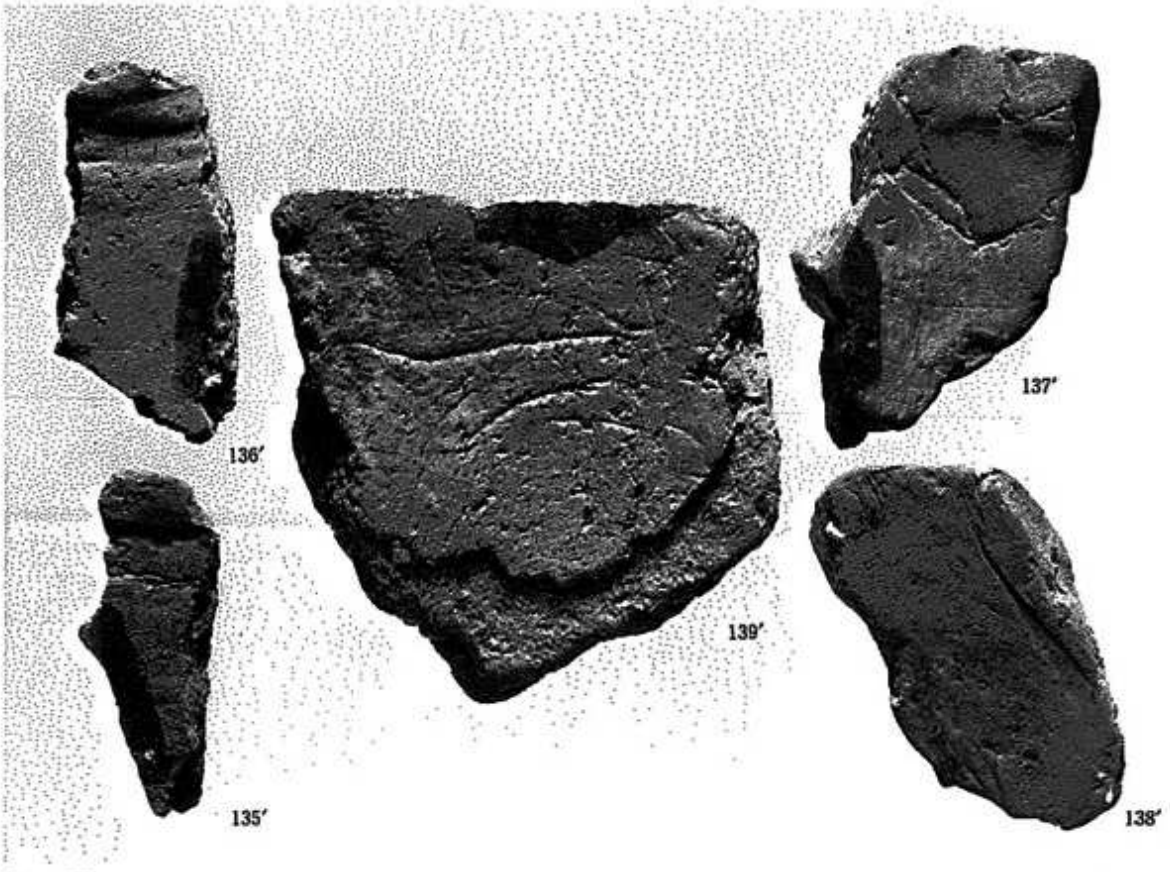
A－3類

(内側)

図版六九　製塩土器各型式(4)



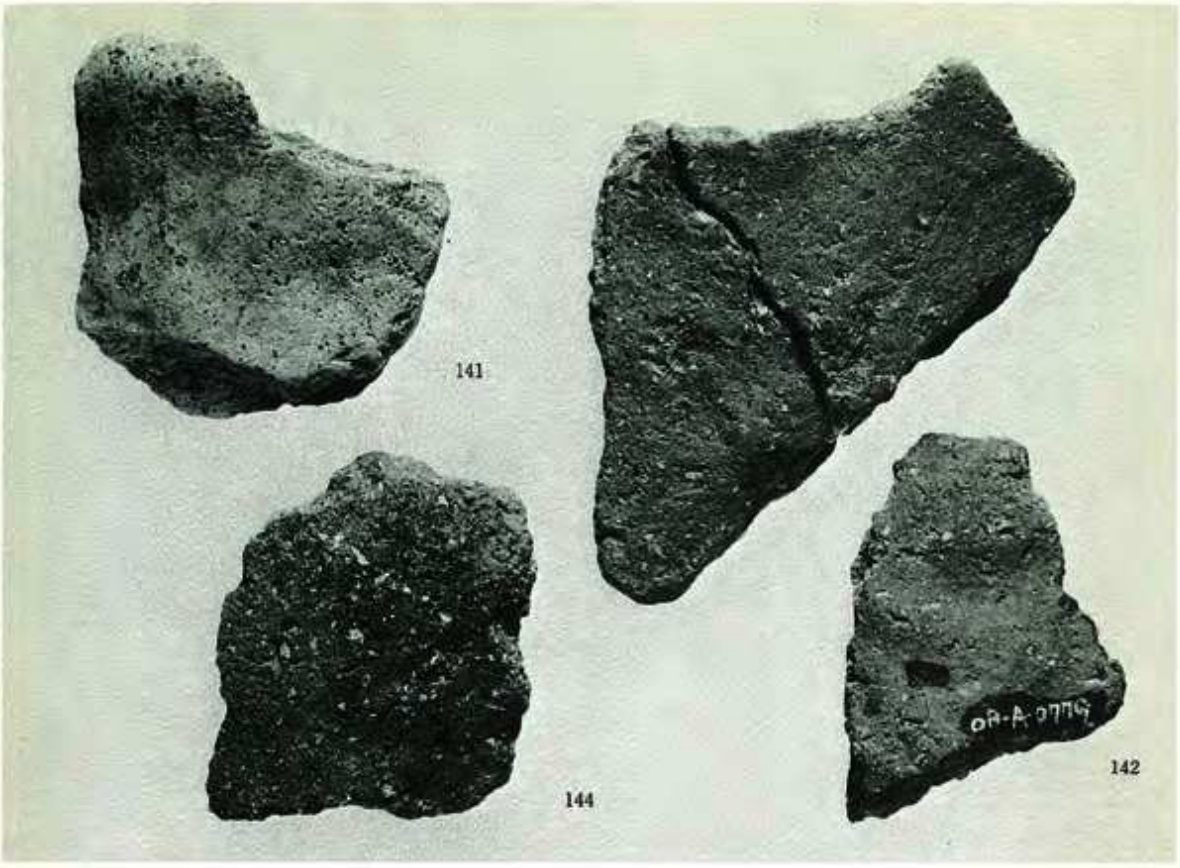
(外側)



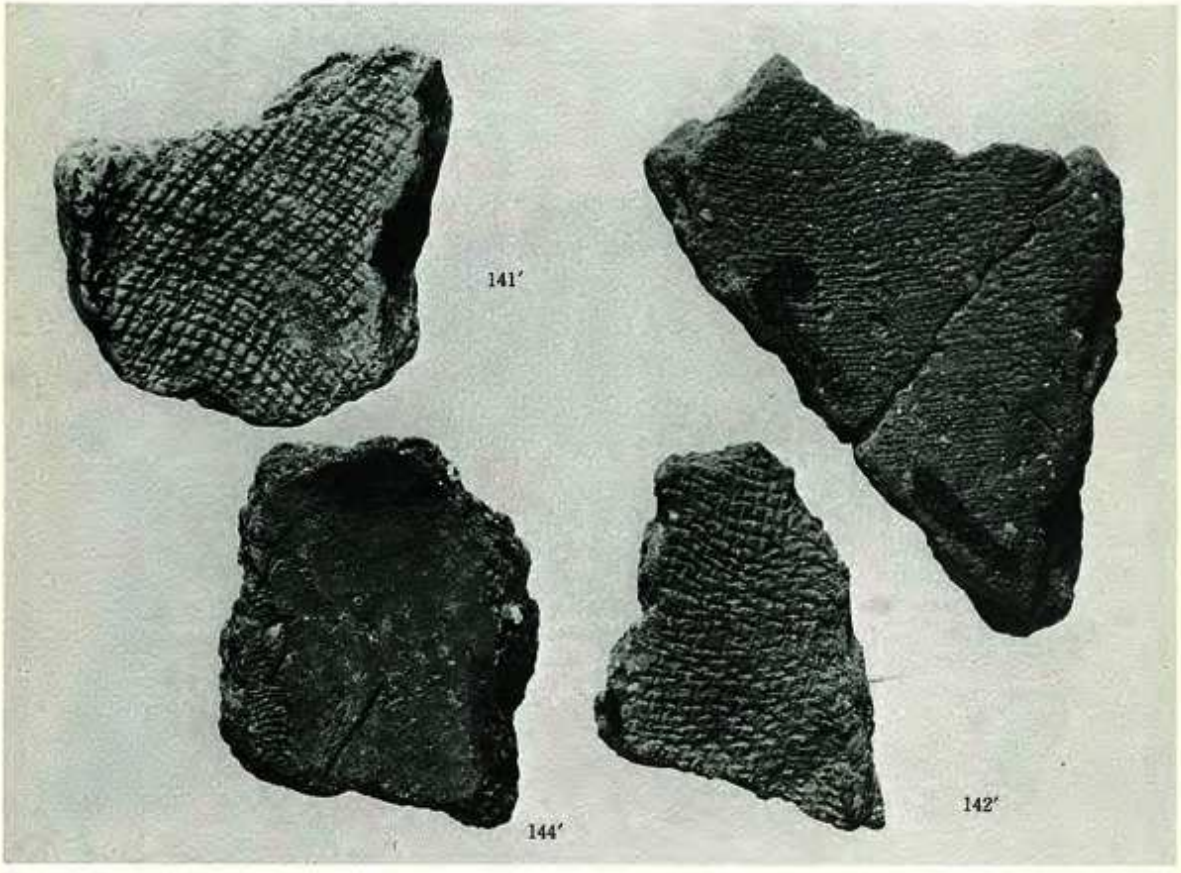
B—1類

(内側)

図版七〇　製塩土器各型式(5)



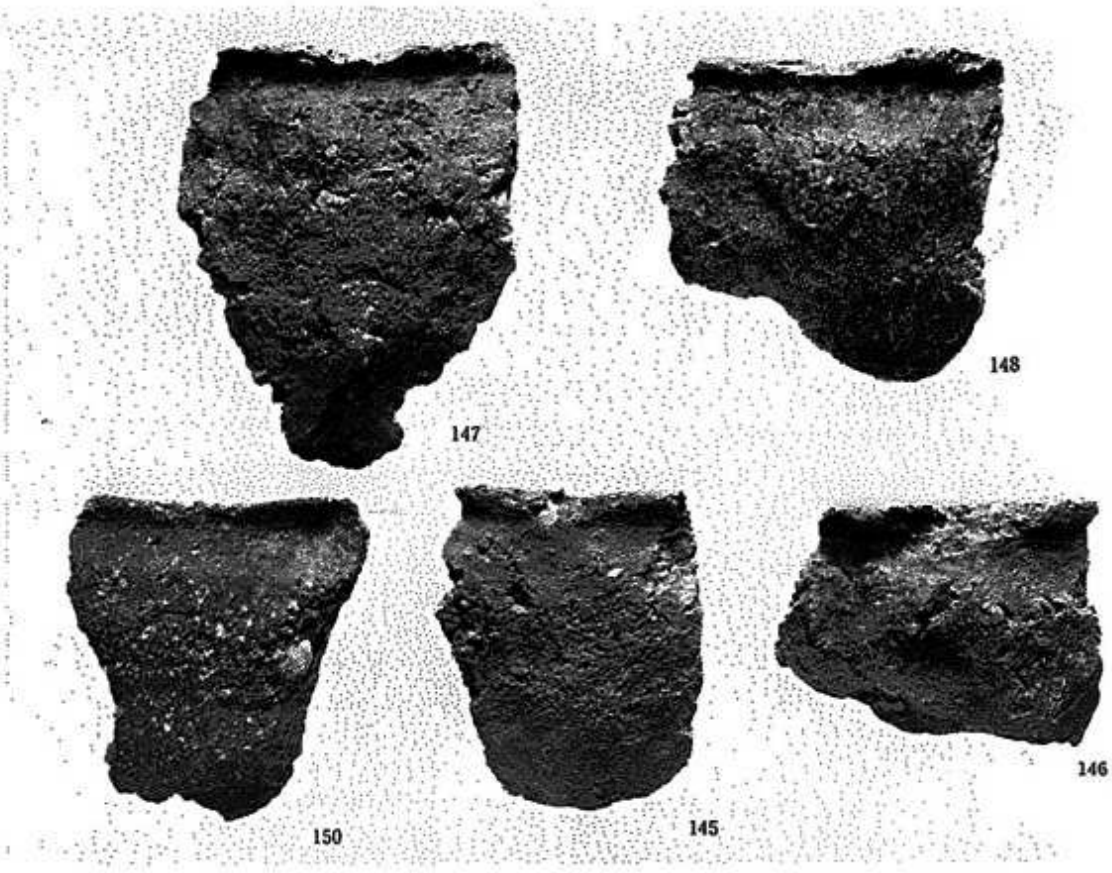
(外側)



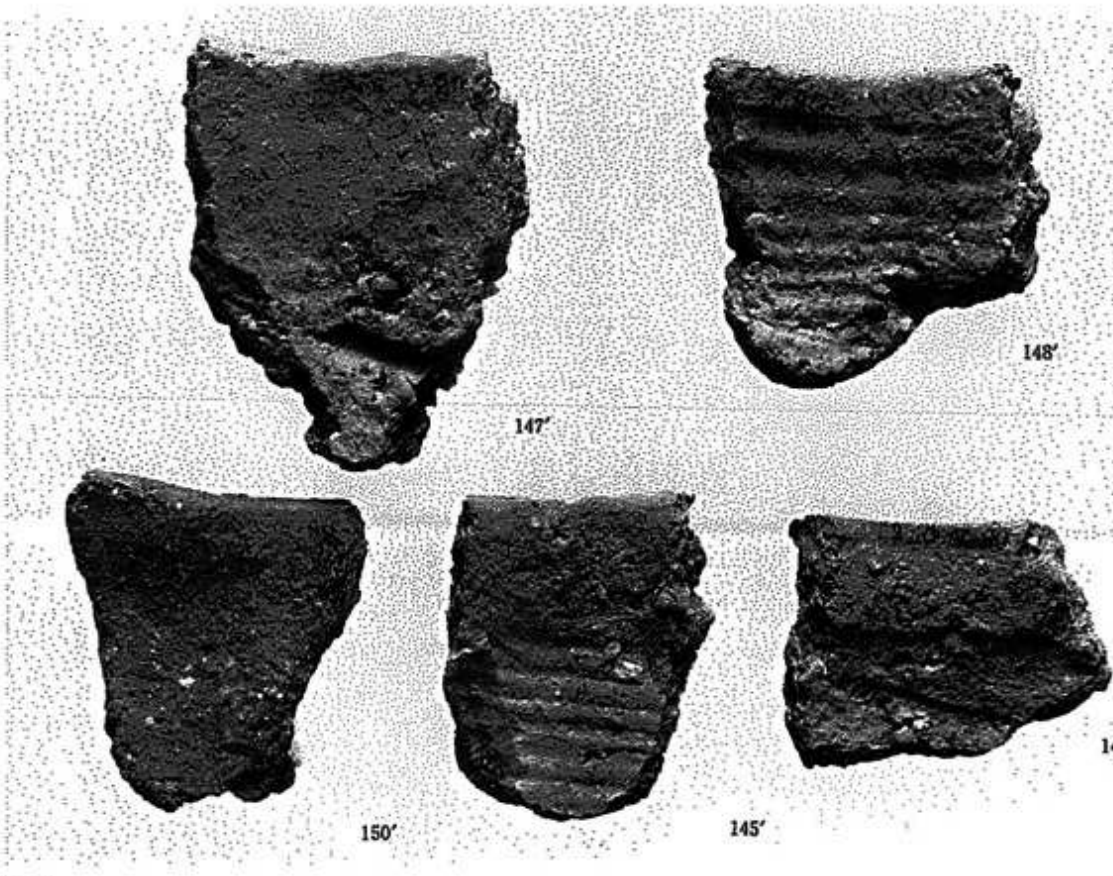
B－2類

(内側)

図版七一　製塩土器各型式(6)



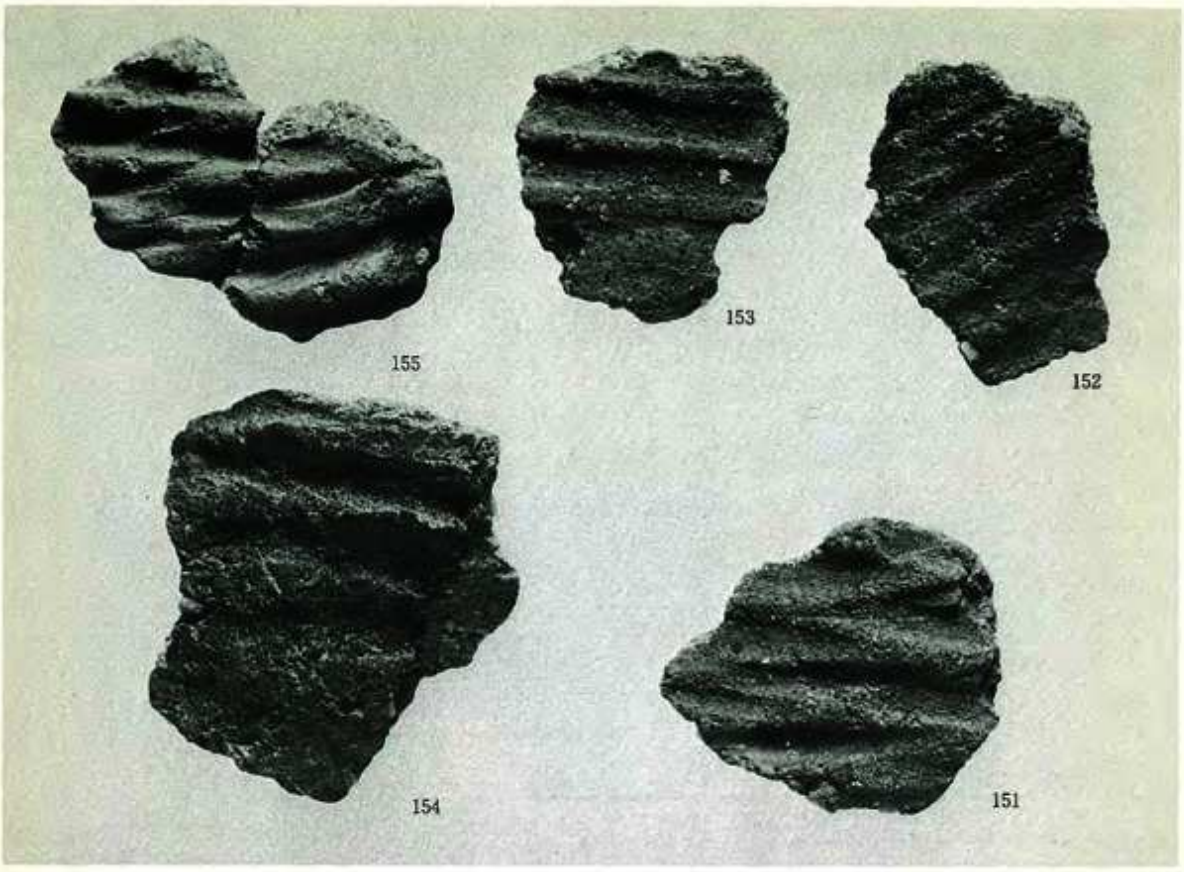
(外側)



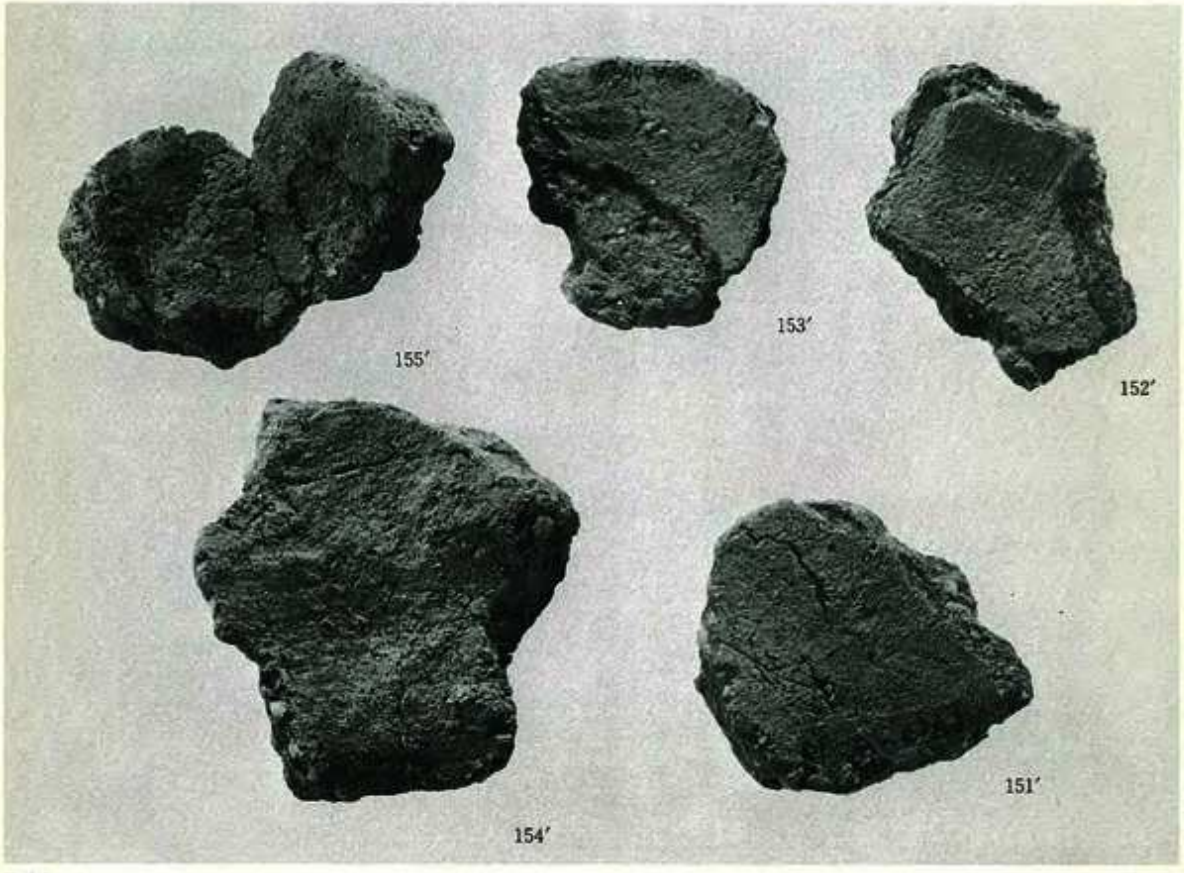
C類

(内側)

図版七二　製塩土器各型式(7)



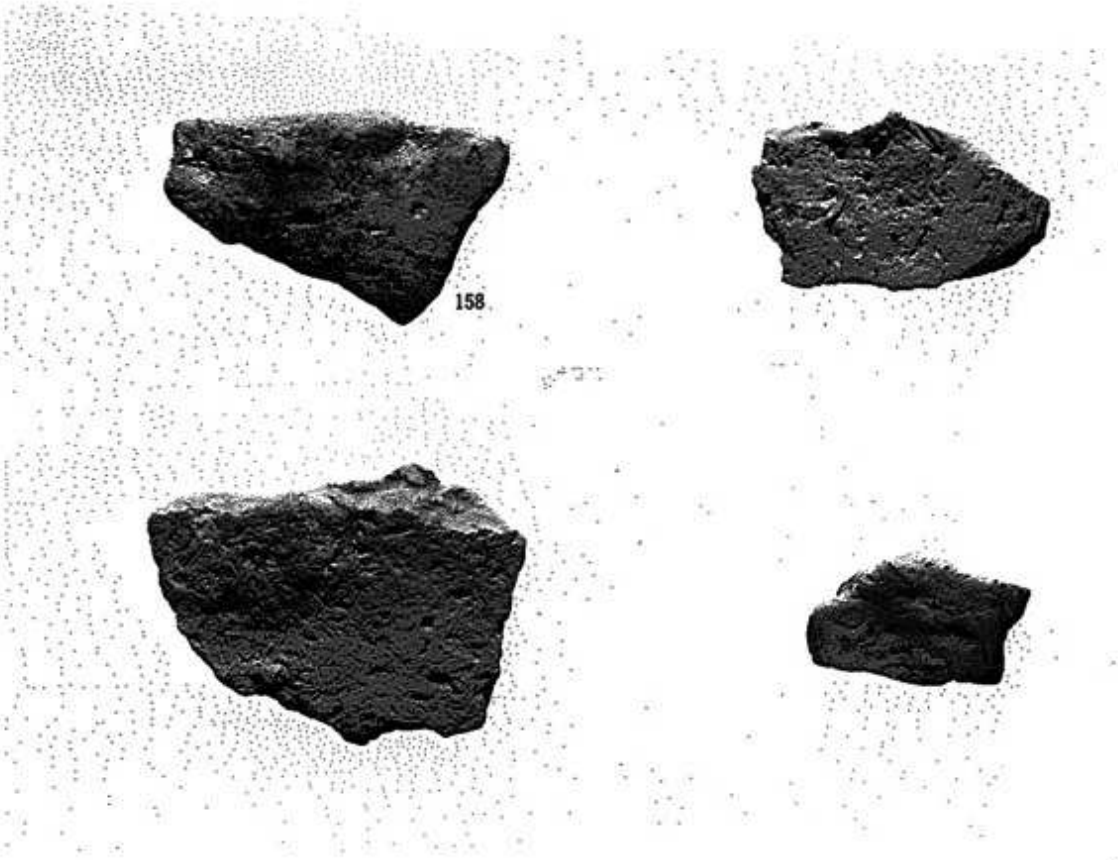
(外側)



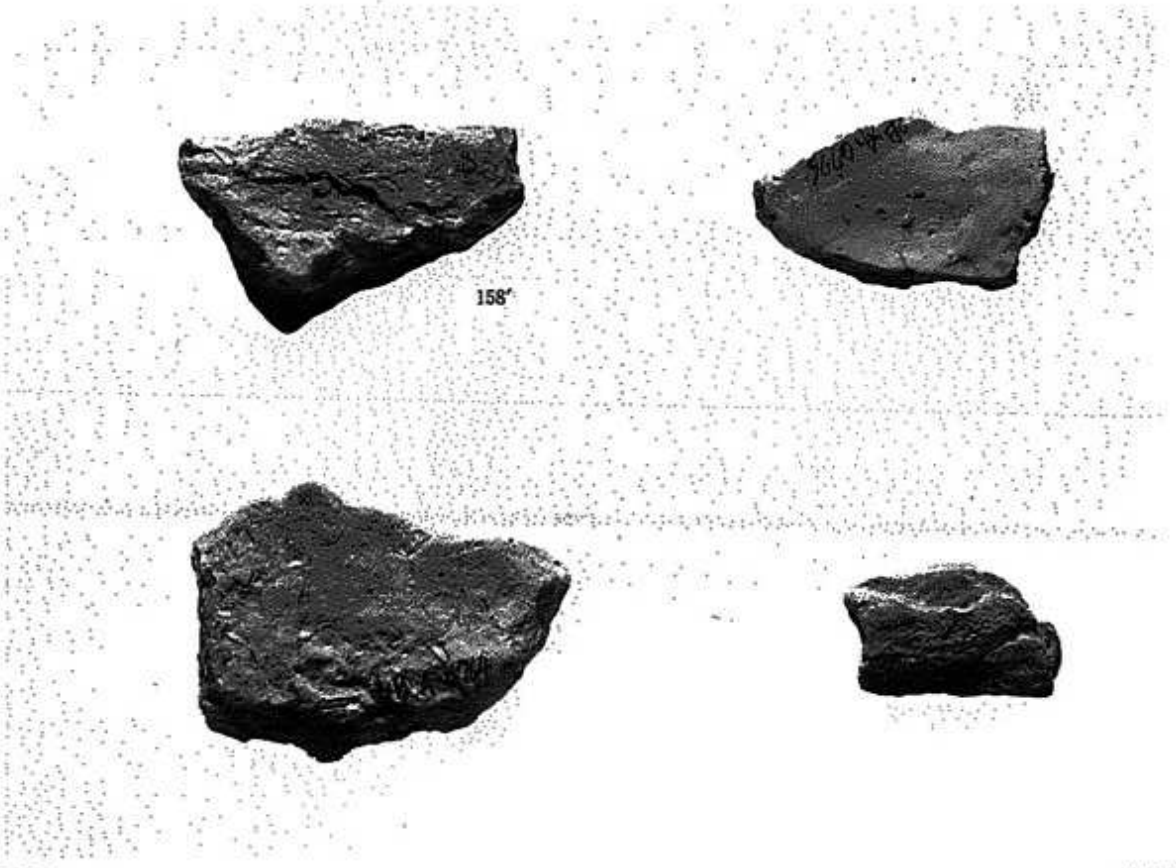
D類

(内側)

図版七三　製塩土器各型式(8)



(外側)



E類

(内側)

大堀城跡 II

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1985年10月17日発行

大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター
大阪市城東区鴫生2丁目10番28号

印刷所 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号